
やる気0でリアリストな英雄達？

YoShoki4869

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やる気0でリアリストな英雄達？

【Nコード】

N1919I

【作者名】

Yoshoki4869

【あらすじ】

『神隠し』

ある日突然差出人不明の手紙が届き、その手紙を開けると別の世界に飛ばされると言う。

そんな超常現象に巻き込まれるのは、二人の高校1年生。何だか変な神様のせいで異世界に飛ばされて、なんやかんやで試練をクリアしていくことに。周りには次第に変な人が増えて、目的も忘れちゃったりして・・・ってどうかこの旅の目的は何なの!？

コメディー90%・戦闘5%・シリアス5%の予定のファンタジー小説です。主人公がやる気なかつたりヒロインが現実主義者だったり仲間が二重人格だったり・・・。こんなんで本当に元の世界に帰れるのか？

新感覚ドタバタラブコメディー風ファンタジー小説、どうぞ楽しんでいってください！

ブログ始めました

<http://yoshoki4869.blogspot.fc2.com/>

お時間がある方は是非いらしてください

第1章 『神隠し』（前書き）

始めましての方は始めまして。

お久しぶりの方はお久しぶりです。

初めてファンタジー小説に挑戦です。とは言ったものの、基本的にはコメディイなのですが・・・。

少々展開が速いかもかもしれませんが、誰でも楽しめるファンタジーコメディイ小説を目指しておりますので、もしお時間があるなら読んでやってください。

それではどうぞ。

第1章 『神隠し』

「『神隠し』？」

「はい、聞いたことありませんか？」

学校の昼休み、高校1年生の夢幻^{むげんしやうま} 翔輝^{しょうき} は冬夜^{ふゆや} 譲葉^{ゆずは}の話聞いていた。

「10年ほど前に発生していた人間消失事件ですよ。その名前のように、家に知らない人、知らない住所から手紙が届き、それを開けると手紙から光があふれ出て別の世界に飛ばされるらしいです。消えた人間がいたところのそばには必ず『招待状』と書かれたカードが置いてあり、中には何も書いてないそうです。今でも時々起こるらしいですけど」

「何でお前はそんな詳しいんだ？」

「つい最近その『神隠し』から戻ってきたと言う人がいるんです。

その人が色々と言ってるのを昨日ニュースで見ました」

「へー。そいつはいつ『神隠し』に？」

「8年前ですね」

「そんなに!？」

「はい。しかも何て言ってると思います？ 『私はある光の先に別世界を見た! 獣人に魔物、エルフなどが共存し、平和な社会を築いていた! 世界は他にもあるんだ!』ですって。どう思います?」

「本人が言ってるんだからあるんじゃないの?」

「ありえませんよ、そんな非現実的な事」

リアリスト
「現実主義者め」

「常識で考えてるだけです。それはそうと、昨日のテストどうでした?」

「いつも通り。お前は?」

「別段変わりはないです」
「だろうな」

そんな会話を繰り返しながら二人は昼休みを過ごした。

夢幻翔輝は16歳の高校一年生で、譲葉とは幼稚園からの幼馴染。長めの黒髪に漆黒の瞳。勉強もスポーツも人よりできるが、それ以外はほとんど目立つこともないごくごく普通の高校生。強いて言うならば、遅刻・サボりの常習犯で、身長は比較的高め。めんどくさい事が大嫌いで、常に楽する方法を考えている。

一方、冬夜譲葉は長い黒髪を背中の中辺りまで伸ばしている黒い瞳の15歳の高校一年生。才色兼備の完璧少女で成績は全国トップ、学校一の美人という噂事実を持ち、一年生にして生徒会会長兼クラス委員、さらにはソフトボール部部长である。また、生徒や教員からの信頼も厚く、「成績優秀、スポーツ万能」の言葉に収まらないほどのスーパードーマン。翔輝とは幼稚園からの幼馴染だが、長い付き合いの中で翔輝が譲葉のタメ口を聞いたのは数えるほどしかない。

さて、時は流れ、放課後

「で、さっきの話だな」

「さっきの？」

「ほら、『神隠し』の」

「ああ、はい。あれがどうかしましたか？」

「気をつけるよ？こつこつって話した奴らが意外とその世界に引き込まれたりするんだよ」

「そんなことあるわけ無いですよ。マンガの読みすぎです」

「だいたいけど。とにかく封筒きたら電話しろよ？」

「絶対来ませんよ。さ、帰りましょう」
「はいはい。」

帰り支度を済ませ、二人肩を並べて教室を出る。

「鞆持ってやるうか？」

「はい、お願いします」

翔輝は右手で自分の鞆を肩に掛けながら持ち、左手で譲葉の鞆を持って譲葉の隣を歩く。二人の家は隣同士で、毎日一緒に登下校している。

「本当に無いと思うのか？」

「ありません！絶対に！」

「何でそう言い切れるんだよ？もしかしたらある日突然家に差出人不明の手紙が来るかもしれないだろ？」

「仮にそれが来たとしても、開けなければいいだけです」

「まあいいからとりあえず手紙に変なのあるか調べてみようぜ？」

「イ・ヤ・です！」

「とは言いつつ家に入ったら手紙を隅から隅までチェックする譲葉なのであった」

「っもう！いいから鞆返してください！」

「御意。じゃ、また明日」

既に二人は家の前に着いていたので、翔輝は鞆を返して譲葉が家に入るのを見送った。

「・・・譲葉〜！」

「何ですか？」

「あつたか？」

「翔輝さん！」

家の中から怒鳴り声が聞こえたので、さすがに翔輝も退散して自分の家に戻った。

「なんだよ、譲葉の奴。あんなに怒ることねーだろ」

と、愚痴を言いながらも少しからかいすぎたと罪悪感を感じながら自分の部屋に戻る。

やはりどんな人間にも弱点というのはあるわけで、譲葉の場合はこれがそれだった。

つまり、オカルト系のもの全般がダメなのだ。

妖怪、怪談、心霊などはもちろん、宇宙人や透明人間、さらには今回のような怪奇現象なんかも全然ダメなのである。

翔輝はそれを知っているのだが、完璧少女の唯一の弱点なのでやはりからかいたくなってしまうのだった。

ちなみに弱点はもう一つあるのだが、それは今は伏せておこう。

翔輝の部屋は2階にあり、ちょうど譲葉の家に面している。譲葉の部屋も2階の翔輝家側にある。

その間には2本の糸が張っており、その内の1本の両端には紙コップがくっつけてあり、いわゆる糸電話が設置されている。

この糸電話はちょうど二人が2年生の頃に遊びで作り、それ以来高校1年生現在までずっとそのままにしてある。

もう1本の両端には鈴がついており、引くとお互いの部屋につながっている鈴が鳴ってちょうど携帯で言う着信音のような役割を果たす。

翔輝はその鈴がついた方の糸を揺らし、譲葉を呼び出す。しばらくして

『・・・な、何ですか？』

と明らかに不機嫌そうな声、というか何かには怯えたような声が返ってきた。

「いや、一応謝ろうと思って・・・。ゴメン、からかいすぎた」

『・・・はあ、し、仕方ありませんね。もういいですよ』

「ああ、ありがとう」

『あ、謝られて許さないわけにはいかないですから。そ、それでですね、翔輝さん』

「ん？なんだ？」

『・・・あ、ありました』

「は？」

『だから・・・で、手紙です。』

「差出人は？」

『シャ、シャルル＝エティエンヌ・ブラッスール・ド・ブルブールです』

「住所は？」

『ム、ムーです』

「・・・悪ふざけじゃねーか、完全に」

『で、ですよ〜』

「・・・」

『・・・』

「・・・」

『・・・翔輝さん』

「なんだ？」

『そっち行っただけですか？』

「いいぞ」

そう返事を返すと、譲葉の家からドタドタとすごい音が聞こえ、ほ

んの数秒で譲葉は翔輝の部屋に飛び込んできて

「しよ、翔輝さああん!!」

「ゴフツ!!」

猛スピードで翔輝の腹部に体当たりを喰らわせた。

「な、何でこんな手紙が!? 誰よシャルル!! エティエンヌ・ブラッスール・ド・ブルブルって!? ムーって何!? いや、何かは知ってるけど何で住所のところがムー!? 何でこのタイミングで来るの!? これってつまりシャルル!! エティエンヌ・ブラッスール・ド・ブルブルとムーが兄弟で実は私が彼らの先生で × !?」
「お、落ち着け! 何言ってるのか分かんねえ! ってかよくその名前かまないで言えたな、おい」

譲葉が敬語を使わない時には大体2つの原因がある。

1つは翔輝がからかいすぎて怒った時。1つは何かに怯えて余裕が全く無い時だ。

譲葉が敬語使わないときはろくな事が無いんだ、と頭の中で呟きながら翔輝は号泣している譲葉が手に持っていた手紙を取り、封筒を見る。

差出人：シャルル!! エティエンヌ・ブラッスール・ド・ブルブル
住所　　：太平洋、ムー

それ以外には何も書いていない。

「イタズラだよ、心配すんな」

「な、何でそう言い切れるのよお!?!」

「つい5分前お前が『神隠し』を否定してたのと同じ理由で」

「そんなの通用するわけ無いでしょ!？」

「お前がそれ言っちゃったらさっきまでの議論が意味を成さないんだが・・・」

「と、とにかく!翔ちゃん、開けてみて!」

「何で俺が?お前宛なんだから自分で開ければいいだろ?」

「私を恐死きょうしさせたいの!？」

「なんだよ、恐死きょうしって」

「恐ろしくって死ぬって事に決まってるでしょ!？」

「決まってるから」

とは言ったものの、譲葉がこの状態のときに逆らうのは無駄なことは翔輝も知っていたので、観念して封筒を空ける。

中には折りたたまれたカードのようなものが入っていて、表には『招待状』と書いてある。

「開けていいのか?」

「う、うん。あ、でもちょっと待って!お母さんにさよなら言うてくる」

「何不吉なこと言ってるんだ!？大丈夫だよ、万が一何かあっても俺がいる!」

「・・・ふえ?」

「・・・あ」

数秒硬直してから自分が何を言ったのかを理解し、翔輝は自分の顔が紅潮していくのが自分でも分かった。

「翔ちゃん、それってどういう」

「あ、開けるぞ!」

翔輝は顔が赤いのを誤魔化そうと急いでカードを開く。次の瞬間、

カードから光があふれ出て二人を包んだ。

「きゃああああ！！」

「ま、マジかよっ!?!」

二人は何も無い空間を落下するような錯覚に陥り、そのまま意識を失った。

第1章 『神隠し』（後書き）

いかがでした？

やはり最初ということであまりコメディーはありませんが、これから次第に増やしていく予定です。

気に入ってくれば幸いです。これからもどうぞよろしくお願いします。

第2章 神様・・・ですよね？（前書き）

実は3話目までは全部続けて書いたのですが、あまりにも長くなってしまうので3話に分けて投稿します。それでは、第2部どうぞ。

第2章 神様・・・ですよね？

「・・・う、いっつつつ・・・。なんだったんだ、いったい？」

翔輝は目をゆっくりと開けたが、どこを見ているのか分からない。ただただ真っ白な空間が目の前には広がっている。

背中が何かに当たっている感覚はあるので、おそらく空を見上げたような状態なのだろう。

起き上がるうとするも、何かが乗っかっているようで動けない。

「ん？」

ゆっくりと頭を上げその何かを確認する。まあ言つまでも無く、翔輝の上には譲葉が寝転がっていた。

「譲葉、起きろ。重い」

その言葉にピクツと反応し、譲葉は起き上がると同時に翔輝の頭に手刀を喰らわせた。

「いつて！何すんだ！？」

「女の子に向かつて『重い』とは何ですか！？デリカシー無さ過ぎです！」

「この状況でそんなこと気にしてるお前にはデリカシーあるのか？」

「どんな状況でもそれは禁句なんです！」

「分かったよ、もう何でもいいからとりあえず別のことで騒いでくれ」

「他に何を騒げと？」

「今現在進行形で起こってる超常現象」

「へ？」

そう言つて譲葉はようやく辺りを見回した。自分の周りをすべて見回したところで、また目に涙を浮かべた。

「何で！？？」

「知るか！俺だつて聞きたいわ！」

『お答えしましょうか？』

「きゃあああああ！！！！！」

「ぶっ！」

突如天から声が聞こえたかと思うと、翔輝は左頬に激痛を感じ吹っ飛んだ。

『うわっ、痛そ〜……。大丈夫？その子』

「しよ、翔輝さん！寝てる場合じゃないです！天から！天から声がああああ！」

「誰のせいだ！？何で俺を殴る！？？」

「今はそんな細かいこと気にしてる場合ですか！？？」

「理不尽だ！」

『え〜つと……。とりあえず話を聞いてくれない？』

「今それどころじゃないんです！黙つててください！」

『ええええええ……。あの、私一応神様なだけど……。』

「黙つててつて……。！ふえ？」

『だから、私この世界の神様な人なんだつて』

「……。ずいぶんと友好的な神様だな、おい」

『私には私のペースつてもんがあるの。さて！改めて、ようこそ！私の世界へ！』

声の主は急にテンションを上げて二人に語りかけた。

「元の世界に返してくれ。第一ムーってなんだ」

『ちよつとお！今し方私「ようこそ」っていったのに！それも含めて自分達でやって！』

「いや、だって誰も好きできてないし。ってか何をやるんだよ？」

『でもここにいてるって事は招待状開けたんでしょ？』

「・・・あ」

「翔輝さん！なんて事してくれるんですか!？」

「やかましい！」

『あゝはいはいストップ！キリが無いわ』

それにしても威厳のない神様である。

『えゝ、もうなんか長引くとまたケンカ始めちゃいそうだから手っ取り早く説明するけど、まず今すぐにあなた達が元の世界に戻る術はありません』

「ざけんなコノヤロー」

『いい加減私も怒るよ？しかし、戻れないことはありません。現に、つい最近あなた達の世界に戻った人がいるはずです』

「そういえばいたな、なんだっけ？」

「8年前に蒸発した男性がつい先日急に家に戻ってきたらしいです」

『そうそう、その人。つまり、戻る方法があります。しかし、そのためには試練を乗り越えなければなりません』

「なんかどっかのRPG見たいな設定だな」

『しかしながら、あなた達は人間です。この世界にいるエルフ、獣人、さらには魔物のどれに比べても全てにおいて劣っています』

「なんか私たちバカにされてませんか？」

「されてる。でも、やっぱり俺の言ったとおり『神隠し』はあったる？種族もおっさんが言ってたのと完全同じだし」

「・・・認めるしかなさそうですね」

『なので、私がお二人にふさわしい素晴らしい素晴らしい能力を授けましょう』
「自分で素晴らしいか言うか？」

「第一そんなことが出来るなら私たちを帰してほしいですね」

『だからあー！無理なものは無理なの！これは特別！君達名前は？』
「冬夜譲葉です」

「夢幻翔輝だ。ってか勝手にこの世界に引き込んだんだから名前くらい知っとけよ」

『分かった、冬夜譲葉ちゃんと夢幻翔輝君だね。覚えておくよ。さて、それじゃ後はスタート地点だね』

「スタート地点？もはや完全にゲームじゃん」

「って言うか素晴らしい力とやらはどこにいったんでしょう？」

『それはあとでのお楽しみ。じゃあ私はこれで。あとは自分達で決めてね』

「なっ！そんな勝手な！」

『じゃあね〜』

「あっ、おい！・・・行っちまったか？」

『うんにゃ、まだいるよ』

「紛らわしいわ！消えるなら早く消えろ！」

『分かった分かった、じゃあ私は行くからあとは自分の好きなところから冒険を始めてね。じゃ〜』

「・・・今度こそ行っただか。しかし冒険って、やっぱりどっかのRPGのパクリじゃねーか？」

「とにかくさっきの自称神様が行っていた入り口とやらを探しましよ」

譲葉がそう提案した直後、目の前にメッセージと共に3つのボタンが現れた。

「これが入り口か？え〜、何々？」

『翔輝君、譲葉ちゃん、とりあえず説明するね。この3つのボタンは冒険を始める場所を選択するためのものだよ。左から順に最初の試練、最後の試練、ランダムだよ。一気に最後の試練に行くこともできるけど、覚悟したほうがいいよ？この世界で死んじゃったらやり直しは出来ないから。私のオススメとしてはやっぱり最初の試練から順にやってくのがいいと思うよ。なんか質問あったら呼んでね。』

「・・・神」

『何？・・・はあ、本当は名前あるのにな。今教えちゃダメみたいだし・・・』

「ふざけてんのか？」

『失礼なこと言うね。私は真剣だよ？』

「なんだよ、この世界で死んじゃったらやり直しは出来ない』って。そんなの当たり前だろ」

『だって翔輝君も譲葉ちゃんもこれなんかのゲームと勘違いしてるじゃん』

「してません。誰だってこんな超常現象が身の回りに起こったら夢だと思いません。私達はこの段階で現実だと認めてる点他の方々よりマシだと思いますけど」

『確かにここで冷静な人はいないからね。で、どうする？最初からやれば多分死ぬことは無いだろうけど、長い時間掛かる。最後に行けばほぼ間違いなく死んじゃう。ランダムなんて問題外ね。』

「そりゃもちろん最初からだろ。死ぬのはイヤだ」

「私も同感です」

『オツケー、じゃあ一番左のボタン押してね』

「最後に一ついいか？」

『どうぞ』

「最後の試練とやらにたどり着くまでにどれくらいかかるんだ？」

『人によるよ。前の人は8年だし、その前の人は2ヶ月。最速は1』

0日だったかな？でも、もちろん一生たどり着けなかった人もいる。」

「・・・それが亡くなってしまった人たちですか？」

『そうだよ・・・ゴメンね、私だってあなた達にこんな危険なこ
とさせたくない。でも、仕方が無いの。分かってくれとは言わない
けど、今は言うとおりにしてくれる？』

「・・・分かったよ、やりやいいんだろ、やりや。その代わりに、絶
対に帰ってやる。試練とやらをクリアしたら帰してもらおうからな」

『大丈夫、それは約束するから。じゃ、幸運を祈ります。行ってら
っしゃい』

声はそれを境に聞こえなくなった。妙な沈黙が空間を支配する。

「・・・どうします？」

「どうするもこうするも無いさ。こうなっちまった以上、生きて帰
る。それだけだ」

「・・・でも、もし何かあったら・・・」

「大丈夫だ、その時は俺が守ってやるって」

さつき元の世界でも言ったセリフ。しかし、今回は重みが全く違う。
今度のは本当に心の底からそう思っている。

だから、恥ずかしがる必要も無い。むしろ、誇ってもいいような事
である。

ただ、今の翔輝は自分がその時思ったことをそのまま口にしただけ
で、そんなややこしいことまでは考えていなかった。

「・・・押すぞ」

「・・・はい」

二人はゆっくりボタンに近付き、ボタンを押す。

刹那、二人が立っていた場所にすっぱり穴が開いた。

「……ふえ？きやあああああ！」

「もうちょっとマシな誘い方くらいあるだろおおお！」

断末魔(?)の叫びを上げ、二人は穴の中へと落ちていった

。

第2章 神様・・・ですよね？（後書き）

感想・評価・誤字・脱字等何でも送ってください。

第3章 試練（前書き）

第3部です。

ここから先は更新遅くなると思いますが、僕も学生なのでご容赦ください……。

第3章 試練

「・・・な、なんだ、どこ？」

「さ、さあ・・・」

空間に開いた穴から突然落とされ、次に目を開いたときにはもう二人は町の真ん中に突っ立っていた。

それにしても活気のある町である。人々はみんな笑顔で雑談していたり、店では店員が呼び込みをしていたり、とにかく騒がしい。

しかし、文章でこの町を表現するにはもう一つだけ重要なポイントがある。それは

「に、人間が一人もいない・・・」

そう、人間、というか二人と同じような外見の人物が一人も見当たらないのだ。

町行く人たちは皆耳がとがっているか動物の体の一部を持っているか、二つに一つだった。

右を見れば耳がとがっている金髪の少年がいて、左を見れば猫のような耳が頭についた女性が笑いながら話している。

おそらくこれが神の言っていた「獣人」やら「エルフ」なんだろうなあ、と翔輝は心の中で呟いた。

「ん、君達、道の真ん中に突っ立ってどうかしたのかい？」

「きゃあああああ！」

二人がその場で周りの風景に唾然としていると、犬のような容姿の男性が話しかけてきた。

本当に犬をそのまま立たせたような感じなのだが、腕はがっしりし

ているしても人間のよう五本の指がありそれぞれが独立して動いている。まさに獣人といった感じた。

啞然としていたことと話しかけられた人物が獣のようだったことが重なり、譲葉はその男性を見るなり悲鳴を上げた。

「うわっ、どうしたんだい!? ゴメンよ、そんなに驚くとは思わなくって・・・」

「あ、こ、こちらこそごめんなさい! 急に悲鳴を上げたりして・・・」

「いや、大丈夫だよ。それより、君達は何なんだい?」

「な、何って?」

「種族だよ、種族。見たところ獣人でもエルフでもないよね。魔物って感じも全然しないし・・・」

「しゅ、種族・・・? えつと、人間、やってます?」

「に、人間! ?」

譲葉がそう言うと、犬男みたいな人は驚いたように吠えた。叫んだのではなく、吠えた。

すると周りにいた否人間(?)の人たちも翔輝達のほうを向き、驚愕の眼差しで二人を見ている。

その視線の意味が分からず困惑する二人に、先ほどの犬らしき人が説明する。

「そうか、君達は異世界にんげんかいから来たんだね」

「に、人間界? あ、はい、多分そうです。あの、何ですかこの反応?」

「この世界じゃ人間は英雄だという伝説があるんだよ。というか、単に魔物と並んで最強の種族と言われているだけだけどね」

「に、人間が最強の種族!? そんなまさか、だってあの神さん『人間はすべての種族に劣っています』って言ってましたよ?」

「そう、普通ならね。でもね、神様に何か能力をもらつたら？それが君達人間が最強の種族とされている要因だよ」

「え、えっと・・・話についていけないのですが・・・」

「そうだね、詳しく説明してあげるよ。僕はこの町の町長、テリアだ。立ち話もなんだから、とりあえず僕の家を招待するよ。着いておいで」

テリアはそう言うと二人を誘導して人混みを掻き分けて進んでいく。二人は時折テリアが掻き分けた人々の中から感謝されたが、意味が分からずただ混乱するばかりだった。

やがてテリアは一つの建物の前で立ち止まった。そこがテリアの家なのだろう。

テリアは二人をリビングへ通し、茶菓子を用意してくれた。

「こんなものしか出せなくて悪いねえ」

「いえ、十分です。こんなにしていただけで、十分感謝しています。ありがとうございます。」

「はっはっは、英雄様からお礼を言われるなんて、光栄だなあ」

「それでテリアさん。説明してくれ。ここはいつたどこで、俺達は何なんだ？」

「・・・ここは君達が来た異世界とは違う次元にある世界、ムーさ
ム、ムー！？ムーって、あのムー大陸の！？」

「そうだね、僕も歴史でしか知らないけど、あの島は元々はこっちの世界にあったはずの島なんだ。でも、何らかの原因でそれが君達の世界に行ってしまった、慌てた神様は誤ってその大陸を海に沈めて消滅させてしまったらしい」

「こ、こつちの伝説とほとんどあってます。ただ、あの大陸が元々この世界のものだとは聞いていません」

「なるほど、じゃあその確率が高いというわけだ。と、まあそんなことが大昔に会った。つまり、君達がこの世界に来ることも可能だ

ということも納得してもらえたかな？大陸だつて移動しちゃうんだから、人の一人や二人移動するのは簡単さ」

「ま、まあそれは分かりました」

「うん。でね、僕にも神様の真意は分からないけど、彼は時々君達の世界から人間を連れて来るんだよ。その際彼らには特別の能力が与えられ、とても普通の人には太刀打ちできないような力を得る。

だから、この世界では人間は魔物に匹敵する強さを持つ種族とされているんだ」

「は、はぁ……。分かったような分からない様な……」

「まあ急に全てを理解するのは無理さ。ゆっくり理解すればいい。

さて、あとは人間が英雄と呼ばれる伝説さ。その昔、この世界を『鬼神』の軍団が襲った。その際、神様は人間をこちらの世界へ誘い、その人間はこの世界のために戦い、ついに鬼神を滅ぼした。世界は救われ、その人間は英雄と呼ばれた。以後、この世界では人間は英雄として尊敬されているんだよ。」

「な、なるほど……。あれ、つて言うかその『鬼神』とやらは魔物じゃないんですか？」

「『鬼神』つて言うのは分かりやすく言うと神様に敵対している種族つて所かな？正確には『鬼』という種族があつたんだよ、昔はね」

「え〜つと……。つまり人間は昔世界を救った英雄で、今でも『人間』英雄』という方程式が成り立ってるわけですか？」

「そんなところさ。大体分かったかい？」

「まあ大事なポイントは理解しました。あと、一つ聞きたいんですけど」

「なんだい？」

「俺達が元の世界に戻る方法があるかどうか知ってます？」

「伝説には『人間はその後光に包まれ姿を消した』と記されているけど、それが君達の言う『元の世界に戻る』ということなのかは分からないよ。ごめんね」

「いえ、色々情報ありがとうございます」

「あ、それからまだ話してないことがあったんだ」

「はい？」

「いつだったかなあ……。神様が僕のところにやってきて、こう言っただよ。『もし将来この町に人間が訪れたら、彼らに試練を与えなさい』って」

「え……。つて事は俺達？」

「うん。まあ試練って言っても多分能力になれるための練習に近いと思うから軽い気持ちでやっていいよ。じゃあ説明するね」

「……。拒否権は？」

「ないよ」

「……。だと思ったよ。で、内容は？」

「この町に正門を出て3キロくらい行ったところに一軒家があるんだけど、そこには昔から魔物が住んでいるんだ。あ、魔物って言っても多分君達が想像してるようなのじゃないよ？普通の人間の格好をした女の子んだけど、この辺りに住んでいる人たちの中で一番強い。その人に会って言うのが試練だよ」

「え、会うだけですか？」

「その後の説明は彼女が知ってるはずだ。とりあえず行ってみてくれないか？正門はこの家を出て右に真っ直ぐ行ったところにあるから」

「……。分かった。それ以外にやることもなさそうだし。」

「あ、危なくないですよ？その人って」

「ああ、それは心配ないよ。彼女は魔物といっても怖い魔物じゃないから」

「そうですか、安心しました。それじゃ、ちょっと行ってきます」

「うん、気をつけてね」

というわけで、待ちの外にあるという魔物の家に行くことになった
翔輝と譲葉。

テリアに挨拶をして二人は家を出る。もうさすがに騒ぎは収まって

いて、数人に話しかけられたが軽く解釈して二人は正門へと向かう。

「どう思う？」

「この現実ですか？」

「ああ、夢だと思うか？」

「そう思えたら楽なんですけどね・・・」

「お前もか・・・。とにかく、神の言葉を信じれば帰れるんだから、とりあえず死なないようにだけ気をつけて試練をクリアして行こう！」

「なんだか目的のハツキリしない旅ですねぇ・・・」

「大丈夫だよ、その内ハツキリするさ。多分」

こうして、翔輝と讓葉の元の世界へ帰るための前途多難な旅は始まったのである。

第3章 試練（後書き）

いかがでしたか？

楽しんでいただけたら光栄です。

これからも頑張りますので、未永く生暖かい目で見守ってやってください……。

第4章 魔物ってどんなの？（前書き）

自分で予想したよりかなり早く投稿することができました。
多分これからも週一位に更新できると思うので、それくらい
の感覚でよろしくお願いします。

第4章 魔物ってどんなの？

「にしても、何でもうこんなに暗いんだ？」

「私達が来たのがもう夕方だったんじゃないんですか？」

「ま、何でもいいけどな。ところで譲葉、魔物ってどんな感じだと思っ？」

「やっぱりこう、丸くて、水っぽくて、青っぽくて、ぷよぷよしてる生物じゃないですか？」

「ドラ エじゃねーよ。魔物ってやっぱり昔の神話とかに出てくるミノタウロスとか日本とかの八岐大蛇やまたのおろちとかじゃないか？」

「そんな人間が化けたような生物いるわけ無いじゃないですか」

「スラムだっていねーよ」

「ついでに言っておくと吸血鬼とか狼人間なども存在しません」

「お前ついさつきテリア見たじゃねーか」

「あれは狼人間じゃなくて犬人間です」

「わかんねーぞ、案外狼人間だったりするかも知れないぜ？」

「ありません」

「・・・いや、まあどうでもいいけどさ」

そんなバカバカしい会話をしながら二人は道を進んでいる。

翔輝と譲葉はテリアに教えてもらったように正門から町の外に出たのだが、意外と町が広く迷ってしまい、結構時間をくってしまったのだ。

時間をくったと言ってもたった十数分のはずなのだが、そこから1キロほど歩いた時点でもう既に当たりは暗くなり始めていた。

少し整備はされているものの、ほとんど樹海のような道をさらに2キロほど進んだところに、二人はようやく小さな小屋を発見した。

「・・・ここ、か？魔物がいるって小屋は」

「ですね、絶対」

「何を根拠に？」

「本気で言ってるんですか？」

「まさか」

本気でそんなことを言ったらただのバカである。なぜなら、その小屋の表にある看板には「魔物注意」と書いてある。

「人間界で言う『猛犬注意』みたいな物ですかね？」

「さあ？でもま、ここにいるのは確かだろ。開けるぞ」

翔輝は扉に手をかけてゆっくりと開ける。

「お邪魔します」

「翔輝さん、ノックくらいしないとだめですよ」

「そうよ、失礼でしょ？もし今ドア開いたら私が着替えの真っ最中、とかだったらどうする気？」

中から誰かの声が聞こえた。しかし、辺りはもうすっかり暗くなっているのであまりしつかりとは確認できない。

「誰かいるのか？」

「誰もいないのに返事が返ってくると思う？」

「思う」

「何で？」

「幽霊とか」

「何言ってるんですか翔輝さん！？いません！幽霊なんていませんから！」

「お前はどっ思う？」

「あたし？あたしは普通にいると思うけど」

「いません！絶対に！」

「……って言うかあんた達、私に用があつて来たんじゃないの？」
「と、そうだった。とりあえず明かりつけてくんねーか？何も見えねえ」

「人間の視力つてのも大したことないのね。ま、知ってたけど」

そう言つてその声の主は暗闇の中で何かをゴソゴソ動かし、急にマッチを擦つて火をつけた。

「うわっ、ビックリした！」

「そういうことをする時は先に言つてからる！」

「注文多いわね。ほら、これでいいでしょ？」

声の主はマッチの火をロウソクに移し、さらにそのロウソクの火を別のロウソクに移す。

そうするうちに、小屋の中にあつたらしい約10本のロウソク全てに火がつき、小屋の中がかなり明るくなった。

そして確認できたのが、二人と同じくらいの少女だった。瞳は深紅、身長は比較的高く、赤い髪をポニーテールにしている。

「で、あたしに何のよう？つて、人間がここに来る理由なんて一つしかないわね」

「そういえばお前なんで俺達が人間だつて分かるんだ？」

「そりゃ分かるわよ。あんた達どう見ても獣人じゃないし、細かいところを見てもエルフでも魔物でもない。だったら残るは人間しかないじゃない」

「残念だったな、実は化けた狸人間だ」

「帰る？何なら村まで送つてつてあげるわよ？」

「ちっ」

「何バカやつてるんですか……。失礼しました、あなたの言うと

おり私達は人間です。つい1時間半程前に人間界からこの世界に迷い込んできてしまつて……。この近くの村の村長さんのテリアさんからあなたに会えと言われたので来たんです。申し送れました、私は人間の冬夜讓葉、彼は同じく人間の夢幻翔輝さんです。それで、失礼ですがあなたは？」

呆れるくらい礼儀正しく挨拶をした讓葉は、改めて彼女を観察する。先ほと言つたとおり目と髪が赤く、身長は若干高めだ。なんとなくだが、イメージカラーは赤。

やや釣り目気味で、瞼は半開き。体には首から床スレスレまでである長いローブのようなものを羽織っている。

「そつちの子はこいつと違って随分と礼儀正しいわね。あたしは魔閻^{まやみ}レイ。種族は魔物よ」

「ま、魔物！？お前がか？」

「何よ、なんか悪い？」

「いや、悪くないけどさ……。魔物つて言うくらいだから丸くて水っぽくて、青っぽくて、ぶよぶよしてるやつみたいなのかと思つたから」

「それつてまんまスラムじゃないの」

「よく知つてんな」

「前ここに来た人間がポケットにDS、だっけ？入れてきたからね」「前に」つて、前にも人間が来たのか！？」

「来たわよ。あんたらも含めてあたしんところには10人くらい来たかな？」

「な、何でそんなに！？」

「あんた達もここに来るとき神にあつたでしょ？」

「え、あれ本当に神様なんですか？」

「そつよ、あんなんでも一応ね。で、『力を授けよう！』みたいなこと言われなかつた？」

「言われたような言われなかったような・・・」

「言われました。『こっちについてからのお楽しみ』とも言われませんでしたね」

「でしょ？で、あたしがその力を授ける役を頼まれたの？」

「・・・え、すいません、どういうことですか？全然意味が・・・」

「つまり、神が時々あたしんどこに来て人間が来るから力あげてつて言うわけ。で、あたしがその力を渡すことになってるの」

「は、はあ・・・」

「まあ口で言ってもいまいち分かんないわよね。とりあえず見せてあげるわ、これがあなた達の『力』よ」

そう言つて魔閻は両腕を前に差し出し、掌を上に向けて拳を開く。それぞれの手の上には、こぶし大の一つの淡く光る球体が浮かんでいた。よく見ると二つはそれぞれ若干違い、中では何かが動き回っている。

一つは水色で数個の時計が球体の中をグルグル回っており、もう一つは紫色で極小の刀のようなものが何本も何本も渦巻いている。

「あの・・・なんですか、これ？」

「これがあなた達の『力』。これをあなた達の胸に押し付ければ、あなた達は晴れて『英雄』に一步近づくわけ」

「つまりこれを体に入れば何かの特殊能力みたいのが使えるってわけか？」

「簡単に言えばそういうことね。能力の説明先にしようか？」

「そうですね、お願いします」

「じゃあまず、え、冬夜讓葉。あなたの能力は『時の停止』、正確には『時の延長』かしら。まあ簡単に言えば時間を止める能力ね」「そ、そんなにすごいこと私に出来るんですか!？」

「出来るようになるわよ。この能力を選んだ理由はね、あなたの名前。冬夜、つまり冬の夜。世界で一番永い『冬の夜』を支配するあ

んたにはピッタリの能力だって神が言ってたわ」

「そ、そんな立派な名前じゃないですよ・・・」

「で、次は夢幻翔輝」

「ん」

「あなたの能力は『刀剣の増殖』。つまり刀なんかを増やせるのよ」
「・・・ぜんぜん分かんらん」

「あたしも分かんなかったから神に聞いたわ。例えば刀に触るでしよ？そしたら同じ刀がそこかしこに何十本も地面に突き刺さった状態で出てくるんだって」

「分かったような分からないような・・・」

「使いながら理解しなさい。で、能力の理由ね」

「神何だって？」

「『何にも思いつかなかったからテキスト』だって」

「神コノヤロー」

「何てこと言ってるんですか!？」

「さて、じゃ説明すんだから『これ』入れて。」

「どうやってですか？」

「手で持つてゆっくり自分の胸に押し付ければいいの」

「ってかそれ持てるのか？」

「あたしは持つてるじゃない」

「だって俺達人間だぜ？」

「つべこべ言わずとつとやりなさい!」

魔閻は額に青筋を浮かべて譲葉に時計の球体を、翔輝に刀の球体を渡した。

二人は淡く光る球体を受け取り、覚悟を決めて自分達の胸に押し付ける。すると球体はゆっくりと、しかしずると体の中に入った。

「・・・これでいいのか？」

「ええ、それでその力はあるんだものよ」

「何だか実感がわかないんですが・・・」

「最初はね。だから慣らさなきゃいけないの」

「どうやって?」

「あたしと戦って」

「は?」

「つまり、あたしがあんた達の練習相手になってあげるの。とにかく来なさい」

魔間はそう言って小屋を出て、小屋の横に設置してある倉庫のようなどころに二人を連れて行き、扉を開ける。

「うわっ!」

「な、何ですかここ!?!」

倉庫の中には、尋常ではない数の凶器があつた。刀、ナイフ、鉄砲、鎖鎌、等等だ。

「好きなの使つていいからあたしを殺してみなさい」

「何言つてんだ!?!ほんとに死ぬぞ、こんなので斬つたり撃つたりしたら!」

「大丈夫、あたしは死ねないから」

「何ですか、『死ねない』って、『死なない』って言いたいんじゃないですか?」

「違うわよ、死ねないの。言ったでしょ?あたしは魔物。魔物の中の」

魔間はそう言って振り向き、笑つて見せた。

「ヴァンパイアなんだから」

そう言ってニヤリと妖艶に笑う彼女の口には、鋭くとがった刃物の
ような歯が見えた。

第4章 魔物ってどんなの？（後書き）

次回は初の戦闘シーンです。

書いたことが無いのでうまく書けるかわかりませんが、頑張ります。

第5章 譲葉って意外と・・・（前書き）

まずは更新が遅れてしまったことに謝罪を。申し訳ありません。

それから今回少し短めの上に前回言った戦闘がほぼ全くありません。代わりと言っては何ですが、コメディー部分に力を入れました。

・・・あれ、それじゃ今までと同じじゃね？

第5章 譲葉って意外と・・・

「うわわわわっ!」

襲い掛かる無数のコウモリを振り払いながら翔輝は真っ暗な森の中を走り回る。

やっと全てを振り払い上空を見ると、そこには紅蓮の髪をした吸血鬼が月をバツクに怪しく微笑んでいた。

「おいコラ!降りて来ねえと斬れねえだろうが!とつとと斬らせる!死なねえんじゃ無かったのか!?!」

「嫌よ、死ななくても痛いんだから」

「だったら攻撃を止める!二つに一つだ、どっちがいい!?!」

「第三の選択肢、『降りないで攻撃を続ける』にするわ」

「んな選択肢があるかああああ!」

現在翔輝はレイによる指導と称したいじめの真っ最中である。事の発端は一時間ほど前

『ヴァ、ヴァンパイア?』

『ええ。吸血鬼とも言っらしいけど、大体みんなヴァンパイアって呼ぶわ』

『れ、レイさん、何を言ってるんですか?きゅ、吸血鬼なんているわけ無いじゃないですか・・・』

『そんなあたしの存在を否定するようなこと言わないでよ。証拠だってあるわよ?ほら』

そう言っってレイはもう一度はつきりと笑っってみせる。そこには確かに、人間の犬歯とは明らかに違う鋭くとがった歯が上下に各2本ず

っ付いていた。

『きゅ、吸血鬼ですよ！？アイルランド人作家ブラム・ストーカー氏の恐怖小説に出てくるあのドラキュラと同じってことですよ！？同じくアイルランド人作家のジョゼフ・シエリダン・レ・ファニユ氏の怪奇小説カーミラと同じってことですよ！？あるわけ無いじゃないですか！？』

『よくもまあそんなに変な名前がホイホイと……。相変わらずスゲエな、お前』

『な、何それ？そのブラムって人がファニユさんとやらのストーカーなの？それとあたしが同じ？失礼ね、あたしはストーカーなんかじゃないわよ！』

『そうじゃなくて、本当に吸血鬼かって話です！』

『嘘つく理由なんて無いし今歯見せたでしょ！これ以上どうやって証明しろって言うのよ！？』

『翔輝さんの血を飲んでください』

『ブツ！？』

すっかり傍観モードに入っていた翔輝は村を出る前にテリアにもらった水を飲んでいたので、予想外のタイミングで矛先が自分に向いたことに驚いて吹き出した。

『おやすい御用よ！』

『待て待て！他にいくらかでも方法があるだろ、空飛べとかコウモリに変身しろとか！ってか何で俺！？』

『何言ってるんですか、人が空を飛べるわけ無いですし、コウモリに変身なんて質量保存の法則により不可能です。吸血鬼に実現可能なものなんて吸血くらいじゃないですか』

『何でお前はそこだけ冷静なんだ！？ってかその理屈を無視するかから魔物なんだろ！？』

『ちょっと、あたしを取り残して色々話を進めないで！っていうかむしろあたしに話を進めさせて！』

『お前はちょっと黙ってる！』

『黙るのは翔輝さんです。とにかく黙って吸血されてください。というか吸血されなさい』

『お前はどこまで上から目線だ！？』

『だからあたしを置いていかないでって言ってるでしょ！？』

そんなやり取りを四十分ほど延々続けた挙句、当初の目的を忘れた三人は十分間うなり続けた後思い出し、レイが説明を始めた。

『つまり、今確かにあなた達は力を手に入れたけど、使い方を知らないんだからまだそこら辺にいるアリ以下よ』

『いくら力が無かったってアリなんかは負けてたまるか！アリに負けるなんてもはや人じゃねえだろ！』

『今はそんなことどうでもいいでしょ！？言葉のアヤよ。だから、練習がてらあたしを倒してみなさいってこと』

『そんな軽く言わないでくださいよ・・・』

『力があるならそんなに大変じゃないわよ。あたしそんなに強くないし』

『お前の言うことはどういうわけか信用ならん』

『つべこべ言わずとつとやるから外に出なさい』

『めんどくさいからヤダ』

『翔輝さん、つべこべ言わずとつと出てください』

『譲葉まで・・・。第一お前戦闘なんて出来るのか？』

『あら？私が翔輝さんに運動で一度でも負けたことがありましたかしら？』

『・・・無かったっけ？』

『ありません』

『何翔輝、あんたこんないかにも「か弱いですよ」って感じの子

にも勝てないの?」

「外で特訓すりゃいいんだな?とつとと行くぞ」

「逃げたわね」

「逃げましたね。ところで魔闇さん、さっきから飲んでいるそれは何ですか?」

「ん?ああこれ?昨日捕まえた鹿の血。あっちの冷蔵庫にまだ数本あるけど譲葉も飲む?」

『遠慮しておきます!?!』

というやり取りを終え、冒頭の部分へと戻るのが

「翔輝くあたしもう疲れた。とつとと練習終わろうよ」

「てめえもう黙れ!」

「翔輝さん。ぶつぶつ文句ばかり言っていないで頑張ってください
く
い」

再度襲い掛かってくるコウモリを何とか追い払い、翔輝は譲葉の方を睨む。

その先には木にもたれかかり何かの本を読んでいる譲葉の姿があった。

「そんでもって譲葉お前は何やってんだ!?!」

「見て分かりませんか?本を読んでいます」

「理由だ理由!練習しようって言ったのはお前だぞ!?!」

「そんなことは一言も、一秒も言っていない。私はただ単に『やってください』もしくは『やりなさい』と言っただけです」

「その時点でふざけんな!第一力を使う特訓をしなきゃいけないのはお前も一緒だろ!?!」

「力を使うための特訓?ごめんなさい、私の目がおかしいのでしょうか?私にはどう見ても翔輝さんのなさっている特訓は攻撃を避け

る、もしくはヘタレる特訓に見えるのですが・・・」

「ケンカ売ってんのか！？どこから来るんだお前の暴言は！？」

「悪意90グラム、嫌がらせ5グラム、人をバカにする優越感3グラム、軽蔑2グラム、愛情1グラムに冗談1グラムで私の暴言は構成されています」

「何だよグラムって、って言うかほとんど悪意じゃねーか！」

「あ、でもこれじゃ100グラムピッタリになりませんね。訂正します、悪意90グラム、嫌がらせ5グラム、人をバカにする優越感3グラムに軽蔑2グラムです」

「その二つを抜くな！それを抜いたらお前はただのSじゃねーか！？」

「心配しないでください。大丈夫です、ただのSではなくDSですから」

「何がどの辺が大丈夫！？微塵も大丈夫じゃねーよ！」

「何だったら悪意を殺意に変えてもよろしいですよ？」

「俺にいったい何の恨みがあるんだ！？」

「先日ジャンケンに負けたことですかね？」

「いつの話だ！？しかも何で質問形！？」

「まあぶっちゃけ特に理由は無いです」

「ねえのか！？つつーか、とつとと参戦しろ！」

「嫌です」

「何で！？」

「今勉強中だからです」

「何の！？」

「何って、力ですが何か？」

「・・・待て待て、何？」

「だから、私の『時の延長』の能力について読んでるんです。意外と面白いですよ」

「・・・さつきから気になってはいたんだが、その本は何だ？」

「ああ、これですか？説明書です。先ほど魔閻さんにいただきまし

た」

「オイ、レイ！」

「何よ？」

「俺の説明書は？」

「『見つからなかった、ゴメンね』だって」

「神アノヤロー。差別だ」

「それは人種差別ですか？性別差別ですか？それとも翔輝差別ですか？」

「翔輝差別って何だよ！？」

「翔輝さんだけを差別する特殊な差別法です。5年ほど前に私が考案して実行しています」

「実行するな！っていつかそんな昔から俺は差別されてたのか！？」

「気付きましようよ」

「無茶言うな！っていつかとつと働け！」

「働くんですか？申し訳ありません、私の視力が悪いのか翔輝さんの頭が悪いのか、この辺りには工場も会社も見当たりません・・・」

「お前はもう黙ってる！」

「了解しました。ただしその『黙る』は体も黙るとい意味で受け取るので、結局さっきの状況に逆戻りですがよろしいですか？」

「じゃあ黙って参戦しろ！」

「いいですよ」

「だから何で・・・っていいのかよ！？」

「本の内容は大方把握しました。そろそろ実践に使ってみようと思っていたところですし」

「ああそう。ちなみにどんなことが出来るわけ？」

「今現在確実に出来ることなら一つあります」

「それは？」

「翔輝さんの重大なミス指摘することです。ついでに頭の無さも」
「頭の無さってなんだよ？って言うかそれ以上にミスってなんだ？」
「順を追って説明しましょう。翔輝さんの能力は『刀剣の増殖』で

したよね？」

「そうだったな」

「ええ、しかし翔輝さん、肝心の刀剣はどうしました？」

「・・・あれ？あ、そっか」

「ミスに気がついたところで早速名誉返上しましょう。まずは先ほどの小屋から使いたい刀剣を持ってきてください」

「ちよつと待て、名誉を返上してどうする？」

「失敬、間違えました。そもそも名誉はありませんでしたね。訂正します、汚名挽回です」

「そこじゃねーよ！また違うし！」

「もうどうでもいいのでとっとと行ってきてください。早く私の力試してみたいです」

「ついさっきまで寝てたくせに随分とえらそうに・・・」

「いいから行ってください」

「了解・・・」

翔輝はため息をつきながらも小走りですっきの小屋の横にあった倉庫に向かった。

「譲葉、あんたって意外と毒舌なのね」

「心配ありませんよ、これは翔輝さん専用のモードですから。今は普段の私です」

「それは嫌いだからやってるの？それとも逆？」

「・・・さあ、どっちでしょうかね？」

譲葉は微笑みそう答え、レイに小さくウィンクした。

第5章 譲葉って意外と・・・（後書き）

なんだか譲葉のキャラが自分の中でも当初の予定と変わっています

^^;

でもまあ、このほうが面白そうなのでいいですよね？

次回こそは戦闘をやってみたいと思います。お楽しみに！

第6章 戦闘？（前書き）

戦闘戦闘言ってた割にはたいした戦闘無いです。^^；
というかあんまり普通のと変わりでないんで、今後もあまり戦闘なんかは期待しないで読んでってください。

第6章 戦闘？

「で、こっからどうすればいいんだ？」

「何が？」

「こいつを増やす方法だよ！」

翔輝は鞘に収められたままの刀を指差して怒鳴った。

倉庫の中には様々な種類の刀剣があったのだが、翔輝は無意識に刀を手に取り現在に至る。

「さあ？念じればいいんじゃない？」

「意味が分からん」

「頭の中で『増えろ〜！増えろ〜！』って繰り返すってこと」

「呪いの儀式か何かか？」

「どうだろうね」

「そこは否定してくれよ」

とは言ったものの、他に方法がないので試してみた……のだが

「……何も起こらん」

「え、ホントにやったの？」

「てめえ！」

「うるさいわね、いちいちあたしに頼らないで！自分でもなんか試してみなさいよ！」

「んなこと言われたって、俺はお前以上に知識ねえんだぞ！？」

「知らないわよそんなこと！グダグダ言ってる暇があったらとつとと発動させなさい！」

「その方法を今グダグダ話してるんだろっが！」

「・・・翔輝さん、とりあえず刀を鞘から抜いてみてはいかがですか？」

「ん、何で？」

「翔輝さんの能力というのは『刀剣の増殖』でしたよね。しかし、その刀は現在鞘に収められています。つまりその状態は厳密に言えば『刀剣』ではありません。なので、鞘から刀を抜き『刀剣』の状態を作り出せばもしかしたら発動するんじゃないですか？」

「・・・成程、まあ試してみるか」

右手で柄をしつかりと掴み、左手で鞘を支えゆっくりと刀を抜く。するとその瞬間、白い光のようなものが天に昇り、翔輝の十数メートル上空で無数の何かを形成し始めた。

「な、何だ？」

「翔輝、あんた何したの？」

「俺が知るわけ無いだろ」

「翔輝さん、取り合えずそこから動くことを推奨します」

「は、何で？」

翔輝がそう言った直後、空の光の形成が終わり、それが全て翔輝めがけて降下してきた。

「うわっ!」

とっさの判断でそれを避け、自分がついさっきまでいた場所を見る。するとそこには自分が持っているものと同じ刀が無数に突き刺さっていた。あと逃げるのが数秒遅かったらと思うと・・・ゾッとする。

「こうなるからです」

「何でこうなるって知ってたんだよ？」

「大体想像出来るじゃないですか」

「きよ、驚異的洞察力・・・」

「にしてもあぶなっかしい能力ね・・・。気をつけなきゃ自分もろともグツサリ、か」

「フーカレイ、お前この能力の説明で『地面に突き刺さった状態が出てくる』とか何とか言っただけじゃなかったか？」

「そうだった？」

「覚えてない人は第4章を参照してください」

「そういうネタって言うていいの？」

「いいんじゃないの？いいのか、もみ・・・譲葉？」

「本当はダメです。あき・・・翔輝さんは迂闊過ぎです。次からはもっと気をつけてください」

「・・・二人とも今何と間違えそうになったの？」

「・・・さあ？」

「何でしょうね？」

「何よそれ・・・？」

元ネタを知りたい人は作者のもう一つの小説へどうぞ。 完結してませんが。

「それはさておき、そろそろ始めるわよ？」

「何だっけ？」

「練習でしょ!？」

「お前がずっと上にいたから練習なんてしてないんだよ!だから忘れてたんだ!」

「何言ってるんですか?翔輝さんずっと逃げる練習してたじゃないですか」

「お前は読書の練習しかしてないけどな!」

「あゝもういい!とにかくあたしに一撃入れればオツケー。あたしは基本的には死ぬような攻撃はしないから」

「怪我するような攻撃はするんですね……」

「それ位しなきゃ練習にならないでしょ？」

「まあそれはそうですね……」

「初めていいのか？」

「そうね、やりましょう。じゃあよい……スタート！」

何だか訓練の割には間の抜けた掛け声だとひそかに呟きながらもレイにそれなりに本気で斬りかかる。

しかし難なくジャンプでかわされ、さっきのような硬直状態に逆戻りだ。

「お前また飛びやがって！俺達からはどうしようもないじゃねーか！」

「それも工夫して色々やってみなさい！」

レイはそう返事をする。とまたコウモリを操り攻撃を仕掛け始める。

しかし、今度は翔輝も刀を持っているのでそれなりに対応することが出来たが、やはりコウモリに刀を当てるのは難しく結局は苦戦している。

一方譲葉はさつき翔輝と一緒に持ってきてもらったナイフでコウモリたちに応戦している。

それも、驚くことに翔輝のように適当に振って当たればラッキー、という感じではなく一匹一匹確実に倒していく。

「譲葉、お前ってそんなにナイフ使うのうまかったっけ？」

「ええ、昔からひそかに翔輝さんを暗殺するために訓練してましたから」

「あ、成程……ってオイ！」

「冗談です。半分」

「半分は本気なのか!？」

「かも知れませんか」

「・・・え、ホントに？マジで？」

「無駄口叩いてる暇があったらちゃんと応戦してください」

「なあ、今思っただけこれ俺がいなくてもいいんじゃないの？」

「そうですね。でも全部相手にするのは骨が折れるのでやれるだけやってください」

「そうですねって・・・。まあどの道休んだりはいしないけどさ」

「そうですね、安心しました。じゃああまり役に立たないながらもせいぜい頑張ってください」

「随分な言われようだな・・・」

翔輝は苦笑して言った。二人はそんな会話をしている最中も確実にコウモリの数を減らしていく。

「そんなことより翔輝さん」

「なんだ？」

「さっきから翔輝さん刀一本しか使ってませんよ？」

「そうだな。それがどうかしたか？」

「あそこのはどうするんですか？」

譲葉は開いている左手で地面に突き刺さっている刀の山を見る。先ほど翔輝が殺されそうになったあの山だ。

「どうするってどういうことだよ？」

「アレだけ武器があるのに全部無駄にしませんか、ってことです」

「んなこといったってどう使えばいいんだよ？俺あんなに手多くねえぞ？」

「誰も翔輝さんにモルルになれなんて要求してません。ただもちよっと使い方があるんじゃないですか？」

「例えば？」

「アレだけあるんだからアレを魔闇さんに投げるとか、両手に持って二刀流にするとか」

「・・・天才か、お前？」

「ええ」

「そこは肯定するな」

「翔輝さんはバカですか？」

「違う」

「そこは否定しないでください」

「何故に!？」

二人が雑談を終えた頃には、辺りにいたコウモリは全滅していた。翔輝は急いで刀の山に向かって走り出し、その中の一本を掴んで上空にいるレイに投げつける。

「はわっ！」

そんな使い方をされるとは思ってもいなかったのか、レイは面白い声を上げてそれを避ける。

翔輝はそれを見て、ここぞとばかりにそこにあつた無数の刀を連続して投げ続けるが、間一髪で全てかわされ続けた。

「はあ、はあ・・・」

3分間投げ続けた刀を全てかわされ次第にイライラし始めた翔輝は全力投刀(?)を続けたため、攻撃する側がバテると言う残念な結果に終わった。ちなみにレイは無傷である。

「・・・やっぱり役に立ちませんね」

「そこ! 黙れ！」

二人の3分間の攻防戦もといコントの間も読書を続けていた譲葉は残念な結果に終わった翔輝を見てため息をついた。

「仕方ないですね、私がやりましょう」

「おお、やっとな」

「まったく、翔輝さんは情けないですね」

「何もやってないお前が言うな」

「だから今から私がやるんじゃないですか。恐れ入りますがこのナイフを翔輝さんの刀のように増やしてくれませんか？」

「え？ああ、分かった」

先ほどと同じように翔輝は譲葉からナイフを受け取ると上空で光が形成され、無数のナイフが翔輝がいた場所に降り注いだ。

「・・・何回やっても怖えくな」

「じゃあ出るところコントロールできるように特訓すれば言いだけの話です。まあ何はともあれありがとうございます。あとは下がっていただいて結構ですよ」

「簡単に言いやがって」と呟いてから翔輝は言われたとおり譲葉の後ろに下がる。

譲葉はナイフの束の前に立つとその中から2本を拾い、レイを見上げた。

「あゝ疲れた。次は譲葉？」

「ええ、覚悟してくださいね」

「いいわよ、かかっつきなさい」

「では、お言葉に甘えて」

譲葉がそういい終わると、地面に刺さっていたはずのナイフが全て

消えた。

いや、正確に言うと消えたのではなく、飛んでいった。全てレイめがけて右からも、左からも、前からも、後ろからも、下からも。

「・・・え？」

「きゃああああ！」

ほぼ全方向から猛スピードで接近するナイフを全て避けきれぬわけも無く、レイは無数のナイフによって串刺しにされた。

「うげっ・・・」

「・・・すごい罪悪感です」

本人に死なないとは知らされていても、串刺しになつたレイは見ていて決して気持ちのいいものではなかった。

腕に、足に、体に、顔にまで刺さっているナイフは言うまでも無く痛々しく、それぞれ全てから流血しているとなればもう惨劇だ。グロテスクを通り越したグロテスクである。どんなグロテスクなのだろうか？

「この状況で冗談飛ばしてるバカがいるぞ？」

「ほっときましょう。それで、あの・・・魔闇さん？」

「・・・い、いった~~~~い!!!」

レイはしばらく硬直した後、急に飛び上がって痛がり始めた。

想像してみてください。全身ナイフと血にまみれて倒れていた人間の容姿をした女の子が急に飛び上がってそれを痛がる・・・下手なホラーよりよっぽど怖いです。バイ ハザードもビックリです。

「あ、あ、あの、魔闇さん、も、申し訳ありませんっ！」

「え？ああ、いいのよ、こうなるのは分かってたし。ただあまりにも予想外だったからちよつとビックリしてね」

「俺はお前のリアクションにビックリだよ。」

「うるさいわね。それにしてもあんた達すごいわね。普通始めてここに来た人たちはここまで容赦なく攻撃できないわよ？」

「ある意味吹っ切れましたから」

「そんなもんでここまで出来るなら上出来ね。とりあえずさ、これ抜くの手伝ってくれる」

「え……」

無茶な要求である。見ているだけでも拷問のようなのにその上抜けと言われるのはかなりきつい。特にこういうのが大の苦手な譲葉には最上クラスの拷問だ。

「いや、それはちよつと勘弁して欲しいです……」

「え？？分かったわよ、一人でやるわ……」

レイはそう言っただけでまずコメカミに刺さっているナイフに手を掛ける。顔を苦痛に歪ませながら一気に引き抜くと、血が盛大に噴出してレイの左側にいた譲葉にかかった。

「……」

「ってオイ譲葉！無言で気絶するな！」

ショックが強すぎて気絶してしまった譲葉をゆっくりと寝かせ、レイに近づく。

「手伝うよ、ってかお前本当に大丈夫か？」

「言ったでしょ？痛いだけで別に問題はないわ。不死だしね。傷だつてすぐに直るわ。ホラ」

そう言つて翔輝に見せた例のコメカミには、先ほどのナイフの傷はもう無くなつていた。

「驚異的だな。お前を本気で相手にしたら誰も勝てないんだろうな。・・・」

「そうね。さ、手伝つて。あたしは腕の抜くからあんたは足の抜いて」
「了解」

役割分担をして二人で作業を始めた・・・のだが協力しているはずなのに、ナイフを手に持つていて返り血を浴びている翔輝と血まみれのレイ・・・。

「・・・虐殺現場にしか見えないな」

「虐殺されてるのはあんた？」

「何で俺の周りには気の強い女しかいないんだ？」

「運命じゃない？」

「そんな運命俺は呪うぞ」

苦笑しながら冗談交じりにそんなことを呟く。そうでもしないとそんな作業をこなすことが出来ないのである。

「勝手に呪いなさい。運命なんて、自分で変えられるものじゃない。どんな運命だろうと、それには抗えないんだから」

「・・・レイ？どうしたんだ？」

「・・・ん、なんでもないわ。ほら、さっさと手を動かさない！」

「分かったよ、分かったからあんま動くな、気持ち悪い」

「何ですって!？」

「その格好でじたばたやられたら誰だつてそう思つわ!」

「こんな格好にしたのは誰よ!？」

「譲葉だ!」

「・・・あ、そうか」

「おお、初めてお前に口げんかで勝った」

「・・・でもナイフ増やしたのはあんたじゃない」

「うっ・・・!」

「ふん、甘いわね」

「ちくしょー・・・」

「・・・それにしても、あの子いったい何したのかしら?」

「ああ、あのナイフの流星群みたいな奴のことか?」

「そう。あれどうやったらあんなことできるわけ?」

「そりやお前、時間止めてナイフを全方向から投げて回ればいいんじゃないか?」

「・・・は?」

「・・・いや、忘れてくれ。うまく説明できねー。とにかく、アイツが起きてから説明してもらえばいいだろ?」

「そうね。そう言えば翔輝」

「ん?」

「明日からあんたはあたしと特訓ね。役立たずにも程があるわ」

「・・・マジ?」

第6章 戦闘？（後書き）

しっかし酷いですね^^；

戦闘中にこんな冗談飛ばせるほど達人にした覚えは無いんですが・
・。

やっぱり戦闘は難しいですね、細かく伝えようとすると説明口調になっ
てしまい、逆に説明口調をなくすと全然伝わらなかつたり・
・。

僕はあえて後者を選ばせていただきました。ぶっちゃけ会話のほう
が楽しいんで^^；

第7章 魔閻レイ（前書き）

今後はなるべく1日か2日に一回のペースで更新できるようにします。

その分少し短くなるとは思いますが、そのほうが僕的にもテンポよく進めていけると思っています。

第7章 魔閻レイ

「翔輝、起きろ！朝だよ、特訓だよ！」

一度目は覚めたが自分が異世界に来たことを改めて確認し、憂鬱になつて二度寝（不貞寝）をしようともう一度昨日レイに借りた寝袋に入り込んだところにそれはやってきた。

特訓という言葉から声の主がレイだという事は推測できたが、あまにも昨日とのキャラが違いすぎる。別人ではないか。

これには朝に弱い翔輝もさすがに目を覚まし、寝袋から這い出る。

「レイ、お前熱でもあ

目を擦りながらそう言い掛けたが、レイの姿を見て驚いて絶句した。

「ん？あそつか、昨日は何にも説明してなかったね。」

レイは何事もないかのように喋っているが、その姿を見た翔輝はフリーズしている。翔輝の目に写っている光景を解説しよう。

目の前にいるこの人物の声は、確かに魔閻レイその人の声と完全に一致する。

しかし、外見が違いすぎているのだ。髪、目、服装、口調、顔に至るまで全てが昨日の魔閻レイとは他人レベルでかけ離れている。

昨日の鮮やかな紅の長髪は全て茶色く染まっっていて、瞳も昨日と違い濃い茶色に変わっている。口調も若干、というかかなり昨日と比べてテンションが高すぎる。

服装も昨日のマントのようなものではなく、明るい茶色をしたワンピースを着ているだけだ。昨日と比べたら随分とあっさりした感じである。

顔も昨日のような妖艶さはかけらも無く、純真無垢な子供のような笑顔で翔輝の前にちょこんと座り込んでいるそれは、どこからどう見ても翔輝の知っている魔閻レイではなかった。

「・・・あ、もしかして双子か？」

「違うよ、昨日と同じ魔閻レイだよ。って、『昨日と同じ』じゃないか、ちゃんと言うと『昨日の夜と同じ』だね」

「ちゃんと順を追って説明しろ。何だよ、『昨日の夜と同じ』じゃないって？」

「僕はね、確かに昨日の夜翔輝と譲葉が会った魔閻レイだよ。けど今の僕は昼の人格、狼女の魔閻レイなのさ」

「・・・つまり？」

「ん〜、難しい話全部飛ばして言っちゃうと、ぶっちゃけ僕は二重人格なんだ」

「あ〜、そう言ってくれば分かるよ。さ、難しい話とやらを頼む」

「これだけ自分の周りでおかしなことが起こってたんだ。これくらいでいちいち驚いてたら身がもたねえ」

「それもそうか。さて、じゃあ難しい話をしようか。僕は確かに魔閻レイ、昨日の彼女もまた魔閻レイ。つまり、この『魔閻レイ』という人物の体は二つの人格によって制御されてるんだよ」

「しかし、何で二重人格なんてめんどくさいことになったんだ？」

「僕の親は女ヴァンパイアと狼男でね。だから僕は二つの種族の血を引いてるんだ。」

「それだけの理由か？そんなんだったらこの世界は二重人格だらけになるんじゃないか？」

「僕の場合は特別だよ。でもちよつと複雑だから特訓の準備しながら話ししよう。僕は先に言ってるから君は自分の武器持って外に来てね。」

「お、おう、分かった」

「それじゃ、僕も自分の武器持って外で待ってるから。あ、でもゆっくりでいいから。それじゃお先に」

レイはそう言っただけで部屋を後にする。部屋と言っても、翔輝と譲葉が寝ているのはレイの倉庫なのだが。

「ホントにアイツ昨日のレイと同一人物なのか？正直信じられない・・・」

「・・・ん、翔輝さん」

「あ、悪い、起こしたか、って寝言かよ。何で寝言で俺の名前が？」

譲葉も同じく寝袋から顔だけ出して翔輝の横で寝ている。昨日寝た位置からほぼ全く動いていない。驚くべき寝相の良さだ。

自分の名前を呼びながら笑顔で寝ている譲葉の姿に、翔輝は少しだけドキッとしてしまった。

「全く、翔輝さんは役に立ちませんね・・・」

「夢の中でまでそれかよ・・・？」

一度苦笑交じりのため息をついてから自分の武器、つまり刀を持って髪を掻きながら倉庫を出た。

「あ、来た。思ったより早かったね」

外に出ると、レイはかなり高いところにある木の枝に座って翔輝を見下ろしていた。

「これと言ってやることもないしな。さ、話の続きだ」

「いいよ。どこまで話したっけ？」

「お前が二重人格で、お前の場合特別だったこと」

「ああ、そうだったね。」

翔輝がそう答えるとレイは「よいしょつと」と言う声と共に枝から地面に飛び降りた。かなり高いところから降りたはずなのに、レイはなんでもないようにふわりと着地した事に翔輝は驚いたが、それよりもレイの話が気になったのであえて聞かなかった。

ちなみに飛び降りる際にはちゃんとワンピースのスカート部分を手で押さえていたのでサービス等は一切ございません。

「じゃあ特別な理由を説明するよ。まず原則として二つの種族のハーフが生まれた場合、位の高い種族の遺伝を濃く引いて生まれてくるんだ。ちなみに種族の位って言うのは鬼、魔物、獣人、エルフの順だね」

「鬼？鬼は確かずっと昔に滅んだんじゃないか？」

「滅んだよ。あくまで参考までになってことさ」

「あつそ。あれ、でもそれだとおかしくないか？その順番のままだと魔物の遺伝だからヴァンパイアになるんじゃないのか？」

「本当はそのはずだったんだあゝ。でもお父さんは純粹な狼人間、お母さんがヴァンパイアと獣人のハーフだね。」

「・・・え、待って待って。つまり・・・何？」

「実を言うと僕にもいまいち分からないんだあゝ」

「当事者がそれかよ？」

「まあそれは置いといて、結構複雑なんだよ。仮に計算しようとしても魔物と獣人の中にもランクがあつてね、例えば狼人間は犬人間より上だし、吸血鬼はオークより上。それも全部ハーフの人たちの血の割合に影響してて、そう言うのを全部計算に入れるとルービックキューブの色の配置のパターンと同じくらいの割合のパターンが

あるみたい」

「うわあ、そりやまたとてつもないな。それって何兆とかの割合のパターンがあるってことか？」

「そう見たいだね。僕も詳しいことはよく分からないけど、二重人格が生まれるのはその何兆パターン中一つだけなんだって。つまり二つの種族の血がちょうど50%の割合で交じり合ってる状態にならないやいいけないみたい」

「成程、それでお前がその何兆分の一の確立で二重人格になったと」「そういうこと。ただ幸いだったのが、僕が獣人でもう一人がヴァンパイアだったってこと。僕は普通の人たちと同じ昼行性、ヴァンパイアの僕のほうは夜行性だから日の出日の入りを境に毎日入れ替わってるんだ」

「そういうことか、複雑だけどまあぼんやりとは分かった。要するにお前は二重人格で昼は狼女、夜はヴァンパイアってことだな」

「すごい大雑把に言えばそうなるね。でもまあ、それくらいの理解でとりあえずは十分だよ」

「はい、じゃあ質問」

「いいよ」

「狼女って言うのはあの月を見ると狼になるアレか？それとも町にいたテリアみたいな二足歩行の獣みたいな奴か？」

「僕はどっちかって言うつと後者だね。テリアさんとはちょっと違うけど。テリアさんは獣人だけど獣の遺伝が濃く出たタイプの獣人なんだ。僕は獣人の状態もピッタリ50%ずつ持つてるから自由に変われるんだ。今は楽だから人の格好してるけど、テリアさんみたいに半獣人になることも出来るし完全に狼になることも出来る。」

「随分便利なんだな」

「まあ確かに便利だけどこれのせいで苦労したこともたくさんあるんだあ。でもこれ以上話が長くなるのも嫌だからとりあえず特訓しちゃう」

「了解。あ、でも今お前はヴァンパイアじゃないんだよな？斬った

「死ぬんじゃないか？」

「死んじゃうね。だから全部峰打ちでお願い」

「御意」

そう言うと翔輝はレイから少し距離をとって刀の柄に手を掛ける。

レイはあくまで自然体で微笑みながら翔輝と対峙している。

数秒の硬直状態の後、唐突にレイが聞いた。

「あ、でもその前に」ご飯食べようか？お腹空いちゃった」

「だああああ！」

あまりに唐突な提案に思わずずっとこけてしまった。

「あれ、ダメだったかな？」

「いや、ダメじゃないけど……。そんなことを唐突に言われるとはさすがに予想外だった」

「あはは、ゴメンね。じゃあとりあえずご飯食べよ。君は料理できるの？」

「人並みには」

「じゃあお願いできる？僕料理あんまり得意じゃなくて……」

「いいよ、じゃあお前は譲葉起こしてきてくれ。あいつ寝起きはいからすぐに起きてくるはずだ」

「分かった、じゃあお願いね」

レイは相当空腹なのか、小走りで譲葉が寝ている倉庫へと向かった。

「面白え奴」と苦笑しながら呟いてから小屋に入り、早々に朝食の準備に取り掛かった。

第7章 魔閻レイ（後書き）

複雑、というか超適当です^^；

ぶつちやけルービックキューブと同じ位パターンがあるなんて知らない、って言うか十中八九間違ってますww

調べてみたんですけど、ルービックキューブって1000京（1000兆の千倍）以上のパターンがあるんですね。始めて知りました。そんなに割合のパターンあるわけねえよww

まあ誰もこんな小説にそこまでリアリティを求めてないと思うので、これでいいかって感じですよ

って言うかあんな説明で皆さん分かりましたか？分かりにくくてすみません・・・T_T

第8章 現実主義者（リアリスト）？（前書き）

少し余裕が出来たので連続更新です

しかし特に話が進展するわけでもなく、ただ前回の続きですね。

自分でも何がしたいのかいまいち分からない回です^^^；

第8章 現実主義者（リアリスト）？

「翔輝さん、おはようございます」

「ん？ああ、譲葉。どうだ、こつちの世界最初の朝は？」

「最悪です」

「どうした？何か嫌なことでもあったか？」

「遅刻の常習犯の翔輝さんに朝起きることで負けるなんて、屈辱です」

「ざまあ見やがれ、だ」

本当はレイに起こしてもらったのだが、なんとなくいい気味だったので黙っておいた。

「それで、翔輝さんはこんな朝早くに起きて何をなさっていたんですか？」

「朝飯の準備」

「そうでしたか。それでは、私も何かお手伝い
「丁重にお断りするおとなしくしてやがれコノヤロー」

何かを言い切る前に翔輝は譲葉の言葉を遮って提案を拒否する。

「どの辺が丁重ですか？・・・まあいいです、じゃあ私は説明書読んでますから」

「ああそうしてくれ、永遠にそうしてくれ。あ、そういえば譲葉」

「返事がない。ただの永遠に説明書を読んでいる譲葉のようです」

「真に受けるなよ、しかも何だその無駄に長い説明」

「返事がない。ただの永遠に説明書を読んでいる譲葉のようです」

「分かった、謝るから俺の話聞け」

「仕方ありませんね、何ですか？」

「昨日の特訓でやったあのナイフ流星群」

「ナイフ流星群……。もうちょっとネーミング何とかありませんかね？」

「今はそれいいから黙って聞け。あれっていったい何をどうしたんだ？」

「あれですか？時間を一旦止めて全方向からナイフを魔闇さんに投げたんです。停止した時間の中で私の手から離れている物は速度を失うので、それを利用したんです。魔闇さんを包囲し終えたら時間を元に戻しナイフは全て速度を取り戻し、全て魔闇さん目掛けて飛んでいったというわけです」

「何か複雑だけど……。とにかく時間を止めてナイフを投げまくったってことか？」

「翔輝さんが分かるレベルで説明するとそう言うことです」

「それはそれは、優しい心遣いありがとうございますコノヤロー」

「いえいえ、バカに分かるように説明するのは秀才の義務ですから」
「笑顔でそういう事をサラツと言うな。それと自分で秀才とか言うな」

「失礼しました。それで、他に聞きたいことがあるんですけど？」

「失礼してないのかよ？まあいいや、もう一つ質問だ。あの時コウモリを簡単に落としたのも時間止める能力使ったからか？」

「ええ、正確に言うると時間の流れを遅くしたんです。そうすればコウモリの動きなんてナマケモノの動きと同じですから、ナイフで斬るのなんて翔輝さんを惨殺するくらい容易たやすいいです」

「言ったなコノヤロー、やって見やがれ」

「いいんですか？」

そう呟いたかと思うと、讓葉は突然翔輝の視界から消える。それと同時に、翔輝は首筋に何か冷たい感触を感じた。

「……やろうと思えば、本当に殺れちゃうんですよ」

「……いきなりだな。何した、今？」

「時間を止めて急接近しました。それで、どうします？この先に行きましようか、それとも降参ですか？」

「はいはい、分かりました。降参だ、降参。それとどっから出したそのナイフ？」

翔輝は自分が命の危機に晒されているにもかかわらず、のほほんとした口調で尋ねる。

「昨日寝る前に魔闇さんに渡されました。スカートで見えませんが、腿の上のほうにナイフホルダーを仕込んであります。」

「腿の上の方って……。マニアが喜びそうな場所だな」

「言っておきますが見せませんよ？」

「分かっているし見せてくれとも言っていない」

「そうですか。翔輝さんが変態じゃ無くて安心しました。では私は外で読書でもしているので、出来たら呼んでくださいね」

「了解」

譲葉はようやくナイフを翔輝の喉元から離し、ナイフホルダーに戻した。

「お前、ホントにそんなところに隠してるのかよ……」

「……っ！？み、見ましたか！？」

「どっちを？って言うかお前が自分でやったんだらうが」

「見たか見てないかを聞いてるんです！」

「見てはいないけど、見えた」

「それは見たってことじゃないですかあああ！」

「自分で見せたんだから、見たんじゃない。あくまで見えたただけだ」
「だからあー！」

「翔輝、ご飯出来た？」

『見た・見えた談議』を繰り広げていると、小屋の外からレイのや
や衰弱した声が聞こえた。

・・・『見た・見えた談議』って何だ？

「あちゃ、レイの奴相当腹減ってんな・・・。譲葉、お前外に出て
レイと適当に話してろ」

「・・・分かりました。私もおなか空きましたし、この事はまた後
日決着をつけましょう。そういえば翔輝さん、魔闇さんのあの姿な
んですか？」

「ああ、それは本人に聞いてくれ。俺もいまいちよく分からんから
もしお前が聞いて分かったら俺に分かり易く説明してくれ」

「嫌です。何で私がそんなことしなくちゃいけないんですか？」

「バカに分かるように説明するのは秀才の義務とか言ってたなかつ
つけ？」

「大丈夫です、翔輝さんはバカなんかじゃありませんから」

「都合いいな、お前」

「本心ですよ。それでは失礼します。調理頑張ってくださいね」

譲葉は微笑んでそう言つと小屋を出て小走りでレイの元へと向かつ
た。

「それが本心ならずつとそのまま素直でいてくれ、ホントに斬りや
がって・・・」

先ほど譲葉が翔輝の喉元にナイフを宛がった時、わざとなのか間違
えたのかは知らないが少しだけ斬られてしまった。

わざとやったのなら別にいい・・・わけではないのだが、少なくとも
も安心できる。後者ならとてつもなく怖い。一歩間違えば死ぬとこ

るだったのだから。

「後で問い詰めてやる。さて、材料は何があるかなつと・・・」

適当に小屋の中を探索し材料をそろえようとするが、見つかるのは調味料ばかり。そこで昨日レイが冷蔵庫があると書いていたのを思い出し、冷蔵庫を探し始める。

数分もしないうちに隣の部屋にあるのを見つけ、随分あつちの世界のものが開発されているんだなあと感じしながら中を見たのだが。

「何々？『鹿の血』『イノシシの血』『ネズミの血（いらぬい）』『鹿肉』『猪肉』・・・。肉と血ばかりじゃねえか。偏りすぎだろ、栄養バランス」

とは言ったものの、他に何も見つからないのでとりあえず鹿肉と猪肉のサラダを作ることにした。もはやサラダではないが。幸い調味料は色々あつたので、味が単調になって飽きるという事態にはならなくて済みそうだ。

すると不意に、外から譲葉の『お、狼・・・！』という絶望したような声が聞こえた。恐らくオカルト大嫌いの譲葉が狼女のレイの話聞いて狼男、つまり怪物を連想したのだろう。

「・・・本人は現実主義者と自称しているが、それって単なるオカルト嫌いの言い訳なんじゃないか？」

謎は深まるばかりである。

第8章 現実主義者（リアリスト）？（後書き）

本当は特訓を少しでも書きたかったんですが、未だに朝食すら取ってませんねww

今思うと、この回で少し第1章に出てきた譲葉を書きたかったのかもしれない。最近あいつ黒いからなww

まあ結局ほとんど出ませんでしたけど・・・

今後も慌てふためく譲葉はチョコチョコ書きたいと思います。本当はあいつそういう感じのキャラだったのに、何をどう間違ったらあんなったんだ？ある意味あいつが一番二重人格かも知れませんか^

^ ;

第9章 秀才、でもバカ（前書き）

譲葉第2の弱点です

しかし今回の話、95%が会話で構成されています。まあこれはこれでありますよね？^^；

第9章 秀才、でもバカ

「わっ、これおいしい！何使ったの？」

「鹿の肉を塩で焼いただけだよ。猪の血も混ぜてみたけど」

「ちょ、翔輝さん！」

「何だよ、大したことじゃないだろ？」

「大したことですよ！それって言えばB型の人にA型の血を輸血する
ようなものですよ！？」

「・・・いや、輸血するにしても手遅れだろ、って言うか絶対違
うし」

調理開始から15分後、三人は小屋の中の小さなテーブルを囲んで
食事をしていた。

献立は鹿の肉のソテー猪の血添えー（？）猪の肉と鹿の肉のサラ
ダ、そして譲葉のみスパシャルドリンクとして謎の赤い液体が出さ
れた。何かを聞く前に外にぶちまけられたが。

この光景を見たら夜のレイはおそらく『あゝあゝあゝあゝあゝ
あゝ！！』と悲痛な声を上げることだろう。

「とにかく、調味料に血液を使うなんて非常識です！」

「お前が言うな」

「何ですか！？」

「自分の心に聞いてみる」

「まあまあ、とにかく食べようよ。ね？」

「嫌です、猪の血なんて食べたくありません」

「何言ってるんだ、血は食べるんじゃないやなくて飲むもんだろ？」

「とにかく私は食べません！これを食べるくらいなら自分で調理さ
せてもらいます！」

「な、バカやめろ！死ぬぞ！」

「どついう意味ですか!？」

「お前の料理の腕は壊滅的だろうが!アレ食ったら絶対死ぬって!

「失敬な!私の料理のどこが壊滅的だって言うんですか!？」

「砂糖と片栗粉を間違えて入れるのは壊滅的じゃないのか？」

「うっ……」

「譲葉、それは酷いんじゃない?僕もさすがにそんなことしないよ?」

「う、うるさいです!最終的に食べればいいんです!」

「食べれないからこういう会話を繰り返しているんだが……」

「つべこべ言わないでください!大体翔輝さんは何ですか!?私が作ったもの一度も『おいしい』って言うてくれたことないじゃないですか!」

「だったら頼むからお世辞でも『おいしい』って言える物を作ってくれ」

「じゃあ教えてください」

「え、あ、習う気あるのか?お前のことだからってつきりやる気すらないのかと」

「翔輝さんと一緒にしないでください。翔輝さんに何か一つのことでも負けているのは私にとっては東京のど真ん中で全裸になることよりも屈辱なんです」

「じゃあ脱げばいいんじゃないか？」

「理屈が分かりません。それと死んでください」

「直球だな」

「こう言わなきゃ分からないでしょう?死んでください」

「二回言うな」

「第一、翔輝さんみたいな人に私の体は勿体無さ過ぎです。それこそ世界に1台しかないスポーツカーの中に3兆円を入れてツァーリ・ボンバで爆破して海に沈めるより勿体無いです」

「俺はお前の中でどこまでダメ人間だ？」

「作者の部屋に落ちている埃の2つ下くらいですかね」

「微妙に分かりやすいような分かりにくいような・・・」
「早い話最下位です」
「お前それは当然俺にもだが作者にも謝れ」
「必要ないです」
「それもそうか。じゃあせめて俺には謝れ」
「必要ないです」
「それもそうか。って待って待って待って」
「何ですか？三回言わなくても分かりますよ？」
「俺には謝れ」
「必要ないです」
「お前も三回言わなくても分かるぞ？」
「大丈夫です、最初の一回は翔輝さんにじゃありませんから」
「何がどう大丈夫なんだ？」
「・・・ねえ、二人っていつもそんな感じなの？」
「まあそうですね。こっちに来てからちよつと調子が落ちてますけど」
「それで落ちてるんだ・・・」
「おう、いつもはもっとすごいぞ？何度か本当に自殺してやるうか迷ったからな」
「それはそれは・・・。翔輝も大変だね」
「もう慣れたよ。ほとんどは適当に流せるさ」
「え、そうなんですか？困りました、次の手を考えないと・・・」
「んなことせんでいいから」
「あはは、でも退屈はしないんじゃない？」
「しないな」
「だよね。ご馳走様でした、おいしかったよ！ありがとう！」
「お粗末様。食器は後で洗っとくからいつも洗ってる場所に置いてくれ」
「え、そんなことまでお願いしちゃっていいの？」
「いいよ、どうせやることも無いし」

「ちょっと待ってください、私に料理を教えるんじゃないんですか？」

「ああ、そういえばそうだったな。悪いレイ、やってくれるか？」

「もちろん。じゃあ二人とも食べ終わったらお皿外に持ってきて。

僕は自分の先に洗ってるから」

「了解。ご馳走様」

「早っ！」

「持っつてくれるか？」

「いいよ」

「あ、じゃあ私のもお願いします」

「あれ、まだ終わってないよ？」

「だから食べないって言ったじゃないですか。自分で作ってそれを食べます」

「本気だったんだ・・・」

「当然です。私嘘は言ったことがないですから」

「今言ったぞ」

「黙りやがってください」

「命令？要求？」

「命令です。拒否権無しですから」

「言っと思った。さて、じゃあ特訓だ」

「翔輝さんをお願いしますのは本意ですが、仕方ありませんね。よろしくお願いします。魔閻さん、肉と血液のほかには何か材料無いんですか？」

「あるよ」

「あるのかよ！？先に言えよ！」

「ゴメンね、忘れてた。倉庫の奥にもう一個冷蔵庫があるから、その中に色々入ってるよ」

「分かりました、好きに使わせてもらいますね。さあ翔輝さん」

「はいはい」

「一応言っておきますが翔輝さんは手を出さないでくださいね。あ

くまで私の特訓なので」

「俺に手伝えつつい何十行か前に言っただけだったか？」

「そういうネタは止めてください。刻みますよ？」

「そりゃ怖い。さ、とつとつとやっつて終わらせるぞ」

「本当に適当に流してるなあ」と二人の様子に苦笑しながらレイは三人分の食器を持って食器洗い場へ移動する。

食器洗い場といっても木製のたらいに近くの井戸の水を入れただけの簡単なものである。ちょうど昔の洗濯と同じような感じだ。

レイがしばらく鼻歌交じりに食器を洗っていると、なにやら焦げ臭い匂いが漂ってきた。

小屋のほうに振り返ると、なにやらキッチンにつながっている煙突から黒煙が立ち上がっている。

「うわわわわっ！」

次の瞬間、翔輝が慌てて小屋から飛び出してきた。爆発の後のように若干煤まみれになっている。

「な、何！？どうしたの！？」

「讓葉の奴、『まずはゆで卵でも作りましょう』とか言っつて電子レンジに金属製のボウルに水入れて生卵放り込んで稼動しやがった」

「うわあ、電子レンジ殺し三連コンボだね・・・」

「レンジに卵と金属がダメなのは常識だろ・・・」

「でもそんなので煙なんて出たっけ？」

「あいつ『へ〜。電子レンジでゆで卵作るとポップコーンみたいになるんですね』とか言っつてしばらく放置してやがった。したら卵とか全部焦げてあけたら煙がモクモクと・・・」

「讓葉つて頭いいんじゃないっけ？」

「勉強はな。料理とか普通の常識はあんまりない」

「今はそんな冗談言ってる場合じゃないでしょ！早くしてよ〜！」
「大丈夫だ。譲葉、行け」
「何で私が行かなきゃならないんですか？」
「お前のせいだろ、これ」
「・・・了解しました」

1秒後、譲葉の活躍により小火は無事鎮火された。

「・・・なんでそんなに落ち着いてられるのよ？」
「だって譲葉がいるし」
「・・・二人とも、夜罰ゲームね」
「それは私達のせいなので仕方ありませんが、何で夜なんですか？」
「それ以前にこれ俺のせいかな？」
「昼の僕より夜の僕のほうがSだから」
「・・・期待しておきます」

この罰ゲームを受け入れたことを、夜に譲葉は後悔することになる。
・・・。

第9章 秀才、でもバカ（後書き）

というわけで、結局特訓なんてしてませんね・・・

それはそうと、明日はハロウィンです。って言うか日本ではもう既にハロウィンでしたね。アメリカは明日なので、お菓子をもらってきます^^

実はハロウィン話を日本に合わせるかアメリカに合わせるか迷ったのですが、展開が急に飛ぶのもアレだし実際にやらないと実感ないんで勝手ながらアメリカ時間に合わせさせていただきます

ハロウィンと言えば、ホラーにオカルト。オカルトといえば・・・
もうお分かりですね？山田義武でした（古畑任 朗風）

第10章 ハロウィンだしね（前書き）

さあ、記念すべき第10章です！

内容かなり滅茶苦茶です。考えながら書いてました。

でもまあ、壊れた譲葉が書けたのでまあまあ満足です

しかし、これがハロウィン話と呼べるかどうかは微妙ですねえ・・・

^^;

第10章 ハロウィンだしね

そして夜。

「じゃあ僕は寝るから後のことは夜の僕に聞いてね」

「・・・なあ、結構前から気になってたんだがその入れ替わりとやらはどうなってるんだ？」

「見れば分かるよ。じゃあおやすみ」

レイは特に説明するわけでもなくとつと寝てしまった。が

「・・・何も起こらない」

「ですね・・・あ」

3分ほど待つと、次第に髪の色に変化が現れた。薄暗くてよく見えないが茶色かった髪が次第に赤く変化し始める。

そしてさらに2分ほど待ち続け合計5分後。ゆっくりと起き上がったレイの髪は完全に赤く染まっており、半開きの目の中から真紅の瞳が覗いている。

「ふああああ・・・。おはよ」

「おはよ、ってんな時間じゃないけどな」

「レイさん体大丈夫なんですか？」

「どうということよ？」

「だってそれってつまり毎日24時間休みなしに動きっぱなしってことですよな？」

「その辺は人間じゃないんだし大丈夫なんじゃないの？」

「自分のことなのにその程度の理解ですか・・・」

「とりあえず大丈夫だからいいの。さて、じゃあ罰ゲームね」

「今更だけどなんでゲームなんだ？」

「見てるあたしは面白いから」

「予想通りろくな理由じゃなかったな……。っていうか何でお前それ知ってた？ 昼間は体の中で寝てるんだろ？」

「今外に出てくる前に昼のあたしに聞いたからね。さ、何はともあれ始めましょう」

「まあ正直どうでも言いや。とっとと終わらせて寝るとしようぜ」

「そんなに簡単に終わるかしらね？ じゃあ説明するわ」

そう言うとレイはタンスの上に置いてあった箱から一枚の葉っぱを取り出した。

「何ですか、それ？ 見たことない葉っぱですけど……」

「これはこの森にしか生えていない植物だね。あたししかこの存在は知らないわ。だから図鑑にも載ってないし、名前も無い」

「かなり珍しいものですね……。で、それがどうしましたか？」

「これは独特の匂いを常に放っててね。あたしはこの匂いが好きだから色んなところにおいてあるんだけど、今日キツチンが燃えちゃったからキツチンの分がもうないの。だからあんた達二人で森に行つてこれを5枚くらい取つてきて頂戴」

「それって相当珍しいもんじゃないのか？ そんな簡単に見つけられるか？」

「そんなに大変じゃないと思うわよ？ 10%くらいの確率で木の根元に生えてるからあんまり時間掛からないわ。でもその木つていうのがちよつと遠くにあるからそういう意味では時間がかかるかもね」

「その場所にはどうやって行けばいい？」

「コウモリに案内させるわ。あんた達はそのコウモリについていけばいいだけ。帰りもコウモリに案内させるから」

「分かりました、じゃあ行ってきます」

譲葉はそう言いレイに借りたコートを羽織って小屋を出た。翔輝は正直自分も罰を受けることに納得していなかったが、二人を相手に勝てる自信がなかったのではしぶしぶ受けることにした。

「あ、あのコウモリですね。さ、行きましょう」

「ラジャー……」

「翔輝さん、もっと気合入れてください」

「俺のせいじゃないのに気合入れるとか言われてもな……」

「何言ってるんですか、翔輝さんの説明不足が招いた事態ですよ？」

「あんなことまで説明しなきゃいけないバカだとは思わなかったんだよ」

「失礼ですね、誰がバカですか！」

「お前」

「分かってますよ！」

「あれ、分かってたのか？」

「もちろんです！……え、あれ、違います、そうじゃないです！」

「何が？」

「だから私は私がバカなのが分かってたわけじゃなくて翔輝さんが私のことを言ってることを知ってたんです！」

「……はい？」

「だあからあ！」

珍しく翔輝が譲葉を押ししている。そんな会話をしながらも二人はちやんとコウモリについて行く。やがてコウモリは木の上に止まり、逆さまにぶら下がり羽を休めた。

「お、コウモリが止まったぞ」

「……つてことはこの辺りに先ほどの葉っぱが生えてい……」

「ん、譲葉？」

最後までセリフを言い切らなかつた譲葉が気になり翔輝は譲葉の方を向く。譲葉は木の根元の近くにしゃがんだまま硬直している。

「おい譲葉、どうした？」

「・・・しょ、翔輝さん・・・。こっち・・・。」

震えた声で翔輝を呼ぶ。ただ事じゃないことを感じながら翔輝は譲葉に駆け寄る。

「どうした、おい？」

「・・・む、む、む・・・。」

「む？」

「む、ムカデが・・・！」

「・・・は？」

「その木の根元に、む、ムカデがウジャウジャ・・・！」

譲葉が震える指で指差す方向を見ると、そこには確かに何か細長いものがうねうねと動いている。それも数匹。

「いや、確かにいるけど、それがどうした？」

「ムカデだよ！？気持ち悪すぎるでしょ！？何で足があんなにあるの！？頭のほうについてるのは何！？触覚！？足！？それともアレは目なの！？そうだったの！？」

「おおお落ち着け！とりあえず落ち着け！大丈夫だ、ただのムカデだから！」

「大丈夫じゃない！ムカデの中には毒をもってるのがいたはず！アレが絶対そうなの！死んじゃうの！」

「だから落ち着けて！大丈夫だ、それくらいじゃ死なないから！」
「ホント？ホントに大丈夫なの？」

「大丈夫だからとりあえず冷静になれ！」

「・・・も、もう大丈夫です。ご迷惑おかけしました」

「お前のその切り替えの早さにはホントに呆れるな・・・」

「それで、あそこには葉っぱありましたか？」

「ああ、あつたぞ。取って来い」

「何言ってるんですかぁ！？私にあんなこの世で一番おぞましいところにある葉っぱを取りに行けっていうんですか！？」

「その通りだが？」

「理由を！」

「お前の罰ゲームだし」

「翔輝さんの罰ゲームでもあるんですよ！？」

「って言うかぶつちや俺もあそこに行く勇氣はない」

「この根性無し！」

「お前は時間止められるからいいだろうけど俺はガチで勝負しなきゃならねえんだぞ！？どつちが簡単か考えてみれば分かるだろうが！」

「どんな理屈だろうと私は行かないよ！翔ちゃんは男の子なんだから自分で行けばいいでしょ！」

「どつちいう理屈だ！？」

「レディースファーストだよ！」

「じゃあなおさらお前が行け！」

「嫌だ！」

「じゃあアレだ！お前が時間止めて俺が取りに行く！それでいいだろ！」

「そんなこと出来るの！？」

「出来ないのか！？」

「知らない！」

「自分の能力だろ！」

「そこまで熟知してるわけないじゃん！」

「って言うかまた動揺してる！また敬語がなくなってる！」

「もうそんなこと知るかー！」
「逆ギレするなー！」

暗い夜の森に二人の怒鳴り声だけが響く。その実にくだらないうり取りは実に1時間以上続いた挙句、その葉っぱはあきらめるといふなんともへたれた結論に至った。

「まったく、翔輝さんのせいで時間を大幅に無駄にしました」

「お前のせいで葉っぱが取れなかった」

「翔輝さんがへたれだからじゃないですか！」

「お前が臆病すぎるんだろ！」

「人のせいにしないでください！」

「どっちがだ！お前こそ人のせいにするな！」

「何です・・・！」

また言い争いが始まりそんな雰囲気の中、急に譲葉が動きを止めた。

「・・・なんだよ？」

「・・・あ、あ、あ、あれ・・・」

「あれ？」

また譲葉が震えだす。「今度は何だ、また虫か？」と呟きながら翔輝はもう一度後ろを見て、後悔した。

譲葉が震えだした理由が分かった。いたのだ、何かが。何かは分からないが、青白い人のような獣のような・・・。

「・・・何だ、あれ？」

「わ、分かるわけじゃない・・・！」

「・・・幽霊？」

「！バカ言わないでよ！幽霊なんてそんなのいない！絶対いないの

!？」

「何で疑問系なんだ？とにかく、幽霊じゃなかったら何だよ？」

「分からないから翔ちゃんに聞いてるんでしょ!？」

「お前が分からないものが俺に分かるわけないだろ!？」

「と、と、とにかくやっつけて!」

「バカ言つな!いいんだよ、こういうときは逃げれば!」

翔輝はそう叫び譲葉の手を掴んで全速力で駆け出す。そのスピードに譲葉は驚いた。

いつも体育や私生活の中で競争することは少なからずあるが、譲葉はいつも圧勝していた。

しかし、今の翔輝のスピードは譲葉より速い。それこそ譲葉が今までに見たことがないくらいに速い。

やがて後ろを見ても先ほどの青白い何かは見えなくなり、二人はようやく速度を落として一息ついた。

「はあ、はあ、ここまでくれば大丈夫だろ」

「しよ、翔輝さん、どうしたんですか？」

譲葉ももう冷静さを取り戻しており、先ほどまた敬語を忘れていたことに気付き元に戻す。

翔輝の方は既に呼吸を整えているが、譲葉は未だに息切れしている。

「何が？」

「な、何で、急に、あんなに、速くなっただんですか？わ、私よりも速かったですよ、あれ」

「お前は……。俺が本当にお前より身体能力劣ってると思ってんのか？」

「ど、どういことですか？」

「いつもはほとんど本気で走ってないんだよ。めんどくさいし、何

より疲れるし」

「ってことは、つまり、今まで、手を抜いてたってことですか？」

「つまりはそういうことだ」

「く、屈辱です・・・」

「お前最近そればかりな」

「う、うるさいです。と、とにかく、魔閻さんに事情を説明して罰ゲームは許してもらいましょう」

「あれ、お前まだ気付いてなかったのか？」

「え、な、何がですか？」

「もう罰ゲーム終わってるぞ」

「・・・はい？」

「そつだろ、レイ？」

『なあんだ、気付いてたの？』

翔輝が空に向かってそう言うと、一羽のコウモリが近くの木に止まった。そして次の瞬間、そのコウモリの中から手が飛び出した。

「ひぎいあう!？」

日常生活ではなかなか出せない叫び声を上げて讓葉が驚く。

翔輝も正直驚いたが、昨日のレイのナイフまみれの姿に比べればあまり大したことはない。それでも十分ショッキングなのだ。

その間にも手はさらにコウモリを引きちぎり、中からレイが這い出てきた。せめてもの救いは、レイが血まみれじゃないことである。これでまたコウモリの血にまみれていたら讓葉は間違いなく気絶していたことだろう。

「お前、コウモリ殺すなよ」

「これはあたしの変化の方法よ。殺したわけじゃないわ」

「悪趣味な方法だな。コウモリになるときはどうするんだ？」

「秘密」

「……ま、魔閻さん、どうして？」

「おお、いい感じに怖がってるわね。いや、満足満足」

「はい？あの、いったい何がどうなって？」

「つまり、本当の罰ゲームって言うのはお前が苦手なものだらけの森にお前を送り込むことだったんだよ。そうだろ、レイ？」

「御名答。それにしてもよく分かったわね。何で？」

「お前コウモリの格好で俺達追ってくるときクスクス笑ってたぞ」

「あ、コウモリの鳴き声ってキーキーだっけ？」

「いや、知らないけど少なくともクスクスじゃない事は確か。それにあからさまにいろいろ置きすぎだ。あのムカデお前が運んできたんだろ？あの時上見たらムカデくわえてるお前が見えた」

「よく見てるわね」

「そ、そうだったんですか……？魔閻さん、意地悪です……」

「たださ、あの亡霊はどうやったんだ？」

「ああ、アレは本物よ？」

「……はい？」

翔輝と譲葉がハモって答える。

「だから、アレは本物。あの森は元々幽霊でやすいの。特にこの時期はね。あんた達の世界では今日ちようどハロウィンとか言うのなんだでしょ？」

「ちよ、ちよっと待ってください！という事はつまり、アレは本当に……？」

「ええ、亡霊ね」

「……」

「ちよ、譲葉！だから黙って気絶するなって！」

翔輝はまたもや気絶してしまった譲葉を起こそうと試みるが、結局

起きることはなかった。

「変な幼馴染がいて苦労してるわね、あんたも」

「まったくだ」と答えながら、翔輝は譲葉を背負ってレイと肩を並べて小屋へと続く道歩き始めた。

第10章 ハロウィンだしね（後書き）

気付いたら滅茶苦茶長くなってて自分でも驚きました^^；

そっだ、豆知識(?)を一つ

ハロウィンというのは今はもう怖い衣装に仮装して「Trick or Treat」、つまり「お菓子をくれなきゃイタズラするぞ」と言って家を回ってお菓子をもらう行事になっていますが、元々ハロウィンとは怖い衣装を着ることで近くに来ている悪霊などを追い払う行事なんです

・・・はい、どうでもいいですね^^；

まあ何はともあれ、とりあえず10話書き上げることが出来ました。これも皆様読者様のおかげです

これからも頑張りますので、よろしくお願いします

それから、評価・感想どんどん送ってくださいね^^

第11章 特訓パート2（前書き）

前の戦闘の回ではあまり戦闘らしい戦闘ができなかったので、今度はちよつと本格的にやってみました。やっぱり説明口調ですね・・・
^^；

第11章 特訓パート2

「さ、特訓開始ね」

「勘弁してくれ・・・」

気絶した譲葉を背負い小屋に着いた翔輝にレイが発した第一声がそれだった。

つまり今から特訓をしようということである。

「何言ってるの、朝でできなかったんだから今やるしかないでしょ？」

「今日は色々あったから疲れたんだ。明日にしてくれ。第一特訓できなかったのは俺のせいじゃなくてほったらかしにした昼のお前のせいだろ？」

「ああ、それはあたしのせいだ」

「・・・は？」

「いやね、よくよく考えたらあたしあの子に特訓の内容教えてなかった」

「じゃああいつは朝何をするつもりだったんだ・・・？」

「それは明日聞いてみて。とにかく、今日出来なかった分今からやるわよ」

「理不尽な・・・」

「うっさい、とつとと武器を持ってくる！」

「御意」

文句を言いながらも翔輝は刀を取りに向かう。しかし、正直翔輝は迷っていた。

「・・・昨日の惨殺現場の再現はしたくないな」

苦笑というか何というか、よく分からない顔を浮かべて刀を取ってレイの元に戻る。

「はい、お帰り。じゃあ始めましょう」

「今日はどうするんだ？また昨日みたいなのは勘弁な」

「大丈夫、今日はちゃんと相手をしてあげる」

「そりゃどうも」

「あら、感謝するのね。意外だわ」

「とにかく早く終わらせて寝たい。始めるぞ」

「あんたが仕切るんじゃないの」

そう言うとレイはふわりと木の枝の上に飛び乗り、マントの中から無数の小さなコウモリを召喚（？）する。

それらはしばらくレイの周りを飛び回り、やがてコウモリたちは全てレイの右手に集まり何かの形を形成していった。ちょうど翔輝の刀が増えたときのようだが、レイの場合集まっているのは黒い塊である。

「何やってんだ、それ？」

「あたしの武器作ってるの」

レイがそう答えると同時に黒い塊はやがて動きを止め、巨大な鎌を形成した。

とにかく巨大だ。高さはレイより頭2つ分ほど高く、刃も腕2つ分ほどある。

ついでに言うと無駄に装飾が細かく、髑髏やら十字架やらがついていて物騒極まりない。

「・・・強そ〜」

「まあね。さ、始めましょう」

「はいはい」

翔輝はやる気なさげに返事をして抜刀する。また恒例の命の危機に晒されながらも刀の増殖に成功し、その中の2本を適当に選んで両手に持つ。準備完了だ。

「・・・で、結局何をすればいいんだ？」

「とりあえずあたしに殺されないのが絶対条件。あとサブクエストとしてあたしに一撃入れるってところね」

「殺す気なのか？」

「それなりには。大丈夫、一応ちゃんと手加減はしてあげるわ」

「一応？ちゃんと？どっち？」

「それなりに」

「そいつはどうも」

会話を終えた刹那、レイが木の枝から飛び降りた。それと同時に鎌を振り上げ、翔輝目掛けて一気に振り下ろす。

いきなり来たので多少驚いたが、鎌の動きが単調だったので軌道を読み何とか横に身を投げて回避する。

体勢を整えてレイのほうを見ると、持っている鎌の刃が半分ほど地面にめり込んでいる。

「どの辺が手加減？」と問いながら翔輝はレイに斬りかかる。

まずは右手の刀で左側から横薙ぎ、次に左手の刀で左斜め下方向から斬り上げる。

レイは繰り出された攻撃を両方かわし、鎌を軽々と拾い上げもう一度振り上げた。翔輝は身の危険を感じたもや横に身を投げ出し鎌をかわす。

「ん、筋は悪くないわね」

「おっそろしく・・・。なあ、今思ったんだがこの能力って剣術使

えねえと全く意味ないんじゃないか？」

「だから今まさにそのために特訓してるんでしょ？」

「正論だな」

再度会話を終了し、お互いに攻撃を再開する。

かわしては斬りかかり、かわしては斬り返しを繰り返す、二人の攻防は攻防を繰り返す。

そして20分後　　。

「はあ、はあ、い、いい加減、疲れてきたぞ……」

「あ、あんた、よくここまで持つわね、人間なのに……」

「も、もう今日は、これくらいで、いいんじゃないか？」

「そうね、あたしも疲れたわ……。昨日よりは、随分とよくなっ
たんじゃない？」

「そりやどうも。じゃあ俺はもう寝るから」

「ええ、おやすみ」

翔輝は「疲れた……」とあくびをしながら譲葉の寝ている倉庫
に向かう。

「……たった20分の特訓でこれか。これは相当期待できるんじ
ゃない？ねえ、マリー？」

レイは空を見上げてそう呟き、食事を求め森の中へと飛び去って
いった。

第11章 特訓パート2（後書き）

今日授業、とうか学校で爆睡してきました
授業内容全く覚えていません。どうしよ〜^^；

第12章 あだ名(仮) (前書き)

とりあえず更新です^^;

さ、こんなことやってる場合じゃありません。早くプロジェクトを
始めないと・・・

あ、でも安心してください。一応まだ余裕はありますので更新はし
ます^^

ちなみに、タイトルの(仮)というのはあとがきで意味が分かりま
す。決してタイトルが仮というわけではありませんのであしからず
・
・

第12章 あだ名(仮)

翔輝がレイの特訓を受けるようになって早三日。

「今日はこれくらいでいいんじゃないかな？」

「そりゃこつちとしちゃありがたい」

刀を鞘に納め、獣人状態のレイに言う。

三日前、つまり罰ゲームの晩以来、特訓は昼間行っている。

あの後夜のレイが昼のレイに翔輝の特訓内容を教えてから、二人は朝食を食べた後に特訓を行うようにしていた。

「しかし、お前も相当強いな」

「そんなことないよ、翔輝だってたった数日でここまで動ければたいしたもんだって」

お互いに相手の力量には感心していた。

翔輝は元々何も習っていなかったにもかかわらず、ここ数日で剣の腕はかなり向上している。

もしもまだ人間達の世界にいたのならインターハイにも行くことができるくらいの実力だ。

もつとも、まだ力の使い方がいまいち分からず能力を発動するたびに死ぬ思いをしているのだが・・・。

レイは体の一部を獣化して機動力を高め、隙を見て全獣化して攻撃するというのを基本戦法としている。

一応武器として鉄扇を手に持っているのだが、本人曰く「使ったら翔輝が死んじゃうから今の段階ではまだ使わない」らしい。使わなくても十分死にそうな思いをしているのだが・・・。

部分獣化を駆使しながら敵を攪乱し、隙を見て全獣化、つまり狼に変身し敵を噛み千切る。恐ろしい戦法である。

「だけど僕は実力の五分の一も出してないよ?」

「・・・マジ?」

「だって本気でやったら翔輝も譲葉も死んじゃうもん」

「それが冗談であって欲しいと切に願う」

「願うだけならその人に自由だからね」

「うるせえ」

「あはは。・・・あ、そういえば昨日聞きそびれちゃったんだけどさ」

「ん?」

「昨日キッチンでまた一騒動あったでしょ?あれどうしたの?」

レイが言っているのは昨日の朝、レイが起きるとキッチンの床が何か泡のようなもので埋め尽くされていたという事件のことである。

その場にいたのはオロオロしている譲葉と何かを掃除している翔輝、そして状況が飲み込めずに呆然と立ち尽くしているレイ。

翔輝はとりあえず譲葉をどこか別の場所に移動させるようレイに頼み、レイがその言葉に従ってその後聞くのを忘れてしまったため、結局何が起こったのかは知らないのだ

「あゝ、あれか・・・。何だと思う?」

「譲葉がまた信じられない調理をして事件が起きた」

「正解」

「やっぱり・・・。今度は何したの?」

「酢1ガロンに小麦粉と間違えて重曹を一袋入れた」

「・・・1ガロンってどのくらいだっけ?」

「大体3.5リットルくらい」

「まず酢3.5リットルに重曹一袋入れる料理が思いつかない」

「しかもよりもよって間違えたのが重曹だもんな……。大惨事だ」

読者様は知っている方がほとんどだと思うが、一応説明しておこう。重曹、別名炭酸水素ナトリウムと呼ばれている主に料理や掃除などに使われる便利な日常用品（？）である。

それに酢を加えると、化学反応が起きて重曹が分解され、二酸化炭素が発生する。すると二酸化炭素が酢の中で発生するので、炭酸飲料の缶を振って開けたときのような泡が発生する。

それを何リットルや何キロでやったのだから、それはもうすごいことになる、というわけだ。

「やっぱりあいつは勉強以外のところはバカなのな」

「誰がバカですって？」

「うわぁ！」

レイと話込んでいたため、後ろから接近する譲葉の気配に気付くことができなかったので翔輝は思わず声を上げて驚いてしまった。

「あ、譲葉。おはよ」

「おはようございます、魔閻さん」

「……。ねえ、そろそろ敬語やめようよ？使われてる側は何だか距離を感じるよ？」

「ああ、すみません。ですが、私は昔からこうですので、今から変えろといわれてもちよっと……。大丈夫です、魔閻さんとは距離をとっているわけではないので安心してください」

「『とは』って何だ、『とは』って。それは遠まわしに俺とは距離をとってるってことか？」

「あら、翔輝さんにしては上出来ですね」

「お褒めにお預かり光栄ですよ、ワガママプリンセス様」

「お褒めにお預かり光栄ですわ、バカな翔輝さん」
「何の捻りもねえのかよ」
「あまり捻りすぎると翔輝さんには伝わらないでしょう?」
「昨日の俺の苦勞を返せコノヤロー」
「大丈夫です、昨日魔閻さんに借りた本で勉強しました。あのよう
な失態は二度と犯しません」
「料理関係でそれを聞いたのは何回目だ?」
「32回目ですね」
「お前が答えたら台無しだ」
「ま、まあまあ。とにかく、今日の訓練はこれで終わりだしゆっく
りしようよ」
「それもそうですね。それじゃあ私は早速昨日勉強した料理でも」
「遠慮しとくね」せめて最後まで言わせてくださいよう・・・」
「あ、そうだ。レイ、どうせ暇だしお前のあだ名でも考えよう」
「へ?何の事?」
「いや、いつまでも『朝のレイ』『夜のレイ』じゃなんか嫌だろ?
だから人格別にあだ名でもつけようと思って」
「それはいいかもしれませんね。確かにどちらかの話をするときに
いちいち『朝の』『夜の』とつけるのは面倒ですし」
「うーん、僕はあんまり気にならないけどなあ・・・」
「俺達が気になる、というか単にめんどくさいんだ。というわけで、
お前に拒否権は無し」
「ええええええ!?!?僕の名前なの!?!?」
「呼ぶのは俺達だからいいんだ。さて、何がいい?」
「『バカ』はどうでしょう?」
「どっちが?」
「翔輝さんです」
「・・・いや、絶対にそう来るだろうなあ、とは思ったけどさ」
「冗談ですよ。ここはシンプルに『表』『裏』とかでいいんじゃない
いですか?」

「どっちが表でどっちが裏？」

「・・・そう言われてみればそうですね・・・」

「というわけでそれは却下だな。『白』と『黒』とか？」

「『白レイ』さんと『黒レイ』さんですか？ちよつとどつかと思ひますけど・・・」

「うん、なかなかいいのが思いつかないな・・・」

「じゃあ別に今無理につけなくてもいいんじゃないかな？」

「いや、だつてめんどくさいし」

「じゃあこうしようよ。ちゃんとじっくりしたあだ名が出来るまで僕は『レイ』、夜の僕は『魔闇』。『レイ』は英語で『Ray』、つまり光線とか光つて意味。『魔闇』は『闇』が入ってるし、とりあえずはそれでいいんじゃない？」

「・・・確かにそれはいいかも」

「ですね、私はむしろそれが一番いいと思いますけど」

「え、でもさすがに夜の僕を苗字でしか呼ばないのは可哀想じゃない？」

「まあ確かにな・・・。じゃあ何か思いつくまではそれで。思いついたら即変えよう」

「分かりました。じゃあそれまでは今はレイさん、夜は魔闇さんですな？」

「何かあんまり変わった感じはしないけど、とりあえずはそれでいいだろ？」

「僕はぶつちやけ変なのじゃないから何でもいいよ。さ、とにかくお昼食べよ。翔輝、何か作つて」

「いいぞ、何がいい？」

「僕はオムライスがいい！」

「私は・・・そうですね、久々に目玉焼きでも食べたいです」

「分かったよ、作ってくるからちよつと待つてる」

「ねえ譲葉、『目玉焼き』って何？」

「ああ、こつちの世界には目玉焼きがないんですね。目玉焼きって

言うのはですね 「

「あ、分かった！鹿の目玉を焼」それ以上言わなくていいです！」「
何で？違うの？」

翔輝は心の中で舌打ちをしてから倉庫の中にある冷蔵庫から野菜と卵を取り出し、小屋のキッチンで調理を開始した。

第12章 あだ名(仮) (後書き)

さすがに『夜の』『昼の』じゃ可哀想だったので、あだ名付けてみました。・・・って言うかあだ名じゃないし^^;

ぶっちゃけあだ名なんて全く考えてません。超思いつきなので・・・
。 どうでしょうか？

というわけで、さりげなく募集してみたりします。何かいいあだ名なんかを思いついた方がいれば、遠慮なく送ってください。感想・評価なんかもよろしくお願いします

第13章 品のよい美形の青年？（前書き）

新キャラです！変です。とことん変です。

って言うかそれ以上に今回それなりに長いです。とりあえずびんご。

第13章 品のよい美形の青年？

「魔閻、とっとと食ってくれよ。皿が片付かねえだろ」

「・・・何でもいいけどさ、その『魔閻』っていつのやめて？何で急に距離を置こうとするの？」

「だから、そういうわけじゃないって何回も言ってるだろ？」

「そう感じる感じないは人によるでしょ？とにかくあたしはやめて欲しいの」

「んなこと言われたって、他にあだ名もないだろうに」

「だからいらないうって言うてるでしょ？」

「お前は困らないだろうけど俺達は困るんだよ。特に作者が」

「そういうネタは止めてくださいって言ったはずですよ？バカ」

「誰がバカだコノヤロー」

「あら？私は一度も翔輝さんのことだとは言っていないませんよ？もしかして自覚しているのですか？」

「・・・」

「あたしをほったらかして話を進めないでくれる？元々あたしのあだ名の話だったじゃないの、なんでいきなり翔輝がバカかどうかなんてどうでもいい話になっちゃったの？」

「譲葉に聞け」

「ぶつちやけ話題がつまらなかつたからです」

「あたしの扱い酷くない！？」

「俺よりはいいだろ？」

「・・・確かに」

「じゃあ話を戻すぞ。お前のあだ名の話だったよな？」

「そうよ」

「じゃあもうめんどくさいから『閻』でいいんじゃないか？」

「どれだけ安直よ？」

「レイも『英語で光だから』って理由があるだろ？」

「じゃああたしもそんな感じでいいよ」

「・・・ダーク？」

「・・・完全に悪役じゃないですか」

「いいんじゃない？吸血鬼ってどっちかといわれれば悪役でしょ？」

「つて言うか昭和の悪役だぞ」

「翔輝さんは昭和生まれじゃないですよ」

「お前もな」

「ん〜、でもさすがにダークは嫌ね」

「さつき『いいんじゃない？』とか言っただけだったか？」

「それはそれ、これはこれ。譲葉、何か考えてよ」

「え、私ですか？」

「だって翔輝じゃ変なのしか思いつかないんだもん」

「失礼なこと言うな」

「そうですね・・・。『ミラ』なんていかがですか？」

「・・・何それ？何の変哲もない適当な名前にしか聞こえないんだけど」

「人間界の小説に登場した女吸血鬼『カーミラ』の『ミラ』です。

苗字で呼ぶよりはいいと思いますけど・・・」

「・・・そうね、あたしはまあまあ気に入ったわ」

「光荣です。それではこれで決定でよろしいですか？」

「ええ。あたしはこれからあんた達の間ではミラね」

「・・・あっさり決定したな・・・」

「譲葉のネーミングセンスなら楽勝でしょ」

「・・・こいつ、中2の頃近所の白い犬に」

「翔輝さん！それはダメ〜！」

「え、何々？面白そう！教えて」

「翔輝さん！教えたら刻みますよ！？」

譲葉は必死にそう言っただけで右の腿に手を伸ばす。

恐らくまたあそこにナイフを仕込んであるのだろう。

「え、何で？聞かせてくれてもいいじゃないの」
「絶対ダメです！」

「・・・どんな名前をつけたらそんな血走った目で妨害しなきゃいけないわけ？」

「とにかく教えるのは絶対にNGです！」

「分かったわよ、そこまで言うんだったら触れないでくわ」

「あ、ありがとうございます」

「そんなことよりミラ、何でもいいからとっとと食ってくれ」

「ああ、忘れてた。・・・翔輝、これ冷たくなってる。新しいの作って」

「ふざけんな。どこまで図々しいんだお前は」

「大丈夫、翔輝は優しいからやってくれるわ」

「本人を前に言うことか、それ？」

「言わないと罪悪感をその人の中に生み出せないじゃない」

「安心しろ、元から微塵もない」

「知ってるよ。でもこれどうしようかな、捨てるのも勿体無いし・・・」

「だから食えって言ってんだろ・・・」

そんな具合に翔輝が半ば諦めモードに入っていると、『トントンツ』という軽快な音がドアのほうから聞こえた。

「あら、誰かいらっしやっただみたいですよ？」

「ちゃんとノックしたわね。翔輝よりはマシな人かな？」

「どんな基準だ？って言うかいつの話だ、忘れろ」

譲葉が「そんなこともありましたね」とか何とか言っている間にミラがドアを開ける。

外に立っていたのは、金髪碧眼の青年だった。かなり美形で、背も

高い。人間界にいたら俳優か何かになっけていてもおかしくないような人物だった。

ただ忘れてはいけないのが、ここが人間界ではないということ。やはりその青年も人間ではないようだった。

「これはこれは、随分と綺麗な方のお出迎えとはありがたいですね」「あら、おだてても何もでないわよ?」

「おだてたなんて人聞きの悪い。これは本心からの言葉です」「そう?なら素直に受け取っておくわ、ありがと。それで、エルフさんがいつたい何の用かしら?」

そう、その青年は非常に人間に酷似していたが、唯一違ったのが耳人間のそれよりも耳がかなり尖っている。というかぶつちやけて言うところ・・・

「・・・リク?」

「・・・かなり似てますね。瓜二つです」

金髪碧眼、尖った耳、そして美形とくれば当然『ゼダの伝説』のあのキャラクターが脳裏にかすかに浮かぶのは必然である。

これで服装が一緒なら一瞬だけだとしても本物を見ている気分になるだろう。

「やっぱりリクはエルフだったんだな」

「・・・いや、アレはエルフですけどリクじゃありませんよ?」

「初対面の人にアレ言うな」

「失敬、あのエルフの方です」

「素直でよろしい」

「とりあえず立ち話もなんだから中入れれば?」

「よろしいんですか?私のような得体の知れない者を家に入れてし

「まっつて」

「大丈夫よ、あたしはヴァンパイアだしあの子達は人間だし」

「成程、それなら私程度の力ではどうしようもありませんね。では失礼して」

一応心の中で翔輝は「何とかかなりそうだったらどうする気だったんだよ？」と突っ込みを入れておいた。

「それで改めて聞くけど、何の用かしら？」

「いえ、お恥ずかしい話なんです、何か食べ物をお恵んでいただければと思ひまして・・・」

「あら？あなたもしかして道に迷ったの？」

「・・・ええ、まあ」

「まあ確かにこの森は多少複雑だから無理もないか・・・でもここ出て少し行けば町あるわよ？何だったらコウモリに送らせましようか？」

「出来ればお願いしたいところですが、よろしいんでしょうか？」

「これくらい全然構わないわ。ご飯も一応あるわよ。食べ掛けだけでもいい？」

「これだけしてもらって文句など言えません。ご好意感謝いたします」

そう言っつてミラはさっきまで自分が食べていた料理をエルフの青年に差し出す。

翔輝が「・・・何気に鬼だな」と呟くと、ミラにコウモリ数匹に攻撃されたので謝って黙り込む。

青年は数分でそれを完食し、きちんと手を合わせて「ご馳走様」と呟いた。

「ありがとうございます。おかげで満腹です」

「そう、それは何よりだわ。」

「あ、それからもう一つお願いがあるんですが・・・」

「何？遠慮なく言ってくれていいわよ？」

「ありがとうございます」

そう言つとその青年はさっきまでのキリッとした顔をやめてなんとも気の抜けた顔になる。

体もさっきまではピシッと姿勢よく座っていたのだが、いきなりダラリと体の力を抜いたタコのようにぐったりする。

「あ、あの？どうかしましたか？」

「ん？ああいや、ずっと慣れない敬語使ったもんでちつとばかり疲れちまっただけさ」

口調もすごいことになっている。さっきまでの『品のよい美形の青年』というイメージに亀裂が入る。

「まあ確かにあんなにかしこまられるところちも肩がこるわ。お互い楽にしましょう」

「いい事言つね、君。そうだ、でさっきのお願いって言つのなら」

「そんな態度でまだ何かを頼む気が」と聞こえないように言つてから翔輝も青年の言葉に耳を向ける。

すると、彼は想像を絶する信じられない一言を言い放った。

「ヴァンパイアの君かその黒髪美人の子、二人とも俺の子産んでくれない？」

三人の『品のよい美形の青年』というイメージは亀裂が広がって、やがて粉々に碎け散った。

第13章 品のよい美形の青年？（後書き）

はい、勝手にレイのあだ名決めちゃいました^^
まあいいですよね？

それから前書きの通り新キャラも出ました。・・・が、

・・・何だアイツ？^^;

とにかく次回に続きます。多分明日更新できると思うので楽しみに！

第14章 そのエルフ、フレイ（前書き）

とりあえず更新です

今回すごくどうでもいい謎が解明します。たった数行の会話です
が

第14章 そのエルフ、フレイ

「とりあえず希望だけは聞いておくわ。天国と地獄、どっちに行きたい？」

レイが笑顔で普段と対して変わらない口調で聞く。しかし、その額には誰が見ても分かるくらいはつきりと青筋が浮かんでいる。

「んな怖い事言わなくていいじゃん？大した事聞いてないだろ、ただの質問さ」

「いつたいあんたはどんな環境で育ったらそれが大した質問じゃないのかしら？」

「普通に育ったらそうだと思うけど」

「あたしが普通じゃないって言うてるのかしら？失礼なエルフね」

「何でもいいけど、俺の名前は『エルフ』じゃなくて『フレイ』だからそれでよろしく」

「・・・『何でもいい』ですって・・・？」

ミラがうつむいてそう呟いた直後、プチツと言う軽い音が響いた。

「あんたみたいなエロエルフの子供産むのが『何でもいい』！？ふざけんじゃないわよ！」

「お、何でもよくないのか？じゃあ真剣に取り組んでくれるんだな」

「黙りなさい！そして出来る限り迅速にあたしの視界から消えうせろ！」

「何でだよ、いいだろ別に。それともまだやった事ないとか？」

「死ねえええええい！」

耳を劈くような声を上げてミラはフレイに襲い掛かる。翔輝の特訓

の時の3倍くらいのスピードで、それも殺意むき出しで襲い掛かる。しかしフレイは臆した様子もなく、冷静にそれを避ける。一方、怒りで周りが見えていなかったミラはそのまま壁に顔面から激突し、地に沈んだ。

「うわっ、痛そ〜……。おいミラ、大丈夫か〜？」

「あんなに取り乱したミラさんは始めて見ましたね」

「その黒髪美人の嬢ちゃん、どう？俺とやってみない？」

「何をですか？新作ゲームか何かですか？」

「いやいや、そんなのじゃなくて……」

「あ、もしかしてこつちの世界には新しいゼダの伝説とかあるんですか？それは楽しみですね、是非やってみたいです」

「も、もしも嬢ちゃん？？そういうんじゃないかと……」

「そうですね、あなたみたいにリクにそっくりな人なら新しいのを持っていても不思議じゃありません。感動です、人間界の誰よりも先に大人気ゲームの最新版をプレイできるなんて！」

「じよ、嬢ちゃん？ちよつと人の話を……」

「それでは私は後日翔輝さんと一緒にあなたのお宅にお邪魔しますので、今日はこれでお引取り願います」

「え、ちよつとま……」

「ごきげんよう」

そう言って譲葉は無言を言わずフレイを外に追い出し、間髪いれずにドアを勢いよく閉めた。

「……スゲー」

「ものすごいスムーズに解決したわね」

「これくらい楽勝ですよ。それよりミラさん大丈夫ですか？」

「ええ、何とか。それにしても、アイツいつたいたんだっのかし

らっ」

「エルフのフレイさんです」

「・・・いや、それは分かってるけど」

「とりあえず次に来たときは斬り刻みます。その時はお願いしますね、翔輝さん」

「ナイフを増やせと？」

「それ以外に翔輝さんに使い道ないじゃないですか 唯一の見せ場なんですからしっかり頑張ってくださいね」

「あくはいいい。せいぜいそうさせてもらいますよ」

「何にしても、もう二度と会いたくないわ・・・」

「それにしても『俺の子産んでくれ』って・・・。いつの時代のナンパ？っていうかそもそもそんなナンパ文句存在するのか？」

「ナンパ文句って何ですか？いや、意味は分かりますけど。って言うか多分ないです」

「それにしても、あんな容姿してあんな事言われたらリクのイメージ丸潰れね」

「・・・ずっと気になってたんだけどさ、何であっちの世界の物がこんなにこの世界にあるんだ？冷蔵庫とかゲームとか」

「こっちにも結構人間が来るのよ。あんた達以外にも。それであっちにどんな物があるのかを教えてもらって、こっちの科学者とか企業が色々開発するわけ」

「あっちの世界に存在する物はこっちの世界にも存在するってことか」

「そういうことよ。まだ『ひこうき』とか『ろけつ』何かはできないらしいけど」

「まあそういうのはあちらの世界でも比較的最近開発されたものですしね」

「へ〜。でもいいなあ、特に『ひこうき』！あたしも一回でいいから空を飛んでみたい！」

「・・・はい？」

「・・・もう飛べるだろ、お前」

「え？・・・あ、ホントだ」

「・・・冗談だよな、ボケたんだよな！？」

「み、ミラさん？さすがに今のはちよつとないですよ？」

「ち、違うの！ボケたの！ホントは気付いてたよ、ホントだよ！」

「そうであつてくれ、頼むから！お前までバカになつたらまともな奴が誰もいなくなる！」

「し、失礼ですね！誰がバカですか、誰が！」

「だ、だからわざとだつて言つてるでしょ！？これ以上言つと怒るわよ！？」

「ちよつとテリア連れてくる。あいつが一番まともそうだからな」

「翔輝さん、ちよつと待ちなさい！私をバカと呼んだことを後悔させます！」

「翔輝、ちよつと！だからあたしは冗談でやつたんだつて言つてるでしょ！」

「えつと、どつち行くんだっけか？」

「人の話を聞いて〜！！！」

こんな感じに、つい三分前までいたフレイの事はすっかり忘れてしまった三人であつた。

第14章 そのエルフ、フレイ（後書き）

フレイの扱いちよつと酷かったですかね？まあ翔輝に比べればこれくらい大丈夫ですよ

そんなことより人間界の物が異世界にある理由、あんなんで大丈夫でしょうか？^^；

第15章 進歩（前書き）

暇だったので書いてみました

一応若干進展しますが、それにはあまり、と言っかほぼ全く力を入れておりません

とにかく暇で書いたものなので、完成度は低いです。・・・と言っかこの小説自体完成度低いですね^^;

第15章 進歩

「翔輝、今日はちょっといつもと違うことやってみようか」
「違うこと？」

時刻は十時半。いつものように特訓をするために外に出た翔輝だったが、今日は違うことをやると言われてキョトンとしている。

「そうだよ。いつまでも刀を自分の上に降らせるのは嫌でしょ？」

「そりゃまあ、下手すりゃ死ぬしな」

「だから今日はそれを直す特訓をしようと思って」

「そりゃありがたいな。で、何をどうすればいいんだ？」

「問題はそこなんだよね」

レイのその言葉に翔輝は思わずマンガのようにずっこけてしまった。

「いきなりそれが問題じゃ身動き取れないんじゃないか？」

「うーん、まあ確かにそうなんだけど僕もいまいちその能力の事分かってないしね」

「こんな頼りない先生は初めてだ、今更だけど」

「あ、それは酷いんじゃない？僕だって翔輝が死なないように手加減してあげてるじゃん」

「それは教える立場の人間として当然のことをしてるだけだろ？教え子を殺したらダメなわけだし」

「う……で、でも役には立ってるんでしょ!？」

「まあそれは確かにそうだな。剣の腕は上達したと思うけど……」

「それはつまり役に立ってるってことなの!」

「んな強引な……。第一剣術はこの能力なくても上達させられるだろ？」

「それは・・・確かにそうだけど・・・」

「俺が習いたいのはこの能力の使い方であって剣術じゃないんだ、何とかならないか？」

「うーん、でも僕にはよく分からないし・・・。とりあえず色々試してみてくださいよ」

「その色々を聞いてるんだが・・・」

「あ、そうか。じゃあ試しに出る場所とかをイメージしながら増やしてみれば？」

「頭の中にその風景を描けと？」

「それが君にとってイメージしやすい形ならね」

「・・・」

いまいちどうすればいいかは分からなかったが、とにかく翔輝は自分の周りに刀が落ちてくるのを想像しながら抜刀する。

瞬間、いつものように光が上空に飛び出し形を形成し始めた。翔輝もいつものようにそれを見上げ、落下してくる刀を避ける用意をする。

しかし、今回は今までと何かが違った。光は翔輝の真上で数秒滞空した後、一気に散開して空に広がり・・・落ちた。

「きゃああああー！」

かなりの広範囲に刀は広がり落下を開始したため、レイも危うく串刺しになるところだった。あと数秒反応が遅れていたらお陀仏だっただろう。

「あ、危ないよ！何で僕のところに着とすかなあ！？」

「お、俺だつてやろうと思ったわけじゃない！ただそこら中に落ちるようなイメージをしただけだ！」

「それがいけないんだって！そこら中に振ってきたらかなりの確立

で僕にも当たるでしょ!」

「大丈夫だって、お前なら避けれるから!」

「何を根拠に!?!」

「俺より強いだろうが!」

「知らないくせに!」

「・・・成功したのに何でそんなに揉めてるんですか?」

いつの間にか小屋から出てきていた譲葉が二人のやり取りに突っ込みを入れる。

「あれ、譲葉?どうしたの、いつもは特訓中に外にくることなんてないのに」

「レイさんのあだ名も思いついたので感想を聞こうと思いましたが」

「え、『レイ』じゃダメなの?」

「ミラさんがあだ名なのにレイさんだけ本名と言つのもどうかと思ってますね。一応考えてみたんです」

「へ。で、どんな名前なの?」

「はい、狼人間は英語でワーウルフと呼ばれているので、その中の『ウル』を取ってウルさん、と言つのはどうですか?」

「いいんじゃないか?」

「そうだね、僕は結構気に入ったよ。そっかあ、僕は今からウルかあ・・・」

「・・・何をそんなに感動してるのかは知らないが、とにかくこれで今日に特訓は終わりか?」

「え、もうやめるの!?!まだ何にもしてないよ!?!」

「いや、だってめんどくさいし」

「特訓までめんどくさいんじゃないじゃダメじゃん!」

「いいんだよ、進歩したし」

「翔輝さん、別にどういつ特訓の方法をとってもいいですけど、あんまり中途半端だと死にますよ?」

「大丈夫だよ、今は別に命を狙われる状況じゃないわけだし」

「よくもそんな悠長なことを言つてられますね。ついこの間私に殺されそうになつたじゃないですか」

「お前が俺を殺すわけない」

「何を根拠にそういう事を言い切れるんですか？」

「お前、自分で刺した人間から吹き出た血が自分にかかるの我慢できると思ふのか？」

「・・・何故でしょう、認めてしまつと何かに負ける気がします」

「ああ、それは大変だ負けてしまえ」

「どつちを願っているんですか？」

「どちらかと言われれば後者」

「教えていただきありがとうございます。ついでに死んでいただければかなりありがたいですが、どうしましょうか？」

「断固拒否する」

「何ですか？あの世も結構面白いところですよ？」

「言ったことあるような言い方だな」

「昔天国の神と契約を交わしたことがありますね。そのときに一度訪問させていただいたんです」

「そりゃよかつたな、永遠にそこにいてくれてもよかつたぞ？」

「いえ、私はまだこの世に未練があつたので天国の住人としては受け入れてもらえませんでした。地獄に行くか生き返るかの二択でしたので、後者を選ばせていただいたんです」

「未練つてのは何なんだ？」

「黙秘権を使用します」

「ああそう。まあどうでもいいけど」

「ね、ねえねえ、何でこんなにピリピリした空間が出来ちゃってるの？」

「別にそんなことはありませんよ？ねえ翔輝さん？」

「そうだな、清々しい10時半だ。さて、昼寝でもするか」

「一緒に一緒にさしていただいても？」

「どうぞ自由」

「感謝します。それではウルさん、ちょっと睡眠をとってきます」
「あ、うん、おやすみ・・・」

翔輝と譲葉は肩を並べて倉庫に入った。それを見送ったウルは呆然と立ち尽くしている。

「翔輝も譲葉も・・・『清々しい』の意味分かってるのかな？」

そんな疑問を胸に秘めつつ、ウルはウルで木に登って昼寝をすることにした。

第15章 進歩（後書き）

最近思ってたんですが、この小説異様に会話多いですね^^；

もうちょっと状況説明のようなものを入れたほうがいいような気もしますが、それやるとさらにクオリティが下がる気がするのでやめておきます

それにしても、主人公こんなに簡単に少し成長しちゃっていいんですかね・・・？

追記：ついにPVアクセス一万人突破です！こんな小説を読んでくれている読者の皆様、ありがとうございます！これからもどうぞよろしく願います！

第16章 変態再び（前書き）

何っーサブタイトルだ^^；

今回は（今回も）何も考えずに書いていたら随分長くなってしまいました
ました

まあ長くて悪い事は無いですね。とりあえず楽しんでくれれば幸いです

第16章 変態再び

翔輝が画期的な進歩(?)を成し遂げたその夜。いつものように夕食を終え、のんびりとしていると誰かが小屋のドアをノックした。

「ん、誰か来たみたいだぞ?」

「翔輝さん、出てください」

「何で俺が?ミラが出ればいいだろ?」

「ミラさんはただいま狩りの最中です」

「お前は?」

「読書の最中です」

「キッチンを掃除している俺よりは動きやすいんじゃないか?」

「レディーにわざわざ席を立てせて見ず知らずの他人を迎えに行かせるつもりですか?」

「レディー?そんな奴どこにいるんだ?あ、もしかして今ドアの外に立ってる奴か?」

「つべこべ言わずにとつと迎えに行ってください、と言うか行きなさい」

「最終的にそうなるのか・・・」

翔輝は掃除の手を一旦止め、ドアを開ける。ちよつと開けたその瞬間に長い金髪が目飛び込んできたので、姿を確認する前にドアを閉めた。

「つておい!ちよつと待て!何で閉めるんだよ?」

「ただいまこの家の住人は外出しております御用の方はここから3キ口南にある崖から落ちて二度と戻ってくるなバカヤロー」

「それは遠まわしに死ねって言うてるのか?」

「分かったなら実行してくださいもう二度と来ないでください死ん

「教えてくださいと言うか死ね」

「今度は随分ストレートだな。人間ってのはみんなこんなにハツキリを言いたいことを言うのかい？」

「俺は昔からそうなんだ。分かつたら消えろ、耳障りだ」

「耳障りなんて言葉あるのか？」

「あるならある、ないなら今作った」

「ちゃんと意味分かるのが嫌だな」

「それなら聞かなきゃいいだろ？その方法の一つとしてここから消えさせることだ」

「それ以外にもあるさ、気にしなければいい」

「黙って消えやがれコノヤロー」

「翔輝さん、さっきから何やってるんですか？」

「お、その声は黒髪美人の嬢ちゃんかい？」

「あら変態、いらしてたんですか？」

「・・・俺はフレイって言っただけど」

「無礼？まあ確かにそうですね。これは失礼しました無礼さん」

「や、無礼じゃなくてフレイ・・・」

「あら、また間違えてしまいましたか？申し訳ありません、もう間違えないように変態さんと呼ばせていただきますね」

「・・・いや、もうそれでいいけどさ」

「それは何よりです。それで変態さん、いったい何の用でしょうか？」

「なぐに、暇だったからちよつと遊びに来ただけさ。それより嬢ちゃん、こいつに俺を入れるように言ってくれないかい？」

「お断りします」

「ありがと嬢ちゃ・・・って何で!？」

「嫌ですわ、どうして変態を家に招き入れる必要があるんですか？あなたを入れるくらいなら翔輝さんを入れたほうが2倍くらいマシです」

「俺とこいつの差はそんなに微妙なのか!？」

「翔輝さんも何を言ってるんですか？今更」

「って事はやっぱり結構微妙なのか！？」

「当然でしょう？と言つか、これでも結構譲歩しているほうですよ？」

「まあ何でもいいけどさ、とりあえず入れてくれないなら実力行使だけど、それでいいかい？」

「どうぞお好きに。出来るものなら」

「言ったね？その言葉後悔させてやるさ」

フレイがそう言った直後、翔輝が張り付いていた壁から矢が突き出る。あと10センチずれていたら串刺しになっていただろう。

翔輝は慌ててその壁から身を離し、刀を取り構える。譲葉も「やれやれ、仕方ないですね」とため息を吐いてから本を閉じて立ち上がる。

その間もドアには無数の矢が刺さり続けていて、数秒後には完全に破壊された。粉々に崩れた木片が宙に舞い上がりドア付近一帯を包み込んだ為、二人からはフレイの姿を確認することが出来ない。翔輝は矢をいっただいという風に使ったらそんな芸当が可能なのか疑問に思ったが、今はどうでも言いと判断して黙った構え続けた。数秒して木の粉で作られた煙が晴れると、そこには巨大な弓矢を持ったフレイの姿があった。その弓矢はフレイの身長よりもさらに頭二つ分ほど高く、とてもじゃないが人間、少なくとも翔輝や譲葉に扱えるような代物では無かった。

「また変なもん持ってんな、どこに隠し持ってたんだ？」

「隠し持ってなんていないよ。ずっと普通に持ってきたさ。君が今日俺の姿をハッキリと確認したのは今が初めてだろ？」

「って事は最初からこうなってたってことか・・・」

「いいや、君がおとなしくこのドアを開けてくれていればこんなこととはしなかったさ」

「お手柄ですね翔輝さん。ご褒美は後程私が一時間ほど説教をしてあげますので楽しみにしててください」

「・・・御意」

「とにかく今はあの変態を家から追い出します。しっかりやっつけてくださいね」

「それには快く協力させてもらう」

翔輝がそう言うと、讓葉は素早くナイフを取り出してフレイに投げつける。

フレイはそれを冷静に避け、一旦外に逃げ出す。翔輝もそれを追って外に飛び出す。

「いきなり攻撃しなくてもいいんじゃないの〜?」

「お前が先に来たんだろ!」

そう反論してから抜刀して斬りかかる。フレイはまたそれを避け、一度距離をとろうとする。

「逃がすか!」

翔輝がそういった瞬間、手に持った刀から光が発生し、フレイが逃げる方向に刀を出現させる。

それはフレイの逃げる道を塞ぎ、それを予想だにもしなかったのかフレイに多少の隙を与えた。翔輝はその瞬間を見逃さず、一気に距離を縮める。

「とりあえず死んどけ!」

「とりあえずじゃ死ねないね!」

フレイはそう言ったかと思うと目にも留まらぬ速さで弦を引き、い

つでも矢を放てる体制をとる。

しかし、翔輝は迷わずフレイに向かって突っ込み、刀を振りかぶる。

「マジで来るの！？だったらこっちも容赦できねえぞ！？」

怖気ついて止まると思ったのが、驚いたような声を上げて弦を放す。

「讓葉！」

翔輝が叫ぶ。すると、さっきまで翔輝に向かって飛んできていた矢が消えた。

「なっ・・・！？」

「ナイス！」

そう言つて翔輝は振りかぶっていた刀を振り下ろす。完全に殺ヤつたと思つたが、手応えがほぼ全く無い。

「あつぶね・・・」

上から声がしたので見上げると、フレイが木の枝の上に座つて翔輝を見下ろしていた。

「逃げんのは早いな、お前」

「まあ死にたくは無いしね。それにしても君容赦ないね」

「何の話だ？」

「今完全に殺す気だつただろ？」

「お前も殺意丸出しだった」

「だってやらなかつたら俺が殺されてたからね」

「黙つて殺されてればよかつたんだ」

「恐い恐い。それからさ、さっきの矢はどこに行つたんだい？」

「教える必要は無い。とっとと消えうせるか死ぬか、どっちがいい？」

「冷たいね。まあ、今日のところは退散するよ。また会おう」

「二度とゴメンだ」

ヤレヤレ、と言う具合に肩をすくめてからフレイは翔輝の視界から消えた。

「つたく、あの変態め……」

「翔輝さん、大丈夫ですか？」

「問題ない。それよりさつきはありがとな」

「まつたく、大丈夫だったからいいものの……。私の反応が間に合わなかつたらどうする気だったんですか？」

小屋から出てきた譲葉は右手に先ほど投げたナイフ、左手には矢を持っていた。

さつき翔輝が譲葉の名前を叫んだ時、譲葉が時間を止めて飛んでくる矢をキャッチしたのだ。

「私の能力を利用するのは勝手ですが、命の保障は出来ませんよ？」

「大丈夫だ、信頼してるからな」

「なつ……!？」

「……ん？あ、いや、違うぞ！？そういう、変な意味じゃなくて！」

「しよ、翔輝さん、言動には気をつけてください。誤解を招かないためにも……」

「わ、悪い。でも信頼してるのは本当だぞ？」

「……仕方ないですね、ちゃんとサポートしてあげますよ」

「……一応お前の命も懸かってるんだからな」

「大丈夫です、私の命が危ないときは真剣にやります」
「・・・俺の命のときは？」
「死なない程度にはサポートします」
「・・・期待してるよ」
「しないでください、気持ち悪い。それにしても・・・」

譲葉は浮かぬ表情をして小屋のドアを見る。

「・・・これどうしましょう？」
「・・・さあ？」
「ただいま、ってうわっ！何これ!？」
「うわあ、そして最悪のタイミングで帰ってきやがった・・・」
「翔輝、何があったのよ!？」
「何で俺限定だ？」
「み、ミラさん、違うんです！実はかくかくしかじかで・・・」
「知らないわよそんなの！現実でかくしかじかが通ると思ってるの!？」
「いや思ってますけど、とにかく話を聞いてください!」

二人の必死の弁明も虚しく、ミラにこっ酷く怒られたのであった。

第16章 変態再び（後書き）

何でこいつらいきなり殺しあい始めたんだ？^^；
とにかく、これでフレイは変態確定ですね。哀れ・・・
今回の戦闘は自分的にはそれなりによく書けた感があるんですが、
いかがだったでしょうか？

第17章 出会い(前書き)

ちよつと風邪気味です。そのためかなり短いです

まあアレです。「バカは風邪をひかない」というので、多分ひいてもすぐに直るでしょう^^

今回からちよつとだけ過去編です。でもかなり思いつきなので正確に何話かは全くわかりません^^;

第17章 出会い

「それにしても驚きました」

変態の襲来から三日。珍しくウル洗濯を手伝っていた譲葉が不意に言った。

「へ、何に？」

「翔輝さんの成長振りにですよ」

「あゝ、何かすごかったみたいだね」

「かなりすごかったですよ。ようやく特訓の効果が出てきましたね」
「まあすごかったみたいだけど、ぶっちゃけ翔輝そんなこと一度も特訓でやってないよ？」

「そんなことって・・・刀を道塞ぐのに使ったりですか？」

「うん、最近はやつと自分の好きな場所に刀出せるようになったからそれを有効活用した戦い方をさせようとしてるけど、そんなのはまだ一度もやられてないね」

「って事は翔輝さんまだ特訓の時に手抜いてるんですか？」

「翔輝が特訓なんかでやる気出すわけ無いでしょ？」

「ごもつともです」

「ごもつともなんだ・・・」

「まあとにかくこれで翔輝さんも『役立たず』から『微妙』に昇格ですね」

「・・・それは昇格してるのか、それとも降格してるのかどっちなんだ？」

「あ、微妙さん。いつからいたんですか？」

「誰が微妙さんだ？」

「・・・」

「無言で俺を指差すな」

「翔輝、どうしたの？何か用？」

「いや、単に暇なだけだ」

「そういうと思った。そういうえば翔輝、この前フレイと戦ったときにどうやってあんなクリエイティブな戦い方したの？」

「別に。本気出しただけ」

「何、じゃあ僕との特訓は本気でやってないってこと？」

「めんどくさいじゃん」

「やってないんだね・・・」

ガツクリと肩を落とし、これ見よがしに落ち込んだ様子をアピールする。が・・・

「それで、何か面白いこと無いか？」

「特には。ウルさんは何かありました？」

「いや、僕も特に無いね」

華麗にスルーされたので気を取り直して会話に入り込む。ちよつと泣きそうになったのは内緒だ。

「・・・つまんね〜奴ら」

「面白いことを求めてきた本人がそれですか？そこは普通翔輝さんが面白い話を披露するでしょう？」

「何言ってるんだ、面白いことが無いから面白いことを求めてここに来たんだろっが」

「・・・成程、言われてみれば確かにそうですね」

「あ、じゃあ二人の事を色々聞かせてよ」

「二人の事って？」

「会った時の事とかそういう事だよ」

「あゝ、そういうことですか」

「って言うか俺達は幼馴染だからたいした会いかたしてないぞ？」

「それでもいいよ、暇だしね」

「構いませんよ。とはいっても、私はあまりよく覚えてませんけど」

「・・・お前一応日本一頭のいい高校1年生だったよな？」

「役に立たないことまで覚えていると他の本当に覚えなきゃいけないことが入りきらないんですよ」

「それは一理あるかもな」

「そうでしょうか？というわけで、翔輝さん説明のほうよろしくお願
いします」

「まあ別にいいけどさ。アレいつだったっけな・・・」

『初めまして、翔輝君。譲葉と一緒にのクラスになったのね。私は翔輝君たちの家の隣に住んでる譲葉のお母さんの冬夜ゆい譲よ。よろしく
ね』

『・・・』

『・・・』

『・・・二人とも、黙り込まなくてもいいんじゃない？』

『・・・』

『・・・』

『・・・はあ。まあとりあえずよろしくね』

二人は沈黙を守り、その日は一言も交わすことなく二人はそれぞれの家に帰った。

これが彼、夢幻翔輝と彼女、冬夜譲葉との出会いだった。

第17章 出会い（後書き）

はい、宣言どおり滅茶苦茶短いです

って言うか正直今現在猛烈に眠いので、これくらいが限界です。――

応更新は出来たので、自分的にはそれなりに満足です

では、次回をお楽しみに・・・

第18章 初めての会話（前書き）

アメリカは明日学校休みなので、夜更かしして更新です（ちなみにこれを投稿したときのアメリカ時間は午前3時過ぎ。眠い・・・）一度ほぼ書き終えたんですが、何かインターネットが落ちて保存する前に全部消えて、心が折れかけたけど何とか全部書くことが出来ました

とりあえず過去編第2章どうぞ

第18章 初めての会話

『・・・』
『・・・』

「気まずい・・・。」

幼き翔輝と譲葉が初めて二人きりになった時の事はこの一言で事足りる。

二人は沈黙を守り続けた、と言うか単に何を話していいのか分からないのである。

たまに生じる会話と言えば・・・

『・・・あの』

『え?』

『あ、いや、その・・・』

という風に、基本的に三回行き来してそのまま終了してしまう。そんな状況が30分も続いただろうかと言う頃、買い物に行っていた譲葉の母親が階段を上がって部屋に入ってきた。

『ただいま、って何で二人とも正座してるの?』

『・・・』

『・・・』

『・・・もしかして私が出かけたときからずっとこの状態?』

無言で二人はシンクロしてコクリと頷く。

『何か話した?』

その問いに関しては二人は少し考えた後、やはり頷いた。
あの話しかけ、返答、そして沈黙の三連コンボも会話に含まれるか
考えた結果、違つと判断した結果である。

『あつきた．．．。二人とも始めて会ってから何日経つてるのよ？』

譲のその言葉には返答せずに譲葉は立ち上がり、おぼつかない足取りで譲の足にしがみ付く。

『何にも話さなかったの？』

『．．．だつて．．．何話していいか分からなかったから．．．』

『そんなこと考えなくても自然に話せると思つただけだなあ．．．
。つて言うか譲葉、あの子の名前知ってる？』

『．．．翔太君？』

『翔輝君よ！名前くらいちゃんと知っておきなさいよ、まったく．．．
。翔輝君も何か言つてあげて？』

『うっん、大丈夫だよ』

『ありがとね．．．。そういえば翔輝君はこの子の名前知ってる？』

『譲葉ちゃんでしょう？さつきおばさん名前言つてたでしょ？』

『よく聞いているわね．．．。まあいいわ。ホラ譲葉、翔輝君とお話してみなよ』

『う、うん．．．』

それだけ言つと譲はとつと下に降りてお菓子の準備を始めた。

．．．再び辺りを立ち込める静寂。

『．．．えつと．．．』

『こんにちは』

『・・・え?』

『いや、そう言えば挨拶もまだだつてでしょ?』

『あ、はい、こんにちは・・・』

『そんなに慌てないでよ、僕も困っちゃうからさ』

『あう、ご、ゴメンなさいです・・・』

『謝られても困るんだけど・・・』

『じゃ、じゃあどうすればいいですか?』

『いや、だから普通にお話が出来ればいいな』

『あ、はい、分かりました。よろしくお願いします、えっと・・・』

翔輝、さん』

『うん、よろしく。でもさ、何でそんな変な言葉使いなの?』

『え、変、ですか?』

『だつて僕達同年だし。それに喋りにくくない、それ?』

『別にそんなことはないですけど・・・。あ、嫌なら頑張つて普通の言葉使いにしますけど』

『いや、そんな頑張らなくてもいいよ。でもさ、せめて「翔輝さん』

』つて言うのはやめてくれない?』

『分かりました。じゃあ・・・翔ちゃん?』

『また随分ぶつ飛んだね』

『ズイブン、つて何ですか?』

『すぐくつてことだよ。普通に君とか呼び捨てとかじゃダメだったの?』

『あ、すみません、そっちのほうがよかったですか?』

『ううん、大丈夫だよ?それが一番最初に出たつて事はそれが一番呼びやすい名前だったんでしょ?』

『・・・何だか言ってる事はよく分かりませんが、呼びやすいつて言うことを言っているならそうですね』

『まあそんな感じだね。僕は普通に譲葉ちゃんがいいよね?』

『はい、よろしくお願いします』

『・・・よし、結構話せるようになったね』

『え？あ・・・』

『慣れた？』

『・・・はい、ありがとうございますです』

『そっか、よかった』

『二人とも、お菓子あるわよ！食べたかったら降りてきてね！』

そんな風に会話が弾み始めると、下から譲の声が聞こえた。どうやらお菓子の用意が出来たらしい。

『い』

『・・・はい』

翔輝が誘うと、譲葉ははにかんだ笑みを浮かべて翔輝の後を追って一階のリビングに降りていった。

「と言うのがまあ初めてちゃんと話したときだな」

「翔輝さんよく覚えてますね。私はほぼまったく覚えてないです」

「って言うか翔輝も譲葉も何歳？」

「？幼稚園だけど」

「どんだけ喋れるのよ、とてもじゃないけど幼稚園児のボキャブラリーじゃないわよ？特に翔輝」

「そんなことないだろ」

「そんなことある。『同い年』とか『随分』とか。こんな言葉普通の幼稚園児は使わないよ」

「俺」

「うん、まあそれは知ってる」

「と言うか翔輝さんが『僕』って……」
「んだよ、文句あつか？」
「文句と言うか、意外だなあって」
「お前俺が小3に上がることまではずっと聞いてたぞ？俺が俺のこ
と僕って言うの」
「そうでしたっけ？」
「どうでもいいんだろ？」
「ぶっちゃけそうなります」
「それより続き続き〜！」
「え、もう終わりだぞ？」
「……え？だってお菓子食べた後は？」
「普通に話して普通に別れて普通に寝た」
「……普通にじゃん」
「嫌だからそう言っただろ今」
「つまんな〜い！何か他の話してよ〜！」
「んなこと言われたって……。譲葉、何か頼む」
「え、私ですか？」
「だって俺他に何も思いつかん」
「……分かりました、じゃあ私達の両親のことも話しましよ
うか」
「やったー！待ってました〜！」
「いいですよね、翔輝さん」
「お好きにどうぞ」
「ではお言葉に甘えて……。コホン」

譲葉はそう一度咳払いをし、二人の両親の事を語り始めた。

第18章 初めての会話（後書き）

書きながらも書いてからも思ってたんですが・・・

こんな会話する幼稚園児がいるか！^^；

でも小1の弟がこんな感じに喋るのでまあありっちゃありですかねえ？

皆さんどう思います？

第19章 二人の両親（前書き）

ちょっと更新遅れちゃいました、すみません

何はともあれ、過去編の続きです。今回はサブタイトル通りの内容なのでそのつもりでどうぞ

第19章 二人の両親

前回の話から3年後。

【ピンポン】

『は〜い?』

『やほ、遊びに来たよ〜!』

『いらつしやい。今行くね』

場所は夢幻家、つまり翔輝の家。

今日は休日と言うことで冬夜家が遊びに来た。

『いらつしやい』

『やほ、遊びに来たよ〜!』

『それさつき聞いた』

『いいじゃないのよ〜』

『近寄らないの、暑苦しい』

『相変わらず手厳しいね〜』

『この程度で?』

『まさか、軽いコミュニケーションの形でしょ?』

『さすが、分かってるわね』

こんなおかしな会話をしているのは讓葉の母、讓と翔輝の母、紫ゆかりである。

紫は黒い髪をポニーテールにしている上に目も若干釣りあがっている。なんとなく気が強そうに見える。と言つか実際強い。対して讓は茶色がかった短めの髪をヘアピンで留めている。活発そうに見えるその外見を裏切らないほどハイテンションかつマイペース。

又な人物だ。

『よお、俺も来てやったぞ』

『あら、冬馬ふゆま生きてたの？』

『どういう意味だ！？』

『そのまんまの意味だけど？』

『じゃあそのまんま答えよう。死んでたまるか！』

『やかましい。それ以上騒ぐと追い出すよ？』

『申し訳ありませんでした』

『分かればよろしい』

友達とはいえ、他人の夫にボロクソ言つて満面の笑みを浮かべている紫。かなりの美人なのでその笑顔はかなりの男性を魅了しそうなほど美しいのだが、理由のせいとその笑顔は悪魔が微笑んでいるように見える。

ちなみに冬馬というのは譲葉の父の名前である。一言で言うと容姿はかなりかっこいい。オールバックにした白髪の見目はハードボイルド小説に出てくるような渋い大人だ。

だが肝心の中身が あんな感じなので、やっぱりかっこいいのかかっこ悪いのかいまいち分からない人である。

『譲葉ちゃん、いらっしやい』

『お、お邪魔します』

『どうぞ』

『あ、譲葉ちゃん』

『翔ちゃん、お邪魔します』

『うん、いらっしやい』

翔輝も冬夜家の来訪を察知し、二階の部屋から素早く玄関まで降りてきた。

『おお冬馬、よく来たな』

『ういつす、来たぞ翔平もとい女の奴隷』

『フェミニストと言え、フェミニストと』

自称フェミニストのこの男の名は夢幻翔平。彼が翔輝の父親である。第一印象は、冬馬と同じようにかっこいい大人だ。

普通に伸ばしている黒髪に細い眼鏡。なんとなくいかにもエリート
って顔をしている。

ただし紫や譲、というか女性に頭が上がらないが、その代わり男性
には容赦ない。

『あ、翔平さん。お邪魔します』

『いらつしゃい、今日もかわいいね』

『そ、そんなことないですよ!』

『そんなことあるって』

『・・・ロリコンかお前』

『そこ、フェミニストと呼べ』

『だからロリコンだろ?』

『黙れ』

『最終的にそんな強制終了?』

『は、い二人とも、そんなのどうでもいいからとっとと上がって』

『そんなのって・・・そんな言い方』やかましい』・・・はい』

『はっはっは、翔平もやはり紫には勝てんか!』

『あなたも少し黙っててくれるかしら?と云うか早く行きましょう、
玄関で立ち話もアレだし』

『・・・はい』

女性陣最強。こんな環境で育ったから今の翔輝と譲葉の関係が成り
立っているのかもしれない。というか絶対にそうだ。

その後、子供二人は二階の子供部屋で仲良く遊び、大人四人は下のダイニングで昼間から談笑しながら酒を飲んでゐる。ちなみに子供二人は延々ゲームをやっていて、大人たちは以下のような会話を繰り返してゐた。

『ほら翔ちゃん二世！あんたも飲みなさい！』

『いや、だから俺は飲めないんだって。っていうか二世は翔輝の方だろうか』

『何言ってるのよ、そんなの気合でいけるでしょ！ね、紫！』

『うん・・・ダメじゃない？翔平根性ないし』

『冬馬、酒！』

『およ、いいのか？』

『ドンと来い！』

『楽勝』

『ん、紫何か言ったか？』

『んにゃ、何にも？』

『？そうか？』

『そうよ。さあとりあえず気が変わらないうちに飲みなさい！』

『ガッテンでい！』

そんなことをやっているうちに時間はすっかり夜。

最初は勢いに身を任せて酒を飲みまくっていた翔平だったが、それなりの量を飲んだあとで自分の限界（身の危険）を感じて飲むのをやめた。さすがに今回は紫も譲も何も言わなかった。

夜と言ってもまだ外はまだそれなりに明るいのだが、時刻はもう既に6時過ぎと言うことと譲葉の両親がベロンベロンに酔っていてこれ以上は無理だと翔平が判断し、今日はこれでお開きとなった。

『ほんとよにごみえんにえ』

『』とよ』ってどうやって発音するのかしら？』

『じゃあ？』

『・・・讓葉ちゃんも大変ね、こんな両親で』

『そ、そんなことないですよ？』

『・・・笑顔が引きつってるわよ？』

『あたやしのごどもをいじみえにやいでえ！』

『やかましい、酒臭いから顔近づけないで。あんた達、明日二日酔い覚悟しときなさいよ』

『ふええええん・・・』

目に涙を浮かべ、懇願するような目で紫を見る。しかし、二日酔い対策なんて紫は知らないし、第一完全に自業自得なので無視することに決めた。

ちなみに冬馬は完全に酔いつぶれていて、紫に方を借りてかろうじて立っている様子だ。とても会話が出来る状態じゃない。

『とにかく今日は帰った帰った。明日朝ちょっとだけ様子見に行つてあげるから』

『やくしよくだやよ？』

『はいはい、いいから早く帰つてとつと寝なさい。何なら讓葉ちゃんも預かつといてあげるから』

『ほんとよ？にやにかりやにやにまでえごみえんにえ・・・』

『ホントよホント。後半何言ってるのか全然わかんなかったけど』

『じゃあ今日だやけおにえぎやいねえ』

『はいよ。お大事に。あとご愁傷様』

『ふええええん・・・』

またさつきと同じような奇声を上げて家路につく。と言つても、家は隣なので何の心配も要らないが。

と言つわけでその日の夜、急遽家に止まることになった讓葉と一緒に作った糸電話が現在人間界で二人の家を繋いでいる。

「と言う出来事があったって私達の部屋には糸電話が通っているんです」
「そついやそんな感じだったな」

「翔輝さん忘れてたんですか？記憶力無いですね」

「どの口が言ってたんだ？」

「この口です」

「知ってる」

「ねえ、『イトデンワ』って何？」

「ああ、こつちの世界には無いんですね？」

「簡単な工作だから作ってやれば？」

「そうですね、久々にやってみましようか。ところで翔輝さんはどうするんですか？」

「昔を思い出す」

「おじいさんみたいなこと言わないでください」

「何言おうが俺の勝手だ」

「分かりました翔輝おじさん。じゃあウルさん、行きましようか」

「誰が翔輝おじさんだ、って聞いてねえし」

「あ、待ってよ譲葉！」

翔輝がそれを言い切る前に譲葉は小屋に向かって歩き出していた。ウルもそれを慌てて後を追う。

それを見送ると、翔輝は木にもたれ掛かってため息をつく。

「……まさかあの時の話をされるとはな」

翔輝は苦笑してそう呟き、あの日のことを思い出す。

それは譲葉の両親と紫が家の外で話をしていた時。翔平が少し酔っ

てリビングのソファーに寝転んで休んでいるときのことだった……。

『……お父さん大丈夫？』

『ん、何とか……。それより翔輝』

『何？』

翔平はダルそうに起き上がり、少し真剣な目をして翔輝と向き合う。

『譲葉ちゃんとはどうだ？』

『？どうって……普通だけど』

『何か問題はないか？』

『うん、楽しいよ』

『そうか。……譲葉ちゃんの事は好きか？』

『うん、好きだよ』

『……そうか。それなら一つだけ覚えておきなさい』

『え？』

『いいか、男に生まれたからには女は守らなきゃいけない』

『……うん』

『だから口で何を言っても構わない。でもな、絶対に手を上げるな。相手に何をされても、絶対にだ』

『え、だってやられたらやり返さなきゃすつきりしないよ？』

『だから何もやられないような立派な人間になりなさい。そうすればお前の仲間は絶対にお前を傷つけるようなことはしない』

『うん、難しくてよく分からないよ』

『今は分からなくてもいい。だから言っただろ、今は覚えておくだけいいって』

『・・・とにかく女の子は大切にしなさいってこと?』

『ああ、そういう事だ』

『は〜い。じゃあ僕譲葉ちゃんにさよなら言ってくるね!』

「・・・たく、あの変態ロリコンフェミニスト親父。余計なこと
昔の俺に吹き込むやがって・・・」

ため息混じりに実の親に向かって暴言を吐く。いないのをいい事に
・・・。

翔輝はそう呟いたあと、苦笑しながら呟いた。

「・・・おかげで譲葉に言われた事は結局やっちまうんだよな、い
くら粘っても・・・」

第19章 二人の両親（後書き）

遅れてしまった分若干長めだったと思います。

今回は自分の中、と言うかこの小説ではそれなりに重要なところのつもりで書きました。この翔平の信念（？）が翔輝をどう影響していくのか、それにも重点を置いて今後も読んでいただければ幸いです。

第20章 帰る？（前書き）

ついに20話到達です！これも読者の皆様のおかげです！ありがとうございます、これからもどうぞよろしくお願いします！

第20章 帰る？

「いつまでここに居るの？」

翔輝と譲葉が小屋に来てから早1ヶ月。何の前振りもなくミラが聞いた。

「・・・は？」

「いやだから、いつまでここに居るのかって聞いているの」

「何ですか急に」

そう聞くとミラは一度ため息をついて順を追って説明を始める。

「まずあんた達は何でここに来たの？」

「・・・なんでだっけ？」

「試練をクリアするための特訓です」

「そうでしょ？なのに何であんた達まだここに居るの？」

「いや、だつて特訓中だろ？」

「二人とももうあたしと対等に戦えるじゃない。これ以上特訓は行かないでしょ？」

「・・・え、そうなの？」

「ミラさんそんなこと言いましたっけ？」

「・・・あれ、言わなかった？言ったでしょ？」

「言っていない」

「言ってますん」

「そうだったかしら？」

「そうだった」

「そうでした」

「・・・ホントに「ホントにそうでした」あぁそう・・・。」

二人に言っただけでなかったことを指摘され、何度も確認するうちに自分でも自身がなくなり最終的に声はほぼ聞こえないほど小さくなっていった。

「それにしても、そういうばそうだったな・・・」

「何がですか？」

「いや、試練あったんだなって」

「それを忘れちゃダメでしょう・・・」

「って言うかさ・・・」

翔輝はそう言う少し言葉を切った。譲葉とミラも翔輝が何を言うのか聞き逃さないように耳を傾ける。

ほんの5秒ほどの沈黙のあと、翔輝が言った。

「ぶつちやけのままこの世界にいればいいんじゃないかね？」

「・・・はい？」

「いやだから、別に元の世界に戻る必要ないんじゃないかねえの？」

「何を言い出すんですか突然！？それはつまりこの世界で一生暮らしていようってことですか!？」

「まあそうなるな」

「いやいやいや、帰りましょうよ！私は嫌ですよ、この世界で一生暮らすのは！と言うか何で急にそんなこと!？」

「いやだって特に帰る必要ないじゃん。この世界で一応1ヶ月暮らしてるけど特に何も不自由して無いし」

「心配する人がいるでしょう！親とかクラスメイトとか！」

「俺の親は放任主義だから多分大丈夫。クラスメイトなんぞ知ったことか」

「何ですかそれ！？大体漣みおちゃんはどうするんですか！？」

「・・・しまった、そいつがいたか」

「そうですね！どうするんですか、翔輝さんが帰らなかつたらあの子何するか分かりませんよ！？」

二人が話している漣と言うのは譲葉の一つ下の従妹、冬夜漣のことだ。

容姿は譲葉と同じく黒い瞳に黒い髪。髪型は肩に触れるか触れないかくらいの長さのツインテール。

性格は譲葉とはほぼ正反対と言っても過言ではない。

人懐っこくて、いつでも明るい。別に譲葉が暗いと言うわけではないのだが、やはり譲葉と比べるとかなり明るい。

そして多少、と言うかかなり頭が悪い。気を使わずに言うとバカ。

そんな数々の特徴よりも目立つのが、翔輝に惚れていると言う事実。会えるのは年に数回、学校の長期休暇の時だけなのだが、その時にはここぞとばかりに翔輝に甘えまくる。

たまに漣の親が長期休暇を使って旅行に行こうと言い出すと、家出をしてまで翔輝に会いに来たと言う武勇伝(?)もある。

そんな彼女の前からいきなり翔輝が姿を消したら・・・。

「彼女荒れますよ?」

「・・・アイツが荒れたら世界も滅ぼせそうだな」

「それは大げさです」

「どれだけ強いよ、その子」

「翔輝さんの表現がオーバーなだけです。本当はすごく可愛い女の子ですよ」

「アレが可愛い・・・?あだっ!？」

翔輝がそう呟いたのを聞いて、譲葉はミラに笑顔に向けたまま翔輝の顔を引っ叩いた。

「いででで・・・」

「そういうわけなので帰らないと言う選択は無いです。翔輝さんは澪ちゃんを悲しませたいんですか？」

「そんなわけあるか」

「だったら帰ります。異存はないですね？」

「ほい・・・」

「シャキツとしてください」

「いいんだよ、これが俺のペースなんだから」

「・・・全く、相変わらずしょうがないですね。やるときはやってくださいよ？」

「わあつてるよ、死ぬのはゴメンだしな。じゃ、俺そろそろ寝るわ」

「早っ、もう寝るの？」

「やることなくて暇だし」

「特訓でもする？」

「嫌だ」

「めんどくさがらない。やりたくないならそれなりの理由を言いなさい」

「さっきお前自分で『もう修行はいらぬ』とか何とかいったから」

「うぐ・・・痛いところをついてきたわね・・・」

「どうだ、グウの音も出ないだろう」

「グウ・・・」

「出すなよ」

「じゃあミラさん、私と特訓してくれませんか？」

「え、私譲葉相手じゃ勝てる気しないんだけど・・・」

「俺だと勝てる気がするってか？」

「うん。って言うか勝てる気しかない。だからこそやる」

「ドS？」

「人聞きの悪い事言わないの」

「他に何を言えと？」

「うるさいわね、ごちゃごちゃ言わない。じゃあ議葉、行きましょ
うか」

「お手柔らかにお願いしますね」

「こちらこそ」

二人は微笑みながら外に向かう。とても今から殺し合い同然の特訓をしいいく人間たちとは思えない。あ、一人人間じゃなかった。

「・・・あれ、まだ試練始まってないんだっけ？こんなんで帰れる
のか、俺達・・・？」

第20章 帰る？（後書き）

今回ちょっと短めですかね？せつかくの20話記念なのに・・・）
自業自得）

新キャラ登場、と言っても名前だけですが。今後出るかどうかは・・・
・未定です（ダメじゃん）

って言うか20話で4話に来た小屋から出ないって・・・展開遅すぎ
ぎですね^^；

さすがにそろそろ冒険を始めようと思います。では次回をお楽しみに

第21章 試練開始？（前書き）

短っ！！！！（オイコラ）

今日は宿題が多いので執筆の時間があまり無いという理由があるの
ですが・・・言い訳ですね、すみません
次回こそは・・・！

第21章 試練開始？

「そういえばさ、二人の次の試練って何なの？」

「・・・え？」

「・・・あれ？」

よう、翔輝だ。今現在俺達は日課になりつつある特訓を終え、昼食を終えたところだ。

翔輝が食器を片付け終えて小屋に戻ってきた時のウルの突然の質問に、俺と譲葉は一瞬硬直した。

「・・・え、知らないの？」

「いや、だって俺達こつちの世界に来てから神と話して無いし」

「ここに来るように指示をしてくれたのもテリアさんですし・・・」

「って事はどの道ここに居ることしか出来なかったのね・・・」

ウルは一度ため息をつく、空に向かって「マリー？」と呼びかけた。

「・・・誰ですか？マリーって」

「うん？すぐに分かるよ」

ウルがそう言ったのは直後、天から「お待ちせう。何？」という声が聞こえた。

「うにゃあああああ！？」

「ネコ？」

「ただただって、急に何も無い空から声が！」

「空なんて無いぞ、あるのは天井だけだ」

「そんな冷静なツツコミは期待してません！」

『・・・あのく、私を呼んでおいて私を無視して話をしないでくれる?』

「よお神、久しぶりだな」

『うん、相変わらず神様に対する言葉遣いじゃないね』

「心配すんな、誰もお前を神だとは思ってないから」

『それはひどくない!?!』

「あ、安心してください! 私は思ってますから!」

『ホント!? ホントに!?!』

「ええ、もちろんです!」

「まあそんな事はいいからとりあえず話を進めようよ」

『そんなことって・・・』

「ところで、マリーって言うのは・・・」

『ああ、私の名前だよ』

「最初に会ったときに教えてくれればよかったんじゃないですか?」

『いやあ、単純に忘れてたんだだけだね』

「そ、そうですか・・・」

譲葉とマリー・・・だっけ? が話している間、俺はウルに少し近づいて耳打ちする。

「・・・なあ、もしかしてマリーってバカ?」

「そうねえ、バカかどうかと聞かれればバカね」

やっぱりな・・・。

って言うか、バカが神で大丈夫なのかこの世界?

『で? 何で私を呼んだのよ?』

「だってマリー翔輝と譲葉に試練教えてないんでしょ?」

『あ、そういえばそうだったわね』

「超人事じゃねえか。俺達を元の世界に返す気あんのかお前？」

『あるよ。失礼なこと言わない』

「・・・失礼か今の？」

「じゃあとりあえず教えてあげてよ。そうしないと二人ともここから動きようが無いし」

『そうね・・・。じゃあ最初の試練を与えましょう』

「急に偉そうになんなボケ」

『ひ、ひどい・・・』

「しよ、翔輝さん！そんなこと言わなくても・・・」

譲葉は慌てて俺にそう言う。

・・・そうは言ってもな譲葉、いきなり上から目線になられたらかなりムカつくぞ？っていうかムカツクだろ？

『さて、じゃあ気を取り直して・・・。最初の試練を与えさせていただけます』

「分かればいいんだ」

「ま、マリーさん・・・。そんな下手に出なくても・・・」

『あなた達はまずここから北に行った洞窟に向かってもらいます。』

そこを拠点にしている盗賊たちの退治が、あなた達の最初の試練です』

「・・・え、そんなのでいいの？」

「なんだか随分簡単じゃないですか？」

『ん、まあ最初だったこともあるしね。あんまり難しいのはさすがに出さないよ。まだ』

「まだって事は今後は出る可能性あるんですね・・・」

「まあとりあえず試練をクリアしてけば戻れるんだな？」

『うん、死ななければ』

「じゃあせいぜい気をつけて行ってきますよ」

「それでは早速行ってきます」

『あゝ、ちよつと待って！レイ、あなたもついていってあげなさいよ』

「へ？僕も？何で？」

『二人より三人のほうが楽しいし簡単でしょ？』

「そりゃまあそうだけど」

『って言うかレイ、あんたどうせ暇でしょ？』

「・・・何か確信持って言われたのもムカつくけど、その予想通りに暇な自分にもムカつく」

『まあとりあえず行ってらっしゃい』

「りょうかい・・・」

というわけで、なんだかんだでウルもつれて俺達は盗賊のアジトに出向くことになった。

・・・ウルよ、こんな簡単に話が進むなら最初からそうしてくれればよかつたんじゃないか？

第21章 試練開始？（後書き）

やっとの事でストーリーが進みました（またもや自業自得）
ちなみに途中でマリーがウルのことを「レイ」と呼んでいます。が、
あいつはレイのあだ名のことを知らないのでアレでいいんです。三
スじゃありませんよ？^^；

第22章 学校風景（前書き）

今回はなぜかかなり長めです。まあいい事なんですけどね
過去編第3話になるんですかね？まあ過去というほど昔の話ではな
いんですが・・・
とりあえずどうぞ

第22章 学校風景

どうも、讓葉です。

今私は翔輝さん、ウルさんと一緒に盗賊退治に向かっているところです。

いつだったか覚えてませんが、ちょっと前に私達が罰ゲームを受けた森の近くを歩いているところです。

うう、トラウマが・・・。

と、とりあえず何か他のことを考えないと・・・。あ、そういえば

...

「私達学校、と言うか勉強どうしましょう?」

「何言つてんだ、行かなくていいものまで気にする必要ない」

・・・翔輝さん?私達一応帰るつもりでいるんですよ?学力落ちたら大学に進学も就職も出来ないんじゃない?・・・。

「ガツコウ?何それ?」

「え、こつちの世界には学校無いんですか?」

「知らないよ、何それ?」

「簡単に言うつと勉強しに行くところですね」

「え?何でそんな変な物作るの?わざわざ勉強なんてしなくてもいいのに」

「あつちの世界は勉強が全てですからね」

「つまらない世界だね」

「そうですね、確かにこつちの世界のほうが面白いです」

「全国トップのセリフか?」

「私だつて勉強は嫌いですよ?」

「へえ、以外だな」

「ねえ、あつちのガツコウどんな感じだった？」

「そうですねえ、ちょっと長くなりますけどよろしいですか？」

「いいよ、どうせ暇だし」

これから盗賊退治に行くのに暇って言うのもどうかと思いますけど
。。。

「翔輝さん、お願いします」

「俺は嫌だ」

「まあいいですよ。そうですねえ。。。じゃあ一番鮮明に覚えて
いる、私達が高校一年生になってから二週間ほど経った頃の話をし
ましょうか」

『翔輝さん、早く起きてください！遅刻！遅刻です！』

『別に遅刻したっていいじゃねえかよ。たかが学校くらい。。。』

『翔輝さんはいいですよ、いつも遅刻してるんですから！でも私は
一応優等生なんです！』

『自分で優等生とか言うか？』

『そういう冷静なツッコミはいいから黙って起きてください！ベッ
ドから出てください！』

『。。。いや、この会話してる時点でもう起きてるしベッドからも
出てるだろ』

。。。ま、まあ確かに糸電話の受話器(?)を取るにはベッドから
出なきゃですけど。。。。

『まったく、俺の安眠を鈴で妨害しおって。。。』

『いいから早く支度してください!』

『分かったから怒鳴るな、すぐ準備するから家の前に来てる。って
いうかなんなら先に行ってもいいぞ?』

『いえ、それは無いです』

『何で?遅刻するのは嫌なんだろう?』

『だって私が見張つてないと翔輝さんサボる可能性大なんですから』

『チツ……。そんなことするわけ無いだろ』

『わざとですよ?』

『……。おつよ、わざとだ』

……。絶対に嘘ですね、返事が若干遅れました。

『……。まあいいです。とりあえず私は待ってるので早く来てくだ

さいね』

『御意』

私は翔輝さんにそう念を入れて家を飛び出した。

翔輝さんは昔からああなんです、特に中三の始め辺りから。

毎日こんな感じで遅刻するかしないかギリギリの時間に起きて、私
にも迷惑が……。

うーん……。昔のあの目が輝いていた翔輝さんはどこにいったんで
しょう……。?

と、そんなことを考えている内に翔輝さんが家から出てきたので、

私は翔輝さんの腕を引っ張って走り出した。この頃は私のほうが足
速いと思ってたんですけど……。

ですがこの頃はまだ翔輝さんめんどくさがって全然本気で走ってな
かったので、必然的に私が翔輝さんの手を引っ張って走ってました。

『翔輝さん、急いでください!あと10分で学校始まります!』

『10分あれば間に合うんじゃない?』

『何言ってるんですか！？ここから私達が全力で走っても最低5分はかかりますよ！？5分も全力で走れるわけも無いんですから、絶対に5分以上かかるでしょう！？』

『だったらもう遅刻でいいじゃねえかよ』

『却下です、却下！誰が好き好んで初っ端から先生に悪印象を与える必要があるんですか！？』

『大丈夫だ、そんなもん俺には何の関係も無い』

『微妙に会話が成立して無くないですか！？』

『そうかもな』

『即答しないでください！』

『・・・そうかもな』

『いや、間をおけば言っていていいといったわけじゃないですよ！』

ああ、無駄な体力を・・・！

そんな我ながらバカバカしい会話をしている間も必死で走り続けた甲斐あって、何とか授業開始1分前に間に合いました。

うう、早速先生方に目を付けられたかも・・・。まあ間に合ったのが幸いですね。

そしてその他にはたいしたアクシデントなども無く、あっという間に昼休み。

ちなみに翔輝さんが居眠りで先生に怒られたのはいつものことなのでアクシデントにはなりません。

『翔輝く、ご飯食べようぜ』

『断る』

『よし、じゃあ横すわ・・・って何で！？』

『鬱陶しい、邪魔、暑苦しい、めんどくさい、目障り、耳障り・・・。まだ言うか？』

『・・・いや、もういい』

『理解力が達者で何よりだ』

翔輝さん、相変わらず容赦ないですね……。あ、今翔輝さんに話しかけてボコボコにされたのは木下きのした天助さんてんすけ。中学の頃から翔輝さんと仲がいい、いわゆる親友って奴ですね。ちなみに顔も普通、頭も普通のあまり目立つ要素は無いんですが、遅刻の多い翔輝さんの親友ということと行動に突拍子の無いという点でクラスの中ではかなり目立っているようです。

『翔輝君、相変わらず容赦無しね』

『あ、恭子さん』

『どうも譲葉ちゃん。私も混ぜてね』

『ええ、どうぞ遠慮無く』

西沢にしざわ恭子きんこさんも天助さんと同じく私が中学の頃から仲のいい友達の一人です。

恭子さんは翔輝さんや天助とは違って成績も優秀で、テストの成績はクラスで私に続いて二位です。

女の私が言うのもどうかと思うんですけどすごく可愛らしくおっとりしたお方で、中学の頃からかなり人気だったみたいです。

ちなみに私のほうにも結構手紙とか来てたんですよ。全部丁寧に断りましたけどね

『恭、とりあえずこのバカタレを追い出せ』

『そ、そんなに言わなくてもいいんじゃない？』

『いいんだ、バカハゲはここにはいらん』

『バカハゲってなんだ！？』

『バカなハゲだ』

『いやそれは分かるけどさ！？』

『翔輝さん、どうでもいいので早くお弁当食べましょうよ』

『そうだそうだ……。ってどうでもよくは無いです！？』

『あ、すみません。つい本音が』

『本音！？本音つつた今！？』

『冗談らしいですよ？』

『「らしい」って何！？』

『天君、ちよつと声が大きだよ・・・！って言うかもつこの会話は
終わりにしない？』

『あ、悪い』

まあいつものことなんですけどね、こういう会話は。

翔輝さんが天助さんをボコボコにし、時々私も参戦、そして最終的に恭子さんが仲裁に入るといふパターンですね。

ちなみに翔輝さんは恭子さんのことを「恭」、恭子さんは天助さんのことを「天君」と呼びます。

基本的に私達四人で行動することが多いです。

って言うか翔輝さんが遅刻とかサボりとかするせいで、私達も先生達にかなり目を付けられています・・・。

うう・・・翔輝さん、恨みますよ・・・。

『じゃ、俺は寝るから』

って言ってるそばからあああ！？

『ちよ、待ってください！何でわざわざお昼休みに寝なきやいけないんですか！？』

『いや、だって今日も誰かさんに俺の朝の安眠を妨害されたし』

『いやいやいや、起こすのは当然でしょ！？』

『いいんだよ、俺は別に学校来なくて』

『が、学校に来なくていいって言うのはないんじゃない？』

『え、何で？』

『だ、だって一応学校に来るのは子供の義務だし・・・』

『ハツ、そんな事知るか』

『鼻で笑われないでよ・・・』

『って言うか翔輝！お前学校に来ないって事は俺にも会えないってことだぞ！？いいのかそれで！？』

『それだから来ないんだってか気持ち悪い近寄るな俺の視界に入るな俺から半径1キロ以内に入るな』

『早っ！よく噛まないでそれ言えたな、って言うかそこまで言うのは酷くねえか！？』

『酷いわけないだろ、天助だし』

『どつという意味だ！？』

『そのままの意味だ』

『いや、それは分かるけどさ！？』

『・・・天君、翔輝君、それもう今日何回目？』

『どつでもいい』

『翔輝君は相変わらず私にも容赦ないね・・・』

恭子さんが苦笑しながら言う。・・・恭子さん、可哀想・・・。

『しよ、翔輝さん、とりあえずお昼休み中は起きてましょつよ』

『えゝ、何で？』

『今寝てしまつたら授業中に寝れませんよ？』

うづん、我ながらなんて不良みたいな理由でしょう・・・。

でもこう言えば間違いなく翔輝さんは・・・。

『・・・あ、そうか。やっぱしばらく起きてよ』

・・・扱いやすいですねゝ。

まあ、今は私達との会話を楽しんでくれるのなら授業中に何しても私達の知ったことじゃないですしね

「・・・あれ、でもそれはつまり先生達がもつと私達に目をつけるという事じゃないですか？」

『あ、翔輝さん、やっぱり今寝てもらってもいいですよ・・・？』

『いや、俺は起きとく』

『・・・じゃあ授業中寝ないでく『無理』ですよ・・・』

ああ・・・また先生に変なイメージを・・・。

そして昼休みが終わってからの授業、翔輝さんは案の定というか何と云うか、すごい幸せそうな顔して爆睡してました・・・。
その後私と恭子さんが職員室に呼ばれて、翔輝さんが何とかならないかと相談されたのはまた別のお話です。

「・・・という感じですね」

「・・・なんて云うか、讓葉も苦労してたんだね・・・」

「分かりました？」

「うん、すごく」

「?どうかしたか？」

「人の気も知らないで・・・」

「何だよいったい・・・?」

「でも学校面白そうだね、僕も行ったみたいな」

「やめとけ、バカみたいにつまんから」

「そんなこと無いですって・・・。確かに疲れますけど」

翔輝さんがもうちょっとしっかりしてくれれば楽しめるんですけどね・・・。

「・・・で、いつその洞窟とやらに着くんだ？」

「もうちよつと先みたいですね」

「あんだけ長い間話してたのにまだ着かんのか・・・」

「仕方ないですよ、気長に行きましょう。しばらく戦わなくて済みますし」

「それもそうか。確かにめんどくさいの先延ばしに出来るしな」

ホントに、翔輝さんはそればかりですね・・・。

「めんどくさがってばかりじゃ、人生楽しめませんよ？」

「俺より年下に人生を語られてたまるか」

「と、歳は関係ありません！」

「俺のペースなんだよ。やるときはやる、でもやる必要が特に無いときはとことん適当」

「まあやることやれば方法はいつでも言いたいということですね」

「そういうこと」

翔輝さんらしいと言うか何と言うか・・・。まあでも・・・

「・・・嫌いじゃありませんよ、そういう考え方」

「だろ？」

「ええ。さて、それじゃあ盗賊退治、張り切っていきましようか」

「まあ3割くらいの張り切りでいいだろ？」

「お好きにどうぞ？ただし死なないでくださいね？」

「おうよ、死にそうになったら本気出ささ」

「ふふふ、ホントに翔輝さんらしいです」

「・・・なんであの二人僕を置いてけぼりでいい雰囲気になってるの？まあいいけどさ・・・」

第22章 学校風景（後書き）

気付いた方もいるでしょうが、前回から視点を変えてみることにしたんですが、いかがでしょうか？

誰か視点かは最初に書きます。特に無い場合は誰視点でもないです

第23章 冬夜 溼（前書き）

ちよつと遅れましたが更新できました（現在アメリカ時刻午前4時）
今回はサブタイトルの通り数話前に出てきた溼の話です

第23章 冬夜 溇

「ねえ、こないだミラに聞いたんだけどさ」

「ん？」

「溇って誰？」

「・・・ミラの奴、余計なこと言いやがって・・・。
まあいいか。あ、口調から察してくれ、翔輝だ。」

「溇さんですか？とても可愛い方ですよ」

「それは前にミラに聞いたよ。なんか他に面白エピソードとかないの？」

「そうですねえ・・・。翔輝さん、なにかありませんか？」

「面白エピソードは無いが普通の話ならあるぞ」

「じゃあそれでいいよ。暇だしね」

仮にも今から盗賊退治に行く人間が暇って・・・。あ、人間じゃないか。

まあそんな事はおいとして、何を話すか・・・。

『まったく、何も休みがあるたびに会いに来ることないのにな・・・』
『そんな事言わないでください、溇ちゃんだって翔輝さんに会うの楽しみにしてるんですから』

『まあそれは素直に嬉しいが・・・』

それにしても、一年振りか・・・、って言っても毎年のことだから

たいして特別な気はしないけど。

『何も電車で三時間かかるところに毎年来る必要も無いのにな』

『いいじゃないですか、会って嫌な気はしないでしょう？』

『そりゃな』

どういうわけか俺と譲葉の家族の中では、澪が来るときは俺と譲葉が駅に迎えに来ることが決まりごとになっている。

と言うわけで俺達は今現在澪が乗ってくるはずの電車を待っている。もう何分も待たないうちに来るはずなんが……。

『……あ、翔輝さん、電車来たみたいですよ』

『ん？お、ホントだ』

『どんな旅だったんですかね？』

『さあな、神のみぞ知ることだ』

『何言ってるんですか？澪ちゃん本人も知ってますし、その近くに座っていた乗客の皆さんも知っています。さらには……』

『いや、悪い、俺が悪かった。もういいよ』

『そうですか』

あそこまで執拗にツッコミを入れてくるとは……。

と、そんなコントのようなやり取りをしているうちに、駅内から人が流れるように出てきた。

『さっきの電車で間違いないよな？』

『間違いありません』

『澪の奴、髪形変えたりしてないよな？』

『そこまでは知りません』

『だろうな』

『それはそうでしょう。あ、来ましたよ！』

『おお、お〜い溇〜』

電車から出てきた溇を見つけたので、とりあえずこっちに呼んでみる。

向こうもこっちに気付いたようで、大きなスーツケースを引きずりながらこっちに向かってくる。

で、こいつが来るときに最初にする事は決まっている・・・。

『翔輝兄さ〜ん!〜!』

さて、毎年恒例の激甘えタイム(?)だ。

溇はどういうわけか俺に滅茶苦茶懐いていてベタベタ甘えてくるんだ、いっどこでもどんな状況でも。

だから今現在もこっちとして公衆の真ん中だと言っにもかかわらず俺に抱きついてきている。

『翔輝兄さん、会いたかったよ〜!』

『分かったからとりあえず離れてくれ』

『嫌です!とりあえずしばらくはこっちさせてください!』

『とりあえずで抱きつくな。っっていうか譲葉に挨拶はどうしたおい』

『あ、譲葉姉さん、こんにちは。これからしばらくご厄介になります』

『ふふふ、相変わらずですね。いらっしやい、溇ちゃん』

『さて、挨拶が済んだところで俺から離れる』

『いやです』

『何で?』

『1年で数回ですよ?抱きつかないなんて損じゃないですか!』

『そうか?だったら譲葉に抱きつけ、同じ1年に数回なんだから』

『嫌です!〜!』

『何で?』

『親近相愛になるからです』

『いや、従姉妹同士はならないぞ。って言うかそういう感情あったんか?』

『冗談ですよ、冗談! 讓葉さんは一緒に寝るときに思う存分やります!』

『え、ちよ、澪ちゃん!? それ本気で言ってます!?!』

『それは一緒に寝たら分かります』

『え、ホントに不安なんですけど!?! 翔輝さん、私何されるんですか!?!』

『それは俺が知ったらやばいんじゃないか?』

『そ、そういう系ですか!?!』

『どついう系?』

『て、貞操の危機的な!?!』

『いや知らんて。そして随分恥ずかしいことを大声で叫ぶな』

『と、とりあえず帰りましょう! これ以上誰も恥じかかないように!』

『恥? 何のことです?』

『お前のことだ。さ、帰るぞ』

『え、翔輝兄さんそれどついうことですか!?!』

『そついうことだ』

『そついうことですか。・・・どついうことですか?』

『そついうことだ』

『そついう』いやもういいですから早く行きましょう』分かってますよ! 遊んだだけです!』

そんなバカをやりながら家に向かう。途中通行人から変な目で見られたが、毎年の事なので気にしない。

というか、むしろ澪がいつも通りで安心した。

『・・・で、いつまで抱きついてる気だ?』

『ん〜・・・夏休みが終わるまで?』

『それはつまり四六時中ずっと同じ生活をするということか?』

『あ、それいいですね!』

『いいわけあるかこの素っ頓狂が』

『す、素っ頓狂って・・・』

『素っ頓狂でいいんだよお前は。っていつかもういい加減離れろって』

『いいじゃないですか、なんだかんだ言っただけで翔輝兄さんも引き剥がそうしてないですし』

『俺はそういう事できないの』

『翔輝兄さんのそれ直したほうがいいんじゃないですか?』

『じゃあ何か?本気で押し倒して欲しいってか?』

『え〜?それはいや・・・あれ、でもそれもいいかもしれませんね』

・・・

『み、澪ちゃん!?それはちょっと危ないんじゃないですか?』

『そうですね?』

『ああそうだ。大丈夫だ安心しろ、どの道殴ったりはしないから』

『そうですね、翔輝兄さんが変わってなくて安心しました』

『あつそ、こっちは若干変わって欲しかった気もするがな』

『え、翔輝兄さん、今の私嫌いですか・・・?』

『冗談だ冗談、泣きそうになるな』

やっぱり変わらねえな、こいつ。昔から俺がこつこつこつこと言っただけに上目遣いで泣きそうになるんだよなあ・・・。

最初こそあの顔にやられて必死に謝っていたが、さすがに毎年来るようになって3年目くらいからはもう慣れて適当に流せるようになった。

っていつか本人も本気で泣いてるわけじゃないみたいなので気にするだけ無駄だ。

一番最初に漣に会ったのは中一の夏休み。譲葉の従妹が遊びに来たということであれもついでに会ったのだが、その際になぜか妙に気にいられてしまい、その後の夏休みは必ず、冬休みにも時々来たりする。

その際は必ずと言っていいほど抱きつかれたり一緒に遊ばされたり、とにかく気に入られている。

まあ俺も漣の事は好きなので、別になんとも思っていないのだが。普通に時々遊びに来る友達っていう感覚だ。

『じゃあ私は譲葉姉さんの家に荷物置いてきます。そしたらすぐに翔輝兄さんの家にお邪魔するので、一緒に遊んでくださいね』

『了解』

漣はそう言つと譲葉に手伝ってもらつて、いかにも重そうなスーツケースを運びながら家に入つていった。

ホントに重そうだったので手伝おうとしたのだが、『翔輝兄さんは人のことばかり気にしすぎですよ！大丈夫です、これくらい』とかなんとか言つて断られた。

で、結局その後俺、譲葉、そして漣の三人でゲームをやつたりトランプしたりしながら一日を過ごしただけで終了。で、その日の夜

『翔輝兄さん、お泊り会しましょう！』

『却下』

『よーし、じゃあ早速……つてええ！？』

『何でわざわざお泊り会なんぞしなきゃいけないんだ？』

『まあまあ翔輝さん、たまにはいいじゃないですか』

『譲葉姉さん！やっぱり私の味方は譲葉姉さんだけです！』

『……とか言つてお前今日漣と寝たくないだけだろ？』

『……』

『……』

『……』

『……そんなことあるわけないじゃないですか』

『今の間の理由を三十字以内で簡潔に説明せよ』

『何か反論を考えようとしたんですが思いつきませんでした』

『素直でよろしい』

『翔輝兄さん、ダメですか？』

『別にダメじゃないがめんどくさい』

『じゃあ私達が全部用意しますから！ね、譲葉姉さん！』

『そうですね、それじゃあ翔輝さん、あとで私の家に来てくださ
い
ね』

『もう勝手にしてくれ……』

『という話はあったぞ』

『で、そのあとどうなったの！？』

『普通に徹夜して遊んで普通に寝た』

『なぐんだ、つまんない』

『何を期待してたんだ？』

『それより翔輝さん、着きましたよ』

『ん？おお、いつの間に』

『さて、じゃあ行こうか』

『ったく、いざとなるとめんどくせえな……』

『文句言わないでください。とりあえずとっとと終わらせて帰りま
しょう』

『当然。さて、それじゃ行くぞ』

『よーし、久々に本気出してみようかな！』

というわけで、俺達は目の前にぽっかり空いている巨大な洞窟に足を踏み入れた。

第23章 冬夜 溼（後書き）

というわけで一応過去編も一段落、そして盗賊退治開始です
そして先日、ついにユニークアクセス20000人突破しました！
読者の皆様、こんな小説を読んでいただき本当にありがとうございます！
ます！これからも頑張りますので、末永くお付き合いいただければ
幸いです！

第24章 団長？頭？（前書き）

まず自分で思ったことを言わせてもらいます

なんじゃこりゃ？^^；

うゝん……。やっぱり戦闘、って言うかシリアスは微塵も向いて
ないですね……

第24章 団長？頭？

「とりあえず作戦を立てましょう」

「んなことしなくてもウルに全部任せれば何の問題もないだろ？」

「それもそうですね、というわけでウルさんよろしくお願いします」

「ちょ、それはダメでしょ！？誰のための試練なの！？」

「いや、だって・・・なあ？」

「ええ、だって」

「「めんどくさい」」

「揃って答えないでくれる！？」

だってなあ・・・。お、いらっしやい、前回に引き続き翔輝だ。

・・・こんな風に語りかけていいのか？まあいいか。

皆知つての通り、俺達は今崖に掘られた洞窟の前に立っているのだが、今になって思うと・・・。

「ベタ過ぎだろ、ドクエか？勇者が英雄に代わっただけじゃねえか」

「ベタって言うのは裏を返せば十分ありえるってことでしょ？そういう事は言わないの」

「はいはい・・・。よし、じゃあ行ってこいウル」

「よし！・・・じゃなくて、翔輝と譲葉の試練でしょ！？僕ばっかりに頼っちゃダメ！」

「冗談ですよ、基本は私達でやりますからウルさんは危ないときに手助けお願いします」

「・・・まあそれならいいけど」

ウルはそう言って（決して快くではないが）了承した。が、俺と讓葉はアイコンタクトで会話をしたので讓葉の言葉の裏を読み取った。

『適当にピンチになってウルさんに任せましょう』

『ガッテン承知』

だってめんどいじゃん？分かるだろ、この気持ち？

大体なんでわざわざ自ら進んで殺し合いをしなきゃいけない？そんなんゴメンだ。

「じゃあ行くよ！」

「うい」

「了解です」

さりげなくウルをリーダーにしながら俺は刀、讓葉はナイフ、そしてウルは頭から耳をはやして（？）洞窟に一步踏み入れた。

・・・ま、特に変わらないけど。さすがに入っていくなりトラップなんて空気を読まないことはしないだろ。

「・・・もうめんどくさいから一番手っ取り早い方法でいいか？」

「手っ取り早い方法？」

「おうよ」

「僕は何でもいいよ、とりあえずやってみなよ」

「いい予感はありませんが・・・。まあどうぞ」

「ほんじゃ、お言葉に甘えて・・・」

ん〜、多分これやったら怒られるだろうな・・・。

ま、二人の許可はもらったし、あえてやってみるか。そのほうが面白いし。

さて皆さん、勘の良い方ならもうお分かりですね？大きく息を吸っ

て、さん、はいつ。

「バカ盗賊共。とっとと出て来い退治してやっから。」

「ちよ、翔輝!？」

「はぁ……やっぱり……。」

おお、さすが譲葉。俺が何するか分かったのか。そのわりには頭抱えてため息ついてるけど。

あ、ちなみに上のセリフ叫んでない様に見えるかもしれないけど叫んでるからな。やる気なさげに。

「……何か奥から雄叫びが聞こえてきましたよ?」

「翔輝!？君何やってるの!？」

「いや、こつちから行くのよりあつちから来てくれるほうが楽じゃん?」

「そんな理由でわざわざ悪条件に!？」

「とか言ってる間に盗賊の皆さんものすごい勢いでこつちに走ってきますすけど」

譲葉がそう言うので奥のほうを見ると、成程確かにものすごい勢いで突っ走ってくる。目が血走ってる。って言うか怒りすぎ。

……あ、一人すっ転んだ。……何でだ?すごく言いたい、言ってもいいか?いいよな?じゃあ言ってみよう。

「ごまあ」

「翔輝いいいい!？」

「あ、悪い、我慢できなかつた」

「翔輝さん、また余計なことを……。」

「ふざけんなよてめえ!」

3人での会話を楽しんで・・・はいないがとりあえず三人で会話して所に盗賊のリーダー的な奴がこっちに声をかけてきた。

「・・・誰？」

「この盗賊団の団長だボケエ！ついでにお前に『ざまあ』とか言われた盗賊団員のリーダーだよ！」

「団長て。せめて頭とかじゃねえの？」

「それと『ついでに』の件はくだりいりません」

「何でさっき散々言われたのにこれ以上言われなきゃならんのだ！？」

「別にスルーすりゃいいだろうが」

「そうさせてもらうよありがとよ！」

「どうでもいい」

「死ね！」

「お前が死ね」

「ふざけるな！お前がもうエンドレスなのでやめましょう」よりもよって俺の番で！」

・・・こいつなんとなく天助に似てんな、や、この顔と似てるとか言ったら天助に失礼かもしれないけど。まあ天助だしいいか。

しかし、この自称団長もものすごい顔してるな・・・。だってさ、ハゲで右目の近くにでっかい傷。・・・うん、まあそこまではいいよ。・・・でもさ？

それに豚鼻はどうよ？

訳分からん、何こいつ？なんなの？獣人？豚人間？それともこっちの世界でも新種？って言うか何で鼻？大体・・・

こっからは翔輝の心の中でのツッコミが長すぎるので要約します

と、「ありえなくて超笑える顔」ということです。ちなみにこの間3秒です by 作者

。 - - 歴戦の勇者みたいな顔して盗賊の頭で豚の鼻？ありえねえ・

「……とりあえずお前ら、何かこいつム力つくから殺れ」
『うおおおおおおお!!!!』

そんな理由で殺されてたまるか、って言うか随分な団結力だな豚鼻団長の部下の方々。
しかも全員同じく豚鼻だし。何ここ、豚鼻パラダイス？どっちかっていうと豚鼻ヘルだな。

「翔輝さん！？何ボーっとしてるんですか!？」
「え？うわっ!？」

やっぱりと言うか何と言うか、脳内でバカにしていたらものすごいスピードで襲い掛かってきた。

「ヤバいっ!」っと思っただその瞬間、俺の視界から盗賊全員が遠ざかった。当の俺はどういうわけかウルのすぐ右側に倒れている。

「……アレ？」
「全く、相変わらず翔輝さんは世話が焼けますね……」

横を見ると、讓葉がヤレヤレといった顔でため息をついている。

「……もしかして、時間止めて俺ここまで運んだのか？」

「ええ、重かったですよ」

「……なっさけね……」

「ホントですよ、次からこんなことがあっても助けませんからね？」
「気をつけます・・・」

うわゝ、屈辱・・・。何がって、守る対象に守られたとこだよ。

しかしやっぱり初めて見たら驚くよな、この能力。あっちの皆さんも「な、何だ今の？」「消えた・・・」とか呆然としてるからな。

「・・・しゃあねえ、とりあえずとつと潰して帰るか」

「その方がよさそうですね」

「翔輝、油断大敵だよ。さっきだつて危なかつたんだから」

「分かつてるよ。譲葉、ウル、とりあえず俺が突っ込むからサポ―トよろしく」

「・・・しょうがないですね、いいですよ。好きにやってください」

「死なないようにね」

「当然」

さっきの汚名挽回だ。初の実戦、やってやるぞ。

「なんだ、やる気が!？」

「いやだから最初に殺してやつからうって言ったじゃねえか」

「いいだろう、返り討ちにしてくれる!」

「勝手にしやがれ」

「翔輝さん、それじゃあ・・・」

「翔輝・・・」

「おう。戦闘・・・」

俺は手に持った刀の柄に手をかけて、腰を低くして構える。譲葉はナイフを逆手に、ウルも半獣人化した手足を地面につけ、戦闘準備に入る。

盗賊団の奴らはさっきと変わらず殺気を出しながら騒いでいるが、

自称団長の顔からはさっきのふざけた表情は消え、真剣な顔になっている。

俺は一度息を吐いて、気持ちを落ち着かせろ。そして……

「……開始だ！」

戦いの火蓋が切って落とされた。

第24章 団長？頭？（後書き）

やっぱりシリアスはかなり難しいですね、思ったとおりに伝えられないって言うか・・・

それと自分で言うのもなんなんですけど、今回文章結構おかしいですね慣れない事するもんじゃないですね・・・

まあこの小説を書きながらコツを掴んで行こうと思いますので、長い目で見てください

第25章 試練1（前書き）

というわけで今回が初の実戦ですね

やはり今まで通りよく分からないような表現があるかもしれません
が、その辺は甘く見てやってください

第25章 試練1

最初に動いたのは豚鼻盗賊団長。部下から巨大な斧を受け取る。数人の団員が必死に運んでいた斧を片手で軽々と運んだのを見ると、相当な怪力のようだ。

「・・・ブタ力」

「ブタ力って何だ!？」

「ブタでバカ力だからブタ力」

「あ、翔輝さんそれうまいですね」

「だろ？」

「・・・二人ともホントに戦う気ある？」

「わあってるよ。こっからは真剣にやるさ、それなりに」

「それなりになって・・・」

「大丈夫です、翔輝さんがそついった時は真剣になりますよ。ほら・・・」

譲葉の言葉通り、翔輝の表情に少しだけ真剣さが現れた。そんな翔輝を見て譲葉は少しだけ微笑む。ウルはウルでなかなか見ることの出来ない翔輝の表情を好奇の目で見つめている。

「・・・かつこいい」

「確かにいつもの顔よりはマシですね」

「手っ敵し・・・」

・・・なんだか？気に会話しているが、お前らもやる気あるのか？そんな感じに二人が会話をしていると、翔輝が目で何かを譲葉に伝えた。それに少し驚いたものの、譲葉は小さく頷いた。

「さて、それじゃあ翔輝さん。やりますか」
「おう、行くぞ。せー・・・の！」

掛け声と共に翔輝と譲葉が走り出す。まずは正面にいる部下Aの腹を刀の柄で力一杯突いて吹き飛ばす。その勢いを保ったまま突進し、今度は鞘の部分を手側に向けた部下Bの腹に叩き込む。

最初はいきなりということで反応できずに棒立ちしていた部下その他だが、二人やられるまでには既に正気に戻って二人に襲い掛かる。

正面から襲い掛かってきた部下Cのコメカミに鞘を思い切りぶつけ、そのまま振り切り右側にいた部下Dの顔面にもついでに鞘を叩き込む。

その隙に後ろから襲い掛かってきた部下Eは譲葉が一瞬足止めし、それに気付いた翔輝が鞘の切っ先部分で部下Eの額を突く。

そんな二人の奮闘に驚きながらも冷静に判断した部下F、G、Hは三方向から囲んで一気に飛び掛る。翔輝はここでようやく抜刀し、左手に持っていた鞘を投げ捨てて能力で刀を持ち、二刀使ってそれらを一掃する。

正面から来た部下Gのわき腹を峰で勢い良く薙ぎ払い吹っ飛ばして右から迫っていた部下Fに当てる。同時に左から迫っていた部下Hも左の刀の腹で側頭部を殴りつけた。

「な、何だ今の!？」

「み、見たことないぞ!？」

「おい、もしかしてあいつら人間じゃないのか!？」

「ば、バカ言ってるじゃねえよ!人間みたいな最強種族が俺達みたいな弱小盗賊団をわざわざ退治しに来るなんてあるわけないだろ！」

「で、でもあいつらそうじゃなかったら何の種族だ!？それに人間以外にあんな技使えるわけないだろ!？」

翔輝の能力を見て部下全員が動揺し始めた。これで翔輝が人間だと

言ったらどうなるのか……。

「ああ、翔輝は人間だよ？ついでに譲葉も」

『……勝てるわけねえええええ！！！逃げるおおおお！！！』

……こうなります。

翔輝と譲葉が人間だと知ったら洞窟にいた盗賊団員のほとんどが逃げ出した。いや、正確には逃げ出そうとした……。

「いでっ！？」

「うがっ！」

「ぎゃあ！」

逃げ出そうとする団員達が瞬間に宙を待った。

翔輝と譲葉も何事か入り口の方を向くと、半獣人化した手足を地面につけて不適に笑っているウルが目に入った。

「僕がいるのも忘れないですよ」

「おお、お疲れウル」

「な、何だ今のは！？」

「い、一瞬で全員吹き飛んだぞ！？」

「待て、アイツ何の獣人だ？」

「犬……？いや、狼……！？」

「お、狼の獣人って、まさかアイツ魔閻レイ！？」

「バカ、んなわけないだろ！魔閻レイつつたらこの辺りじゃ最強の獣人もとい魔物だぞ！？そんな奴が俺達みたいな弱小盗賊団をわざわざ退治しに来るなんてあるわけないだろ！」

たちまち洞窟内に残った団員達もパニックに陥る。最後の奴のセリフなんかデジャブ……。

「ああ、それ僕だよ」

『・・・可能性ゼロおおおお!!!』

・・・うん、やっぱりデジヤブだった。

今度はもう完全に団員全員は戦意喪失状態に陥り、洞窟の奥に逃げ
ていった。

「・・・まさかお前らがそんな大物だったとはな・・・」

「おうよ、びびったか？」

「いや、最初から只者じゃないような気はしていた」

「聞いたか譲葉？俺達ブタ力のお墨付きだよ」

「冗談かましてる場合ですか？」

「いいじゃん、久々にちよつと気合入れて疲れたんだよ」

「今の戦闘たったの5分もかかってないじゃないですか・・・」

「やっぱり翔輝は翔輝だったね・・・」

「・・・だから俺を放って話を進めるなあ！大体ブタ力じゃないと
何度も言ってるだろ！」

「知るか。俺達がブタ力だって言ったらお前はブタ力だ」

「死ねええ!!!」

理不尽な言い様についてキレたのか、巨大な斧を振り回して三人に
襲い掛かる。

さっきの部下達の必死振りを見ると相当な重さのはずなのだが、そ
れを感じさせないほどのスピードで走ってきた。ブタが俊足ってど
ういう事？

そのありえないスピードのせいか、三人は反応が遅れて危うく斧を
直接喰らうところだった。

とは言っても、譲葉もウルもその能力のおかげで簡単に避けられた
ので実際に危なかったのは翔輝だけなのだが。

「ブタのくせに俊足ってありか？」

それさつきも言った。

「ありだ！」

「無しだろ」

「うるさい！」

「逆ギレだ」

「知ったことかああああ！」

翔輝は何が楽しくて挑発しているのかは知らないが、ブタ力はなおもありえないスピードで翔輝を追い回す。

ちなみに譲葉とウルはものすごいスピードで洞窟の入り口付近に避難している。

「死ねええええ！」

「それさつき聞いた。ついでに死なん」

翔輝はそう言うと盗賊団頭に向かって突進する。

盗賊団頭はそれを見て斧を横向きに構え、それを信じられないようなスピードで薙ぎ払う。

「かかったなボケブタ力！」

そう言うと翔輝は刀を自分の進路の目の前に地面に突き刺さった状態で出し、それに踏み台にして大きく跳躍、一気に盗賊団頭の背後に降り立つ。

そのまま盗賊団頭に反撃する暇を与えずに足を払い、転んだところで斧を持っている右手を足で踏みつけ、頭の真横に刀を突き刺す。

「動いたら死ぬぞ」
「・・・そんな気の抜けた声で言われてもな・・・」
「でも分かっただら？」
「・・・まいった、完敗だ」
「ほい、お疲れ様」
「まったく、ある意味屈辱だな・・・」
「で、どうする？盗賊やめるか？やめたら死なねえぞ？」
「・・・分かった、解散しよう」
「物分りが良くて何よりだ」

その後盗賊団はその場で解散され、第一の試練は無事成功に終わった。

死者0名、軽傷者多数の限りなく平和的な結果となった。
ちなみにこの世界で言う警察に連行されたものはほんの数名しかない。結局全員昔盗賊団頭に脅されて入っただけで実際は抜けたかと思っていた人物がほとんどで、結局本心から悪いことをしているものが数名しかいなかったからである。

そして日もすっかり暮れて夜。洞窟で目覚めてご機嫌斜めなミラと共に三人は道を歩いている。

「それにしても、案外あっけなかつたですね」
「って言うかあの盗賊団なんか悪い事でもしたんか？」
「さあ？でも盗賊団って言うくらいなんだから悪い事したんじゃないの？」

「ん・・・でもあのブタ力悪い奴じゃないと思うんだけどな・・・」

」・

「何を根拠にそんなこと言ってるのよ？」

「だってアイツ怪力だぞ？俺が手踏んだくらいなら普通に跳ね除けられただろ」

「・・・確かにそうですねえ。。。じゃあ何でやらなかったんでしよう？」

「そこまで知るか。盗賊やるの疲れたんじゃないの？」

「そんな理由ですかねえ・・・？」

「まあとにかく、第一の試練クリアだ」

「そうですね、とりあえず今はそれでよしとしましょう」

そんな会話をしながらついた家路だった。

第25章 試練1（後書き）

うぐん・・・今回の終わり方いまいちですねえ・・・

って言うか今回更新少し遅れてゴメンなさい。ホントは昨日も更新したかったんですが、遊んでるうちに遅くなってだるくなって止めちゃいました（コラ）

今後こんなことあまりない様に頑張りますのでこれからもよろしく
お願いします

第26話 暇（前書き）

前回は戦闘だったので今回はコメディオンリーです。・・・前回もろくな戦闘じゃなかったって言うツツコミは無しでお願いしますそれから今回から後書きにミニシアターのな何かをお送りしたいと思います。とりあえず本編をどうぞ

第26話 暇

「・・・暇だわ・・・」

皆こんにちは、じゃなくてこんばんわ。ミラよ。暇です。やることがない。

昨日までは食料調達とかコウモリたちの世話とか仕事があったんだけど、昨日もう全部終わっちゃったからやることないのよね・・・。

あ、ちなみにコウモリの世話って言っても野生のコウモリなんだけどね。同じ吸血生物として放っておけないのよ。

しかし毎日こんな感じじゃさすがにつまんないわね。あたしが起きる時って翔輝たちが寝る2時間前とかだから暇で暇でしょうがないわ。

いつもは仕事してるうちに時間が過ぎてくんだけど、今日はもう仕事もないし・・・。

ホント、何しようかしら？

「読書・・・はこの前読み終わった本が最後だし・・・。洗濯物も洗わなきゃいけない食器も無いし・・・。本格的に暇ね」

こないだやつぱりサボって本読まないでちゃんと食料調達行つとけばよかったな。

翔輝と譲葉が来てから二人とも色々やってくれるから洗濯物も食器も溜まって無いみたいだし。

家の掃除は・・・疲れるからヤダ。今度翔輝にでもやらせましようかね。

「・・・こんな時はやつぱりイタズラでもしましょうか」

『暇な時はイタズラしよう』、これ常識。

そこ、「何言ってるの?」みたいな目で見ないの。

「まず譲葉には・・・天井にお化けの絵でも書いとけばいいかな。ウルには頭の横にクモの模型みたいな置きばいいでしょ」

・・・うん、我ながらかなりランク高いんじゃない? 滅茶苦茶ビビリそう。愉快愉快

後は翔輝よね。・・・あ、あたしアイツの弱点知らないわ。じゃあ適当に顔に落書きでもしようかしら。

さて、それじゃあ思い立ったが吉日、早速実行しましょう!

（30分後）

「・・・よし、こんなもんね」

うん、満足満足

まず翔輝には落書き、しようとしたんだけど手元が来るって何が何だか分からなくなったから適当に顔を墨で真っ黒にしといた。

ウルのために枕元には超精巧な大蜘蛛の模型置いといたから、あそこで寝て朝ウルが起きたら素晴らしい悲鳴が聞こえるでしょう。さて、残るは譲葉だけなんだけど・・・。

「困ったわね・・・」

譲葉の弱点はオカルトしか知らないからお化けしかないんだけど、

あたしは、その、絵が苦手で・・・。
だから天井にお化けの絵を書いても多分ゴーストバスーズのお化けをさらにデフォルメしたようなのになっちゃうのよね。さすがに譲葉もそれじゃ驚かないか。
しょうがない、他に方法も思いつかないし・・・。

「お化け狩りにでも行きますかね」

簡単な話だ。絵のお化けが用意できないなら本物を用意すればいい。さすがあたしね
というわけであたしは早速昨日餌を与えたコウモリ数匹を付き従え、マントを羽織って小屋を出る。目指すは譲葉のトラウマの地、ハロインの森。

あそこのお化けはかなりの霊力持つてるから普通の人にも見えるしね。あいつら何匹か捕まえて縛り上げて譲葉が寝てる場所の真上に吊るしとけばいいか。

善は急げ、ってなわけで出発進行！

「・・・さて」

やってきましたハロインの森。この世界で唯一誰でも心霊体験を満喫できる心霊スポット。他のところは霊力の弱い霊ばかりで基本的には見えないから100%霊が見える場所はここしかないのよね。

まあそんなこと今はどうでもいいわけで、早速適当な霊を何人(?)か捕まえて帰るとしましょう。

・・・あれ、でも霊って触れるのかしら?・・・まあいいか、モノ

は試しよね。

って言うかそれを実証しようにもどこにも幽霊が見当たらないんだけど……。

「……あ」

いた、遠くにぼんやりと光ってる何かが見える。この辺りで光る物と言ったら霊くらいしかないはずだから……。

「獲物発見」

足音がしないように浮遊しながら霊に近づき、思いつきり抱きついてみる。すると意外や意外、なんと触ることが出来た。

『のわあああ！？』

「あ、霊って触れるんだ。ラッキー」

『何するんだお前っ！？』

「うわっど……。危ないわね」

抱きつかれた霊は驚いて手を振り回したのであたしは慌てて手を離してちよつと距離をとる。

抱きつく前に確認してなかったけど、今ちゃんと見てみるとどうやらエルフの霊みたいだった。

『なんなんだよ！？』

「いや、ちよつと捕まえようと思って」

『何を？』

「あんたを」

『何で？』

「イタズラに使うため」

『拒否権は？』

「ある」

『じゃあ使わせてもらう』

「ふ〜ん、別に構わないけど。でもいいの？」

『は？』

霊にそう問い掛けてからあたしは黒い塊で形を形成し、いつぞやの漆黒の大鎌を手に持ち、刃の部分を霊の首の裏側に当てる。

「イタズラに協力してくれないなら霊を武器で斬れるかどうかの実験台になってもらいたいんだけど」

『・・・イタズラに協力の方向で』

「そう？助かるわ〜」

『・・・完全に脅迫・・・』

「何か言った？」

『言っていないです！』

「ならいいわ。さて、次行きましようか」

こんな方法であたしは結局2時間かけて約5匹の霊を捕獲した。ハロウィンが終わっちゃったからもうあんまり霊もいなくなっちゃったのかな？

まあ何はともあれ5匹捕まえたので急いで小屋に戻る。だってもう空が少しだけ明るくなってるんだもん。

『あの、俺達あんまり日の光は得意じゃないんだけど・・・』

「何、消えちゃうわけ？」

『いや、そういうわけじゃないんだけど・・・』

「じゃあいいわ。とっとと行くわよ」

『・・・鬼畜』

「なんか言った？」

『いいえ何も!』
「よろしい」

ホントはなんて言ったかばつちり聞こえてたけどもう時間がないからスルーすることにした。

小屋に戻ったら急いで全員縛り上げ、倉庫の天井から吊るして準備完了した。ついでにあたしも眠くなってきたから寝ましょうか。最後にもう一回イタズラ全集をチェックして眠りにつく。おやすみ。

そして朝。

「うにいいあああああああ!!!!!」

・・・どうも、翔輝だ。ついでに言う朝の安眠を悲鳴のような猫の鳴き声で妨害されてイラツと来た翔輝だ。あれ、猫の鳴き声のよくな悲鳴か? まあどうでも言いや、寝ぼけてるってことで。

「んだよ、うるせえな・・・」

「しょ、翔輝さあああああつはははははははあああああ!?!」

「・・・それは泣いているのか笑っているのかどっちだ?」

「あつはつはつはつはあああああ!?!」

「どっちかにしろ、朝から忙しい奴だな。どうしたよいったい?」

「う、上上ええええ!!」

「上?」

譲葉に言われたままに上を見ると、なんだかよく分からん青白い・・・エルフ? が縄で縛られ天井から吊り下げられていた。

『ど、どうも』
「あ、どうも。朝からお勤めご苦労さんです」
『いえいえ、お互い様です』
「それじゃ俺は朝の支度してくるんで」
『あ、はい』

うん、悪い人じゃないからどうでもいいか。何で吊り下げられてるのかはものっそい疑問だけど。

「いいいいいい×やあああああ！！！！！！」

・・・ホントに朝から騒がしい連中だ。

「ウル、朝からどうした？幽霊が天井からぶら下がってたか？」
「な、何それ！？ちぢち違っ、とにかく来てえええええええ！！！」

・・・めんどくさいがしょうがない。ちょっと行ってやるか。

「・・・ウル、どうしたんだよ？」
「しょ、翔輝いいいいいい！！！！蜘蛛があああっははははははははは
は！！！！！！」
「譲葉と同じようなリアクションするな。何だ、俺の顔がどうかしたか？」
「ど、どうかしたけどそれより蜘蛛を何とかして！！！！！！」
「どうかしたんかい。で、蜘蛛？」

ウルが9割以上泣きながら指差したベッドの上には、成程確かに巨大な蜘蛛がいた。・・・ひっくり返って。

「・・・あれどう見てもぬいぐるみか何かだろ？」

「何でもいいけど蜘蛛はダメなの！何とかして！」

「ヤダ」

「翔輝いいいいいい！！！！」

や、だって俺も蜘蛛は苦手だし。大体なんで俺がわざわざ蜘蛛退治をせにゃならん。朝から悲鳴で起こされて機嫌が悪いんだ俺は。そして何よりめんどくさい。

ちなみに譲葉のほうも同じ理由で助けない。俺は二人に心の中で棒読みで謝ってから洗面所に行く。洗面所といつても外にある桶に水を溜めるだけでできるものだが。あれ、じゃあ洗面所じゃねえじゃん。

というわけで水を溜め、鏡がないので代わりに溜まった水を覗き込んで反射を利用して自分の顔を見てみる。

「・・・どういうわけか随分黒くないか？俺の顔。ミラか」

うん、まあこんなしょうもないことをするのはあいつしかいないか。って言うかこの家でビビッてないのミラと俺だけだし。

って言うかぶっちゃけこんなイタズラなんともないわ、つかアイツ何歳だよ？

という感じで数回の自問自答の後、俺はさっさと顔を洗って墨を落とし、ほっとくわけにも行かないだろうということで譲葉とウルに手を貸してやった。

しばらくして落ち着いた二人がミラに激怒し仕返しを企んでいたが、俺はぶっちゃけどうでもいいもといめんどくさいので外に出て昼寝をしていた。

第26話 暇（後書き）

「譲葉って随分礼儀正しいよね？親が厳しかったの？」

「いえ、逆です」

「逆？」

「親が失礼この上ない人たちだったのでフォローばかりしてたらいつの間にかこういう性格になっちゃってたんです」

「・・・苦労したんだね」

第27章 やり場の無いこの怒り（前書き）

更新遅れてすみません、つい数時間前まで旅行に行っていて・・・
その分今回は少し長めなのでご勘弁を・・・^^;

第27章 やり場の無いこの怒り

譲葉とウルの二人が悲鳴を上げた日の午後。

怒りで我を忘れそうになっていた二人をなだめつつ、蜘蛛の模型を粉々にして霊を全て森へ帰した。そういえばその時いたエルフの霊とは友達になったぞ。・・・あれ？やべ、名前忘れた。・・・まあいつか。

で、上記をやってるうちに結構時間が経ってしまったので昼食にし、食器類を洗って俺が小屋の中に戻ったらもうそんな時間だった、という感じた。

ちなみにこの間会話は一切無し。いや、今までで一番気まずい午前中だった。ミラの奴、クリームつけてやる。まあ結論を言つと・・・暇だ。

「・・・さて、それじゃあやる事も全て済んだことですし」

何時間も続いた沈黙を破り、譲葉が口を開き・・・。

「ウルさんを血祭りに上げててもよろしいでしょうか？」

「ちよっ・・・！」

ナイフを握りウルに笑顔を向けて物騒この上ない言葉を言い放った。

「ちよっと待ってよ！」

「なんでしよう？あまり待てませんよ、かなり我慢の限界に近いので」

「僕を殺そうとしないでよ！イタズラを仕掛けたのはミラであって僕じゃないよ!？」

「知りませんよそんなこと。結局は同じ体を使ってるので同一人物

です。つまり、ウルさんを血祭りに上げるといっなのはミラさんを血祭りに上げるのと同じ義です」

「いやいやいや、確かにそうかもしれないけど！せめて夜まで待つてくれない！？そしたらミラに変わって不死身になるから！」

「先ほど言いましたよ？『かなり我慢の限界に近い』って」

「と、とりあえずまずはその笑顔で話すのやめようよ！？怖すぎるんだけど！」

「何言ってるんですか、笑顔が怖いなんてあるわけないじゃないですか」

「怖いんだって！譲葉の今の笑顔は多分閻魔大王も震え上がるって！」

「詩人ですねえ」

「そうか？普通の例えだと思っが」

「って言うか閻魔大王って仏教じゃねえの？この世界に仏教あるのか？いや、閻魔大王が仏教かどうかも知らねえけど。」

「と、とにかく待つてって！って言うか僕も被害者だし！」

「じゃあ私のこのやりようのない怒りはどうするんですか！？」

「僕だっでどうしようもない怒りで一杯だよ！自分に復讐できるわけないでしょ！？」

「今はそれはどうでもいいんです！私はとりあえずこのイライラを何とかして発散したいんです！」

「それは僕だっで同じだっで！」

「だから今はそんなことどうでもいいんですっでば！」

「それは酷くない！？？」

「酷くありません！」

「酷いよ！」

「ひ・ど・く・な・い！」

「酷いっで！」

「酷くないって言ってるでしょ!？」

「譲葉、敬語敬語」

「!し、失礼しました!取り乱しました・・・」

「な、何か譲葉が敬語使わないのって新鮮だね」

「こいつが敬語忘れるのは死ぬほど怖がった時と本気の口論の時だけな」

「こ、怖がったときは敬語忘れませんよ!」

「まあその辺はハロウインの時の譲葉の様子をミラに聞けば分かるだろ」

「ミラさんの名前を今は出さないでください!」「ミラの名前は今は出さないで!」

「・・・御意」

こいつら二人ともミラの名前に敏感になりすぎ。って言うかこんな時に八モらんでもよろしい。

「しかし、本格的にどうしましょうかこの怒り」

「我慢すれば?」

「出来ると思います?」

「ぜってー無理」

「分かってらっしゃいますね」

「僕は何とか抑えてるけどこのままじゃ譲葉が僕に八つ当たりするから何とかして欲しい」

「ちょ、失礼ですね!私がいっ八つ当たりなんてしましたか!？」

「この回が始まって約五行で」

「翔輝さん、そういう発言はNGです」

「じゃあそういう発言につながるような質問をするな。素直に八つ当たりを認めてりゃ良かったんだよ」

「・・・なんとなく理不尽じゃありません?」

「全然?超筋が通ってるだろ」

「何か釈然としないんですよ・・・」
「疑心暗鬼か？」
「いやぜんぜん違います」
「・・・二人ともさっきからどんな会話してるの？」
「こんな会話」
「うんそれは知ってる」
「じゃあ聞くな」
「だからそうじゃなくてえ！」

・・・うん、やっぱり暇な時はこいつらで遊ぶに限るな。

「・・・今物凄い失礼なこと考えなかった？」
「精神科行くか？」
「それは酷くない？」
「そうだな」
「・・・そこは否定しようよ？」
「何だ、嘘ついてほしいのか？」
「いや、それは嫌だけど・・・」
「翔輝さん、私達で遊ばないでください」
「バレた？」
「バレバレです」
「え〜！？翔輝遊んでたの！？」
「結構」
「酷いよ〜！」
「お前今日酷いしか言っていないな」
「だって皆酷いんだもん！」
「あゝ暇だな〜」
「スルー！？」
「じゃあトランプでもして遊びます？」
「え、あるの？」

「翔輝さんならポケットの中に入ってるんじゃないですか？」

「よく分かったな」

「伊達に今まで幼馴染やってきたわけじゃないですからね」

「その割にはいつまでたつても敬語は抜けないのな」

「これが私なりの礼儀なんです」

「あつそ、どうでもいいけど」

「なら聞かないでくださいよ・・・」

そんな呟きを華麗に聞き流し制服のポケットからトランプを取り出す。

ちなみに俺達はこっちに着てからずっと制服姿ですごしている。もちろん洗濯はしているが、基本的にはずっと制服だ。

俺達の高校の制服はかなりオーソドックス。男子は白いシャツに紺の長ズボン、そして赤いネクタイ。シャツの胸ポケットには高校のシンボルの刺繍（？）が施されている。

女子は水色が基準のセーラー服。特に特徴もない退屈な制服だ。強いて言うなれば左の裾に男子用の制服の胸ポケットにあるものと同じ刺繍があると言うことか。

それから皆さんお察しの通りこれらは夏服で、冬服は男子も女子も紺色のブレザーに決まっている。ちなみに女子は基本的には首はリボン、下はスカートと決められているが、俺達の高校はそれらをズボンとネクタイに変えるのを許可している。まあ譲葉は規定通りスカートにリボンをしているのでどうでもいいのだが。

「僕はやるよ！」

「私も参加させてもらいます」

「そんなら当然俺も」

「何やりますか？」

「テキサスホールデム」

「って何でしたっけ？」

「ポーカーだよ。アメリカのカジノではこっちの方が主流だな」

「・・・なんで翔輝がそんなこと知ってるの？」

「従兄がラスベガスのカジノのディーラーだから」

「え、そうなんですか！？」

「らすべがす？」

「ええ。別名遊びの街と呼ばれ、ポーカー、スロット、ルーレットなど様々なゲームを楽しめるカジノが多数存在し、おそらく世界一ギャンブルが盛んな町です。そのディーラーと言う事はかなりの実力者ですね」

「ディーラーに実力も何もあるの？」

「ありますよ。カジノだつて最終的には勝たなきゃ運営側に儲けがないんですから、それなりにお客さんの手札を操作できないといけませんからね。でもイカサマがばれたら訴えられる可能性もあるので絶対にばれないようにイカサマしないといけないのでかなりのプレッシャーがかかります。しかもラスベガスなんてギャンブルの聖地でディーラーをやってるんですから、かなりすごいことです」

「・・・とにかく翔輝の従兄がすごいランプ上手だつて事は分かった」

「要約するとそうなりますね」

「説明終わったか？それじゃ始めるぞ」

相変わらず譲葉の説明は長いな、途中一瞬眠くなつちまった・・・。

「それでテキサスホールデムのルール説明してもらえませんか？」

「めんどくさい」

「じゃあ遊べないんですけど・・・」

「・・・じゃあねえな、テキサスホールデムってのは、

各プレイヤーに2枚のカードが裏向きで配られて、ゲーム開始となる。この2枚のカードを「ホールカード」あるいは「ポケットカー

ド」と呼ぶ。ゲームにおいてこの2枚だけが、プレイヤーが個別に渡されるカードであり、これはショーダウンまで見せる必要のないカードである。

各プレイヤーにカードを配り終えたら、ベットラウンドが開始する。このラウンドは「プリフロップ（フロップが開く前）」と呼ばれる。賭けはビッグブラインドの左隣から、時計回りに行う。ただし、ブラインドがない場合は、ディーラーボタンの左隣から行う。

プリフロップでの賭けが終わった段階で、2名以上プレイヤーが残っている場合はディーラーは3枚のカードを開く。フロップは、表向きに3枚のカードをテーブルに出す。これは全てのプレイヤーに共通のカードである。この先の賭けは、全てカードが配られた時点で、ディーラー・ボタンの左隣のプレイヤーから時計回りに行われる。

フロップのベットラウンドが終わると、ディーラーは更に1枚の共通カードを開く。このカードをターン（またはフォース・ストリート）と呼ぶ。

同様に、ターンにおけるベットラウンドが終了すると、ディーラーは最後の1枚となる共通カードを開く。このカードをリバー（またはファイフス・ストリート）と呼ぶ。

リバーにおける賭けが終了した時点で、残っているプレイヤーが2名以上いる場合、勝者を決めるためにショーダウンを行う。

各カードが出される際に、カードに印が付けられている可能性などを考慮して、見えている一番上のカードは配る前に伏せたまま場に放棄して利用しない。これをバーン・カードと呼ぶ。

つて感じのゲームだな。あ、ちなみに今の説明全部 Wikipedia
ia からコピペしただけだからな。作者が」

「・・・暇な方だけ読んでください。あ、あと翔輝さんそういう発言は控えてくださいって何度言えば分かるんですか？」

「ぼ、僕はこれ聞いても（読んでても）全然わかんない・・・」

「大事なのは慣れた、慣れ。さて、始めるぞ」

と言う前途多難な状況で始まったゲームであったが、何度かやるうちに譲葉もウルモルールや役を覚え、ちゃんとしたゲームが出来るようになってきた。

あ、一応言っとくけど俺達何にも賭けないでやってるからな、普通のチップも。そんなもんが都合よくあるわけ無いし、第一レイズとか何とかめんどくさくてやってられないか。

ついでに言っとくとチップとか無いならこのゲームやんねえほうがいいぞ。バカみたいにつまらない。俺達がやってるのはほら、他にやること無いし。

と、二人ともそろそろ慣れたみたいだし、じゃあそろそろいいか。

「翔輝さん、どうします？」

「どうするもなにも無いだろ？」

そりゃ何もかけてないんだから当たり前だろ。

今テーブルの上に出てるカードは4枚。ハートの10、スペードの9、クラブ（クローバー）の10、そしてハートのJ。10のワンペアがあるだけだ。

俺は山札の一番上にあるカードをめくり、その4枚の横に置く。カードはジョーカーだった。・・・よし、予定通り。

「ジョーカーってなんだっけ？」

「何でも使えるんだよ」
「便利だね〜。・・・あ、やた！」

反応からしてかなりいい役が揃ったみたいだが・・・無駄だな。

「よ〜し、それじゃオープン」

俺の掛け声（？）で俺を含めた三人が2枚の手札を見せる。

譲葉：ハートの9とハートのA、つまりフラッシュだ。

ウル：スペードのQにクラブの2、なのでストレート。ちなみにこの時点で譲葉に負けているので、ウルは「そんなにやあああああ！！」とか言つて悶えている。

翔輝（俺）：スペードの10とダイヤの10。ジョーカーを入れて10のファイブ・オブ・ア・カインド（ファイブカードのアメリカでの呼び方）

「はい俺勝利」

「ま、まさか最強の役が出るとは思いませんでした」

「うう、僕ビリだよ〜・・・」

ん、まあ俺がディーラーの時点で俺の勝ちは決定してんだけどな。

その後も引き続きゲームを続けたが、結果は俺の全勝。譲葉とウルもそれなりにいい役が作れていたが、紙一重で俺が勝利し続けた。

「翔輝、ずるしてるでしょ？」

「ん？してるけど」

「あつさり肯定！？」

「だからお前は俺に嘘ついてほしいのか？」

「翔輝さん、ずるはダメですよ・・・。従兄の方に習ったんですか？」

「そ」

「ずるいですよ」

「従兄の口癖教えてやるよ。『ばれなきゃイカサマじゃないんだよ』」

「

「それは違うでしょう?」

「そうかもな。だけど俺の中では真実だからそれでよし」

「翔輝汚いよ〜! 正々堂々勝負しようよ〜!」

「何で確実に勝てる方法があるのにわざわざ勝てないかもしれない方法取るんだよ? んなことするわけ無いだろ」

「む〜! 翔輝のバカ!」

「はいはい、そうですね」

「翔輝さん、何かを賭けてる訳じゃないんですからいいじゃないですか。このままだとせっかく遊んでるのにつまらなくなりますよ?」

「・・・まあそれもそうか。悪かったな、遊びすぎた。これで終わりにするよ。ほら譲葉、お前ディーラー頼む」

「素直で大変よろしいです」

その後拗ねたウルを何とかもう一度ゲームをするように促し、数時間トランプを続けた結果、イカサマ無しでも俺がほとんど勝ってしまった。

事実を事実として受け止めることが出来る譲葉は良かった。ただ純粹(単純バカ?)なウルは半分発狂していたがイカサマしていないのだから文句も言えず、結局最初に抱えていたイライラを倍増させるだけに終わった。

いや〜、めでたしめでたし(?)。

第27章 やり場の無いこの怒り（後書き）

「讓葉、私が寝たらあとはよろしくね」

「はい、お任せください。ミラさんが起きたら血祭りに上げます
やるなら小屋の外でやれよ、汚れるから」

「・・・翔輝もう完全に主婦だね」

「『主婦』じゃない、『主夫』だ。・・・いや、違うけど」

「だって掃除洗濯料理、この三つが出来て主夫じゃないって・・・
「じゃあ俺もうそれやめるわ」

「ちよ、それは困るよ！掃除洗濯はともかく、讓葉が料理できるわけ無いって!!」

「しまった、そうだったな・・・」

「・・・お二人方から先に血祭りに上げましょうか」

「えっ・・・!?!?ちよ、お前、やめえええええ!!!!」

「あ、や、讓葉、やめて、おねが、あ、いやああああ!!!!!!」

・・・どうなったかはご想像にお任せします。

第28話 復讐(前書き)

イタズラ編(?) 最終話です

結構いつも通り(3000字ほど)の長さです。そういえば最近長
かったり短かったりであまり安定してませんでしたね・・・

第28話 復讐

「それじゃ譲葉、あとはよろしくね」

「お任せください、必ずウルさんの仇を取ります」

譲葉です。夜です。いよいよミラさんに復讐するです。・・・あれ、これ文法おかしいですかね？

とまあそんな事は置いてですね、今まさにウルさんが寝てミラさんが目覚めようとしているところです。ウルさんはベッドの上に横たわり、私は彼女の手を握り締める。その光景はなんとなく死んでいく仲間に復讐を誓う主人公のようです。言ってる意味分かりますかね？

「バカバカしい・・・」

「翔輝さんは黙ってください。って言うか翔輝さんも被害者ですよ？復讐しなくていいんですか？」

「めんどいからパス」

「そう言うと思いました」

ホントに翔輝さんはダメですね、色々。こんなにモチベーション低くてホントに元の世界に帰れるんでしょうか？正直不安です。

「じゃあ僕は寝るから。僕の方まで頑張ってね」

「もちろんです」

その言葉を最期に、ウルさんは静かに息を引き取った・・・わけではなく眠りに落ちました。

さて、ではここから私達の反撃開始です・・・！

「・・・で、どうやって仕返す気だ？」

「全く考えてません」

「オイ」

「いいんです、即興で考えますから」

「例えば？今ここで考えてみ」

「・・・起きた瞬間ナイフで胸を一突き、とかどうでしょう？」

「お前の発想はいちいち残酷でグロテスクなんだな。そういうの苦手なくせして」

「そこは今はスルーでお願いします。それよりこれはいかがですか？」

「無理じゃね？」

「どうしてですか？」

「お前スプラッタとか大丈夫なのか？って言うか無理だろ？」

「・・・翔輝さんをお願いって言うのは「却下だ」何ですか！？」

「めんどくさい」

「そればかりじゃないですかさつきから！」

「当たり前だろ、それがあある意味俺の信念だ」

「めんどくさいが信念って嫌過ぎませんか？どれだけ何でもめんどくさいんです？」

「ものすく」

「それじゃあもういつその事死んでしまえばいいんじゃないですか？」

「久々に出たな毒舌」

「あ、じゃあこれで精神的にダメにするのはどうでしょうか？」

「多分一番簡単に復讐できる方法だと思うが」

「じゃあそうしましょう。あ、でもどうしましょうか・・・」

「もう勝手にしてくれ。俺は寝てる」

翔輝さんは欠伸びながら部屋を出て行った。

出て行くの私がミラさんに勝利した後でもいいんじゃないですかね

？そんなに私の勇姿（？）を見たくないんですかね？

「ふああああ・・・あ・・・」

と、そうこうしている内にミラさんが目覚めましたね。

うん・・・やっぱりこの時間にベッドの上で起きて欠伸をしているのを見るのは新鮮ですね。

「あ、譲葉おはよう」

「・・・」

「・・・あの、譲葉？」

「・・・」

「・・・なんで無言でこっちを眩しいくらいの笑顔で見てるの？」

「・・・」

「・・・ちよ、譲葉、怖いんだけど・・・」

「・・・」

「ねえ、何か話してよ！ちょっと！」

「何か？」

「・・・ど、どうしたの？」

「いえ、別に何も」

「そ、そう？じゃあ何でそんな清々しい笑顔を浮かべてるわけ？」

「いえ、別に何も」

「・・・ひよつとしてイタズラの事怒ってる？」

「はい？何のことですか？もしかして翔輝さんのあのイタズラの事ですか？」

「へ？翔輝の？」

「ああそういえばミラさんは知らないんですけど。今日の朝起きたら天井から幽霊が吊るされていたんですよ。酷いと思いませんか？」

「え？あ、ああ、そうね・・・」

「?どうかしましたか?」

「あ、ううん、なんでもないんだけど・・・」

「そうですか。あ、そういえば翔輝さんったらウルさんのベッドの横にもすぐリアルな蜘蛛の模型を置いてたんですよ。しかもかなり大型の。まったく、翔輝さんのイタズラにも困ったものですね」

「・・・うん、そうだね」

「あれ、どうしました?元気ないですね」

「・・・ううん、なんでもない」

「しかし、翔輝さんには何か制裁を考えないといけませんね」

「俺がどうしたって?」

「あ、翔輝」

「おうミラ、おはよう」

「こんばんはでしょ?」

「細かい事は気にすんな」

ちょうどいいタイミングで翔輝さんが部屋に入ってきた。

って言うかさつき寝るとか言ってますでしたっけ?まあこっちとしては好都合ですけど。

「翔輝さん、何でイタズラなんてしようも無い真似したんですか?」

「は?何のことだ?」

「だから、壺を天井から吊るしたりウルさんの枕元に蜘蛛の模型置いたりしたのですよ」

「?何だそれ、俺じゃねえぞ」

翔輝さん、ちゃんと私のアイコンタクト理解してくれましたね。

あ、さつき翔輝さんに目で言ったんですよ。『ミラさんを嵌めるので、空気を読んで会話してください』って

「え、翔輝さんじゃないんですか?」

「俺がわざわざなんなめんどこさい事するわけねえだろ？第一俺の顔も真つ黒だったろ」

「・・・そう言われてみればそうですねえ。特に最初の」

「普通根拠は後者じゃね？」

「それにしても、翔輝さんじゃなかったらいつたい誰が・・・？」

「無視かよこの野郎」

「野郎じゃありません」

こんな会話をしながらもミラさんの様子を伺う。案の定、私が『いつたい誰が・・・？』と言った時点でミラさんの体がビクツと震えた。

ん、いい感じに追い詰めてますね

「ミラさん、心当たりありません？」

「え！？あ、いや、私は・・・」

「そんなわけありませんよね　まあでも犯人を見つけたら血祭りに上げないといけませんね」

「う、うん、そうだね・・・」

「おいミラ、顔色悪いぞ？」

「そ、そんなこと無いですよ！？」

「動揺し過ぎだ、何で敬語？」

「どうしたんですか？汗ビツシヨリですよ？」

「ななな何でもないよ！？」

「まあそれは置いといて、イタズラの加害者にはどんな制裁を加えますでしょうか？」

「べ、別に制裁とかはいいいんじゃない？」

「いえ、私の気がすみません。まず血祭りは間違いないですね」

「・・・」

「他には・・・時間止めて座る直前に椅子を引き抜いたり、その人の食べる料理にだけ唐辛子入れたり・・・」

「ゴメンなさああああいいいいいいいい！！！！！！」

はい、と言うわけで私の勝ちです。まあ精神的にはボロボロにして
ませんが、これはこれでいいですかね。

その後私は翔輝さんに礼を言い、私はそれから3時間ほどミラさん
に説教を続けました。

その一部が です。

「大体人の嫌がる事をわざわざ使用なんて最低です！第一そういう
事をするなんて意味が分かりません！そんなことをして楽しいんで
すか！？」

「え、うん、まあ・・・」

「聞いてないです！」

「今聞いたじゃないの！？」

「反論する気ですか！？」

「あああああごめんなさいいいいい！！！！！！」

まあさすがにそれが日が変わろうかという時間まで続く！翔輝さん
から怒られたので、明日に持ち越しになってしまいました。

ああ、あくまで持ち越しですよ？明日の夜引き続きこの時間までや
りますよ

さて、少しはスッキリしたのでそろそろ寝ましょうかね？それでは
私はこれで。

「翔輝さん、おやすみなさい」

「・・・」

・・・寝てますね。レディースファーストはどこに行ったんでしょ
うか？

つて、なんとなく意味違いますかね？まあいいでしょう。それでは

今度こそお休みなさい

第28話 復讐（後書き）

え、書く事が無いです

「いきなりぶつちやけんじゃねえよ」

「さすが作者ですね」

やかあしい

「まあいいや、書くこと無いなら帰してくれ」

「今回ばかりは翔輝さんに同意です」

ん、俺はいいんだけどこれは読者の皆様の的にありなのか？

「無しでも帰る。それじゃ」

「右に同じく。それでは」

あ、ちよ、待つて・・・！・・・ホントに行きやがった・・・。ゴメンなさい、二人とも帰っちゃいました。それじゃまた次回、よろしく願います・・・。

第29話 学校（前書き）

この回からちょっと真剣にジャンルチェンジを考え始めようと思います……

どうしましょう、このままファンタジーで行くべきか、それともコメディにするべきか……。皆さんどう思います？（人任せ）

あ、ちなみに今回短いですがご了承ください

第29話 学校

『・・・目覚めよ』

「やだ」

『・・・え、ちよ・・・え？ゴメン、目覚めて？』

「やだ」

『・・・目覚めてくださいお願いします』

「やだ」

『どうしたら目覚めてくれるのよ!?!』

「・・・目覚めるも何も今お昼じゃないですか」

『・・・今何時?』

「ちようど12時半だね」

『・・・皆、こんにちは』

「急に普通に戻ってんじゃねえよ」

大体普通に飯食ってるの見て『目覚めよ』とか言うか?あ、翔輝だぞ。

「で、何の用だ?」

『試練を与えに来たんだよ』

「よし、帰ってくれ」

「ちよ、翔輝さん!?!」

「翔輝、何言ってるの!?!帰るんじゃないの!?!」

「だってぶっちゃけめんどくさいし」

「ダメです!マリーさん、この人は無視してその試練とやらを教えてください」

『うん、まあ翔輝ならそう言うと思って覚悟はしてたから特になんとも無いしね。え〜とね、今回の試練は・・・何だっけ?』

「・・・」

「……」

「……」

『じよ、冗談よ冗談！ちょっと待ってて、え〜っと……あ、そう
だそうだ。今回の試練って言うのは、二人に学校に行ってもらっ
と』

「……は？」

「……へ？」

「ガツコウ！？僕も行けるの！？」

『うん、いいよ』

「ちよ、待て待て待て！」

『何？』

「まず学校無いんじゃないのか！？」

「いや、って言うかそれ以前にそれ試練ですかね？」

『学校はあるよ？でもレイがこんな山奥に住んでるから存在知らな
いだけ』

「……そう言うオチ？」

『そういうオチ。で、二人とも元の世界に帰っても勉強できなきゃ
困るでしょ？だから学校に通わせようと思ってね』

余計な事しやがって……。

せつかく鬱陶しい学校から抜け出せたってのにわざわざ学校に通え
なんて……。

「まあ私は行きたいですけど」

「僕も！絶対行くよ！」

「でもさあ、これ学校行つちまったらこの小説のジャンル変わるん
じゃね？」

「だからそう言う発言は控えてくださいって」

『大丈夫だよ、学校には通いながら試練こなしてもらっから』

「いや、会話として成立してねえし」

「でも翔輝さん、3対1ですよ?」

「そうだよ、観念して行こう?」

「・・・はあ、しゃあねえな・・・。どうなっても知らんぞ作者」

「いやだからそう言う発言はダメですって。でもまあ何はともあれ翔輝さんも了承したことですし、早速行ってみましようか?」

『何言ってるの?今日は土曜日だよ?』

「時間間違えてたマリーが言うこと?」

『と、とにかく今日は無いから!』

「まあいいですけど。制服とかは大丈夫ですか?」

『大丈夫だよ、こっちは制服とか無いし』

「あ、そうなんですか?じゃあ筆記用具とかは・・・」

俺そっちのけでどんどん会話を繰り広げていく三人。や、別に寂しいとかそう言う事じゃないんだが、なんとなく除け者はいいい気はせんで。

しっかし学校か・・・。別に行くのが嫌って訳じゃないからいいけどさ。どうせサボったり寝たりするだけだし。

ただ問題はそれで試験が出来るのかって話だよ。確かに表面上はどうでもいいって感じだけどさ、俺だってそれなりに帰りたいわけよ。それなのに学校なんて行ったら試験なんて行けるわけ無いだろ?だからそう言う理由であんまり学校行きたくないんだよなあ・・・。あ、でも勘違いすんなよ?最大の理由は勉強が嫌だからだからな。

「とりあえず分かりました。次の月曜日から学校に登校すればいいんですね?場所はどこにあるんですか?」

『学校は最初に二人が来たところにあるよ。テリアの町だね』

「ああ、あの町ですか。え、って事は毎日ここから登校するんですか?」

『そう・・・なるかな?』

「遠くありません?」

『何だつたら町の中に引越す?』

「いえ、それをするとウルさんが寂しくて死んでしまうのでいいですけど……」

「だ、誰が死ぬのよそんな理由で!？」

『ウル?レイの事?』

今頃かよ?

「ああ、そういえばマリーさんはまだ知りませんでしたね。朝と夜、どちらもレイさんはややこしいので朝のレイさんはウルさん、夜のレイさんはミラさんと呼ぶことにしたんです」

『へへ、じゃあ今のレイはウルなんだ』

「そうなります」

「そんな事はどうでもいいのよ!何で僕がそんな理由で死ぬと思うのよ!？」

「イメージです」

「そんな不快なイメージヤダよ!」

「だってそう言うイメージありますよ?ねえ」

『それには全面的に同意』

「何でええええ!？」

いや、だって明らかにそんな感じじゃん。何つの?ハムスターみたいなの?

「まあそれはいいや。それより明後日から学校だ!あへ、楽しみ!」

「小学校に初めて入学する子供みたいだな」

「確かに……」

『じゃあ私は入学手続き済ませてくるからあとよろしく。じゃね』

・・・何で神が高校への入学手続きしに行くんだ？まあいいか、俺達がやらなくていいわけだし。

「さて、じゃあ買い物に行きましようか」

「買い物？」

「ええ、筆記用具等を揃えに町に行つてこいと言われました」

「金は？」

「人間だつて言えばただで貰えるそうですが、さすがにそれは気が引けるのでウルさんにいただく事になってます」

「ちょ！？聞いてないよそんなの！？」

「まあまあ、いいじゃないですか」

「僕のお金だよ！？」

「まあいいじゃん。そう言うことならとりあえず行こうぜ」

「僕はまだ納得してなあああいいいいいいい！」

後ろで叫んでいるウルは無視して、俺と譲葉は久々にテリアの町へ続く道を歩き始めた。

しっかし、まさかこつちの世界に来てまで学校か……。まあサボるのは楽しみだな。ちいとばかし楽しみかもな。

第29話 学校（後書き）

「・・・これはどうなんだ？」

これ、と言つと？」

「ファンタジー小説に学校って」

いいんじゃないの？そう言う小説もチヨコチヨコあるし

「でもこの小説ってあらずじにも『冒険』って字が入ってるんですが・・・」

それなんだよね、問題は

「オイ」

まあ、その点は大丈夫だ。一応解決策は考えてるから。まあそれが読者様敵にありかどうかは分かりませんが・・・

「あつそ。まあやるだけやってみ」

了解。それでは皆さん、さいなら」

「あらら、作者ったら大事な連絡事項も忘れてあつち言っちゃいましたね。え〜と、この度はPVアクセス30000アクセス突破、ありがとうございます！これからもこんなバカみたいなノリで突っ走ると思いますが、それでもよろしい方はどうぞよろしく」

第30話 レッツ買い物 〈前編〉 (前書き)

普通に書いてたらいつの間にか結構な長さになってしまいました。しかもそれでも収まりきらず前編後編で分けます。もしかしたら中編もあるかも・・・

まあ毎回言ってますが、いいことなので問題なし(ですよね?)

あ、ちなみに今回新キャラです。どうぞお楽しみに

第30話 レッツ買い物 〈前編〉

「さて、着きましたね」

「明後日から毎日ここまで歩いてくるのか・・・」

「大した距離じゃないよ、男の子なんだから弱音吐かないの」

「や、ただ単にめんどくさいだけ」

「大概にしてください。さ、まずは文房具を買いに行きましょう」

俺は「へいへい」とやる気0を通り越してマイナスの状態で返事をする。あ、「俺」「翔輝」だからな。

今現在俺たち三人はテリアが町長を務める、俺と譲葉がこの世界で始めて訪れた町に来ている。とは言っても、まだこの世界でこの町しか知らないが。

あの時は頭がぼぼまったく機能していなかったけど、改めて、今度は落ち着いてみると、結構新しい発見があった。

まず、人口(?)。人間・・・はもちろんだが、魔物に比べてエルフや獣人が圧倒的に多い。

さらに補足すると、獣人の中でも猫や犬の獣人が大半を占めている。ちなみにさつき俺達の横を像の獣人が通り過ぎた時、地面が揺れた。それから意外と人間界の物もこっちに伝わってるみたいだ。今も俺の目の前を犬の獣人が自転車で跨って颯爽と通り過ぎて行った。

・・・って言うかあんた絶対普通に走ったほうが速いだろ?何でわざわざ自転車乗ってた?

あ、一応俺なりの種族の見分け方を教えとくな。まず耳が尖ってたからエルフ、体の一部でも獣っぽかったら獣人、そのどちらも無かったら魔物な。

ん?大雑把?知るか、大体こんなもんでいいんだよ、結構当たってるはずだし。や、根拠は無いけどな。

「で、文房具屋ってどこだ？」

「ウルさん、どこにあるんですか？」

「え、知らないよ？」

「ここウルさんの世界ですよ？しかも近くの町」

「だって僕ここ滅多に來ないし。って言うかブンボウグって何？」

「あ、そこから説明しなきゃダメでしたか？」

「文房具知らんて世間知らずにも程があるだろ」

「だって必要ないもん。分からないならテリアに聞いてみようよ」

「テリアさんの家はご存知なんですか？」

「知ってるよ。多分あっち」

「ちよい待ち。『確か』じゃなくて『多分』？」

「だって滅多に來ないし」

「それさっき聞きました」

「頼りになんね〜」

「う、うるさいなあ！」

だって事実だし。

とは言っても俺も覚えてないし……。

「しょうがないですね、一旦入り口に戻りましょう」

「何で？」

「記憶を頼りにテリアさんの家まで行きます」

「おお、さすが成績ナンバー1」

「そんなこと出来るの？」

「自信はありませんが……」

譲葉はそういい、苦笑して俺達を先導する。

……って言うかさ、んな面倒なことせんでもその辺の人に道聞けばよかつたんじゃないか？や、あえて言わないけど。

まあ俺がそんな妙案もとい嫌がらせを思いついてる間にも譲葉は頭

を抱えて考え込んでいる。
ホントに思い出せんのか？この町小さくは無いぞ？

「・・・多分こつちです」

「同じ『多分』なのに譲葉のはお前のより信用できるな」

「う、うるさいなあもつ！」

「二人とも、来るならさっさと来てください。置いていきますよ？」

「ま、待つて譲葉〜！」

「じゃあ俺の分もついでに買ってきてくれ〜」

「了解です。グリップに棘が満遍なくついている鉛筆や墨が練りこんである消しゴムなどを買ってきます」

「悪いやつば俺も行くわ」

「そうですか？じゃあとつとと来てくださいよ」

「うい・・・」

相変わらずだな、アイツ・・・。
つてか売ってねえよそんなモン。

「で、行けそうなのか？」

「まあ何とか。大体通った道は覚えてますし」

「譲葉つて頭いいんだね〜」

「だから言つたじゃないですか、私あつちの世界じゃ一番頭のいい
高校一年生ですよ？」

「料理はダメなのに」

「りよ、料理は勉強に関係じゃないですか!!」

「それにしたつてあのレベルは無いつて。僕だつてあれよりは上手
に出来るよ？」

「そ、そりゃ私は他の人たちに比べて少し料理は下手かもしれませ
んけど・・・!!」

「少し？」

「翔輝さんは黙っててください。とにかく私が料理が下手なのは素直に認めます」

そりゃ事実だし。

「でもそれはあくまで料理の話です。私の学力とは違います」

だからそれ以前の問題なんだって。って言うかそれよりもそれ以前に……。

「讓葉、讓葉」

「なんですか!?!」

「とりあえず先に進んでくれ」

お前さつきから道の真ん中に突っ立って叫んでるから通行人全員こつちを好奇の目で見てんだよ。

や、別にここが元の世界だったならいいよ?こんなもん遷とのやり取りしてるうちにこう言う目には慣れてるから。

でもさ、ここ俺達の世界じゃないし。俺達人間だから他の奴らと容姿違うんだから余計に目立つんだよ。

しかも俺達仮にもこの世界じゃ英雄だからな?

そんな奴が道のど真ん中で怒鳴り散らしてたら「人間」。「いつも怒鳴ってる野蛮な種族」的な方程式が出来上がるからやめてくれ。

や、俺は別にいいけどさ、他の人間の皆様が可哀想だから。

「……すいませんでした」

「素直でよろしい。じゃあ案内してくれ」

「ああ、後でちゃんとはつきりさせますからね。それこそ何時間使つてでも」

「……覚悟しておきます」

・・・俺ついさっきまで優勢だったのになんでいきなり劣勢に？
と、ちつとばかりへこんでいたら譲葉が動き出したんで俺とウルも
後に続く。

あ、ちなみに観客（？）の誤解はウルが解いてくれた。ウルは結構
この町では信頼されてるらしい。

「あ、着きました！」

「おお、ホントに着いた」

「『ホントに』は余計です」

と言っわけで着きました、テリア家です。
ぶつちやけホントに覚えてるとは思わなかった。普通にスゲー。

「譲葉、すごいすごい！」

「さすがだな」

「珍しいですね、翔輝さんが私を褒めるなんて」

「別にいいだろ、たまには」

「テリアー！いる？」

「お前は話の流れを無視し過ぎだ」

ウルはいつの間にか扉の前に立ってテリアの名前を呼んでいる。
しばらく待つとテリアが外に出てきた。

「この声はレイちゃんかな？っておや、二人とも！無事だったのか
い！？」

「久しぶりだね〜！」

「無事ですよ、何とか」

「死ぬかもしれないと思ったのは数回あったけどな」

「そうか、よかった。いや〜、1ヶ月も音信普通だとさすがに無事

は想像しにくかったよ」

「あ、そういえば何も連絡してませんでしたね……。すみません」
「いやいや、無事で何よりだよ。で、今日はどうしたんだい？」

「僕達ね、明日からこの町にある学校に行くんだ！」

「そうなのかい？そりやまたなんで？」

「試練だとき。マリーの奴が行行って」

「試練？学校に行くのがかい？」

「そうらしいです」

「何だか面白い話だね……」

テリアさんは苦笑してそう言った。そりやそうだ、学校登校が試練なんてどこの不登校児だよ。

「それで明後日から通うことになったんですが、色々と準備を整えないといけないので買い物に来たんです。なのでこの町の地図か何かをいただけませんか？」

「え、でもレイちゃんに聞けば分かるんじゃないか……。もしかして滅多にこないから道が分からないとか」

「そ、そんなこと無いよ！？ただ地図があつたほうが便利」その通りです」そうだよ！悪かつたね！」

「あはは……。ん、でもこの町それなりに大きいから地図はあるけどお店の場所までは書いてないんだ……」

「そうなんですか、それは困りましたね……」

「あ、じゃあ僕が毎回聞きに来るよ。獣化すればすぐに着くし」

「大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ、これくらいじゃバテないよ？」

「いえ、そうじゃなくて」

「？」

「道分かります？」

「……その発想は無かつたわ」

「ダメじゃん」

「うるさあい！ー！」

「じゃあ僕も着いて行くよ。それならレイちゃんが迷う心配も無いし」

「だから迷わないって！」

「でも悪いですよ、テリアさんだってお忙しいのに・・・」

「そんな、忙しくなんてないよ・・・って言いたいんだけど、生憎ホントに忙しいんだ、これが。だから代わりに僕の娘に案内させようか？」

「え、テリアさん子供がいたのか？」

「うん、今年高校生になった娘が一人ね」

「じゃあ私達と同級生ってことですか？」

「あ、そう言われてみればそうだね」

「じゃあもしご迷惑でないならお願いしてもよろしいですか？」

「もちろん。呼んでくるからちょっと待っててね。あ、中で適当にくつろいでて」

テリアさんは笑顔でそう言って一度家の中に戻る。ホントにいい人だな、テリアさん。

俺達は言われた通り中に入って適当にくつろぐ。譲葉はリビングのソファに座っていて、ウルはその横で丸まっている。狼の獣人のはずなのになぜか猫に見えてしまうから不思議だ。

ん、俺？俺は暇だから壁にもたれ掛かって座ってる。何かソファって好きになれないんだよな、床のほうが落ち着くし。

しばらく待っていると家の奥の方からテリアさんが出て来た。俺は立ち上がってテリアさんに向き合う。

「いいってさ。英雄様を案内するのはちょっと不安らしいけどね」

「そんな大層な話じゃないでしょうに・・・」

「こっちの住人にとっては一大事なんだよ」

「まあもうこの際どうでもいいよ。で、その娘さんとやらは？」
「今部屋で準備してるよ。すぐに来るさ。・・・あ、来たみたいだね」

テリアさんのその言葉通り家の奥の方からドタバタという騒がしい音が聞こえてきた。

・・・今『パリン！』とか『グチャ！』とか『ゴキッ！』とか色々ヤバそうな音が聞こえたけど大丈夫か？

やがて家の奥での激闘（？）を終えた少女が一人転がるように、つて言つか転がってリビングに入ってきた。

「い、つつつ・・・」

「・・・おい、大丈夫か？」

「緊張しすぎだよエミー」

「エミー？」

「は、初めまして！エミー・ケーニツヒです！どうぞよろしくお願
いします！」

素早く体勢を立て直し、妙に大声で自己紹介する。ガチガチに緊張
してるみたいだ。

エミー・ケーニツヒと名乗ったその少女は、ぶっちゃけかなりの美
少女だ。

160あるかないかくらいの身長で黒い髪を短く揃えて、瞳は蒼色
をしている。黒髪蒼眼つて言つのも結構珍しい組み合わせだ、つて
言つか俺は初めて見た。

さすがテリアさんの娘、獣人だ。頭から動物の耳があり、さつきか
らフヨフヨ動き回っている尻尾もチラチラ視界に入る。

で、その耳と尻尾が最大の疑問。確かエミー、だっけ？はテリアさ
んの娘だったよな？じゃあさ・・・。

「・・・なんで猫耳と猫の尻尾？」

うん、頭からはバッチシ猫耳、後ろには犬とは思えない細い尻尾が見えてるから、多分猫の尻尾だろう。ちなみに多分だけど両方黒猫のな。

で、テリアさんは確か犬の獣人。つまり・・・。

「何で親子で種族違うんだ？」

「いや、種族は同じだよ、同じ獣人さ。でも引き継いだ獣の血が違うんだね」

「・・・どういうことだ？」

「レイちゃんの話は聞いただろう？二重人格になったわけ」

「ああ、血が複雑に混じってちょうど半々になったって話か」

「そう。でもほとんどの場合そんな事にはならないから、強く引いたほうの血が容姿として表に出るんだ。で、エミーは僕の犬の血よりも妻の猫の血を強く引き継いだってわけさ」

「つまりエミーはお母さん似って事か？」

「そう言つこと」

「とりあえず納得」

めんどくさいんだな、種族間の違いって。

「え、えっと、よろしくお願いします！」

「そんな大声出さんでも聞こえてるよ」

「あう、すいません・・・」

「別に謝る必要も無し。とりあえずよろしく」

「は、はい！よろしくお願いします！」

「・・・エミーって普段から敬語？」

「はい？いえ、そんな事はないですけど・・・」

「じゃあ俺にも敬語やめてくれないか？」

「え、今すぐにはちよつと・・・」

「ああ、そのうちでいいからさ。あんまり敬語使われるの好きじゃないんだ。悪いな、無理言つて」

「と、とんでもないです！」

「あ、そついや俺達の紹介ままだつたな。俺は夢幻翔輝、あつちの黒髪が冬夜譲葉だ。よろしく」

「エミーさん、どうぞよろしくお願いします」

「あ、こちらこそよろしくお願いします」

「エミー！久しぶり！」

「あ、レイも来てんだ」

「知り合いか？」

「まあね。とは言つてもあんまり会うこと無いけど」

「そりゃこの町の地形知らないくらいだからな」

「翔輝しつこい！」

「ま、そんなどうでもいい事は置いといて」「どうでもよくない！」「案内よろしくな」

「はい、お任せください」

とつわけでエミーに案内を任せ、俺達は買い物を開始した。ん、敬語いつになつたらやめてくれるかね・・・。

第30話 レッツ買い物 〈前編〉（後書き）

「皆さん、ここに詐欺師がいますよ」

誰が詐欺師だ誰が!？」

「お前だよ。何だこの展開？」

買い物

「いや知ってるよ。そうじゃなくて」

なんだよ？」

「お前自分でこの小説のあらすじ読んでみ？読んだか？よしじゃあ聞こう、この小説のどこに冒険がある？旅がある？シリアス？まだ欠片も出てねえよ、そういうのを期待してこの小説を読みに来た読者の皆様に謝れバカヤロー」

・・・すいませんでした

「確かに小説開始30話でまだ最初の町にいるって言うのは問題ですね・・・」

だって俺ファンタジー向いてないんだもん

「じゃあ書くなよ」

ごもつともです・・・。大丈夫、ちゃんと定期的にファンタジー入れるから！

「私達帰れる日が来るんでしょうか・・・？もう泣きたいです・・・」

「

第31話 レッツ買い物へ後編 (前書き)

ちよつと更新ペース落ちてますね・・・

最近念願のPSS3を買ったんでそれに熱中してしまつてなかなか書く時間が・・・(コラ)

英語版のMGS、スネークの声がどうしても好きになれません・・・

！T
ー
T

あ、それと最後のミニ話かなり適当です。ご了承ください(？)

第31話 レッツ買い物へ後編

「さて、んじゃまずは文房具屋だな」

「さっきまでのやる気の無さはどこに行っただんですか？まあやる気出してくれたのは素直に嬉しいですけど」

「や、途中で帰るのは無理だと判断したからとっとと終わらせて帰ろうと思って」

「見直して損しました」

まったく、ちょっと油断したらこれです……。あ、皆さんいらっしやいませ（？）、譲葉です。

現在前回に引き続き買い物をするために移動中なのですが、相変わらずと言いか予想通りと言いか、翔輝さん全くやる気ありません。まあ確かに買い物にやる気も何もあるかって感じなんですけど、やっぱりこのテンションですと一緒に行かれるとこっちもなんとなく影響されそうになると言いか……。

「エミー、文房具屋ってどこにあるんだ？」

「文房具屋ならこの近くにありますよ。徒歩で3分くらいです」

「近いですね、じゃあ行きましょう」

「……ところでさ、やっぱりお金は僕が払うの？」

「当然」

「うう……。エミー、私の代わりに払ってよ〜」

「え、ヤダよ！私今金欠気味なんだから！」

「そんな事言わないでお願い！」

「ヤダってば！大体レイはほとんどお金なんて使わないでしょ！？」

「そ、そうだけどもさあ……。手に入れる機会も少ないからなるべく持つてたいんだもん……」

「そんな理由で私に払わせようとししないで……」

「エミーのケチ〜！」
「何ですってえ!?!」

「・・・エミーさんって面識がある程度ある人には結構容赦ないですね。まあ私が彼女でも同じ反応したでしょうけど。」

「翔輝〜！ホントに僕が払うの?」

「今の会話からするとお金が珍しいから取ったときたいて事か?」
「・・・うん」

「お金が珍しいって言うのもまた珍しいですね・・・」

「じゃあ俺があっちの世界の小銭やるから、それでいいだろ?」

「え、あっちの世界にもお金あるの?」

「逆にお金の無い世界を教えてください」

「そんなのあるわけ無いでしょ〜」

「だからこそ今聞いたんだよ」

「・・・何て会話でしょうか?ほら、エミーさんが会話についていけずにキョトンとしますよ?」

「・・・あ、あの、着きましたよ?」

「ん?ここか?」

「は、はい・・・」

「翔輝さん、ウルさん、少しおとなしくしましょうね?エミーさんが若干引いてます」

「そ、そんな事無いですよ!?!ただなんとなく変わってるな〜って思っただけ!」

「それを引いてるって言うんじゃないのか?」

「あう・・・!」

翔輝さん、自分でそうなる風に仕掛けといてそのコメントはどうか

と。。。。

「ゆ、譲葉さん。。。！わ、私翔輝さんになんて事を。。。！」

「そんなに気にする必要はないですよ、翔輝さんには基本的にどんな暴言でも許されます」

「待てこら、俺がいつそんな事許した？」

「今までの経験をあてにしてみました」

「まあ確かに翔輝は女の子に甘いしね」

「や、優しいんですね、翔輝さんって」

「甘いだけですよ」

「お前らには都合良いだろ？」

「まあ私達は色々得するしね」

まあ確かにそうですね。って言うか皆さん。。。。

「そろそろ中入りしましょうよ、買い物が進まないです」

「ああ、そういえば買い物に来てたんだったね」

「それを忘れたら元も子もないでしょう。。。」「

「。。。すみません、私も忘れてました」

「。。。と、とりあえず入りましょう！」

「盛大に誤魔化したな」

「う、うるさいです！翔輝さんもとつとと来る！」

ゴメンなさいエミーさん、後でちゃんと誤りますから。。。。

さて、と言うわけで文房具は買い終えました。省略しましたが、特に何も変わった事は無かったのでもいいですよ？

まあ唯一あつたおかしな事と言えば翔輝さんがホントに「ここに棘付きシャーペンとか墨入り消しゴムとか無いですよ？」とか聞いてたことですかね？あるわけ無いじゃないですかそんなもの。どん

な嫌がらせですか。

文房具屋は意外と品揃えもよく、人間界に存在する文房具と質もあまり変わり無いのでかなり便利ですね、今後も使わせてもらいましょうか。

とまあそんな具合に進んだ文房具ショッピング（？）でした。次は・・・ウルさんの服ですかね？

いや、まあ服は何でも良いって言われてはいるんですが、やっぱり少しはお洒落した方がいいんじゃないかと思ひまして。

私達は制服なので良いですけど、ウルさんは普通のワンピースみたいな格好なので・・・。って言うかぶつちゃけ私がこっちの世界の洋服屋を見たいだけなんですけどね

そんなこんなでエミーさんに案内していただき、ただいま洋服屋の前にいます。

「結構大きいんですね」

「まあここはこの町で一番大きな洋服屋ですからね」

「おつきいね〜！」

「服なんて何でも良いだろうに・・・」

「女の子は常にそう言うことに気を配らないといけないんですよ」

「そう言うモンかね？」

「そう言うモンです」

「まあいいや、じゃあとりあえずとつと買って帰るぞ」

分かってないですね・・・。まあ分かってるとはさらさら思っせてませんでしたけど。

とりあえず中に入ると、ウルさんは大騒ぎしてお店の奥のほうに行っちゃいました。お店の人に注意されなければ良いですけど・・・。

「じゃあ私達もちよつと見てみますか？」

「私もご迷惑でなかったらご一緒させていただいてもよろしいです

か？」

「もちろんですよ。翔輝さんはどうします？」

「俺はどうでもいいから別にいい」

「どうでも良くても着いて来てもらいます。迷子になられても困るので、こつちが」

「さっきの質問の意味は？」

「特に無いです」

「それなら聞くな」

「じゃあ問答無用で連れて行っても良かったんですか？」

「必死で逃げるけどな」

「・・・」

あ、エミーさんがまたキョトンとしてますね。

「あ、あの、お二人はいつもそんな会話をしてらっしゃるんですか？」

「まあ基本的には」

「ハモって即答!？」

そんなコントを繰り返しながら店内をうろつろと搜索し始めてしばらくすると、やがて女性用の衣服コーナーにたどり着いた。よく見るとウルさんが大はしゃぎしながら辺りを走り回っている。

・・・はあ、しょうがないですね。私は一度目を閉じ、少ししてからゆっくりと目を開ける。すると私以外の全ての物は活動を停止し、世界は静寂に包まれた。

「相変わらず異様ですね、この光景・・・」

自分の能力に苦笑を浮かべながらゆっくりと空中で停止しているウルさんに歩み寄り、先ほど買った文房具を頭の上に配置する。

ん〜、片付けるの大変ですけどまあいいですよな？

で、セッティングを全て終了してから頭の中で時間が動き出すのをイメージすると同時に世界は活動を開始し、必然的にウルさんの頭上で待機していた文房具は動きを取り戻し落下した。

「うきゅあああ！？」

何だかよく分からない悲鳴を上げながら文房具の雨に下敷きにされたウルさん。文房具の中にシャーペン等を入れなかったことには感謝してくださいね

「ウルさん、店内では静かにしましょうね？」

「りよ、了解・・・」

「・・・え？え！？」

「ああ、そう言えばエミーはあいつの能力知らなかったっけ？」

「の、能力？人間が特殊な能力持つてると言う言い伝えは本当だったんですか？」

「特殊な能力なのかはともかく、俺も譲葉も能力はもらったぞ？」

「な、成程・・・。ちなみにお二人の能力は何なんですか？」

「俺は『刀剣の増殖』、譲葉は『時間の延長』」

「・・・譲葉さんのは何だか無敵っぽいですね」

「ホントにな、譲葉があ能力持つとホントに動き回る災厄に見える」

翔輝さん、説明ありがとうございますけど最後のは余計です。

あ、ちなみに「ありがとうございますけど」なんて文法（？）はありません、多分。

その後、ウルさんにおとなしくしてもらおう事を心掛けてもらいながら服を選んで、女性陣は全員服を選び試着を開始しました。もちろん翔輝さんは何にも持ってないし、女性コーナーなのでずっと居心

地悪そうにしてみました。一応日頃の仕返しと言つことでもござまあみろです

で、私達は今試着室の前にはいるんですが、試着室がほとんど使われていて残っているのが一部屋しかないので順番待ちの状態です。今入っているのはウルさん。まあ一番はしゃいでましたしね。

「あ、誰か出てきましたよ？エミーさん、お先にどうぞ」

「え、い、いいですよ！讓葉さんこそお先に！」

「いいんですよ、こう言う風に他人を優先するのは日本人の精神なんですから」

「に、ニホンジン・・・？」

「俺達の人種。まあ言うなれば元の世界で言う種族みたいなもんだ」

「あ、ああ、そう言うことですか。で、でも悪いですよ、英雄様より先に行くなんて・・・」

「何言ってるんですか、こう言う時は素直に甘えておくものですよ？」

「そ、そうですか？じゃ、じゃあお言葉に甘えて・・・」

そう言つてエミーさんは恐る恐ると言つた感じで着衣室に入つていった。うーん、そこまで申し訳なさそうな顔されると何だかこっちが悪い気がしてきたんですけど・・・。

するとこのタイミングでウルさんが試着室から出てきたので、交代で私が試着室に入ることになりました。それではここからはウルさん視点でどうぞお楽しみください

と言つわけで、何気に初の僕視点！張り切つて行きます！

「ただいま」

「おう、長かったな」

「女の子は普通にこれくらいかかるんだよ」

「知らん」

「聞いたくせに」

「聞いたとらん」

「むう」

「何だ、妙にテンション高くないか？」

「そんな事無いよ？」

「そうか？」

嘘です、思いつきりテンション高いです。だって初の僕視点なんだもん！あゝうれしい！31話目にしてようやく僕視点！ミラは何回かあったけど僕視点は初めて！

「・・・おいウル、顔思いつきりにやけてるぞ？」

「へ！？そ、そんな事無いよ！？」

「そんな事ある、バリバリにやけてる」

「う、うるさいなあ！！！」

にやけてなんかないもん！ほら、顔触ってみただけどちょっと口が吊りあがってるだけだよ！

「こらそこ！」にやけてんじゃん」とか言わない！

「いい加減にやめとけよ、気持ち悪いから」

「うるさいってばあ！」

しつこい翔輝の背中をドンッと押してやった。あ、ちょっと強く押しすぎたかな？

「キヤツ！」

「うわっ!?!」

そしたら何か予想外。翔輝の横の試着室から中にいた人が急に出てきてぶつかりそうになったところをとっさに横に飛んで避けたんだけど、その先には別の、人の入っている試着室があつて……。

「やっべ……!」

うん、思った通り試着室にダイブして行つたね。つて、ちよつと!?

「翔輝!?!何やってるの!?!」

「え、ちよ、翔輝さん!?!何やってるんですか!?!」

「……」

「翔輝さん!?!何があつたんですか!?!」

「翔輝、大丈夫!?!」

ここの試着室全部カーテン式だから簡単に入れちゃうんだよね。ドアにしたほうがいいんじゃないかな……。何て考えてる場合じゃない!翔輝思いつきり入つたからどつか当たつたんじゃないの!?!つて言うかそれより中の人大丈夫!?!

「翔輝!?!」

「……」

「ちよつと翔輝!返事くらい……」

……あゝ、そう言う事。

いやね、翔輝が入つた試着室、その中にさ……。

「しよ、翔輝さん……!」

「・・・エミー・・・」

うん、中にエミーがいたんだよ、しかも着替えの途中だから結構きわどい格好で・・・。

「・・・あ、悪い！これは、その、不可抗力って言うか・・・！」

「翔輝・・・！」

「へ？あの、エミーさん？口調が・・・」

「なあんであんななんか敬語使わなきゃなんないのよ！！！」

「だから不可抗力だって言ってるんだろ！？」

「そんな事知るか〜！」

「エ、エミーさん！？どうしたんですか！？」

「ウル！何とかしろお前！」

「ぼ、僕！？ヤダよ、突っ込んだの翔輝でしょ！？」

「お前が押したからだろ！？」

「翔輝がしつこく馬鹿にするのが悪い！」

「理不尽だ！」

「ごちゃごちゃ言ってるんじゃないの！反省てよね、は・ん・せい！」

「だからそれをウルに言えっつえの！」

「ウルって誰よ！？そんな名前も知らない奴に謝れるわけないでしょ！？？」

「そう言えばまだ言ってるなかつたな！だったら説明しよう、ウルはそんなの今はどうだっていいの！」何でだ！？聞いたのお前だろ！」

「うっさい！誰が見たってあんたが悪いんだから色々言っつな！」

「段々口悪くなってるませんかエミーさんや！？」

「いいのよ、あんたにはこれくらいで！」

「相変わらず俺はどこまで悪者！？」

「この世で最低のバカよ！」

「低くね!？」

「これでも高いほうよ!」

「それ以上下ねえだろ!」

「そんな事どうでもいいの!とにかく「お客様」はい?」

店内で大声でケンカをしていると、笑顔を浮かべた女性店員が眉毛をぴくぴく震わせて、なおかつ笑顔で二人に話しかけた。

「お客様のご迷惑になりますので、お静かにお願いします」

「「あ、すみません」」

さっきまでのケンカが嘘のようにハモって答えると、二人は急に静かになった。

しかし、さっきのエミーすごい剣幕だったね……。僕もあんなにすごい見たこと無いよ……。

その後、僕達は会計を済ませてからテリアさんの家に戻った。あ、ちなみに帰る途中翔輝とエミーはずっとケンカしてたよ。うるさかった……。

後でエミーのお母さんに聞いたんだけど、エミーって普段は結構お転婆、って言うかワガママらしい。エミー母いわく「超お姫様体質」何だって。

ん〜、明後日から毎日このやり取り見れるのかな?ちょっと楽しみかも

第31話 レッツ買い物へ後編 (後書き)

「つたく、エミーの奴・・・」

「あれは翔輝さんが悪いでしょう?」

「いや、一番悪いのはウルだろ」

「何で僕なのさ!?!」

「お前が押したのが全ての始まりだろ?」

「でもだって「もういいですよその話題は」良くないよ!」

「それにしてもエミーさんって面白い方ですね」

「全然。生意気なお嬢様だろ?」

「だから面白いんですよ、性格が」

「・・・お前自分が被害者じゃないからって・・・」

「ふふっ、明後日の楽しみが一つ増えましたね」

「勘弁してくれ・・・」

第32話 討論会(?) (前書き)

昨日は更新できないでごめんなさい・・・
ちやんと書いてはいたんですが、ほぼ全て書き終えたところでなぜかデータが全て消えてしまったので心が折れてしまって・・・
しかも待たせてしまった上にちょっと短くて、本当に申し訳ないです・・・
と、とりあえず本編をどうぞ・・・

第32話 討論会(?)

「え、あんた達学校行くことになったの？」

どうも、せつかく学校に行かなくてもいい世界に来たのにどう言うわけか学校に行くことになってしまったので若干元気が無い翔輝です。

まったく、何が楽しくて学校なんて行かなきゃいけないんだ？

「翔輝さん、今日ため息多いですよ？」

「だって学校行きたくねえんだもんさ」

「何ですかその変な喋り方？」

「変か？」

「多少」

「まあどうでもいいんだけどな」

「でしょうね」

「ん、あたしも行きたかったな、学校・・・」

「やめとけて、面白いことなんかねえから」

「そんな事無いでしょ。確かに授業はあれかも知れないけどいろんな人に会えるじゃない？」

「と言うかそもそもお前は学校知ってるのか？」

「知ってるわよ、ウルと一緒にしないで」

「や、だって同じじゃん」

「違うわよ！・・・いやそうだけど、違うわよ！」

「どっちですか？」

「ん・・・どっちなんだろうっね？」

「オイ」

「だって分かんないでしょ？」

「・・・まあ確かにそうですけど。翔輝さんどう思います？」

「・・・どっちだろうな？」

「それじゃさっきのミラさんと同じじゃないですか・・・」

「でも確かに不思議ね、どっちなのかしら？」

「じゃあまず『同じ』と『違う』の定義をしつかりさせましょう。

『同じ』というのはつまりウルさんとミラさんが性格が分裂しているだけの同一人物として考えるか事、『違う』というのはウルさんとミラさんは体を共有しているだけの別人と考えることですね？」

「それでいいんじゃないの？」

「まあ定義としてはそれでいいんじゃない？」

「では討論会を始めましょう。まずミラさん、どう思いますか？」

・・・おい、いつの間に討論会になった？まあ別にいいけど。

「違うに決まってるでしょ？」

「言い切ったな」

「当たり前でしょ？あたしとウルが一緒だなんて何よりもあたしに失礼よ！」

「ちよい待ち、それはそれでウルに失礼じゃないか？」

「まあそうだけどさ、それ以上にあたしに失礼。あのアホな娘とは一緒にしないでよね」

「お前さりげなく酷いこと言ってるじゃないか？」

「言ってるわいよ」

「・・・あつそ」

「じゃあ今度は翔輝さんの反論の番ですね」

「いや、反論する必要もないと思うけど」

「討論会なんだからそんなこと言っちゃだめですよ」

いやだからいつの間に討論会になった？

「ん、でも同じ体使ってるし同じなんじゃないの？」

「違うわ、それは違う」

「全否定かよ」

「当然」

「そんなに威張って言うな、さすがにウルが可哀想だ」

「・・・ん、まあ確かにちよつと言い過ぎたかもね。でも大丈夫よ、ウルどうせ今寝てるし」

「人が聞いてないからって陰口か？性格悪いな、お前」

「あんたが言うっ？」

「まったくです」

「・・・俺そんなに性格悪いか？」

「「悪い」です」

「・・・そうですか」

かるくシヨックだな。いや、まあこう言われるだろうなあ、とは思ったけどさ。

「で、反論終わり？」

「ん、もうちよい。って言うかホントはもうめんどうさいからどうでもいいんだけどなんとなく負けると悔しいからやだ」

「子供ですか？」

「やかあしい。で、結局は人格違うだけの同一人物なんだし、同じでいいんじゃない？」

「嫌よ、あの娘と一緒にされるのは」

「ホントに容赦ないな・・・。でもまあ結局は同じ人だろ？」

「しつこいわねえ・・・。あれよ、気合の差でこっちの勝ちでいいでしょ？」

「それは俺が納得せんぞ？」

「でもあたしもウルと一緒にされるのは御免よ？」

「ん・・・あ、でもお前もウルも同じ名前だろ？」

「それはだって同じ人物だし」

「・・・さて、お前がそれ言っちゃダメなんじゃないか!？」
「え?・・・あ、ホントだ。でも別に大丈夫じゃない?どっちの仮定でも同一人物なのは確定してるわけだし」
「いや、まあそうかもしれないけど・・・」
「・・・はあ、何か疲れた。もういいわ、ギブアップ。あたしの負けでいいから。」
「ちょ、ちよつと待て!それはそれで俺が納得できん!」
「だあってめんどくさいし・・・」
「お前、俺でさえやってんだぞ!?!お前がめんどくさがってどうする!?!」
「あたしだつてめんどくさいときはめんどくさいのよ、あんたなら分かるでしょ?」
「いや、分かるけどさ・・・。つて言うか上の文平仮名ばっかで読みにくくないか?」
「翔輝さん、私が言いたいことわかりますね?」
「おお譲葉、まだいたのか?」
「まだいたのかとは何ですか!?!」
「いた、だつてさつきから全然喋ってなかったから」
「とにかく!そう言う発言は無いです!」
「・・・前から思ってたんだけどさ、何で?」
「なんとなくです」
「そんな理由で俺は何度も何度も怒られてたのか!?!」
「まあぶつちやければそうなります」
「理不尽だな・・・つて言うかミラは?」
「ついさつき狩りに出かけましたけど」
「ホントに逃げやがったのか!?!」
「逃げるも何も無いと思いますが、とりあえず討論会は終わりですね」
「・・・なんだろうな、このスッキリしない感じは・・・」
「未練がましいですよ、これくらいのことすんなり諦めてください」

「はいはい・・・」

「ついでに学校のことも観念してくださいね」
「・・・」

もう何も反論する気にもならない・・・。

って言うか今回話だらけだぞ？大丈夫なのか、これ？

まあでも・・・俺の知ったこっちゃねえな。今は自分のことで精一杯だ。

はあ・・・寝よ。

第32話 討論会(?) (後書き)

「いや、バカだな」

「バカですね」

誰が？

「お前」「あなたですよ」

・・・分かりきつてはいるが理由を聞こうか？

「だってせっかく昨日書き終えたのに消しちゃったんでしょう？」

不可抗力だ！なぜか消えたんだ、なぜか！

「理由も無しに消えるわけ無いじゃないですか、何かしないとデータは消えませんか？」

う・・・

「第一この程度の文字数の小説が消えたくらいで心が折れるっていうのは無いだろ？」

だってデータ消えたの午前2時だぞ！？次の日学校あるのにそれ以上夜更かししてられるか！

「じゃあもつと早く始めりゃ良かったんじゃないの？」

・・・うるせええええX!!!

「最終的に逆切れかよ!？」

「まったく、ホントに毎回同じようなことを言ってますけど、先が思いやられますね・・・」

第33話 自己紹介（前書き）

今回ぶっちゃけちょっとやっつけです。すみません、眠くてやる気
でなくて・・・

第33話 自己紹介

「・・・うわぁお」

「何ですかその日本語なのか英語なのか分からない英語は。って言うか英語ですか？」

「ニホンゴ？エイゴ？なにそれ？」

「日本語はお前も喋ってたんだろ」

「え、これ日本語って言うの？知らなかったけど・・・」

「そういえば何で私達の言葉こつちの人に普通に通じてるんですかね？」

「知るか、通じりゃいいんだ通じりゃ」

「いい加減な考え方ですね」

「今更何言ってたんだ？」

「そうですね」

「・・・ガツコウ来ても二人は変わらないね・・・」

よお、翔輝だ。今ウルが言ったように、俺達は学校の目の前に立っている。

学校・・・はぁ・・・。何て嫌な響き。滅ばいいんだ。

そんなことを頭の中で呟いていると「何を馬鹿なことを考えてるんですか？」と譲葉が脳内に現れてため息と共にそう言った。うるさいわ、思考にまでツッコミ入れるな。

で、その学校なんだが・・・ホント、最初の「うわぁお」しか出てこない。

なんて言うか、フランスのノートルダム教会を十個並べて学校にした感じだ。まあ要約すると超でかくて無駄に豪華で、少なくとも人目見ただけでは学校なんて思えない。

何でこんなでっかい学校が必要なんだ？って言うかそもそもこれ学校か？未だに疑わしいんだが・・・。

「翔輝さん、なにアホみたいに突っ立ってるんです？ほら、さっさと行きますよ？」

「アホみたいとは何だコラ」

「そのままの意味ですけど」

「いやそれは分かるけどさ」

「二人とも、いい加減にしようよ。学校初日からケンカしてちゃ面白くないよ？」

「学校なんて元々面白くもなんとも無いだろうが」

「いや、学校だけじゃなくて何でもケンカしてたら面白くないですよ？」

「ん、まあそうかもしれないが」

「でしょ？ほら、早く入ろうよ！」

「小学生か、お前は・・・」

ほら、あれだよ。小学1年生になった子供が小学校に行く前日に大はしゃぎするのと同じだよな？

ん、まあ確かに校門・・・みたいなところですつと突っ立ってるのもある意味迷惑か。入るか。

「翔輝さん、行きましょう」

「2対1だよ、観念していこう？」

「わざわざんな事言わんでも行くつもりだよ」

「嘘つかないでください」

「嘘じゃねえよ、今回ばかりは」

「何でもいいから行こうよ」

「はいはい・・・」

俺って全く信用されて無いのな・・・。

まあいいや、とつと行つてめんどくさい挨拶終えて、とつと帰

るか。

あ〜！ホントにめんどくせえ〜！

「え〜っと、知ってる人もいると思うけど今日から転校生がこのクラスに入ることになったわ。それも三人」

と言うわけで場所も時間も少し飛んで現在教室の前。先生が教室内の生徒に俺達の事を説明している。って言うか転校生ではないけどな。

「カッコイイですか？」「可愛いですか？」

うわっ、ハモリやがった……。やっぱり最初に気にするのはそれなのな。

「カッコイイし可愛いわよ？かなりハイレベルね」

「やった！」

またハモった、って言うか先生？何ハードル上げてくれちゃってんの？

「と言うわけで、三人とも入って〜」

「……はあ……」

あ、二人も若干迷惑そうな顔してる。よかった、ハードル上げられて困ったの俺だけじゃなかった。

まあでも呼ばれたからには入らないわけにも行かないので、しょう

がないので一度ため息をついてから中に入る。

『・・・』

・・・や、黙られても困るんだけど・・・。

譲葉とウルもどうしていいのか分からずに複雑な顔を浮かべて黒板の前に突っ立っている。

・・・って言うかそろそろ何か話してくれよ、どうしていいのか分からんのだが。先生もニコニコして見てないで何とかしてくれないか？

と、先生を頼ったような目で見ていると・・・。

「可愛い可愛い！！！！」「カッコイイイイイ！！！」

生徒たちのその爆音にも近い叫びを境に、静寂に包まれていた教室は一気に騒がしくなった。

「ヤバイ、滅茶苦茶可愛い！」

「ストライク！」

「俺はあの黒髪の子の方がタイプだな」

「俺は断然隣の茶髪の子」

「カッコイイ！何あの子、俳優とか芸能人じゃないの！？」

「1000点ね！」

・・・ゴメン、やっぱり皆黙っててくれるか？

隣の二人もいきなりの事で驚いたのか、その場でしばし硬直した後オロオロとし始めた。

「はい皆、静かにする！自己紹介に入るわよ！」

先生がパンツと手を叩くと、さつきまであんなにうるさかった教室が今度は一転してお通夜のように静かになった。
・・・いくらなんでもギャップが激しすぎないか？まあいいけど。

「じゃあまずは・・・誰が行く？」

「生徒さんが好きな人でいいんじゃないの？」

「黒髪の子！」「茶髪の子！」「君！」

「・・・決まらん」

「じゃあ翔輝君、君からどうぞ」

「・・・はあ、了解です。え、夢幻翔気です。ほい次」

「え、私ですか？つて言うか翔輝さん短すぎなんじゃ・・・。今日から皆さんと一緒に勉強させていただくことになりました、冬夜譲葉です。皆さん、よろしくお願いします」

「じゃあ最後は僕だね。初めまして、魔閻レイです！ウルって呼んでね！」

俺達の自己紹介が住むと、教室はまた少し騒がしくなった。

「おい、魔閻レイって・・・あの二重人格の魔閻レイか？」

「ムゲンシヨウキにフユアユズ八だつて、面白い名前だね」

とかそういう内容の会話だ。悪かったな、へんな名前で。

「と言うわけで自己紹介は終わったけど、何か質問ある人？」

『はいはいはい！！！！』 『はい』

「あ、じゃあ一番まともな事聞きそうなエミー」

『酷くない！？』

ん？エミー？まさか・・・。

「翔輝に質問。何で来たの？あ、譲葉とレイ・・・ウルは歓迎するからね！」

「ちょ、エミー！？転校生になんて事聞してるの！？」
「だあってこいつ一昨日あたしが洋服屋の試着室で着替えてるときに思いつきり中に入ってきたのよ！？」
「え〜！？何それ変態！？」
「信じられな〜い！」
「おいウル、変態だつてさ。どうする？」
「何で僕なの！？」
「や、だつてお前が俺のことを押したせいで中に入っちゃったわけだし」
「まあ確かにあれはウルさんが悪いんじゃないですか？」
「ゆ、譲葉までえ・・・！」
「理由はともかく！よくもまああんな事しといてノコノコとあたしがいるクラスに來れたわね！？」
「誰が好き好んでお前がいるクラスなんかに來るか」
「何ですつてえええええ！？」
「え、エミーさん！落ち着いて下さい！」
「落ち着いてられるかああああ！！！」
「はいじゃあ次の質問〜」
「勝手に進めるな！」
「はい！俺！」
「じゃあ君」
「三人の種族は！？」
「僕は昼は狼の獣人、夜はヴァンパイアだよ」
「俺は人間」
「私もです」
「に、人間！？」
「ああ、そういう言い忘れてたな。あ、それが分かったからって敬語使うとか態度変えるとかいう奴らがいたら死刑な」
「に、人間の君が言うとか冗談に聞こえないんだけど・・・」
「と、とりあえずみんなと同じように接してくれって事かな？」

「そう言うことだ。変に特別扱いされるのは嫌いなんだ」
「わ、分かりました・・・」

ん、何か始まって早々怖がらせちゃったか？

・・・ま、いつか。とりあえず自己紹介を終えた俺達はそれぞれ席を指定され、その席に座って授業を受けた。

さて、昼休みの質問攻めに耐え切るために・・・寝るか。それじゃあ読者の皆、昼休みに会いましょう。おやすみ。

第33話 自己紹介（後書き）

・・・自己紹介の時のその他の質問とその回答・・・

「スリーサイズは!？」

「死にますか？」

「ごめんなさい」

「何歳？」

「16」

「同じく」

「んゝ・・・30歳位かな？」

『ちよつと待てえええええ!!!!』

「ふえ? な、何？」

「30歳!? 嘘付けお前!」

「う、嘘じゃないよ! 基本的にヴァンパイアは不老不死なんだからミラが表に出てきてるときは年取らないんだよ! 私達は大体半日で入れ替わるから実年齢の2倍は生きてるの!」

「な、何か分かるようなわからんような・・・」

「つまり本当は30歳だけど感覚的には15歳くらいって事!」

「ふ、複雑ですね・・・」

その他の質問は次回。多分。

第34話 昼休み(前書き)

最近更新ペースが落ちてる上に短くてすみません、ちょっとスランブ気味なのと学校が忙しいのが重なって・・・
何とかする努力はしているんですが・・・

第34話 昼休み

さて、前回に引き続き俺こと翔輝視点でお楽しみください。

まあそんなこんなで授業も終わり、今は昼休み。予告通り授業始まってわずか10分の速さで睡眠を取った俺だったが、先生も俺が人間だという事実+今日来たばかりの転校生という二つの理由で俺を起こすに起こせなかったらしく初めて学校で安眠を取れた。それも授業中に教室で。

「翔輝、寝るの速すぎ・・・」

「いいんだよ、俺だけは寝るのが許されてるんだ」

「バカな事言わないでください」

「第一授業が簡単すぎるだろ、俺達これ結構前に習った覚えがあるぞ？」

「その点に関しては同感です。私もこの授業は2年ほど前に習った気がします」

「え〜？僕はチンプンカンプンだったけど・・・」

「そりゃ学校も知らないお前がいきなり高一に入学したらそうなるだろ」

「どうしよ〜・・・翔輝、分かんないところ教えてね？」

「めんどくさいからパス。譲葉に教えてもらえ」

「まあ私でいいのならお教えしますよ？」

「でもさ、譲葉に教えてもらったら僕翔輝より頭良くなっちゃっよ？そしたら翔輝立場無いんじゃない？」

「俺はそこまでバカじゃないぞ？」

「嘘だね」

「即答すんな」

・・・なんかさ、学校来てもやってること同じじゃね？話題が学校

関連になっただけで。

と、ふと教室が昼休みにしては異常に静かなのに気付いた。辺りを見回すと俺達の周りにはクラス全員が集まって、しかし一定の距離を保ってこちらの様子を伺っている。

「おい、何かお前らも喋れば？」

「え？い、いやそんな・・・」

「あんま氣い張んなよ？立場的には転校生ってことで俺達のほうが下なんだし」

「そうですね、それに皆さんも話しかけてきてくれないと私達も暇ですし」

「あたしでよかったら話してあげましょうか？」

俺達在必死に説得をしているとどこかで聞いたような生意気そうな声が聞こえた。って言うか説得するような事じゃないと思うんだがな。

「いやお前はいい」

「あんたの意見は聞いてないわよ」

「あ、エミーさん」

「やほ、讓葉。ウルも」

「俺に挨拶はどうした？」

「する必要ある？」

「するのが礼儀だろ？」

「あんたが礼儀とか言う？」

「言ったら悪いか？」

「少なくとも覗き魔に言われたくないわね」

「誰が覗き魔だ」

「あんた以外に誰がいるの？」

「ウル」

「何で僕!？」

「ウルは別に覗き魔じゃないでしょ? 何言ってるの?」

「お前あん時の話詳しく聞いたか?」

「ううん、聞く必要ないし」

「それがあるんだな、これが」

「あんた何言ってるの?」

「譲葉、説明頼む」

「何で私なんですか?」

「俺が言っても信用されないだろ?」

「納得です。エミーさん、えつとですね・・・」

その後譲葉がああ時の事をちゃんと説明してくれたのでエミーの誤解は解けたのだが、結局着替えを見たのに違いは無いと言うことでエミーの中で俺はまだ有罪らしい。理不尽だ。

でもまあ最初にエミーが「覗き魔」とか言って招いた誤解は解けたのに加えて俺は無罪になったのでよしとするか。

それにエミーのおかげか他の生徒も話しやすい状況になったのか、いろんな人が話しかけてきた。この点はエミーに感謝だ。

とりあえず今回はそれぞれに向けられた質問とその返答を紹介しよう。

〔翔輝編〕

人間ってホント!？」

「ホント」

「って事は別の世界から来たんだよね? どんどころだった?」

「人間しかいなくて退屈な世界だったな」

何歳?

「16。最初に答えたらうが」

どっちが本命!？」

「今のところはどっちも・・・って何言わそうとしてんだお前ら」

能力って何かあるの？

「あるけどあんま役には立たん」

どんな能力？

「凶器が増える」

え、何それ……。自分の性格を一言で表すと？

「性格？ん〜……。ダルがり？」

それって性格？

「性格でいいよもう」

特技は？

「無い。器用貧乏だから何も無い」

あえて言うのなら？

「昼寝、サボり、遅刻」

……。ろくなの無いね。

「それ質問じゃないぞ？」

〈譲葉編〉

スリーサイズは！

「最初の質問がそれですか？って言うか前にお答えしました」

付き合ってください！

「あなたが死んでくれるなら喜んで」

Sですか？Mですか？

「S（死んでくださいのS）です」

彼氏いるの？

「いませんよ？」

付き「それもうさつき聞きましたしお答えしました」

まだ全部言っていないんだけど……。特技は？

「全てです」

「嘘付け、料理はダメだろ」

「……」

……。えっと……。な、なにか苦手なものはある？

「・・・オカルト全般ですね」

夢幻とはどんな関係だ？

「幼馴染です」

ホントにそれだけ？

「くどいですよ？」

（ウル編）

スリーサイズは！

「譲葉と同じ質問・・・？確か黙秘権ってあったよね？」

付き合ってください！

「ヤダ」

二重人格ってホント！？

「ホントだよ」

もう一人のウルってどんな人？

「ん〜・・・。僕よりも頭が良くて髪と目が赤くてかつこよくて・・・。羨ましいなあ・・・。」

そつなのか？俺達も会ってみたいけどいつ会えるんだ？

「夜じゃないと起きてないから見れないよ。どうしても会いたいなら夜に森の中にある小屋に来てくれれば会えるけど」

へ〜。特技は何かあるの？

「何も無いかな〜？譲葉より料理には自身あるけど」

「・・・」

・・・何か冬夜が後ろで怒ってるけど・・・。

夢幻とはどういう関係だ！？

「どうも無いよ、面白いから一緒にいるだけ」

じゃあ付き合ってください！

「ヤダ」

翔輝に質問していた生徒達は普通にそれを聞いて楽しんでいた（？）が、譲葉とウルに質問していた生徒達は基本的に全滅した。

そんな質問攻めにあっているうちに昼休みは終了した。昼食を取れなかった翔輝は授業中に隠れて食事、譲葉はいつもと変わらずに授業を受け、ウルは腹の虫を鳴らしながら机に突っ伏して午後の授業を過ごした。

第34話 昼休み（後書き）

「ううゝ・・・おなか空いたよゝ・・・」

「知らん」

「何さ、翔輝だつてご飯食べてなかったでしょ!？」

「いや、俺は食つたぞ？」

「嘘だね!翔輝も一緒に質問に答えてたもん!」

「だから授業中に食つた」

「ええええ!？だめだよ、そんな事しちゃ!それに授業中に寝るのもダメ!」

「翔輝さんに何言つてもだめですよ、あっちの学校でもしよつちゆうそつ言つこととしてましたから」

「えゝ・・・」

「ホントにあれはどうにかして欲しいんですけどねえ・・・。まあ無理だと思えますけど」

「だね・・・」

第35話 依頼室（前書き）

すいません、スランプ+学校・宿題が忙しいの二乗効果で更新できませんでした・・・。

金曜日から冬休みなので、多少は更新速度が上がると思います。目指すは冬休み中に最低5回の更新です。

第35話 依頼室

「終わった〜！」

と言うわけでウルさんの言ったように今日の学校は終了です。皆さんお久しぶりです、譲葉です。

ん？お久しぶり？何ででしょう、なぜかそんな気がします。

あ、ちなみに今は教室内にいます。放課後なので基本的には誰もいませんが、まだゆつくり帰りの支度をしている方や友達と話している方も教室に残っています。私達は後者ですね。

「やっと終わった・・・」

「翔輝さんずっと寝てたじゃないですか・・・」

「何言ってるんだ、学校で寝るのって結構しんどいんだぞ？」

「え、何で？学校で寝れるんだからいいんじゃないの？」

「学校の机ってバカみたいに寝にくいんだよ。今も体がそこから痛いし・・・」

「・・・それってさ・・・あれ、何だっけ？えっと・・・じ、自爆自殺？」

「何だその殺伐とした四字熟語」

「自業自得、ですよ。心配しなくても言いたいことは分かります」

「ん〜・・・、やっぱり僕バカなんだね」

「そりゃそうだよ」

「うう・・・」

「翔輝さん、酷いですよ？第一翔輝さんだって人の事言えないじゃないですか」

「いくらなんでも自業自得くらいは知つとるわ、日本人として」

「まったく、相変わらずあんたは子供みたいなやり取りしてるわね。

あ、譲葉、ウル、お疲れ〜」

「あ、エミーさん」

まあ案の定と言うか何と言うか、エミーさんが翔輝さんにだけ毒を吐きながら近付いて来た。

ん、翔輝さんのこと嫌っているようで結局私達と遊びに来るからホントに嫌ってるわけじゃないと思うんですけど、やっぱり来ると毒吐くんですよねぇ……。

何でしたっけ、確か漫画とかだとこういうキャラクターに何か特定の名前みたいのついてましたよね？と思ってしばらく考えてたんですけど、出てこなかったので翔輝さんとウルさんに聞いてみました。

「あ、そういうええなんかあったな。何だっけか？」

「漫画でエミーみたいな子って好きの裏返しみたいになってる子って事でしょ？そういうええよくいるね、何だっけ？」

「ツン何とかだったと思うんですけど……」

「ツン……ゴリ？」

「いやそれ地名です」

「ツンドラじゃなかったっけ？」

「それはツンドラ地帯の事でキャラクターのことじゃありませんよ」

「何だっただっけね……」

「ちょっと、あたしそっちのけで話進めていいと思ってるわけ？」

「ダメか？」

「ダメに決まってるでしょ！？まったく、せつかく人が親切にしてあげようとしてるって言うのに……」

「何の事だ？」

「あんた達この学校の構造も仕組みも全然分かってないでしょ？だからあたしが案内してあげようと思って」

「ほ、そりやまたどんな心境の変化だ？」

「か、勘違いしないで！あ、あたしはあんたを認めただけじゃないのよ！？あたしが案内しようとしているのは譲葉とウルだけ！ま、ま

あ着いて来たいなら来てもいいけど・・・」

そう、これですよこれ。いつもツンツンしてるけど時々デレっと・・・あれ？

「ツン・・・デレ？」

「「それだ！」」

「へ？な、何？どうしたの？」

「そつだそつだ、よく思い出したな」

「譲葉すごい！さすがあつちの世界で一番頭良かっただけあるね！」

「いえいえ、それほどでも・・・」

「ね、ねえ、何の話？」

「お前の性格のめんどくささの話」

「なんですつてえ！？」

「翔輝さん、あなたはいつも一言も一言も足りませんね・・・」

「わざとだ、わざと」

「めんどくさい事嫌いなくせにそう言うことはするんですね・・・」

あれですかね、めんどくさいのは嫌いだけど面白いことのためならどんな努力もいとわないとかそう言う事ですかね？

まあとりあえずそれは置いておいてですね、ここは皆さん満場一致でエミーさんのご好意に甘えて案内させてもらうことになりました。基本的に外見は翔輝さんが言っていた様に、本当にノートルダム聖堂を十個並べたような見た目をしていて、あつちの世界じゃ信じられないほど大規模な学校です。というかこれあつちに会ったら普通に世界遺産じゃないですか？

しかしそれ以外は比較的普通で、中身は結構日本の大学に似てますね。広い講堂にの前方に教壇があつて、そこから段々に一本につながった席が10列ほどあります。こんな説明で分かりますかね？分

からなかつたらなんとなくイメージしてくればいいです。
と言うか単純計算でこの学校の一教室50人くらい入るんですが、
その教室がノートルダム聖堂十個分に敷き詰められてたら相当な数
ですよ？何千人単位なんでしょうか・・・？
まあ他にはどの学校にもあるような職員室、保健室などがありました。
ただ、一つだけ気になったのが・・・。

「じゃあ最後はここね」

「・・・ここは？」

「依頼室よ」

「依頼室？」

「うん。あれ、知らないの？」

「知らん、あつちの世界には無いからな」

「へへ。依頼室っていうのはそのまんま依頼を受けれる部屋よ」

「だから依頼って何だよ？」

「依頼は依頼よ。世界中から依頼が来て、それを受けられる部屋」

「具体的に依頼って何なんですか？」

「ホントに様々よ。物資調達、移動中の護衛、盗賊の討伐、暗殺・
・・・色々」

「何かありきたりですね。どんなRPGですか？」

「これが全部RPGだったらどんなに楽しかったか・・・。ホント何
なんだよこの世界？」

「あたしに言われてもねえ・・・」「僕に言われてもねえ・・・」

「同時に答えんな」

要約すると・・・なんでしよう？何でも相談・解決所みたいなもの
ですかね？はい、全然要約できてませんねすみません。

「・・・なあ、これって試練に入るのか？」

「へ？あ、ああ、どうでしょうね？」

「ん〜・・・帰ったらマリーちゃんに聞いてみようよ」
「試練？」

「その事に関しては後でテリアさんに聞いとけ」
「何で今説明してくれないのよ？」

「「めんどくさいから」ですよね？」

「やかましい勝手に人のセリフにかぶせるな」

「失礼しました」

「ふ〜ん。まあいいわ、じゃああたし今日はもう帰るね。また明日」

「あ、はい。今日はありがとうございました」

「エミー、ありがとうね！」

「どういたしまして。・・・で？」

「・・・ん？俺？」

「そうよ俺よ。あんたも何か言うことないの？」

「ああ、何だよ、んなことか？はいはい、感謝しますよ」

「心こもってないわね〜・・・」

「こめてるこめてる。んじゃ、また明日な」

「もういいわよ、まったく〜。。。また明日〜」

一度ため息をついてエミーさんは一人で帰路に着いた。

「それじゃあ私達も帰りましょうか」

「やつとか、もう夕方近いぞ」

「この学校無駄に広いからね〜・・・」

「無駄に」は余計だと思いますが、広いということには同感です。

その後、私達は森の中を今日の感想を言い合いながら歩いて小屋に帰りました。そして小屋にて、翔輝さんとマリーさんの会話です。

『え？学校の依頼？』

「ああ、あの依頼って試練のうちにカウントされるのか？」

「ん〜・・・、じゃあ事前に私に依頼内容を教えてくれればこつちで検討しておくよ」

「って事は可能性はあると?」

「そうだね。ついでに成績若干上がるし報酬ももらえるし一石二鳥じゃん」

「・・・なあ、依頼受けて外出中の間って出席どうなってるんだ?」

「え?ああ、それは「依頼」「授業」だから出席扱いになるよ」

「ふ〜ん・・・」

「・・・何故でしょう、何かとてつもなく不安がするんですが・・・。
これは今後、監視する必要がありますかね・・・。」

第35話 依頼室（後書き）

「しつかりしろよ」

返す言葉も・・・

「バカ、のろけ、サボり魔」

「最後翔輝さんが言いますか？」

「つて言うか言い過ぎだろコノヤロー」

「で、実際どうなのよ？まずいのか？」

・・・若干。でもまだ休載するほどじゃない

「単に更新ペースが落ちると？」

「読者様には申し訳ありませんが・・・」

「まあしゃあねえよ、さすがにこっち優先して成績落ちるのまずいし」

「おお、翔輝さんが学校関係でまともなことを言ってるのを今始めてみました」

「やかましいわ」

「と言うわけで今後（冬休み後）も若干ペースは遅いと思いますが、ご了承ください・・・」

追記：

実は作者は「ツンデレ」という言葉の意味を最近まで知りませんでした。そこで知ったエピソードをここで紹介させていただきます。

（なんとなく面白かったから）

ツンデレという単語自体は何度か見た事があったのですが、意味は知りませんでした。すると先日、学校で外国人の友人が何故かツンデレの話をしていて、意味を尋ねたら「え、ツンデレ知らないの！？ホントに日本人！？」と言われました。とりあえずその外友人（外国人の友人の略）よ、お前は日本人を誤解している、と思うのは

俺だけですか？；

まあそう言うわけで覚えた単語ですので、せっかくだから使ってみようと思ったわけでしょう。

・・・後書き長くなってしまいました・・・では次回。

第36話 狼なんですけど・・・（前書き）

さて、冬休みです

気が抜けました、今日も午後2時まで爆睡してました
やっぱりぐっすり寝るっていいですね〜

第36話 狼なんですけど・・・

「ん」

「・・・なにかしら、この手は？」

はい、譲葉です。え、現在火曜日の放課後、つまりこっちの学校二日目なんですが、私達は今昨日エミーさんに教えていただいた依頼室とやらにいるんですが・・・。

中にいた担当の先生に翔輝さんが黙って手を出して、「ん」とだけ言っただけです。先生も困ったような顔をして、どうしていいかわからないような様子ですけど・・・。

あ、ちなみにウルさんは今エミーさんに勉強見てもらってます。

「翔輝さん、いくらなんでも説明不足じゃないでしょうか？」

「そうか？ここに来て手を出したら一つしか意味無いと思うんだが」

「まあそれもそうね。依頼の受注かしら？」

「ああ、何か無いか？」

「そうねえ、今は特に無いと思うけど・・・。あつ」

「何かいいのがあったんですか？」

「ええ、一つだけあったわ。結構前からあるんだけど、皆怖がって受けてくれないのよ」

「そうなんですか。・・・え、怖がって？」

「うん、怖がって」

「・・・なあ、その依頼の内容って何なんだ？」

「ああ、まだ言っただけだったわね。依頼の内容は幽霊退治ね」

「ゆ、・・・！」

「幽霊退治？」

「ええ、まあよくある『学校の七不思議』みたいなものよ。毎日真夜中に幽霊が学校の中を徘徊するらしいのよ」

「あ、ありえませんがそんな事・・・」
「ん、でも目撃者結構いるのよ。あなた達誰か仲いい子いる？」
「え、エミーさんとはまあ仲がいいですけど・・・」
「エミーか、エミーもその一人だから話聞いてみれば？」

と言うわけでエミーさんの所に話を聞きに来たんですが・・・。

「違う違う！こうやって座って・・・！」

「え、こ、こうっ？」

「お尻もつと下げて！ほら、尻尾もちゃんと出す！」

「し、尻尾も？」

「そうよ！ああこら！耳引っ込めないの！」

「だって人間の姿のほうが動きやすいんだもん・・・」

「ダメ！ちゃんとしないと出来ないの！ほら、準備いい？せいの！」

「「ニヤ」オ・・・」

・・・何か教室で猫の鳴き声講座みたいのやってるんですけど・・・。

と言うかエミーさん？ウルさんは猫じゃなくて狼の獣人だったと思うんですけど私の記憶間違っていましたか？

それにウルさんも何で素直にやってるんですか？あなた狼ですよ？間違っても猫の鳴き声は出せませんか？

「だから違っつて！」

「うう、ごめんなさい・・・」

「・・・何やってんだお前ら」

「あ、翔輝。おかえり」

「見れば分かるでしょ？猫の鳴き方講座よ」

ホントにそう言う題目だったんですか？

「いや、ウルは狼だぞ？狼は遠吠えだろ？」

「あ、それは僕得意だよ？」

「いや知ってるよ。ってか何でお前はお前です直に講座受けてんだよ？」

「それに二人とも勉強するんじゃないですか？」

「いや、最初はそうだったんだけどさ……」

「だから、ここはこの公式を使って……！」

「分かんないよ……」

「何だよ？こんなの数字当てはめて解くだけじゃない？まったく、

あんたもうちよっとしっかりしなさいよ……」

「しっかりしてるよ」

「嘘つかないの、全然何も出来ないじゃない」

「そんな事無いよ！」

「って言うかそもそもあんた獣人でしょ？何で人間みたいなカッコしてんのよ？」

「だ、だってこっこのほうが動きやすいんだもん！」

「そんなの知らないわよ！少しは獣人らしくしなさい！」

「じゅ、獣人らしくって何さ!？」

「例えばほら、鳴き声とか」

「できるもん！」

「じゃあちよっとやってみてよ」

「いいよ？いくよっ」

「とういうわけよ」

「どういうわけだ？そこから何をどうやったら猫の鳴き声講座になる？」

「いやね、僕が遠吠えしたらエミーが『そうじゃないわよ！』とか何とか言っただけでいつの間にかこんなことに……」

「いや、だからウルさんは猫じゃなくて狼ですからね？何度も言いますけど……」

「と、ここに来た本来の目的忘れてました。ん、まあ聞きたくはないんですが、本当にその幽霊とやらを見たかどうか聞いてみたいと……」

「あ、そういえばエミー、お前この学校で幽霊見たってホントか？」

「え？ああ、その話？見たわよ……」

「見たんですか……」

「あ、あれ、譲葉？どうしたの、そんなブルーになって……」

「こいつ幽霊苦手なんだよ」

「そ、そんな事ありません！ただ存在を認めてないだけです！」

「はいはい、そうですね」

「ば、バカにしていますね！？ホントに怖いわけじゃないんですからね！？」

「も、ケンカならどっか他のとこでやってよ。で、結局それが何なの？」

「いやな、依頼受けにいったんだけど残ってたのが学校にいる幽霊の退治なんだってさ。で、担当の先生がお前幽霊見たことあるから聞いてみるって」

「ああ、そう言うことね。見たことあるわよ、結構前だけど」

「へ。じゃあそれ受けてこよ」

「軽っ！？そんな軽い気持ちで受けちゃダメです！」
「別にいいだろ、たかが幽霊退治くらい」
「ダメです！やるならもつと真剣に！ちゃんと除霊用の道具とかを用意してフル装備で行かないとダメです！」
「・・・あのさ、そんなに怖いなら別に来なくてもいいんじゃないか？」
「こ、怖いんじゃないやありませんっ！私はただ何があってもいいように念を入れてるだけです！」
「譲葉の怯え方も結構斬新ね」
「面白いよね〜」
「そこ！面白くありません！そしてその隣もそういうこととは言わなくていいんです！」
「はい、じゃあ行く人挙手〜」
「私は行かないわよ、バカバカしい・・・」
「行くの夜だね？ミラが何て言うか分からないから何とも言えないなあ・・・」
「って事は今確定してるのは俺だけか・・・」
「だから私も行くって言ってるじゃないですか！」
「じゃあとりあえず帰ろうか？」
「ええ、とりあえずあたしは帰るわ。また夜にね」
「うん。・・・え？」
「あ、いや、そ、そうじゃなくて！き、気が向いたら行ってあげてもいいわよって言っ・・・」
「・・・ふふっ、絶対来るくせに〜！」
「ちがつ・・・！ふんっ！絶対に行かないんだから！また明日！」
「うん、じゃあね〜」
「いやホント、無理しなくていいぞ？」
「だからあああああ！！！！」

と言っわけで夜になりました。ウルさんも眠りに就き、今はミラさんが表に出ています。・・・こういう使い方で会ってるんですかね？で、あまり期待しないで、と言っか翔輝さんを止めてくれるのを期待して同行してくれるか頼んだところ、快く了承しちゃいました。本人曰く「何か面白そうだからね」らしいです。とりあえず恨みま

す。
「何時出発？」

「11時。幽霊は12時くらいに出るらしいからな」

「了解。で、譲葉大丈夫？」

「だから大丈夫ですってば！」

「母さん、あたし今夜ちよつと出かけてくるから」

「ん？どこに？」

「学校。ちよつと友達が幽霊退治の依頼受けたみたいだから手伝ってあげようと思って」

「ふ〜ん。あ、もしかして翔輝君？」

「な、ちがつ・・・！」

「あら、凶星？もしかしてあなた・・・」

「そ、そんなんじゃない！とにかく行ってくるから！」

「そんなに動揺しなくてもいいじゃない。って言っかバレバレだし」
「」

「・・・！もっつ！知らない知らない！」

エミーは顔を真っ赤にして階段を物凄いスピードで駆け上がって行

った。

「ん、ホントにそう言う気持ちがあるのかどうか知らないけど、とにかくいいお友達が出来たみたいね。良かった良かった」

第36話 狼なんですけど・・・（後書き）

先日ユニークアクセスが5000人を突破いたしました！
ありがとうございます、これも読者の皆様のおかげです！
これからも頑張りますので、どうぞよろしくお願いします！

あ、あと感想、評価、指摘などありましたら御遠慮無くどうぞ。
まあユーザー登録しなきゃいけなくなりましたので難しいとは思いますが、来ると物凄くテンションが上がるので出来ればお願いしまっ！

それではまた次回お会いしましょう

第37話 幽霊の事情（前書き）

今回ありえない長さになりました。何と5000文字越えです；いや、そろそろクリスマスじゃないですか？だからそれに合わせてクリスマス関連の話をしようと思ってるのでこの依頼編を終わらせたくて1話にまとめたらこんな長さになっちゃいました

ついでにここで自分の逃げ道絶つときます。えゝ、明日明後日明々後日、つまりクリスマス当日までは毎日更新します。ええやってやりますとも！あ、ちなみに全部クリスマス関連なので戦闘なんかは全くありませんがご了承ください

第37話 幽霊の事情

えと、初めまして、エミーです。今回初めてのあたし視点なので若干緊張してます。

前回バカ翔輝が幽霊退治の依頼を受けたので、しょうがないからあたしが手助けするために今から学校に向かうところです。

いやね、譲葉もウルもいるから大丈夫なんだろうけど・・・さ？その・・・ひ、暇だったし手伝ってあげようと思って・・・。

べ、別に寂しいとかそう言うわけじゃないのよ！？違うからね！？決してそう言うことではないからね！？

ってあたし何必死になって色々言ってるんだろ？まあいいや。

とまあそう言う理由で今学校に向かおうと思ったんだけど・・・。

「やばっ、そういえばあたしみんなが何時に学校に来るのかわらない・・・」

今が8時でしょ？ん、こないだあたしが見たのが10時辺りだったから、ちよつと早めに行くとして9時半くらいに出発でいいかな？
・・・ってあれ、ちよつと！あたし視点ここだけ？ちよつ、まっ・・・！

どうも、翔輝だ。えっつと、現在時刻は11時半。まあ幽霊なら当然真夜中だろって事で、ここから学校到着まで30分はかかるから今から小屋出て学校着くころにはちよつど12時。完璧

「おっい、そろそろ出るぞ？準備いいか？」

「準備はいいですけど何でわざわざこんな時間に行くんですか？こんな昼間行けばよかつたんじゃないですか？」

「讓葉、怖いのは分かるけど昼に幽霊が出るわけないでしょ？」

「こ、怖いわけじゃありません！ただこういうめんどくさいのは早いうちに終わらせてしまおうと・・・！」

「分かった分かった。どうでもいいからとつと行くぞ。間に合わなくなるだろ」

「何に？」

「真夜中に」

「何でそこにこだわるんですか？」

「だってほら、肝試しつつたら真夜中が基本だろ？」

「翔輝、これはあくまで学校の依頼だって事を忘れないようにね？」

「でもモチベーションは上がらねえな、マリーの奴も試練にはならないって言ってたし・・・」

「そりゃこんなしょぼい依頼じゃ試練になるわけないでしょ？ゴチャゴチャ言っていないでさっさと行くわよ？」

と言うわけで出発です。

とりあえず依頼内容を適当に説明しておくとな、数週間前学校の窓に何か白い人影を町の住人が発見した。

翌日、その噂を早々に聞いた生徒数人が幽霊を目撃。そのさらに二日後、残業していた職員二人も目撃した。

そして二週間前、学校に忘れ物を取りに侵入したエミーが幽霊を見、ついでに話しかけられたらしい。その後速攻逃げたらしいが・・・。

まあそんな感じで結構な目撃者がいるから確かな情報だろうと言う事で幽霊退治の依頼が先週からあったのだが、皆意外と怖がって誰も受けなかつたらしい。

とりあえずはこんなとこだ。あとは知つての通り、入学してきた俺達はその依頼を受けて今に至ると言うわけだ。

さて、と言っわけで学校到着です。って何か校門に猫耳みたいのと尻尾生やした人影が。あれって……。

「あれ、エミーさん？」

「……あ、翔輝！」

おお、やっぱりエミーだったか。って……。

「なあにやってたのよ〜！」

「げふっ!？」

俺に気付いて多分3秒もしないうちに腹に物凄い強烈なストレートを喰らった。って言うかもうほとんどボディブローだろこの威力。って冷静に状況説明してる場合じゃねえな……。

「何しやがんだコノヤロー!？」

「あんたは何してたのよ!？今何時だと思ってるの!？」

「普通に真夜中だろ？」

「何で真夜中に来てんのよ!？」

「真夜中に幽霊退治で何が悪い!？讓葉みたいに昼の来いつてか!？」

「誰も昼に来いとは言ってないでしょ!？昼じゃなくたってもうちよつと前に来てくれたっていいでしょ!？」

「って言うかそもそもお前は何やってんだここで?」

「うっ、それは、その……」

「もしかして寂しかったんですか？」

「……!ち、違うわよ!？そう言うんじゃないやなくて、その、暇だったから、そう、暇だったから来てあげたのよ!」

「そ、そうですか?そ、そんなに必死に否定しなくても……」

「で、ホント何しに来たんだお前?ついでに何時からここにいた?」

「ん・・・じゅ、10時くらい・・・」

「バカだろお前」

「う、うるさあい！！手伝いに来てあげたんだから感謝しなさい！」

「手伝いに？お前バカバカしいとか言っただけじゃなかったか？」

「き、気が変わったの！」

「分かった分かった、分かったからちよつと黙れ俺がうるさいし近所迷惑だ」

「あ、それは普通にゴメン近所の皆さん」

「俺には当然のように詫びないのか」

「詫びるわけないでしょ？」

「だろうね。まあとりあえず俺達が心配になつて来てくれたと」

「か、勘違いしないで！心配してきたんじゃないやなくて暇だから来ただけなんだからね！？」

「はいはい、だから怒鳴るなって・・・」

まあと言うわけで俺、譲葉、ミラの三人に何故かエミーが加わり、俺達は幽霊退治に繰り出すのであった・・・。

さて、学校に入った直後の会話からどうぞ。

「・・・初めまして？」

「ええ、初めまして」

「あんたがウルの言つた夜の人格？」

「まあね。で、あなたがウルの言つたツンデレの子？」

「はい？ツンデレ？あ、あたしが？」

「さっきの会話からしても間違いないと思うけど」

「まああなたが間違っただけではないけどデレは無いわよ?」

「それは何? ツンになるの?」

「それでいいわ。で、あんたはヴァンパイアなんだっけ?」

「そうよ、とりあえずあんまり会う事ないと思うけどこれからよろしくね」

「こちらこそ」

「挨拶終わったか?」

「たった今ね。どう、何かいた?」

「なんも。エミー、お前幽霊どこで見たんだ?」

「あたしが見たのは教室の前の通路よ。でも最初の人はステンドグラスの下の窓の近くにいるのを見たし、先生は職員室の前にどこにでも出るのよ」

「って事は手分けして探したほうがよさそうだな」

「ててててて手分け!?!」

「今何回? て? 言った?」

「って言うか譲葉さつきから無口すぎ。ビビリすぎよ」

「び、ビビってません! ただあれです、夜の学校も新鮮だな　って
!」

「これが学校に見えるのかお前は。スゲーな、俺には呪われた神殿
か何かに見えるぞ」

「そう言うこと言わないでください!」

「ビビってないんじゃないのか?」

「ビビってないですよ」

「じゃあ何で呪われた神殿とか言っちゃダメなんだ?」

「それは・・・あれですよ、何かあったときビックリしちゃうじゃないですか」

「幽霊が出る以上にびっくりすることって何だ?」

「あ、あれですよ、翔輝さんの首がいきなり吹き飛ぶとか・・・」

「お前はそう言う物理的なのより精神的なのほうが苦手だろ。」

影機という名前のカメラを使う数字がタイトルの某ホラーゲームみ

「たいな「その話題を出さないでええええ!!!」おお、相当な下
ラウマみたいだな」

「と、とにかく幽霊を探してとっとと帰りましょう!」

「はいはい。じゃあとりあえず、分かれるぞ」

「や、やっぱり分かれるんですか・・・?」

「だってその方が効率いいし」

「で、でも危険じゃないですか?」

「うるせ〜な〜。。。じゃあ二人一組でいいだろ?」

「そ、それなら構いませんが・・・」

「じゃあ組む奴らはお前が選べ、めんどくさいから」

「あ、じゃあ翔輝さんと私で」

「決断速っ」

「そんなに翔輝と一緒にいきたいわけ?もしかして譲葉・・・」

「ち、違いますよ!?そう言うんじゃなくて、ただ単に翔輝さんと

一緒なら翔輝さんを盾にして逃げられるから・・・!」

「オイ」

「まあいいわ、じゃああたしたちはあっち行くから・・・」

「私達はそっちに行きますね」

「いやそれじゃ二手に分かれる意味がないじゃない」

「いいじゃないですか、皆仲良く行けば」

「お前話の流れぶった切り過ぎだ」

「と、とにかく!行きましようよ!」

「あれ、これって結局そうなる流れ?」

「そうらしいわね、まあ譲葉と一緒にいるんだからこうなると思っ

たけど・・・」

「譲葉っていつもこうなの?」

「まあ俺達の世界にいたときからこうだ、こいつは」

「ほら、早く行きましようよ!あ、翔輝さんは常時私のそばにいて

くださいね?」

「盾にできるからか?」

「当然でしょう?」
「即答だな」

まあ何でもいいや、とにかく幽霊探し開始です。

『・・・あの〜・・・』

・・・あれ、早くも発見か?

「あれ、あんたはいつぞやの」

『・・・あゝあゝあゝあゝ!!!』

何だこの・・・エルフ?の幽霊、ミラの顔見て断末魔のようを叫びを上げた。

・・・あれ、俺こいつに会ったことあるな、いつだっけ?

「・・・ちよつと翔輝」

「ん?」

「譲葉」

「・・・あゝ」

すげえ、譲葉がこの世の終わりみたいな顔してる。久々に見たな、こいつのこの顔。

最後にこの顔見たのは・・・あのゲームやったとき以来か。何だかんだ言っつて最後までやるこいつは律儀?だよなあ・・・。

「い・・・」

「い?」

「いやああああ!!--!!」

「ぐえっ!!--?」

いきなり腹に正拳突きを喰らった。正直さっきのエミーのボディブローより効いた……。
と思っただら直後に力一杯抱きつかれた。何この飴と鞭？それともあれか、エミーとは一味違ったツンデレか？

「・・・何がしたいんだお前は？」

「その場の勢いで行動してます」

「意外と冷静だな？」

「こつちの世界に着てからいろんなことがありましたからね。一瞬驚いても昔よりは多少れいしえいに対処できます」

「れいしえいに？」

「・・・噛みました」

「結局最終的に分かりやすく動揺してんのな」

まあでも昔よりは確かにマシか。あつちの世界であるゲームやった時は三途の川を見たからなあ……。

「で、何でこの間私を脅かした幽霊さんがここにいますか？」

「ん？・・・ああ、そう言えば……」

なるほど、だから見覚えあつたんだな。

ん、あの人悪い人じゃないはずだから説得すれば普通に帰ってくれないかな？

・・・試してみるか。

「あの……」

『ああ、はい？あれ、あなたは……』

「どうもです。こないだミラのいたずらに使われてた幽霊だよな？」

『あなたは……顔が真っ黒だった方ですか？』

・・・そう言えば俺はそんな状態だったな。

「まあそんな時の話はどうでもいいとして、何でここにいるんだ？」

『それは・・・その・・・』

「・・・ゴメン、ちよつといいかしら？」

「ん？何だよ」

「あたしが見た幽霊って女の子の霊だったんだけど・・・」

『！ホントかい！？』

「きやつ！？」

『あ、ああ、ゴメン・・・』

「ど、どうかしましたか？」

『じ、実は・・・』

と言うわけでここからはちよつと長い話が続いたので俺の要約でお楽しみください。

まあ要するにこの人（生前は18歳らしい）が死んだのはつい2ヶ月前程らしい。で、この人には生前恋人がいて、その人と一緒になんやかんやで死んでしまったと。

それでもって霊になったらあら不思議、彼のそばに彼女はおらず、この人はこの人である森で迷子になっているところをミラに拉致られ、解放されたところからウロウロさまよっていると学校に着きそこで彼女を探していた、と。

それでさまよってる間に会った人に彼女のことを知らないかと聞いて回っていたが、皆話を聞く前に怖がって逃げてしまったので行方が分からなかったから今エミーが女の霊を見たという言葉に反応したわけなんだと。

・・・こんなもんか。

『それで、その女の子の霊というのはどこで・・・？』

「あたし達の教室の前の通路よ。教室番号は107号室よ」

『え、107号室・・・?』

「その教室がどうかしたのか?」

『いえ、ただ・・・その教室、僕とリサが初めて会った場所だから・・・』

「え〜と・・・お、いたいた」

『・・・リサ?』

『あ・・・ライアン・・・!』

間違い無いっばいな。二人はお互いの姿を確認するなり走り寄って相手を力の限り抱きしめた。

「恋人で間違いないか?」

『はい!ありがとうございます!』

「別に大したことしてないだろ?まあとりあえずこれで一件落着だな」

「お二人はこれからどうなさるんですか?」

『とりあえずはもうちょっとこっちの世界を満喫して成仏、ですかね?』

「そうですね。あちらでもおしあわしえに」

「おしあわしえ?」

「・・・噛みました」

「結局最後まで慣れないと・・・」

「う、うるさいです!」

『本当にありがとうございます、それでは』

「達者でな〜・・・」

二人は最後に俺達に一礼し、二つの小さな人魂になってやがて姿を消した。

「……いい話ですね……」

「ホントにね。あゝあ、あたしもあんな恋したいわ」

「確かにそうだけどさ……」

「……ん？どうかしたか？」

「……身近にいる男子がこいつだけって……はあ」

「失礼だなコノヤロー」

「まあ何はともあれ終わりです。帰りましょう」

何か極めて心外だがとりあえず依頼は完遂したので、ついでに眠いので譲葉に黙って賛成する。

時計を見ると時間は午前1時を回っていたのでエミーを家まで送り届け、俺達も家に戻る。よし、明日は堂々と寝れるな。もちろん授業中に。

第37話 幽霊の事情（後書き）

（後日談）

「ほら譲葉、森に例の葉っぱ取りに行くわよ？」

「い・き・ま・せ・ん！行くなら翔輝さんを連れてってください！」

「ワガママ言わないの。こないだの依頼で慣れたでしょ？」

「慣れません。全然慣れません」

「あの時は結構大丈夫そうだったじゃないの」

「あの幽霊さんたちは優しそうだったから大丈夫だったんです」

「幽霊が全部有害って考え方はどうかと思うけど・・・」

「とにかく行きません！絶対に行きません！」

結局譲葉の恐怖症は治らなかつたとき。

第38話 プレゼントを求めて(前書き)

すみません！今回ふざけんじゃねえぞつてくらい短いです！

ちよつと寝坊してしまつた(午後2時起床) + MGS4に普通に熱中してしまつた + 行き当たりばつたりで書いているの三重苦でこれが限界でした・・・；

あ、明日はこういうことが無いように注意します・・・。ホントに申し訳ありません・・・

第38話 プレゼントを求めて

どうも、譲葉です。今日は水曜日の放課後で、今私とウルさんは校門の前でブラブラしています。翔輝さんはいに先生に呼び出され、エミーさんは用があるとの事で先に家に帰られました。

え、まず何から話しましょうか・・・。

とりあえずついさっき知ったのですが、もうそろそろクリスマスらしいですね。

そういえば最近寒くなってきたなとは思ってたんですが、先日学校に行くまで全然気付きませんでした。だってウルさんの小屋にカレンダー無いし、こつちの世界に来てから学校で見るまで一回も日付を確認してなかったものだから・・・。

って言うか私達学校通い始めてたった1週間で冬休みなんですけど、これいいんですかね？

「雪降ってきたね」

「今年はホワイトクリスマスになりそうですね」

「ほわいとくりすます？」

「雪の降っているクリスマスの事ですよ」

「へ」

それにしてもクリスマスか・・・。私も一応翔輝さんに、じゃなくって皆さんにプレゼントしてあげた方がいいですかね？

お金は・・・まあこの間の依頼の報酬金の範囲内で何とかなりそうですね。じゃあちよつと買物にでもいきましようか・・・。

「ウルさん、私ちよつと町へ買物に行つてきます」

「え？ああ分かった。じゃあ僕は先に小屋に帰ってるから迷子にならないようにね」

「バカにしないでください」

やっほ、ウルだよ。

今さっき譲葉が買物行くとか言っただけで町のほうに行きました。

ん、まあ僕も小屋に帰るなんて言っただけ、実は僕も買物して帰ろうと思っただけだよ。

だってホラ、そろそろクリスマスでしょ？今年のクリスマスは翔輝、譲葉、それにエミーもいるからいつもみたいに一人ぼっちのクリスマスじゃないよ！

あ、楽しみ！というわけで、僕も買物行ってこよう！

あ、皆さんどうも、エミーです。

さっき学校が終わってからとりあえず翔輝達と分かれて家に帰るって言っただけ、そろそろクリスマスだしね。

まあなんだかんだで結構一緒にいるし、何もあげないのはちょっとまずいわよね。。。

ん、やっぱクリスマスって言ったら普通に手袋とかマフラーとかかな？

ちょっと高くなっちゃうかな。。。でもまあそこは父さんにお願ひすればお小遣い少しはもらえるかな？

よし、そうと決まったら早速交渉開始ね。

ふあゝ……、やっと終わった。

まあさすがに居眠りばかりかし他のは悪かったか。しゃあないな、次に居眠りするのには冬休み終わってから少なくとも一週間後だな。

あ、そう言えば職員室にあったホワイトボードに12月23日って書いてあったな。って事は明後日クリスマスか。

んゝまあ譲葉には毎年恒例の事だから当然あげるだろ？そんでもってついでにウル、ミラ、エミーの三人にも何かあげないとか。

「……めんどくせ、何プレゼントにすりゃいいんだ？」

まあいいや、何か適当に町回ってよさそうなものを買えばいいだろ。タイピング良く昨日の依頼の報酬金もあるし、それで何とかなるはずだ。さて、とりあえず行くか。

第38話 プレゼントを求めて（後書き）

「譲葉！勉強教えて〜！」

「構いませんよ？何が分からないんですか？」

「全部」

「・・・前途多難ですね。とりあえずじゃあ数学からやりましょう。何か分からない事はありますか？」

「ん〜、九九がいまいち分かんないかな」

「・・・ホントに前途多難ですね」

第39話 それぞれの感想（前書き）

今回会話がない分短く感じるかもしれませんが、これでも2500文字強あります

って言うか時間結構ギリギリでしたね・・・；

第39話 それぞれの感想

と言うわけで町にいます。あ、どうも譲葉です。

え、前回言ったように、皆さんにあげるプレゼントを探しに町にいるわけなんですが……。

「……どこでしょうか？」

「……そこ、「やっぱり」とか言わないでください。

だってこの町ってビックリするほど大きいんですよ。テリアさんはこの間小さな町とか言っていましたけど、普通に広いです。

前回テリアさんの家に行く時、実際は町並みを覚えてたんじゃなくて曲がった方向を思い出しただけだから何とか行けましたが、さすがに目的地も無くブラブラしてたら迷いますよこの町は。

しかも町にある家ってほとんど全部同じつくりしてるから場所の見分けがつかないんですよ……。

まあそういう理由なので恥を忍んで近くににいる人に聞いてみましょう……。

「あの、すみません」

「はい？何でしょうか？」

「この近くにクリスマスプレゼントに贈れるような物を売ってるお店を知りませんか？」

「この近くにですか？だったらこの先の角を左に曲がった先にある洋服屋があります。マフラーや手袋は勿論、アクセサリーなんかも売ってるのでクリスマスに贈るプレゼントにはもってこいだと思いますよ？」

「あ、ホントですか？ありがとうございます」

教えてくれた方に感謝して、私はとりあえず指定された角を左に曲がりそのお店を発見しました。

中に入ると、なるほど確かにすごい品揃えです。

お店のほとんどは服などに埋め尽くされていて、残りはイヤリングやネックレス、アクセサリー類が数多く揃えられているようです。

あ、ついでに言っておくと店中にいる店員さんが皆サンタさんの衣装を着てますね。って言うか何でしょうあの女性店員さんの衣装。

ちよつと説明すると長くなるので一言にまとめて言いますと・・・ミニスカへそ出しサンタ衣装に黒いブーツ、とでも言いましょうか？とにかく女性店員さん達が可哀想に思えてきました。

何と言うか、仮装というよりもコスプレ、って感じがしてきました。って言うかこの二つって何か違いあるんですかね？

でも皆さんかなり楽しそうな顔をしてるので、もしかしたら好きでやってるんですかね？

と、それは置いといてプレゼント選びなんですが、正直言って何にも考えてませんでした・・・。

まあでもこれだけ品揃えが豊富なんですから何とかかなりますよね？それでは早速選んで行きましょうか・・・。

やっほ、ウルですよ。

まあ前回説明したけどとりあえずもう一回言っとくと、明日はクリスマススイブだから何か皆にプレゼントをあげようと思ったから今町に買物に来てます。

って言うかね、それ以前に一つ問題が・・・。

「・・・迷った」

うっ、やっぱり広いねこの町。よくエミーこんなところで遭難しないで生きていけるね〜。
どうしよう、誰かに聞いてもいいけど久々に運動がてら探してみよ
うかな？

と言っわけで色々適当に回った結果、何かすっごい大きな洋服屋さん見つけました。

「うっわ〜、何これすっごいね〜」

・・・あそうか誰もいなかったんだっ。

最近ずつと翔輝とか譲葉と一緒に行動してたから忘れてた・・・。
時々そう言うことあるよね？

さて、じゃあとりあえずここで何か探そうか。結構色々あるし。

ちよつと店内の様子を説明しとくと、服が結構多くてちよつとアク
セサリーもあるみたい。

あとは・・・店員の皆がサンタさんの服着てることかな？女の子の
結構過激な。

何だろうね、ミニスカサンタさんって言うのかな？簡単にエロサン
タ、じゃダメかな？ぶっちゃけそっちのほうがしっくり来るんだけ
ど。

結構かわいいと思うけどね。今度帰るかどうか聞いてみようかな〜？
ん〜、まあそれは今はいつか。とりあえずここでいいものあるか探
してみよっかなつと。

あ、皆さんどもです、エミーです。

えっと、今私は皆にあげるクリスマスプレゼントを探しに来てるん
だけど、どこに行こうか迷ってるどころです。

「ん〜、候補としては結構あるんだけどな〜」

この辺りには結構クリスマスプレゼントになりそうなもの売ってる
お店結構あるのよね〜。

まあでも一番面白いお店でいいかな〜。あそこも結構大きいほうだ
し。

じゃあとりあえずそこに行きましようかね・・・。

と言うわけでやってきました例の洋服屋の前に。

ここはね〜・・・ぶっちゃけあんまり来たくは無かったかな〜なん
て思ったりします。

いやね、別に品揃えが悪いとかそう言うわけじゃないのよ？

たださ・・・店員が独特すぎるのよここ。何かイベントある度にノ
リノリで仮装するのよね・・・。

別にいいんだけどさ、何て言うの、リアクションに困るって言うか
・・・。

しかも何か変なもの売ってんのよねここ、『本日の特売品！』って
書いてあるところに。こないだ来た時は何か2万円位する金ぴかの
服が売ってたし。あれ誰が着るんだろ、マイル・ジャソン？
・あれ、それって誰？

で、今は・・・うわあ、何これ？

何か・・・形容し難いサンタの衣装着た女性店員の皆さんが・・・
何て言うんだろ、エロサンタ？

で、今日の『本日の特売品！』は・・・女性店員の人たちが着てる
エロサンタの衣装ね。どうすんのこれ、何に使うのかな・・・。

でもまあ品揃えは結構いいからとりあえずここで色々見てみようか
しら・・・。

どうも、翔輝だ。

え、めんどくさい先生の説教から開放され、今現在の奴らのクリスマスプレゼントを探して町をさまよっているところです。

しかしこのまま探してもきりが無いな……。テリアのどこにも行っていいと聞いてみるか。

と言うわけでテリアに聞いたらテリアのオススメ店への地図を書いてくれた。

で、それを頼りに町を歩いていると、なにやら大きな洋服屋に着いた。

とりあえず中に入ってみたが……。

「何だここ？コスプレ喫茶？」

何かすげー露出度高いサンタのコスプレした女性店員さんだらけの洋服屋だった。

……テリア、お前のオススメってここか……？

でもまあ……確かに品揃えは悪くないか。服も結構あるしアクセサリーもあるし、とりあえずここで色々揃えられるか。

しかしこの店、目のやり場に困るんだが……。若干恨むぞ、テリア。

さて、それじゃ色々探してみるか。

第39話 それぞれの感想（後書き）

どうも、最近出番が少なくてちょっと拗ねてるミラです。

あ、そういえばそろそろクリスマスね。皆にプレゼントでも買ってこようかしら・・・。

まあ皆寝静まつてるしね。あそこならまだ開いてるかしら？

と言うわけで来てみたけど、相変わらずすごい衣装してるわねここ。今年もエロサンタか。

じゃあ何かいいものあるか探してみましようか。ウル、讓葉、翔輝、エミーの四人でいいかしらね。

第40話 メリークリスマス！(前書き)

かなりギリギリでしたが、何とか出来ました！三日連続更新です！え〜っと、何か色々おかしなことになってますが、とりあえず更新できたって言う事実を重要視していただければ非常に助かります；まあなにはともあれ皆さん、メリークリスマス！

第40話 メリークリスマス！

「と言うわけで第一回……」

「……『第一回』、何ですか？」

「……考えてなかった」

「ダメじゃん」

「やかましい。じゃあいいや、第一回クリスマスパーティー」

「まんまですね」

「やかましい」

と言うわけではない、翔輝です。え、どういうわけかと聞かれたら困るんで聞くな。

とりあえず説明だけすると、現在俺、譲葉、ウル、エミーの四人はテリア宅にお邪魔しています。

まあさっき言ったように要はクリスマスパーティーだ。テリアの家が広いつて理由でここに来てるってわけだ。

え、現在時刻は5時半で帰るのは8時半の予定だ。基本的にウルは7時にミラと入れ替わるから、ちょうど1時間半ずつ過ごせるようにテリアさんが計画してくれた。

「しつつかし、見事に全員プレゼント持ってきたな」

「当たり前でしょ？クリスマスって言ったらプレゼント、これ常識」

「右に同じです」

「だよな？」

「はいはい、そうですか」

まあそんなわけで皆プレゼント持参で来ている。一応ミラにも買ってきたからプレゼント渡しは二回に分けることになっている。とは言っても二回目のはミラに渡すためだけに設けられるので結局プレ

ゼントは一つしかもらえない。

と言うわけで早速パーティー開始だ。まあでも基本的には何をするわけでもない。ただ普通に飯食って普通にいつも通りの話して・・・。ホントにいつも通りだ。

ただ唯一違うことがさっき言った各自が持ってきたプレゼント。これがあるからなんとなくクリスマスって感じがするんだよな。

とまあそんなこんなで時間は飛んであつという間にプレゼントタイム。

「誰から渡す？」

「じゃあ私から渡しますね」

そう言ったのは譲葉だった。まあ口調から明らかだが。

「それじゃあこれは翔輝さんに。これはウルさん、これはエミーさんですね。これはミラさんの分なので、また後ですね」

「あ、すごい綺麗〜！」

「ホントだ、わざわざラッピングしてくれたの？」

「まあ一応人に渡すものですからね。さすがにそのまま渡すのは気が引けるじゃないですか」

「お前はホントそう言うところ律儀だな」

「これは人として当然じゃないですか？」

「そうか？多分この二人もしてないと思うけど」

「・・・」

「・・・いや、あの、二人とも何かすみません・・・」

「俺には？」

「翔輝さんに謝る必要がこの世界のどこにあるんですか？」

「まあ少なくとも今の状況では謝る必要ないな」

「でしよう？さて、どうします？今開けますか？」

「私開けたい！」

「あたしはどつちでもいいけど」

「俺もどつちでも」

「じゃあウルさんが開けたいそうなので今開けましょうか」

と言うわけで開けることになった。

渡された箱は比較的大きめで、綺麗に包装紙でラッピングされている。

「包装紙破いていいの？」

「ええ、構いませんよ。あ、でも翔輝さんは綺麗に開けてください」

「え、何で？」

「なんとなくです」

「いじめ？」

「それでいいです」

「いいのかよ」

しかしまあ譲葉にもらうプレゼントなので、一応譲葉の要求は聞いておく。バカバカしいとは思うが。

え〜っと、ここをこうして……。譲葉の奴、わざとめんどくさくしやがったな……。

とまあそんな感じで3分ほどの格闘の末、ようやく破らないで開けることが出来た。

箱を開けると、中から出てきたのは黒いマフラーだった。……。なんで黒なんだ？普通白とかじゃね？まあ別に何でもいいけど。

「またオーソドックスなモン選んだな〜」

「僕は白い手袋だね」

……え？

「あたしはニット帽ね。って言うかこの耳の部分長くない？」

「・・・え？え？」

「暖かいからいいじゃないですか。さて、じゃあ次は誰ですか？」

「じゃ、じゃあ僕ね。え〜っと、これ翔輝、これ譲葉、これエミ

」。譲葉、これミラが起きたら渡しといて

「了解しました」

と言うわけでもらったのは・・・。

「・・・またマフラー？今度は赤いけど」

「あれ、あたしもまたニット帽だ」

「ご、ゴメンね？かぶっちゃったね・・・」

「・・・え、これまずくね？」

「あ、私はピンクの耳あてですね。ありがとございます」

「そ、それじゃあ次はあたしのプレゼントね。これ譲葉、これウルね。これは・・・ミラのだから、これあんたの」

「名前で呼んでくれねえか？」

「いやよ、プレゼントもらえるだけありがたいと思いなさい」

「言っと思った。とりあえずありがとさん」

と言うわけでもらったプレゼントは・・・。

「・・・今度は緑か？」

「僕は・・・ピンクの手袋」

「私のこれは赤い耳あてですか？見事に全部かぶりましたね・・・

」

「しょ、しょうがないでしょ!? ゆ、譲葉とウルが同じもの買ってくるなんて思ってもなかったんだから!」

「いや、別に責めてるわけじゃないからいいんですけど・・・」

「と、とにかく最後は翔輝、あんたの番よ!」

「あゝ・・・。一応最初に言っとくけど・・・」

「俺のも普通にお前らのと完全にかぶってるぞ」

「」「」「」

「・・・いや、沈黙されても困るぞ? 知らんぞ、俺は。俺はエスパーじゃないんだからお前らが何買ってくるかなんて知らん。」

「・・・何よこれ、イタズラ?」

「何のだよ?」

「・・・運命の?」

「うわっ、恥ずかしい。真顔でそう言うことよく言えるな」

「う、うるさいうるさい!」

「それにしても確かにすごい偶然だね。まさか全員同じプレゼントもらうなんて」

「唯一の救いはそれぞれデザインが違うことですかね」

「まあとりあえず・・・な?」

「そうですね、そういえばまだ言ってますでしたね」

「ああ、じゃあ一応言っとく?」

「クリスマスなんだから言うしかないでしょ? それじゃ皆で、せのっ!」

『メリークリスマス!』

プレゼントは全部同じだったけど、まあ面白かったからいいだろ。

ああそうだ、この後ウルが寝てミラが出てきたんだけど、そんな時の様子も一応書いてくいな。

「ミラさん、メリークリスマスです」

「はい、メリークリスマス」

「ほらよ。あとこれはウルからな」

「皆ありがとね。開けてもいいのかしら？」

「お好きにどうぞ」

「じゃあ遠慮無く・・・」

とまあそんな様子で開けたんだけど・・・。

『・・・』

ん、まあ予想通りと言うか何と言うか、中身は皆揃ってネックレスだった・・・。

何だっけ、意思疎通？ん？何か違ったっけ？まあどっちでもいいんだけどな。

と言うわけで、何かおかしなクリスマスだったけど・・・まあ今までが一番楽しいクリスマスだったな。

第40話 メリークリスマス！(後書き)

「そういえばこないだ作者言っでなかったけど、昨日たしかPVア
クセス50000人突破したんだよな？」

「そうなんです！クリスマスの時期に突破と言うこともあつてなんと
なく嬉しさ2倍です！皆さん本当にありがとうございます！」

「これからも頑張るらしいので、末永く生暖かい目で見守ってあげ
てくださいれば大変ありがたいらしいです」

「ホントにその通りです。と言うわけで、これからもよろしくお願い
します！」

第41話 翔輝の意外な一面（前書き）

更新遅れました・・・すみません

三日連続更新達成したと思って気を抜いていたらいつの間にかこんなに時間経っちゃって・・・

しかも内容物凄くどうでもいいので、タイトルつけるのにすごい苦労しました；

第41話 翔輝の意外な一面

「寒いですね」

「今頃になって雪降ってきたな」

「どうせならクリスマスに降ってくれば良かったわね」

「良くないわよ、降らないのが一番!」

「エミーは猫だから寒いのが苦手なのかしら?」

「わ、悪い!」

「誰もんな事言っていないだろうに・・・」

「うっさい! あんたには聞いてないでしょ!」

「はいはい、でお前は何しに来たんだ?」

どうも、翔輝です。冬休みなんて適当にウルの小屋でダラダラしていたんだが、どういうわけかエミーがここにいる。

ちなみに現在時刻は9時半。そろそろ寝ようかと思っていたんだが、ミラの突然の訪問によってそれを妨害されたので若干不機嫌気味です。

「随分早く寝るんだな」と思ったそのあなたへ。え、早く寝るの理由は簡単、単に暇だからだ。

考えてもみる、ゲームもパソコンも無い世界にいきなり放り込まれたらやる事ないぞ? そうなったらできる事なんて寝る事くらいしかないだろ。

あっちの世界にいた頃は日付が変わるか変わらないかって時間までゲームやってたからな。あ、あ、P Pでも持ってくるんだっ・
。

「べ、別にいつどこに来ようとあたしの勝手でしょ!」

「寂しくなったのか」

「ち、違うわよ! そう言うんじゃない! あんたがどうせ暇してん

じゃないかと思ってわざわざ来てあげたのよ！感謝しなさい！」

「何で俺の安眠を妨害した事に關して感謝しなきゃいけないんだよ」

「このあたしがわざわざ来てあげたんだから感謝するのは当たり前でしょ？」

「感謝する必要なし。ついでに暇だけど寝るといふ大事な予定があるから帰れ」

「嫌よ」

「なんだそれ？さてはお前も暇なのか、って言うかお前が暇なんだな」

「ち、ちがつ……！」

「まあまあ、とりあえず来てくださったんですから、無碍むわいに扱あつかう事もないじゃないですか」

「そうそう、分かったかしら？」

「ったく……。で、結局何しに来たんだお前」

「ん、まあそれは全く考えてないんだけどね」

「おい」

「何よ、別にいいでしょ！？」

「何も考えてないなら来んなよ……」

「だからそれを皆で考えようって言ってるんでしょ？」

「んなこと言われた記憶は無いんだが」

「だから今言っただじゃない」

「……もう好きにしろ」

「そうさせてもらっわ。で、何する？」

「……私は何も提案はありませんけど」

「あたしも特に無いわ」

「当然あたしは無いしこのバカも無いでしょ？……あれ、じゃあ何するの？」

「……お前も帰れよ」

「うるさいわよ！こんな事もあろうかと、人生ゲーム持ってきたわ」「そんなモンまであるのか」

「ホントに色々な物がこつちの世界に来てるんですね」

と言っわけで人生ゲームをする事になってしまった。

いや、実を言うと俺人生ゲーム嫌いなんだよ。何かルーレット回すだけでゲーム進むしサイコロで勝ち負け決まるじゃん。

何でルーレットで勝敗決めなきゃいけないんだ？意味分からん、腕もクソもないじゃないか……。

まあそんな理由で嫌いな人生ゲームはほとんどやった事はない。俺達の世界のゲームのルールをこつちの世界の住民に聞かって言うのは変な感じだな。

さて、始まりましたつまらん人生ゲーム。何故か全員強制参加、それ故俺もやらされている。

「じゃあ私からですね。え〜と……5ですね。」\$300もら

う

「あたしは3。げ、『\$200払う』……」

「あら、あたしは8で『\$500もらう』」

「……『一回休み』」

「あ、言い忘れてたけど最下位罰ゲームだから」

「はあ？」

「何ですかそれ……？」

「また厳しいわね……」

「罰ゲームって何するんだよ？」

「あたしが考えてたのは最下位がトップに恥ずかしいセリフを言うって言うの考えてたけど」

「……ちよつと待て、それって俺が負けるの前提じゃないか？」

「んなこと無いわよ、あんたがトップでもいいじゃない」

「何だそれ。第一内容が大雑把過ぎだろ、具体的に何だよ恥ずかしいセリフって」

「ん〜、例えば告白する時に言うセリフとか、誰かをダンスに誘う

ときのセリフとか、囚われの王女を助けたときのセリフとか」

「お前のセンス訳分からん……」

「何よ、悪い？」

「悪い。それは確実に俺が言う事を想定されているから悪い」

「細かい事は気にしないの。じゃあ続けるわよ」

何だか納得はいかなかったが、譲葉もミラも黙ってゲームに戻ってしまったのでしぶしぶ俺もゲームに戻る。

で、まあ予想通りと言うか何と言うか、少ししてゲームが終わった後に俺の負けが決定した。

「さ、罰ゲームよ」

「……寝る」

「ちよつと待ちなさい！」

「寝る」

「待ちなさいってば！あたしにそう言うこと言うのそんなに嫌なの！？」

え、今回の勝者は会話から察せるようにエミー。

「嫌に決まってるんだろ、罰ゲーム受けるの決まって喜ぶ奴がいるか」

「それは若干正論ね」

「若干って何だよ」

「でもそんなの知らないわよ、罰ゲーム受けるの決まったんだからやって行きなさい」

「分かったよ、で結局何言えればいいわけ？」

「そうね……よし、多数決」

「決めとけよそれくらい」

「私は『ダンスに誘う時のセリフ』が見てみたいです。何か斬新って言うか映画でも私が知ってる限りではそんなに無いシーンです

し」

「あたしもそれが見てみたい気はするわね」

「と言うわけで決定。『誰かをダンスに誘うときのセリフ』、やりなさい」

「・・・了解」

つて言われてもなあ・・・。依然として大雑把過ぎねえか？

それに誰かをダンスに誘った事なんて無いし、何て言えばいいか分からんぞ？

ん〜、適当に言っていればいいなら何となくそれっぽいことを言えばいいんだけど。適当に。

「あ、ちなみに心の底から、心を込めて言いなさい。ちょっとでも手を抜いたとあたしを感じたらやり直しね」

「・・・」

・・・ダメだった。

まあこいつの事だから適当言ったらホントに何回もやり直して言われるだろうし、若干真剣に言つてとつと終わらせるか。

「設定は？」

「だから『誰かをダンスに誘う』」

「じゃなくて、こつ、それにしたって色々あるだろ。学校の企画のダンスパーティーに誘うとか、貴族の間の仮面舞踏会に参加している誰かを誘うとか」

「ああ、それなら・・・後者で」

「はいよ」

俺はそう言ってエミーの前に立ち、右手を差し出して、

「・・・Shall we dance?」

と一言だけ言った。まあ昔なんでか忘れたけど見た映画のタイトルだったりするんだけど、何となくピツタリっぽかったから少しエミの言ったように心を込めて言ってみた。

「・・・これでいいだろ?」

「」「」「」

「・・・黙り込むな、何かリアクション取れよ」

「いや、何て言うか・・・」

「物凄く上手でビックリしたんです・・・」

「へえへ、って事は合格か?」

「く、悔しいけど合格・・・」

「そうか、それじゃあ俺は寝るから。お前もそろそろ帰れよ、テリアさん心配するぞ」

「う、うん」

よっしや、一発合格。とつとと寝よ寝よ、疲れた・・・。

「お、驚くほどうまくいったわね、翔輝・・・」

「譲葉、アイツもしかして俳優か何か?」

「そんなわけ無いじゃないですか。ただまだあれほどめんどくさがり屋じゃなかった中学時代に演劇部に所属してましたから、まあそう言っつのは得意なんでしょう」

「な、なるほどね」

「う、うう・・・。一瞬ドキッとした自分が情けないわ・・・。く、悔しい〜!馬鹿にしてやろうと思っていたのに〜!」

「まあまあ、また今度頑張りましょうよ」

「譲葉、やつぱりあんたはあたしの味方ね・・・！ありがとう、手
伝ってくれるなんて！」

「え？は、はあ・・・」

「よし、負けないわ！今度絶対に翔輝の奴をギャフンと言わせてや
るんだから！」

エミーさんはそう言って小屋を飛び出した。

・・・うぐん、手伝いますよって意味で言ったんじゃないんですけ
どね・・・。

まあそれはそれで面白そうだから別にいいんですけど。

さてと、それじゃあ私も寝るとしましょうか・・・。

第41話 翔輝の意外な一面（後書き）

「町のある店にて」

「そういえばこっちの世界にはコタツ無いのか？」

「コタツ？あるよ、ほらあそこ」

ウルが指す方向を見ると、確かにそこには立派なコタツが売っていた。だが一つ気になる点が……。

「……何でミカンと一緒に売ってた？」

「え、だってコタツのミカンはセットなんでしょ？」

「……何か微妙に間違ってる気があった。」

第42話 あけましておめでとございます（前書き）

時差の事すっかり忘れていました・・・

ホントは大晦日とお正月で二日連続更新しようとしたんですが、時差があるの忘れてて失敗しました。今アメリカは大晦日なんです
がね・・・。

と言うわけで多分明日は更新しません（どういうわけだ）。って言うか普通に大掃除とか色々あって忙しいんで無理です、すみません。って言うか内容ほぼ全くデタラメです。これこの話でやる必要なかったような・・・

と、とにかく今年最後・・・じゃなく最初の話、どうぞお楽しみください

第42話 あけましておめでとつございます

「・・・だる」

「一年の終わりに言う事がそれですか？もつと何かあるでしょう？」

「だるい時にだるいと言って何が悪い」

「それはそうかもしれないけど、一年の最後くらい有意義に過ごしましょうよ」

「・・・だる」

「それもつさつき聞きました」

皆さんこんばんは、おはようございます、それかこんにちは。譲葉です。

もうすぐ一年も終わりですね。現在時刻は10時、外の天気は大雪。あと2時間で年も明け、めでたく新年を迎える事になります。

今私は翔輝さんと一緒にミラさんの小屋にいます。ミラさんはこんな時期でもしっかりと食糧確保に行っていて、エミーさんはさすがに年末は家族の方々と過ごすよう来ていません。

テリアさんから忘年会をやらないかと誘われたんですが、色々してもらえばなしで悪いと思ったので今回は遠慮させていただきます。

皆さんの一年はいかがでしたか？私は・・・そうですね、こんな世界で年を越す事になるとは思いもありませんでしたが、まあそれなりに楽しめました。

ただ少し文句を言わせてもらってもよろしいのならば、翔輝さんにもう少ししっかりして欲しかった事、そしてやはりこんな世界に来たくは無かったです。

あ、別にこの世界が嫌いと言ってるわけではないんですよ？ただやつぱり元の世界が恋しいというだけです、そこにいる家族や友達の皆さんも含めて。

そして最初の『翔輝さんにもう少ししっかりして欲しい』という事
なんですが……。

「暇だ……」

ご覧の通り年末だと言うのにダラダラしてます。

別に年末にしっかりしなきゃいけないとは言いませんが、これはひどいです。

さつきから一言目は「だるい」二言目は「暇」ばかり連呼して
て理由は「俺だぞ?」ですって。何となく納得ですけどそれを許す
のもどうかと思ひまして……。

まあ確かにだるいのも暇なのも分かるんですよ。年末は何となく体
がだるくなりますし、いつも見ている「紅白 合戦」や「 っては
いけない」等が見れないので確かに暇です。

しかしそれが出来ないなら色々他にもできる事はあると思うんです
よ。散歩するもよし、知り合いに年末の挨拶にいくもよし、年越し
そばを用意するでもよし。

でもそれらを提案しても翔輝さんさつきから「このクソ寒い時期に
何でわざわざ外出しなきゃならんのだ」とか言ってこの間買ったコ
タツから一步も動こうとしません。

去年はもう少し構ってくれたんですが、今年は例年に増して「やる
気なしオーラ」を放出しています。……もう恥を捨ててぶっちゃ
けます。

寂しいです。

まだそういった経験をしたことが無いので分かりませんが、バイト
や仕事で年末に働いている彼氏に合えない女性の心境と言ったこ
ろでしょうか。

「翔輝さん、構ってくださいよ……」

「何をしろと?ゲームか?生憎俺はさすがにゲームはポケットに入

れてないぞ。漫画も残念ながら入らない」

「違いますよお、とりあえず一緒に何かやりましょうよ・・・」

「だから何をつて聞いているんだよ、この小屋で何ができるんだよ」

「それは・・・分かりませんが・・・」

「だろ？お前に分からない事が俺に分かるわけないだろ」

「そんな事はないですよ、翔輝さんだつて頭良いんですから何か一緒に考えましょうよ」

「・・・いつも『翔輝さんはバカですね』みたいな態度取ってるくせに何を今更言つてんだお前は」

「う・・・。と、トランプは・・・」

「こないだやつたばっかだろ」

「じゃ、じゃあしりとりとか・・・」

「俺に勝ち目が無いからやりたくない」

「そ、それなら人生ゲーム・・・」

「あんだけ無残な負け方した俺にあれをもう一度味わえと？」

「・・・じゃ、じゃあゆ・・・」

「寒いからヤダ」

「まだ何も言つてないじゃないですか!？」

「どうせ雪合戦とか言おうとしたんだろ？」

「・・・ゆ・・・」

「雪だるま作りもヤダ」

「うう・・・」

・・・これじゃあいつもと立場が逆です・・・。

やっぱりこういう時の翔輝さんの何もしないっぷりは尋常じゃないですね、もう私じゃどうしようもありません・・・。

諦めてはあ、と大きくため息をつく、小屋のドアから何か不思議な音が聞こえてきた。まるで獣がそこを引っかいているような、なんと形容し難い音です。

ミラさんが帰ってきたのなら普通に開ける筈ですし、もしもエミー

さんが来てたとしてもこんな音は立たない筈ですよ？という事は・・・何でしょう？

まあ何かを確かめる方法は一つです、ドアを開けてみればいいんですよ。それ以上簡単な方法は知りませんよ私。

と言うわけでドアを開けてみました。その瞬間、凄まじい冷気が小屋中に流れ込んできます。

「うわっ、何やってんだ讓葉！？早く閉めろ、寒い！」

「ちよっと待ってください！」

騒ぐ翔輝さんを取りあえず無視して、外を見渡す。しかし音の原因らしいものは何も見つかりません。

おかしいですね、いくら雪が降ってても風であんな音がするはず無いですし・・・。

と、しばらくそこで唸っていると足元から「ニャ〜」という可愛らしい鳴き声が聞こえてきたので下を見ると、真っ白な何かポツンと立っていました。

「・・・あ」

何となく予想していたものと全然違ったので少し唾然としていて、それはすごい勢いで私の足の間を走り抜けてコタツの中へ・・・。

「うわっ、何だこれ！？つてか讓葉早くドア閉めろ！」

「あ、はいすみません！」

「何だこれ、何かフサフサしてるけど・・・」

ドアを閉めて翔輝さんのほうを向くと、コタツの布団を持ち上げて中を覗いて硬直してました。

「どうしました？」

「・・・譲葉、これ見てみ」

「これって？」

そう返答して私はとりあえず翔輝さんの横に行ってコタツの中を見
てみる。すると中にはさつき見た生物がコタツの中で丸まっていま
した。

「これって・・・」

「・・・猫だよな？」

「・・・猫ですね」

まあさつきまで散々「何か」とか「生物」とか言ってきたが、
最終的には何の変哲も無い子供の白猫です。

生まれてまだ1ヶ月も経ってないような大きさの子猫がコタツの中
で物凄く幸せそうに丸まっています。

「・・・何だこいつ？」

「いやだから猫でしょう？」

「それは分かるけどさ、何で当然のようにコタツに入って来るんだ
？」

「だってさつきまで外にいたから相当寒かったんでしょう。いいじ
やないですか、別に翔輝さんが入る場所がなくなっただけじゃない
ですし」

「別にいいけどさ、単に気になっただけだし」

「動物の行動の意味をいちいち気にしていても意味なんて無いです
よ、本能で行動してるんですから」

「そう言うモンかね？」

「そう言うモンです。それにしても汚れてますね、ずっと外にいた
んでしょうか？」

「さあな、でも首輪もつけてないし多分野良猫だろ」

「とりあえず私はこの子をお風呂に入れてきます。翔輝さんは何か食べられそうなものを用意して置いてください」

「俺そいつが何食べるかなんて知らんぞ？」

「じゃあ町のペットショップにでも言っただけ聞いてきてください。何ならエミーさんのお母さんに聞いてきてもいいですよ」

この間クリスマスパーティーをやらせていただいた際にお会いしたんですが、エミーさんのお母さんは獣人らしいですが姿は完璧に黒猫です。ただ唯一の『人』の要素は喋る事くらいですかね？

・・・喋る黒猫。そんな映画ありませんでしたっけ、ギリか何かに。

「何で俺が？寒いし遠いから行きたくないんだが」

「その寒くて遠い道を女の子に行かせる気ですか？」

「・・・チクショー、恨むぞ親父。行つてくりやいいんだろ？」

「ありがとうございます、よろしくお願いします」

「はいはい、30分くらいで帰ってくるから」

そう言うと翔輝さんはコタツと一緒に買った上着を羽織って外に出て行きました。

すこしも罪悪感が無いかと聞かれれば・・・無いといえば嘘になりますがそれよりまさきまで構つてくれなかつた翔輝さんが色々してくれる事が嬉しいと言う事の方が勝っていますね。

さて、それでは私も早速仕事に移りますか・・・。

「ただいま」

「ああ翔輝さん、お帰りなさい。どうでした？」

「粉ミルクでいいつてさ。ほら、もらってきたからあとよろしく」
「ありがとうございます」

私は粉ミルクを受け取ってから水を火にかけ――。

「・・・いや、やっぱ俺がやるわ」

「え？」

――ようとして急に翔輝さんに止められた。

「どうしたんですか？翔輝さんがそう言うことを進んでやるなんて珍しいですね」

「お前が火を扱うと火事になる」

「なっ・・・！？失礼ですね、そんな事になるわけ無いじゃないですか！？」

「なったる、ついこの間」

「・・・あ、あの時は調子が悪かっただけです」

「料理に調子があるか。いいから俺がやる」

「・・・すごく不本意ですが分かりました」

納得いきません・・・。

と言うわけで完成したミルクをエミーさんのお母さんにお借りした哺乳瓶を使って猫に飲ませます。

最初は猫も警戒していたようですが、しばらく根気強く続けるとようやく少し慣れたのか飲み始めてくれました。

そして全て飲み終わると、我先にと私と翔輝さんよりも素早くコタツに潜り込んでしまいました。

「とりあえずこれで大丈夫ですかね？」

私もコタツに入って翔輝さんに聞いてみた。翔輝さんも私と向き合うようにコタツに入った。

「一応これで応急措置は完了。あとは出来るだけ早く獣医さんのとこに連れてけ、だそうだ」

「分かりました。あ、名前どうします？」

「・・・何も考えてなかった」

「私입니다」

「白い猫だろ？・・・ホワイト？ブラン？」

「外国語で白って言うてるだけじゃないですか」

「いいだろ、何となく名前っぽくないけど」

「ダメじゃないですか」

「それじゃあ・・・ミカン？」

「あ、それいいんじゃないですか？白関係ありませんけど。何でミカンなんですか？」

「ほら、某魚介類家族の猫がミカン割って踊って出てくるだろ？だからミカン」

「・・・命名の理由はともかくいい名前だと思います。じゃあミカンで」

「だとさ。どうだ、気に入ったか？」

翔輝さんが中にいるミカンにそう聞いた。ミカンは何も言わずに丸まっているだけでした。

「・・・あ、もう12時ですね」

「ん？ああ、もうそんな時間か」

「いつの間にか年越しちゃいましたね」

「まあいいだろ、退屈はしなかったし」

「どの口が言うんですか、どの口が」
「気にすんな」

そう言ってヘラヘラと笑って言う。まったく、ほんとに翔輝さんは・
・・。

「翔輝さん」

「ん？」

「あけましておめでとございませう、今年もどうぞよろしくお願
いします」

私は頭を丁寧にかけてそう言った。コタツに入ったままですけどね。

「んな丁寧にやらんでもいいだろ？」

「親しき仲にも礼儀あり、ですよ」

「・・・それもそうか」

翔輝さんは納得した様にそう呟き、私と同じようにお辞儀をする。

「あけましておめでとございませう、今年もよろしく」

「はい、よろしくお願ひします」

第42話 あけましておめでとつございます(後書き)

「皆さん、あけましておめでとつございます」
今年もどうぞよろしくお願ひします

「あれ、翔輝さんは？」

何かとんでもなく失礼な事を言いそうだったから今回出さない

「主人公なのに・・・」

どうだった、今年一年？

「あなたのせいでこんなとんでもない世界に飛ばされてしまいましたし、散々でした」

そう言うなって、新鮮だろ？

「あなたは気楽でいいですね・・・」

まあまあ、でも楽しかったんだろ？

「・・・まあ」

だったらいいだろ？

「ホントに気楽ですね。だから成績が危ついんですよ」

ここでリアル話すんな！

「それでは皆さん、こんなダメ作者ですが今年もよろしくお願ひします」

他人に言われると物凄くムカつく・・・。その通りんだけど

「それでは次回、またお会いしましょう」

良いお年を

「それもうちよつと前に言つべきでしたね」

・・・すみません

第43話 呼び出し(前書き)

更新ペース驚くほど落ちてますね・・・;

いや、申し訳ありません。年末年始は大掃除やら何やらで忙しくな
かなか更新できず・・・

多分しばらくこんなペースだと思いますが、それでもいいと言う方
は読み続けてくれれば嬉しいです

第43話 呼び出し

少し遅れた挨拶になってしまいました。が新年あけましておめでとうございます、譲葉です。

今日はお正月から数日後なので本来ならまだ冬休みの真っ只中なのですが、何故か先ほど学校から呼び出しを受けたので向かっているところです。

「まったく、何が楽しくて冬休みに学校に登校しなきゃならんのだ・・・」

と、隣を不機嫌なオーラ丸出して歩いている翔輝さん。ちなみに来るように命じられたのは私と翔輝さんだけなので、ウルさんは小屋でお留守番してます。

「知りませんよ、また翔輝さんが何かしたんじゃないですか？」

「そんな覚えはないぞ、少なくともこの学校では。ってか俺が原因って言うのは信じて疑わないんだな」

「当然です。覚えが無い、だなんて信用できませんよ、私達の世界の学校では問題ばかり起こしてたじゃないですか。居眠り、遅刻、サボタージユ、その他諸々・・・」

「そりゃ確かにそうだけども・・・。ってか普通にサボりって言えばいいだろ」

「何となくです」

「でも俺こっちの学校ではまだ問題起こしてないぞ・・・確かに一回だけ職員室に呼び出されたけどさ」

「結局起こしてるんじゃないですか・・・」

でもまあ確かに妙な話ですよ、一回職員室に呼び出されたくらい

でわざわざ休日に学校に呼び出すワケ無いですし、そもそも私が一緒に行かないやいけない理由が全くありません。

私は翔輝さんと違って学校では一応優等生を装っているので問題なんて起こしていないと断言できますし……。

「もしかしたらこっちの学校は私達の世界にある学校とは校則なんか若干違うのかもしれないね」

「って事は一回職員室に呼ばれただけで休日に呼び出されるのも……」

「可能性としては捨てきれないという事です」

「マジかよ……」

「どうしたんですか？あつちの学校では別に怒られてもどうってこと無いって感じだったじゃないですか」

「ん、まあそうなんだけどさ、何となく入ったばかりの学校で問題起こすの抵抗あるじゃん？」

「『じゃん？』って同意を求められても私は問題なんて起こさないので分かりません」

「ああそうですか、そりゃ悪うござんしたね」

「おかしな喋り方するのやめてください、ただでさえバカみたいなんですから」

「やかましいわバカタレ」

「はいはい、いいから行きましょう」

とにかく学校に行ってみましょう、そうすれば全部ハッキリするでしょうし。

「あゝめんどくせー」

「いい加減にしてください、付き合いなきやいけないこっちの気持ちにもなってくださいよ」

「だからまだ俺が原因だって決まったわけじゃないだろ……」

結局その後、私は延々翔輝さんを責めながら学校まで行きました。まあおそらく翔輝さんが原因で無い事は分かっているんですが、それでも私の休日を無駄にされたので若干のイライラもあるわけですよ。

と言うわけで学校に着きました。普段校門は閉まっているんですが、今日は私達が来るという理由があるからなのか開いています。

校門を抜けて学校に入り職員室に向かうと、私達の担任の先生やその他の先生方が中で色々とやっていました。

とりあえず私達は担任の先生のところへ話を聞く事になったんですが……。

「あの、先せ……」

「何！？あ、翔輝と譲葉ね！？今忙しいから依頼室にいる先生に話聞いてきて！」

「……あ、はい、分かりました……」

……何か物凄い剣幕で言われたので一瞬返事が遅れちゃいました。つて言うか目が血走ってたんですけど……。怖いです……。でもまあこれで少なくとも翔輝さんが何かして呼び出されたわけじゃなさそうですね。

だってもし翔輝さんが説教されるために呼ばれたなら依頼室に行けなんていわれないでしょうし、第一あんなバタバタしてる中で翔輝さんに怒るために時間を使うとは到底思えませんし。

依頼室に行けって事は……この間の幽霊退治のときの依頼に関する事でしょうか？

と言うわけで先生に言われたように依頼室に着きました。

「あの……」

「ん？ああ譲葉。どうしたの？何かに怯えてるように見えるけど・・・」

「ええ、職員室の先生方の剣幕に少しビックリしたんです」

「ああ、なるほど」

「それで、何のようです？わざわざ冬休みに学校に呼び出すなんて」

「あれ、翔輝も来てたの？」

「・・・どういう意味ですか、呼んだの先生でしょうか」

「いや、まあそうなんだけども、翔輝のことだからどうせ来ないだろうな〜って思って」

「・・・」

「そんなことよりどうして私達を？」

「そうそう、忘れるとこだったわ」

「・・・忘れるほどどうでもいいことなんですか？」

「いや、そう言うわけじゃないんだけど、ちよつとあなた達がこの学校に入った事が色んなところに知られちゃってね。人間は英雄ってことになってるから助けて欲しい人がいっぱいいるから物凄い量の依頼が来ちゃったってワケよ。だから今職員室は依頼を整理とかしなきゃいけないからすごく忙しくてね。だから譲葉が言った時も物凄い剣幕だったんでしょ。あ、ちなみに私は整理されて届けられる依頼を管理するだけだからすごい楽なんだけどね」

「・・・え、って事はあの剣幕は俺達のせい？」

「まあそうなるわね」

「・・・」

「あ、別に気にしなくていいのよ！？ほら、この学校結構大きいでしょ？だからテストの採点とかしてるときもあんな感じだからいつもと変わらないわよ」

「は、はあ・・・」

「とにかく、今日二人をここに呼んだワケね」

「そうだ、忘れるところでした」

「って事は依頼関係の話か？」

「ええ。二人とも、物は相談なんだけど、この依頼受けてみる気はない?」

そう言つて渡されたのは一枚の依頼書。依頼主は……。

「……マドリード王国女王、エナレス?」

「マドリードつて……どっかで聞いたような……」

「マドリードとは私達の世界のスペインの首都です。人口は約313万人、標高655メートルの場所に位置し、イベリア半島の経済の中心地の一つです。また、マドリード州の州都であると同時にマドリード県の県都でもあります。とは言つてもこれは全て私達が住んでいた世界の話ですのでこっちの世界ではあまりあてになる情報ではありません。現にマドリードは確か王国じゃないはずですし、この女王様の名前、エナレスというのはマドリード州東部に位置するスペインの都市、アルカラ・デ・エナレスの事だと思つのですが、そのような名前は私達の世界では聞いた事ありません」

「さすが譲葉、何でも知ってるな」

「何でも知ってる人間なんていません。私が知ってる事は私が知っている事だけ、翔輝さんが知ってる事は翔輝さんが知っている事だけです」

「……つまり?」

「人間は自分が持つている知識しか持つていないという事です」

「……そう言う哲学的なことはいいから続き読んでくれよ」

「自分で説明を求めたんじゃないですか……。え〜っとなすね、依頼内容は……『反乱軍鎮圧の援護』ですつて」

「……は?」

「いやだから、『反乱軍鎮圧の援護』です」

「そこじゃねーよ、反乱?」

「はい、そう書いてありますけど」

とりあえず何だか信じていないようなので翔輝さんに依頼書を渡す。翔輝さんもざっと目を通し、ようやく納得してくれたのか怪訝そうな顔をしながらも依頼書を私に返してくれました。

「確かにそう書いてあるけど・・・そんな依頼まで来るのか？」

「現に来てるじゃないですか。先生、説明お願いできますか？」

「うん、マドリード王国って言うのはずっと前からこの世界にある王国だね。あなた達が来る数ヶ月前に反乱始まっちゃってね。理由は・・・何だっけな」

「オイ」

「あ、あはは・・・それは受けた時に王女様に聞いて。で、その反乱のせいでそろそろ色々やばい事になってるから助けが欲しかったんだけど、そこにちょうどいいタイミングで二人が来たってワケ」

「随分適当ですね・・・」

「まあ詳しい事は依頼主にちゃんと聞いてよ。で、どうする？」

「どうするって・・・無理ですよ。いくらなんでも荷が重過ぎます」

「だよな、さすがにそれは厳しいぞ。第一俺達実戦らしい実戦はまだ一回しかやった事無いし」

「経験不足、実力不足なので行っても全然力になれないと思うんです。だから申し訳ありませんがその依頼を受けるわけには・・・」

「まあそうだと思ったよ。気にしないで、ダメモトで聞いてみただけだから。多分この以来受ける生徒はあなた達以外いないと思うから、もし受けられると思えるようになったら来て頂戴」

「・・・」

その後、私達はお互いに何も言う気になれず、静かに学校を後にして家路についた。

第43話 呼び出し（後書き）

「・・・暇だな」

これが翔輝と譲葉が出かけてる間にウルが口にした唯一の言葉だと
言う・・・。不憫すぎる・・・。

第44話 意外な組み合わせ？（前書き）

更新今までに無いほど遅れて申しわけありません！何か毎回謝って申し訳ありません！

実はですね、アメリカは今学期末テスト期間中ですので、普通に時間が無くて……。来週がテスト本番ですので、おそらく来週は更新できないと思います。もし少しでも余裕があれば更新したいと思いますが、可能性は低いと思うのでご了承ください……

第44話 意外な組み合わせ？

皆こんにちは、ウルです。

えーっと、ちょっと前に翔輝と譲葉が学校から帰ってきました、けどね……。

「……」

「……」

「……」

……何この気まずい雰囲気。学校でいったい何があったのさ？
せつかく二人が帰ってきたから遊んでもらおうと思ったのに、こんなに暗かったら言うに言えないんだけど……。

「……ウル」

「ひゃい!？」

ずっと黙ってのにいきなり声をかけられたからつい変な声出ちゃった……。

「悪い、俺もう寝るわ」

「え、ええ!？だつてまだお昼過ぎだよ!？」

「ウルさんごめんなさい、私もちょっと失礼します。ちょっと一人で考えたい事があるので」

「え?え!?!そんな〜!」

僕結構我慢してたのにこんな仕打ちって酷くない!?

ああ、そういうしてるうちに二人ともいつの間にかいないし!

……うう、いいもん。エミーのどこにでも行く……。

「……というわけでして……」
「それはそれは……まあいいわ。上がった」

突然お邪魔したにもかかわらず、エミーは快く僕を迎えて部屋に入れてくれました。

うん、持つべきものは友達ね。

「でも来たはいいけどやる事特にないわよ？」

「それでもあの二人がいる家に一緒にいるよりは何倍もマシだと思
うんだ……」

「……どれだけ重症よ？」

「面白いよね、こっちに来た時より落ち込んでるもん」

「こっちに来た時って？」

「例えばさ、エミーが急に全然知らない世界に送られちゃったらど
う思う？」

「それは……発狂するかも」

「……」

「……ちょっと、あんたから話し振ってその返答に引かないでよ
！」

「あ、ご、ゴメンゴメン。僕だったらさすがに発狂まではしないか
な〜って」

「もう……。それで、それが何？」

「うん、翔輝と譲葉はまさにそう言う状況でしょ？なのに来た当日
結構冷静だったんだ」

「へ〜。でも来た当日かどうかは分からないでしょ？」

「ああ、その辺の話はテリアにでも聞いて見たほうがいいかも？」

「何でお父さんに？」

「だってこっちの世界であの二人に話しかけたのはテリアだって言
つてたよ？」

「嘘ッ!？」

「嘘つく理由がないでしょ？とは言っても僕も二人に聞いただけ
だからほんとかどうかは知らないけどね」

「こういう時は本人に確認するのが一よね？」

「同感」

そうと決まれば早速行ってみよう！

と意気込んでみたものの、エミーの家にいるんだから30秒もしな
いうちに会えたけどね。

「お父さ〜ん」

「ん？どうかしたのかいってレイちゃん、いらっしやい。いつから
いたんだい？」

「そんな事は置いといて、お父さんこっちに来たてホヤホヤの翔輝
と譲葉に会ったの？」

「そんな事って・・・。うん、本当だよ」

「来たてホヤホヤって・・・」

「どんな感じだった？」

「そうだな〜、翔輝君も譲葉ちゃんもかなり落ち着いてるように思
えたよ。度胸あるんだな〜って思ったのを覚えてるからね」

「度胸って？」

「だって急に存在すら知らなかった世界に送られたら普通は誰だっ
てパニックになるでしょ。そんな様子がなかったからすごいな〜っ
て」

「って事はホントだったんだね〜」

「そうだよ。それに本人達が言ってるんだから疑う必要もないじゃ
ないか」

「それもそだね。じゃあテリア、ありがとね〜」

「うん、どういたしまして。ゆっくりして行ってね」

「ありがと〜」

と言っわけで再びエミーの部屋へ。

「と言っわけで本当でしたとき。チャンチャン」

「……」

早くも話題が尽きてしまいました。

しまったな〜、もうちょっとな色々話題考えてから来るんだった。まだ来てから30分も経ってないのに……。

それにしても、どうしようかな〜……。話す事も無いし、漫画でも読んでよ〜と。

と言っわけでしばらく漫画を読んでいると、

「……あのね」

何とも意外な事にエミーの方から話しかけてきました。

「珍しいね、エミーから話しかけてくるなんて」

「それって言われてあんまりいい気はしないわよ？」

「気にしない気にしない。それで？」

「ああ、うん。ウルはさ、翔輝の事どう思ってるの？」

「翔輝？翔輝たちじゃなくて？」

「うん、翔輝だけ」

「う〜ん……すごく仲のいい友達、かな？」

「適当な答えね〜」

「だって他に言いようがないじゃん。あ、じゃあ初めてできた男の子の親友は？」

「まあ何でもいいけどさ」

「変なの……。でも何でそんな事聞くのさ？」

「だって普通は良く知らない男を家に泊めたりしないでしょ？だから何か理由があるのかなって思って」

「あゝ、確かにそうかも。でもだって僕は翔輝が何かしてきても返り討ちにする自信あるし」

「なるほどね」

「エミーは？」

「え？」

「エミーは翔輝の事どう思ってるのさ？」

「あ、あたし？あたしは……。どうなんだろ、考えた事もなかったわ」

「冷たいな」

「う、うるさいわよ。それより譲葉はどうなの？」

「譲葉は……。少なくとも私達よりは翔輝に甘い、のかな？」

「どういうこと？」

「良く一緒にいるし、ケンカしてるけど結局は仲いいし、寝る時も倉庫で一緒に寝てるし」

「い、一緒に寝てる！？」

「ふえ！？う、うん……」

「ダメ！それはダメよウル！」

「な、何で？」

「いい！？いくら二人が幼馴染だって翔輝は男で譲葉は女よ！？男なんて皆ケダモノなんだから譲葉をアイツと一緒に寝かせたら……！」

「ね、寝かせたら……？」

「と、取り返しのつかない事になる！」

「と、取り返しのつかない事って！？」

「そ、それは……」

「それは……？」

「ああだめ！私の口からはとても言えないわ！」

「い、いったい何なの！？」

「とにかく！今二人は何してるの！？」

「ふ、二人とも寝るって言うってたけど！？」

「な、何ですって！？ダメよ、阻止しないと！手遅れになる前に！」

「て、手遅れ・・・！ど、どうすればいい！？」

「戻るのよ！ダッシュで！全力疾走で！明日なんかなくらいに！
実際そうしなければ譲葉に明るい明日はないわ！」

「りよ、了解しました！」

「急ぐのよ！」

「はいっ！」

何か良く分からないけど譲葉のピンチらしい！というわけで走れ僕！

「んぐ、たまには悪ノリするのもいいかもね。まあ翔輝がそんな事
できるワケ無いし、何の問題もないでしょ。さて、宿題でもしよう
かしら・・・」

エミーのその眩きは既にその場から走り去っていた僕の耳には届いて
いなかった。

「・・・」

「・・・」

・・・翔輝だ、眠れん。

さつきからあの依頼の事が頭から離れない。

一度ため息をついてから起きあがる。

「・・・眠れないんですか？」

「・・・お前は？」

「今こうして起きてることで答えになってませんか？」

「それもそうだ」

俺は少し苦笑して答える。

やっぱ眠れないよな、あんな重い事言われた後じゃ。

って言うかな、ああいう「君達の意味で」って言う感じの言い方が一番困るんだよ。だって要するに行かないって事は行きたくないってことで、つまり人助けをしたくないっていう誤解招く可能性があるし。

かといって今行けば確実に俺達が死ぬし・・・。

ホントに、どうしていいか分からない・・・。

「はぁ・・・」

今日何回目になるか分からないため息をつき、もう一度寝転がる。

「日本一様、何か妙案はありますか？」

「あつたらこうしてませんよ？」

「ごもつとも」

結局、どうしたらいいんだか・・・。

もう一度ダメモトで目を瞑った瞬間、

「讓葉あああああ！！！！」

物凄い叫び声をあげてウルが小屋に飛び込んでいく音が聞こえた。

・・・ドア壊れたんじゃないか？

「あ、あれ!? 讓葉!? どこ!?」
「・・・倉庫ですけど」

讓葉がそう呟くや否や、一瞬で小屋のほうから倉庫まで狼が肩で息をしながら走ってきた。

「ひゃあう!?!」

「うお、何だお前?」

「何だは酷いよ!」

「お、狼が喋った!」

「狼じゃないよ! いや、狼だけどさ・・・」

「・・・狼じゃん」

「いや、だからそうじゃなくて・・・!」

「う、ウルさん、どうしたんですか? そんな必死に・・・」

そう、多分もう皆さん気付いているとは思いますが、目の前にいるのは完全獣人化したウルその人である。まあ特徴もそれと言って無く、簡潔に述べると普通にただの狼だった。とは言ってもまあ一応人間の姿のときに来ていた服はそのまま着ている形になっているので、他の狼との見分けはつく。何より喋るしな。

「それで? いったい何だ?」

「と、とりあえず翔輝!」

「ん?」

「出てけ!」

「ええええええ!?!」

ちよっと待て! 話が急すぎるぞ!

俺何か悪い事したか！？しかも何でそんな急に！？

「う、ウルさん！？翔輝さん何かしたんですか！？」

「譲葉、大丈夫！？手遅れだった！？」

「て、手遅れ！？な、何がです！？え！？あれ！？え！？」

「あ、あれか！？遊んでくれなかったから怒ってんのか！？」

「翔輝！君譲葉になんか変な事しなかったあ！？」

「するか！」

何だこいつ！？急に帰ってきて何色々ワケわかんないことってんだ！？

結局、その日は怒り狂ったウルを何とか鎮めることに全力を使ったため、その後は悩むことなく一日を終えた。

そう言う意味ではウルに感謝、かな？

第44話 意外な組み合わせ？（後書き）

「にしても、ウルとエミーの組み合わせって何となく珍しいよな？」
「確かにあの二人は私達が間にいないとあまり会う事ないですからね」

「どんな会話になると思う？」

「あの二人の会話ですか？そうですねえ・・・」
「ねえ、2の三乗つて6でいいの？」
「あんたバカじゃないの？何でそうなるのよ？」

「え、だって2×3と同じでしょ？」
「・・・」
「って感じになると思います」

「それ俺が譲葉がエミーの立場でも同じようなやり取りになるんじゃない・・・？」

「そんな事無いと思いますけどね・・・」

読者の皆さん知っての通り、本文みたいなやり取りになります
えつとですね、若干後書きに書くことのネタ切れ気味です。なので、
もし万が一何か提案などあれば送ってもらえると嬉しいです

第45話 レッククッキング！(前書き)

お久しぶりです；

明日の単元は科学と体育なので、比較的楽なので頑張っ
て書いてみました。取り合えず明日と明後日で期末も
終わりなので少しペースを取り戻せると思います

第45話 レッククッキング!

「今日の放課後ちょっと買物に付き合ってくださいませんか?」

唐突に譲葉がそう言った。あ、ちなみに俺は翔輝な。

今日は冬休みが終わって少し経った金曜日。とうとう学校が始まってしまった。

そんな相変わらずだるいある日の質問だった。

「放課後?別にいいけど何だ?」

「いえ、ちよつと見てみたい本がありました」

「へ」

「何々?何の話?僕にも教えて」

「ウル」。授業中に私語は禁止」

「僕だけ!?翔輝とか譲葉だって話してたよ!」

「授業の邪魔しなければ何してもいいの。ウルは授業妨害したから注意したの」

「先生そう言うの気にしないからじゃん!」

「や、何となくあんたが話していると注意したくなるのよ」

「差別だ」!」

そんな感じでウルを注意してるのが我らが先生のラビン先生。

うさぎの獣人らしく、目が真っ赤で頭から白いうさぎの耳が生えている。何故か黒髪(本人曰く黒うさぎと白うさぎのハーフ)。

性格は何と言うか・・・いい加減?今みたいに気まぐれで人注意したりするし、何か自分に被害が及ばなければ基本的に生徒が何してようと関係ないって感じだからな。

「で、結局何なの?」

ウルと先生が口論を続けている隙を狙ってエミーが俺の横にやってきた。先生気付けよ……。

「ん、放課後譲葉の買物に付き合えって」

「ふうん、じゃああたしも行くわ」

「何で？」

「文句ある？」

「別に文句はないがちょっと気になる」

「気分よ気分。いいじゃん、友達付き合いも大切にしろなさい」

「へいへい……」

……と言っわけ放課後。

「ウルは？」

「先生に怒られるために職員室です」

「そんな悪いことだった？」

「その後先生に色々反抗したからちょっと適当に色々言われるみたいです」

「……何となく納得」

「それで？行きたいとこってどこだ？」

「ああ、本屋さんです」

「本屋？何でまた？」

「いえ、ちよつと料理の本を探しに「やめとけ」言い切る前に止めないでください」

「何、譲葉料理苦手なの？」

「こないだウルの小屋が火事になりかけた、と言っかなった」

「嘘よ、だつて譲葉頭いいじゃない」

「否定したい気持ちは分かるがな……」

「……ホントに？」

「ホント」

「ちよつと、何気に失礼なこと言ってますか？」

「何気にも何も・・・もろ失礼なこと言ってるけど」

「そんな事を正直に告白してもらってもうれしくありません」

そんな会話を続けつつ、場所はあつという間に本屋の中。

「で、何で急に料理なんだ？」

「え、だって学食高いじゃないですか。だからお弁当でも作っていいのかなと思ひまして」

「んなもん言ってくれば作ってやったのに」

「翔輝さんに何かを頼むなんて出来るわけ無いでしょう？」

「言つと思つたよ。でもお前出来るのか？」

「馬鹿にしないでください。あれです、説明書さえあれば簡単にできますよ」

「レシピな」「レシピでしょ？」

「・・・レシピです」

「いや、だからレ・シ・ピ」

「・・・レ・シ・ピ？」

「よろしい」

「・・・屈辱です」

そう言いながらも譲葉はちやつかり初心者用の料理の本を手にとつて、それをレジに持っていった。

エミーは何か漫画を買ったらしい。タイトルは「TWO PEACE」。・・・どっかで聞いたようなタイトルだな。考える事はどの人も同じか。

で、またまた場所は変わってエミーの家。

「おい、ホントに大丈夫か？冗談抜きでやばいぞ？」

「大丈夫よ、一応私達で見張ってるから」

「まあそれなら被害は最小限に食い止められると思うが・・・」

「心配しすぎよ、大丈夫でしょ多分」

「さり気なく多分とか言わないでくれ、洒落になってない・・・」

そうこうしてる内に譲葉が三角巾、エプロンを装着した。片手には先ほど購入した本。

そして譲葉が纏っている空気・・・。これから戦争に行くかのような殺伐とした空気を纏っている。

「で、結局何作るんだ？」

「今日の試作品はカレーですね」

「・・・」

「・・・」

「・・・え、何ですか？」

「カレーなんて料理の本に書いてあったか？」

「・・・え？無いんですか？」

「・・・探したのか？」

「・・・」

そう言っただけで必死で料理の本をぺらぺらめくり始める譲葉。そして読み終わると信じられなかったのかももう一度最初から読み直す。それを何度か繰り返した後。

「・・・作戦変更です」

「無かったんだな。そりゃそうだ、カレー作れない奴なんていないからな」

「う、うるさいです！とにかく変更！お好み焼き作ります！」

「何故に数ある料理の中からお好み焼きをチョイス？」

「とにかく！作ります！」

「・・・はあ」

と言つかそれ以前にお好み焼きの作り方はその本に書いてあったのか？変わってんなその本。

「まずは・・・小麦粉？を水で・・・」

「いやもうお前素買ってこい」

「素？お好み焼きの素なんてあるんですか？」

「・・・もう諦めるお前」

「え？え？」

「想像以上に酷いわね・・・」

「大体お好み焼きを弁当に持ってく気かお前？」

「・・・予定変更です」

「さて三回目だ。次は？」

「・・・あ、これなんかいいじゃないですか？『レンコンの甘辛ハンバーグ』」

「お前作れんのか？」

「・・・つ、作れますよ・・・」

「その沈黙は何？」

「お前ももう少ししっかりしてくれ頼むから」

「・・・と、とにかく！まずはレンコンですね、エミーさんありますか？」

「まあ一応あるはずだけど。他に何かあるなら今言ってくれろ？」

「あ、はい。えっと、ひき肉、たまねぎ、卵、しょうがですね。あとは調味料なのでそれはこの辺で探します」

「お前ホントに大丈夫か？」

「だ、大丈夫ですよ、多分」

「・・・」

もう前途多難とか言うレベルじゃないな・・・。

少し待ってエミーが食材持って帰ってきた。

「えっと、まずはレンコンを5ミリに切る・・・」

まあ譲葉は基本的ら器用だから一応レシピがあれば問題ないと思うが・・・。

と何とか言ってる間に譲葉は定規を取り出して・・・って待て待て。

「お前何やってんだ？」

「何って・・・5ミリに切ってるんですけど」

「いや、何でわざわざ定規で？」

「だって、今まで失敗しっぱなしだったからちゃんとやろうと・・・」

「

「んな完璧にやらんでも・・・」

「いいんです、完璧にやるって事はつまり失敗が無いってことなんですから」

「そりゃそうかもしれないけど・・・」

「とにかく黙って見ててください！」

「・・・」

確かにあんだだけ完璧にやろうとしてれば失敗も早々起きないか。

そう結論をつけてとりあえず譲葉の好きにやらせる。レンコンを切り終わると、今度はたまねぎを切り始めた。

「・・・うっ・・・!!」

まあ予想通りと言うか何と言うか、たまねぎを切り始めて数分で涙をポロポロ流し始めた。が、その理由を料理知識皆無の譲葉が知っているはずも無く、

「な、何ですかこれ！？テロリストの新作催涙兵器ですか？」

テロリストも随分過程的な野菜から兵器を作るんだな。

とまあそんな具合に色々言いながらも無事にたまねぎを切り終え、それを電子レンジにかける。

きっかり1分半待つてから取り出してそれを冷まし、その間にパン粉をボールに入れて牛乳・卵を加えて混ぜる。

さらにそれに今のためねぎを混ぜ、ひき肉、しょうが、塩、こしょうを加えてしっかりと混ぜる。

「何ですかこれ、ヘドロ？」

「仮にも自分が食べるものに何てこと言うんだお前は」

「だってグチヨグチヨですよこれ？」

「それでいいんだよ、むしろそうならなかつたら失敗してんだ」

「・・・って事はここまでは成功してるってことですか？」

「そう言うことだ」

「・・・えへへ」

譲葉はそうと分かる的微笑んでまた混ぜ始めた。初めて自分が料理を作ってる事を実感できて嬉しいのだろうか？

さて、あんを作り終えた譲葉は今度はレンコンに片栗粉を薄く振り掛け、レンコンで挟み込む。譲葉はそれを10個ほど作り、とりあえず横に避けておく。

最後に作るのは焼きダレ。これは単純に砂糖大さじ2、醤油大さじ2、酒大さじ1、みりん大さじ1、水大さじ2、最後に油を適量入れて混ぜれば完成だ。なのだが・・・。

「・・・翔輝さん」

「ん？」

「適量ってどれくらい入れればいいんですかね？」

「・・・適量」

「めんどくさいですね、『適量』とか『何でもいい』とかそう言うのが一番困るんですよ・・・」

「・・・いや、俺に言われても。」

そう文句を言いながらも何とか焼きダレを完成した譲葉は、それと一緒に先ほどのレンコンサンドを油を引いたフライパンで焼き始める。すると急にやる事がなくなって暇になったのか、さっきまで使っていた食器などを片付け始める。

「待った、お前はレンコン見てる。片付けは俺がやるから」

「そんなのダメです、私がやらないと」

「お前のことだから片付けてる間にあれ焦がすのがオチだ」

「・・・反論できない自分が不甲斐ないです」

「分かったら大人しく見てろ」

「・・・」

譲葉は渋々と言った感じでレンコンサンドが焼きあがる様子を見守っていた。

数分後、いい匂いが漂ってきたそれらを皿に移し出来上がり。譲葉が始めて無事に作りきった料理だ。

「・・・で、出来た・・・」

「お疲れ、譲葉。なんだ、意外と出来るじゃない」

「俺もまさか最後までトラブル無しにできるとは思ってたな」

「・・・私が・・・自分で料理を・・・」

「・・・お疲れさん」

「・・・翔輝さん、どうぞ」

「ん、いただきます」

俺は机の上に置かれた皿から一つを端で掴み、口に運ぶ。その瞬間、異変に気付いた。

・・・譲葉の奴、焼きダレに砂糖じゃなくて小麦粉入れやがったな？しかもこれ醤油じゃなくて味ポンじゃ・・・？

何か想像してた味とかなり違った（って言うかぶつちやけ結構まずい）のだが、譲葉のこの感動を台無しにするのもなんだしな・・・。

「・・・ん、まあまあいける」

「ほ、ホントですか？」

「まあまだちよつと変な味はするけど今までに比べたら全然うまいだろ」

「どれどれ、あたしも一口」

エミーもそう言っつて一つを口の中に放り込んだ。

しばらく吟味してから、俺の方をチラツと見てクスリと苦笑する。そして譲葉の方を向き、

「うん、確かにちよつと想像してた味とは違うけど結構いけるわよ？」

俺の意図を理解してくれたのか譲葉にそう言った。

「よ、よかつたあ・・・」

「譲葉、これ全部食っていいの？」

「も、勿論です！私の方も食べてもらって構いませんよ!？」

「お、マジか？じゃあいただきます」

今度譲葉にちゃんと調味料確認するように言っておくか。

それにしても、嬉しそうな顔しやがって・・・。料理作れたのがそんなに嬉しいか。

「えへへ・・・。翔輝さん、初めて私の料理おいしかったね」

その笑顔に一瞬だけドキッとしてしまったのは秘密だかな？他言無用だぞお前ら。

第45話 レッククッキング！（後書き）

「……あのさ、皆少しくらい僕を待ってくれてもいいんじゃない？」

授業中に見つかるように話すからだ

「でもさ、翔輝と譲葉だって喋ってたじゃん。何で僕だけ？」

決定的な違い教えてやろうか？

「？」

見つかるか見つからないか

「……それはそうかもしれないけどさ」

だからある意味見つからなければクラス中に音楽聞いててもいいんだぞ？

「……それはどうなの？」

第46話 どの人も考える事は同じ(前書き)

更新ペース上がらんですね・申し訳ありません

正直ですね、テストで力尽きました。毎日週末は午後起きに近いです
すねw

そんなだるい体に鞭をうち、何とか書き上げました。今後は少しペース上がる、といいなあ・・・と思います

あ、それからちょっとペンネーム(?) 変えさせていただきました。さすがにちょっとリアルの名前に近すぎるので；

第46話 どの人も考える事は同じ

「ん〜・・・やっと終わった〜」

皆久しぶり、エミーです。何故久しぶりかというところ最近あたしの視点で書かれた物語が無かったからね。

最初のセリフから察した人もいると思うけど、今ちょうど学校が終わったところ。まあ性格にはあたしが授業中に旅立った幸福の空間から帰還したところなんだけどね。

「平たく言えば居眠りだろ」

「人の心を勝手に読まないで」

「ホントにそんな事考えてたのか？」

「適当に言っただけ！？って事はあたし墓穴った！？」

「そうなるな」

何か知らないけどバカ翔輝があたしの机の横に立ってた。早とちりで墓穴掘るって、あたしまだ寝ぼけてんのかな・・・？

「ったく、やっと起きたと思ったたらこれかよ・・・。とっとと帰るぞ」

「やっとって何よ、いいじゃないちょうど学校終わったところなんだし」

「何言ってるんだ、まだ寝ぼけてんのかお前？」

「え、何が？」

そう言うってからようやく脳が覚醒し始めたのか、教室に違和感を感じ始めた。

あたしの計算では今の時刻は3時。ちょうど学校が終わった時間の

はず。なのに、何で教室にあたしと翔輝しかいないの？
それに何か窓から入ってくる光も若干赤い気がするし……。

「……あのさ」

「ん？」

「今何時？」

「5時55分。あと5分で最終下校時間」

「……」

なるほど、つまり寝過ごしたと。

「最悪……。放課後のんびり買物でもしようかと思ってたけど今から行くのもなあ……。あれ、そういえば譲葉とウルは？」

「家、と言うか小屋。譲葉がウルに勉強教えてる」

「ふうん。で、あんたは何してるのよ？」

「別に。強いて言うならお前が起きるの待ってた」

「はい？なんでわざわざ？」

「だって置いて帰るのも悪いだろ」

「起こしてくればよかったのに」

「それはしない」

「何で？」

「安眠を妨害されるのが物凄いイライラだって言うのを嫌というほど知ってるから」

「……納得。ん、って事はずっと待ってたの？」

「途中自販機でジュース買いに行ったけどそれ以外はずっと教室にいたぞ」

「って事は……あたしの寝顔？」

「ん」

翔輝がそう答えた（？）瞬間、持ち前の瞬発力（猫だからね、忘れ

た人もいるかもしれないけど）で思いつきり殴りかかる。けど、読んでいたのかなんでなのかは知らないけど難なく避けられてしまった。

「・・・女の子がグーで殴りかかるか？普通」

「やかましい！何て事してくれるのよ！？」

「何もしてないだろ？」

「したわよ！罰金払いなさい罰金！」

「・・・ん」

「ジューズが欲しいわけじゃ・・・いや、ちょっと欲しいけど・・・でもそうじゃなくて！ってかそれどっから出したのよ！？」

「さっき自分の分買ったときについてにお前のも買ったんだよ。いらないなら貰うけど」

「・・・いる」

「ほい。結構前に買ったからぬるくなってると思うけど」

「・・・役立たず」

「お前が熟睡してるのが悪い」

「う、うるさい！大体・・・！」

『生徒の皆さん、午後6時になりました。まだ坑内に残っている生徒は速やかに・・・』

「だとさ。帰るぞ」

「・・・」

な、何か釈然としないなあ・・・こうなったら・・・。

「あ、あのさ！」

「うん？」

「その、あたし今日の放課後買物に行こうと思ってただけだよ」

「ああ、そういえばさっきそんなこと言ってたな」

「う、うん。それでさ、その、ちよつと暗くなっちゃったから、その、ちよつと付き合ってたよ」

「買物に？」

「そ、そうよ。か、勘違いしないでね！？別にあなたと一緒に来て欲しいとかじゃなくて、その、荷物持ち！そう、荷物持ちよ！」

「別にいいけど」

「じゃ、じゃあ早速行きましょう」

あ、あたし何こんな必死になってんだろ・・・？

ま、まあそれは置いて・・・。と言うわけで町を歩いていきます。

「で、買物って何？」

「こないだ見れなかった番組があるからそのビデオ。そろそろレンタルビデオ屋さんに出てると思うから」

「へへ。あれ、でもそれだと荷物持ちいらなくないか？」

「いや、それ以外にも色々買うから。今日はあたしが夕食当番だからその食材も買ってかなきゃいけないし」

「夕食当番？お前が？」

「何よ、そのいかにも『お前料理なんて出来たのか？』って感じのあれは？」

「なんだ、お前エスパーか？」

「そうなのよ、なワケないでしょ。あんたあたしで遊んでない？」

「まあな」

「何のためらいも無しに答えるな！」

「それじゃあレンタルビデオ屋に行った後にスーパーに行けばいいんだな？」

「話を逸らすなあ！」

「いいからとつとと行くぞ」

「分かってるわよ！色々言っていないでキビキビ歩く！」

「はいはい、お姫様の仰せのままに・・・」

そう言つて翔輝は歩き出す・・・直前でその足を止めた。

「・・・何？」

「・・・俺レンタルビデオ屋もスーパーも場所知らないんだけど」

「・・・あ、そっか」

「・・・その俺にとつと先に行けと？」

「・・・あ」

「・・・色々言つてないでキビキビ歩く」

「う、うるさあい！」

そんなやり取りをしつつもしっかりと足を進めてレンタルビデオ屋に到着。

「で、ビデオって何なんだ？」

「毎年年末にやってる『絶対に笑つてはいけないホニャララ』って

番組。芸人が笑うたびに・・・ケツバツト、だっけ？」

「ああ、こつちにもそれあるのか」

「あつちにもあるの？」

「あるぞ」

「じゃあ説明する事は何も無いわね。それを年末に見損なっちゃったから借りてこうと思つて」

「成程ね」

ビデオはギリギリ一本残つてたのでそれを借りて店を出て、そこからさらにスーパーに向かう。

5分ほど歩いてスーパーに到着。中に入り、買い物籠を手取る。

「して、今夜の姫様のお夕食の献立は？」

「ハンバーグ」

「・・・若干子供向け過ぎないか？」

「そう？おいしいじゃない」

「・・・成程、姫様はハンバーグが大好物、と」

「え、ちょ、ちがつ・・・！別にハンバーグなんて・・・ちよつと・

・少し・・・結構好きだけど・・・で、でも大好物とかじゃ・

・！」

「分かった分かった。それでは今度私目の所に遊びに来る時のお食事はハンバーグでよろしいでしょうか？」

「だから違うつてえ！」

本気で翔輝を殺したいと思つた一日でした。

その後も色々遊ばれたりしながらも買物は終了。あたしが会計を済ませてる間に翔輝は荷物を「当然だろ？」つて態度で全部持つてくれた。

なんだかんだ言つて結構優しいのよね、こいつ。あとはこのタチの悪い性格を何とかして欲しいんだけどなあ・・・。

・・・もし翔輝の性格がもうちよつとまともだったなら・・・どうなつてただろ？

・・・いやいや、無い無い・・・。

「何やつてんだ、早く行くぞバカタレ」

「だあれがバカタレよ、誰が！？」

「目の前にいる変な奴」

「うう・・・！バカ！バカ翔輝！」

「はっはっは、事実だから全く堪えない」

「あああああ鬱陶しい！！！」

ホント、翔輝に口喧嘩で勝てる気しないわ・・・。

「わざわざ家まで送ってくれなくてもよかったのに」

「そこは素直に礼の一言くらい言ったらどうだ？」

「余計なお世話よ」

買物を全て終えたあたしと翔輝は現在あたしの家の前にいます。と言つのも、翔輝が「送ってくよ」ってまたもや当然って感じに言ってくれたからです。

それにしても、あたし何気に翔輝に結構世話になってるわね。学校で寝過ごしたの待ってもらっちゃって、あたしのワガママで買物に付き合わせちゃって、拳句の果てに荷物持ってもらって家まで送ってもらっちゃって……。

これはさすがに何もしないで帰しちゃうのは悪いか……。

「あのさ」

「何だ？」

「今日色々世話になっちゃったからちよつと家が上がってきなさいよ。ビデオ一緒に見ない？」

「テリアとかに迷惑じゃないか？」

「大丈夫よ、お父さんは翔輝のこと何故か気に入ってるみたいだし」

「何故か、ねえ……。じゃあ邪魔じゃなければ上がらせてもらおうよ」

「うん」

と言つわけで翔輝を家に招き入れる事になりました。まあだから何ってわけでもないんだけどね。

「ただいま」

「お帰り、今日は随分遅かったねって翔輝君？」

「お邪魔します」

「どうしたんだい？」

「今日ちよつと色々お世話になったからちよつと上がったもらおうと思つて。ダメ？」

「うん、別に構わないけどお世話になったって？もしかしてエミ―また学校で寝過ごしたのかい？」

「う……」

「もしかしてそれで起きるのを翔輝君に待つてもらつて、そこから買物にも付き合つてもらつたとか？」

「きよ、驚異的洞察力……」

「ず、凶星みたいだね。いいよ、ゆっくりして行きなよ」

「サンキュ、テリア」

「どういたしまして。何ならエミ―、今夜は僕が夕食作ろうか？」

「え、いいの？」

「たまにはエミ―もゆっくり友達と遊びたいだろうからね」

「ありがとう、お父さん」

「じゃあテリア、これ今日の晩飯の食材」

「うん、ありがとう。……エミ―、ハンバーグ好きだからね？」

「ちよ、お父さん！」

「うん、何だい？」

「……！もうっ！」

「……え、何？僕何か変なこと言つたかな？」

「いや、気にしないでいいだろ。ちよつと色々あつたんだよ」

「……？」

余計な事を言つてしまつたお父さんを置いて、あたしと翔輝はテレビがあるあたしの部屋に案内する。

ただ扉の前で部屋の現状を思い出し、ドアノブに手が触れる直前で硬直する。

「…………どうした？」

「…………やっぱりリビングで見ない？」

「別にいいけど、なんで…………いや、やっぱり理由はあえて聞かないで置く」

「…………うん、ありがとう」

と言っわけでリビングに。

借りてきたビデオ、と言うかDVDを入れて再生。

しばらくして企画がスタート。芸人とあたし達に刺客が襲い掛かる。

「…………ぶっ」

「…………」

ギィウウウウウウ…………。

「ふあだだだだだ！」

翔輝の頬つぺたを思いつきりつねってやった。

「な、何すんだよ!？」

「笑ったでしょ？罰ゲームよ、罰ゲーム」

「…………あ、そう言うルール？」

「そう言うルール」

「成程」

「…………」

「…………」

「…………あはは!…………!」

大声で笑ってしまった。慌てて両手で口を塞ぐけどもう遅い。

恐る恐る翔輝の方を見てみると、翔輝はこっちの方を見ていた。

「……はあ。どうぞ」

あたしは観念して目を瞑り、つねられるのを覚悟して顔を少し前に差し出した。だけど、

「……いや、俺はいいや。お前がやりたいなら俺だけそのルールでいいから」

「え？」

てつきり思いつきり、頬っぺが千切れるくらい思いつきりつねられると思つてたから、翔輝のこの言葉は予想外だった。

だって翔輝あたしと、つて言うか誰と喋ってる時も言葉に容赦ないからそれくらいやると思つたんだけど……。

「……何で？」

「……別に。普通にこの番組見てたいから、かな？」

嘘だ。何でか分からないけど、あたしはそう感じた。何故かは分からないけど、理由が無いつて言うふうにはとてもじゃないけど見えなかったから……。

そんな事を一人で考えていると、ずっと画面を見ていた翔輝が突然吹き出した。あたしも慌てて画面を見ると、移動中のバスの天井からガスが噴射していた。それに対するリアクションが面白くて、あたしもついつい笑いそうになってしまった。つまりあれを見て笑ってしまったと言うわけね。

「……今のは笑つたの？」

「……いやあ、今のは驚いたつて事で勘弁していただきたいんで

すが……」

「……却下」

「いのでででで！」

……何かちよつと引つ掛かるけど、まあいつか。今度譲葉にでも聞けば理由分かるでしょ。

その後、結局明日は学校も休みって事で翔輝は家で夕食を食べてビデオも全部見ていったので、帰ったのは日付が変わった頃だった。

第46話 どの人も考える事は同じ（後書き）

「ただいま」

「あ、翔輝。お帰り。どうしたの？随分遅かったわね」

「ちよつとエミーん家にお邪魔してたんだよ」

「そうなの」

「で、譲葉は？」

「もう寝てるわよ。明日ちゃんと謝つときなさいよ？」

「へ？」

「あの娘ずつとあなたの心配してたんだから。『事件がもしれません！』とか言つて探しに行こうとしてたし」

「そうだったのか。そりゃ悪い事したな・・・」

「そうよ、しつかりしなきゃダメよ？」

「はいよ。それじゃ俺も寝るから」

「分かった。お休み」

「ああ、また明日な」

・・・これ普通に小説に入れればいいんじゃないか、と書いてて思いました；でもそうすると後書きに書くことないんでw

ブログを始めてみました！

<http://yoshoki4869.blogspot.fc2.com/>

まだ始めたばかりなので何もありませんが、お暇な方は来て頂ければ幸いです^^

第47話 ミカン騒動（前書き）

久しぶりの連続更新です！でももう寝ないとやばい時間です！；
この小説に関する情報なんかを書くためのブログを始めました

<http://yoshokki4869.blogspot.fc2.com/>

前回の後書きにも書いたんですが、一度投稿した後に書き足したもののなので見ていない方もいらっしゃるかと思うので、もう一度書かせていただきました

基本的にはこの小説に関する情報や報告なんかを書いていこうと思います。例：「テスト期間なので更新が遅れます」など

また、このサイトが去年リニューアルした際にユーザー登録しないと感想を書くことができなくなってしまったので、読者の皆様が気軽に感想を書き込めるようにという意味でも作りましたので、お暇がある方は一度来て頂ければ幸いです^^

長くなってしまうて申し訳ありません、では本編をどうぞ

第47話 ミカン騒動

「やほ、遊びに来たよ」

「おお、よく来たな。とりあえず帰れよ」

「ありがとう、それじゃね」

「ああ、また学校で」

「うん。・・・てちよつと待ちなさいよ!？」

皆様どうもこんばんは、譲葉です。

ついさつき晩御飯を食べ終えそろそろ寝ようかと思っていたところに、なぜかエミーさんが遊びに来ました。もう外も真っ暗なんですけど・・・。

「どうしたんですか?こんな時間に」

「や、暇だったからさ」

「んな理由でこんな時間に遊びに来んな」

「いいじゃん、どうせ明日も休みなんだし」

「微妙に理由になってない」

「細かい事は気にしないの。お邪魔します」

「まあいいじゃない。いらっしやい、何か飲む?」

「あ、ミラ。久しぶり」

「・・・悪かったわね、久しぶりで」

「・・・あれ?あたしなんか悪い事言った?」

「気にすんな、なんでもないから」

「なんでもなくないわよ!久々に本編に出てきて『久しぶり』って言われたら落ち込むに決まってるでしょ!？」

「・・・」、「ごめんなさい」

「何で謝ってた?」

「・・・何となく謝んなきゃいけない気がしたから」

「まあ何となく分かるけどな。とりあえず帰れ」

「何であんたはあたしを執拗に帰そうとするのよ!？」

「早く寝たいから。お前のワガママで昨日夜遅くまで遊んでたんだから今眠いんだよ、猛烈に」

「・・・そんな事言っつて翔輝結局最後まで楽しそうに笑ってたじゃない」

「今朝になつてもヒリヒリしたんだぞコノヤロー、どうしてくれる?」

「やかましい、責任をあたしに押し付けないで」

相変わらず仲いいですね、あの二人。まあ確かに喧嘩してるようにしか見えませんが、それはほら、「喧嘩するほど仲がいい」って言いますしね。

私は翔輝さんと喧嘩はしませんが、仲がいい方だと思いますよ?それがどうしたつて話ですけどね。

「それで?何でエミーさんがここにいらっしゃるんですか?」

「だから遊びに来たんだつてば」

「それは分かってますけど、わざわざこんな時間に来るのはおかしくありませんか?」

「気にしない気にしない」

「・・・何だかすつごく気になるんですけど」

何となく怪しいと思ったので、ジト〜とした目でエミーさんを睨んで(?)みた。でもそんな私の視線に気を害した様子もなく、エミーさんは小屋の中に入ってきてコタツにモゾモゾと潜り込んでしまいました。

完全に体をコタツの中に入れてしばらく経つと、コタツの中から顔だけ出してまたしばらく行動停止。いつもは吊り目気味な目も、気のせいかな今は幸せそうに垂れ下がってきます。

「ふう、あつたかあい・・・」

「猫かお前は」

「猫よ？」

「・・・そう言えばそうだったな」

「翔輝、もしかしてエミーが猫だったこと忘れてたの？」

「だってあつちの世界でも最近猫耳猫尾の人間だって普通にいるし」

「いや普通にはいませんよ、基本的にちょっと特殊な人たちだけです」

「そんなのいるの？」

「人間も変わってるのねえ・・・」

「俺から見たらこつちの世界の奴らのほうがよっぽど変わってるぞ？」

「まあお互い違う世界から来たんですからそれはある意味当たり前ですけどね」

「そうかもねえ・・・」

エミーさんはそう言ってまたコタツの中に潜り込みました。・・・ホント猫みたいですね。

そんな事を頭の中で呟いていると、突然コタツがガタガタッと、と言うかボコンツと言った感じに動きました。ついでに何かゴンツという鈍い音も聞こえたような・・・？

「痛ツ！熱ツ！」

「どつち？」

「どつちも！」

そんな会話を繰り返して間もなく、エミーさんがコタツから後頭部を押さえて転がるように出てきました。若干殺意を纏ったその目は

潤んでいる・・・ように見えなくもないです。

私がそんな観察を終えると同時にコタツの反対側から今度は白い動物が、これまたエミーさんと同じように転がるように出てきました。その動物とは言うまでもなく・・・

「ミカン?」「」

「みかん?どこ?」

「いや、あそこ」

「・・・み、みかん?だってあれどう見ても猫・・・」

エミーさんがそのセリフを言い終える前にミカンは猛スピードで部屋を飛び出し、小屋のリビング(?)の隣にあるミラさんの部屋に走り去っていった。

「あっ・・・!」

「エミー、一体全体なにしてたのよ?」

「いやね、あたしがコタツに潜り込んで丸まったら何か足が何かに当たってさ。何かな〜って思ってみたらあの子で、ビックリしてコタツに頭ぶつけたの。そしたらそれにあっちもビックリして逃げたんだと思う」

「・・・とにかくミカンを探さない。別に問題ないとは思いますが、俺はとりあえず待ってる」

「何よ、まためんどくさいとか言う気じゃないでしょうね?」

「じゃあ何か?俺にお前の部屋に入れと?」

「・・・ここで待ってなさい、命令よ」

「だからそう言っただろうに・・・」

と言うわけで翔輝さん以外で部屋の中を散策した結果、ミカンを発見・・・できませんでした。

入ってから気付いたんですがこの部屋の窓が少しだけ開いていたので、おそらくそこから外に逃げていつてしまったんでしょう。

「何でこの寒い時期に窓を開けっ放しにしてんだお前は？」

「だってあたしあの部屋に普段いないもの。だから『ちよつと寒いかな?』とは思っても別に気にならなかったし」

「だからって……」

「とにかく今はそれどころじゃないでしょ?早くミカン探さない」と

「……それもそうか。じゃあ行くぞ、ミカンがこれ以上遠くに行く前に探さない」と

「了解です」

防寒着を身に纏って外に出る。相変わらず森の中は雪に包まれていて、ある意味幻想的ですがそんな事を気にする余裕ありません。だって寒いんですもん。尋常じゃなく。

「さ、寒い……!」

「猫は寒いのが苦手なのに……」

「文句言つな、同じ猫のミカンだってこの極寒の中にいるんだから」「はいはい、無駄口叩いてる暇があったらとつと探しに行くわよ?バラバラに行ったほうが効率いいからそうさせてもらっからね?」

ミラさんはそれだけ言つと無数のコウモリを呼び出し、ミカンを探すように指示を出してから自分もコウモリに変身して散策を開始する。

「……あれだけコウモリが行けばすぐ見つかると思うんですが……私達待ってちゃダメなんですかね?」

「お前らもサボんなよ?」

「翔輝さんと一緒にしないでください」「あんたと一緒にしないで」

「一緒にされたくなかったらとつと行ってい。とりあえず見つ
かっても見つからなくても30分後にここに集合な？」
「分かりました」

翔輝さんもそう言っつてミラさんとは違う方向に向かって歩き始めた。
となるとまあ必然的に私とエミーさんが小屋の前に残るわけです。

「・・・行きましようか？」

「そうね。あ、そつだ譲葉」

「何ですか？」

「ちよつと聞きたい事があるんだけど、いい？」

「構いませんよ？何なら中入ります？」

私がそう言つた直後、辺りが少しの間沈黙に包まれた後、

「・・・」

「やめましょ、翔輝に負けた気になるから・・・」

「激しく同意です・・・」

結局ミカンを探しながら話を聞くことになりました。

「それで、聞きたい事つて何ですか？」

私はエミーさんに歩きながら尋ねる。一応ミカンを探しながら会話
しているの、サボリにはならないでしょう。

「うん、昨日の事なんだけどさ」

「はい」

「あたし翔輝と『絶対に笑つてはいけないホニヤララ』観てたの」

「・・・こつちにもあるんですか、その番組？」

「まあね。ルールは譲葉の世界と同じみたい」

「そうなんですか。それで？」

「うん、それで一緒に観てただけけど、ただ観るだけじゃつまんな
いからルールを考えたのよ」

「もしかして笑ったらデコピンとかそういう感じのですか？」

「そう、笑ったら相手の頬つぺたつねるって言う罰ゲームつきで観
てたのよ。そした……」

「エミーさんが翔輝さんの頬つぺをつねっても翔輝さんは一回もエ
ミーさんの頬つぺはつねらなかったと」

「……なんで分かったの？」

「昔からそうなんですよ、翔輝さんは」

「昔から？」

「ええ、女の子に手を上げることには極端に抵抗があるんですよ。少
し大げさですが、ある種の恐怖症とも言えるかもしれない」

「手を上げるって……そんな大したことじゃないじゃない」

「まあそうなんですけど、昔からそうなんですよ。翔輝さんはたと
え相手が付き合いの長い私でも、どんなにふざけていても絶対に手
は出しません」

「何でそこまで？」

「さあ、理由までは私もちょっと……。そういえば何でなんでし
ようね？」

「いや、あたしが知ってるワケ無いじゃない」

「別にエミーさんに聞いたわけじゃありませんよ、ただの独り言で
す」

「ああそうなの？ならいいけど。しっかし意外ね、翔輝のことだ
から女の子でもボコボコにするかと思っただのに」

「エミーさんは少し翔輝さんを過小評価しすぎじゃないですか？」

「そうかしら？」

「そうですね、翔輝さん普段はあんな風に口が悪いですけど、本当
はすごく優しいんですよ？」

「アイツが優しいなんてそんなこと・・・」

そこまで言うと、エミーさんは何かを思い出したのか黙り込んでしまった。

翔輝さんがさり気なくしてくれた親切でも思い出したんでしょう。

「・・・確かにそうかもね」

「はい。まあ何はともあれ、エミーさんの疑問の答えにはなりませんでしたか？」

「うん。でも原因は何なんだろ？」

「・・・」

「譲葉？」

「・・・さあ？」

「え？」

「さあ、何なんでしょうね？」

「・・・まいっか、あたしの知ったこっちゃ無いし」

「・・・」

「・・・ごめんなさい、エミーさん。本当は知ってるんです。

翔輝さんが異常なまでに女性を傷付けるのを恐れるようになってしまったきっかけが何かは知りませんが、決定的になってしまったある出来事については・・・。

でも、私にはそれを喋る権利はありません。だから、翔輝さんが自分の口で、自分の意思でそれを皆に話す時まで、今はまだ、我慢していてください・・・。

第47話 ミカン騒動（後書き）

（30分後）

「皆どうだった？」

「俺は見つけらんなかった」

「私もダメです」

「あたしも」

「万事休す、かしら？」

ニヤ〜・・・。

『・・・』

というわけで、急いで中に入るとミカンはコタツの中で丸まっています。どうやら部屋が暗かった事もあって見逃してたみたいですね。そんなわけで、就寝前の無駄な30分を送った一日でしたとさ、チャンチャン

今回はちょっと伏線を張ってみました。いつこの伏線に繋がるかは未定ですが；

第48話 どうして？（前書き）

更新遅れました、申し訳ありません。普通にやる気出なかったただけなのでさらに申し訳ないです・・・；

ですが今回、超大作です！6500文字強！

前の小説ではこれでも少ないほうだったんですが、この小説にしてはかなり長いほう！頑張りました！

今回かなり重くなってしまった感がありますね。前回に続き、少しコメディー少なめです

まあそろそろ話を進めたくなくなってきてる感じもあるので、コメディー目当てで来て頂いてる方には申し訳ありませんが、もう少しお付き合いいただけたら幸いです

それではどうぞ〜

第48話 どうして？

学校中にベルが鳴り響くと共に学校が終了しました。日本の学校みたいな「キーンコーンカーンコーン」じゃなくてちゃんとした教会にしているようなベルです。チャリティーベルみたいな。

さて、学校から開放されてホッと一息ついているのはこの私、譲葉です。

最近はこの学校にもさすがに飽きてきました。まあ先生が明るい方なので授業中に眠くなるとかそう言うわけではないんですが、やっぱりちよつとレベルが低すぎてあんまり面白くないというか……。もし！万が一！忘れている方がいれば一応言っておきますけど、私こっちに来る前は全国トップだったんですよ？成績。だからこれくらいの授業なら問題なくこなせます。

まあそれはさておき、とにかく本日の学校は終了です。さっさと帰るとしましょうか。

「翔輝さん、帰りましょう」

「悪い、俺今日はパス」

一応誘ってみたんですが、やっぱり返事はいつもと同じでした。予想はしていたものの、私はその返答にため息をついて、

「今日『も』でしょうか？最近全然私と帰ってくれないじゃないですか。ひよつとして私のこと避けてたりします？」

「んなことするかよ、必要もなければ理由もないだろ？」

「それはそうかもしれませんが、ここまで見事に全部拒否されるとさすがに自信が持てなくなるんですけど……」

「だから悪かったって……。しょうがないだろ、用事があるんだから」

「その用事というのは？」

「それは秘密」

「何ですかそれ・・・」

「とにかく悪かったって。また今度な？」

「それももう少しなくとも十回は聞いた気がするんですけど」

「・・・そんなに帰ってなかったっけか？」

「帰ってません。最後に一緒に帰ったのはちょうど2週間前です」

「・・・」

「毎回少しでも期待して誘うこっちの気持ちにもなってくださいよ・

・・・」

「でもやっぱ今からはちょっと無理だな・・・」

「・・・そうですか」

「んな露骨に落ち込むなって。分かったよ、明日か明後日は何とか開けてやるから」

「・・・上から目線が気に入りません」

「ワガママ言うな」

「・・・いいでしょう、それくらいは譲歩しましょう。それじゃあ

明日か明後日、絶対ですよ？」

「はいはい、約束するよ」

「破ったら？」

「何だよ、針千本吞めってか？」

「私と強制デートとかどうですか？」

「願ったり叶ったりだよ。じゃな」

「・・・まったく」

しょうがないですね、翔輝さんは。まあ用事だという事は分かっているのであまり強く言う事にも抵抗を感じるのであんまり文句も言えないんですね・・・。

・・・って、え？私と強制デート願ったり叶ったりなんですか？

・・・どこまでが本当なんでしょう・・・？

その後、エミーさんが遊びに来る事になって、辺りが暗くなる直前までミカンとじゃれ合ったり談笑したりしながら過ごしました。途中で翔輝さんが帰ってきたので一緒にどうかと誘ったんですが、これまた遠慮しておくといったとつと寝袋に入って寝ちゃいました。

それからしばらくして、エミーさんもそろそろ帰った方がいいだろうというくらい時間。

「それにしてもさ、翔輝どうしたの？いつもより元気なかったけど」「分かりません、最近ずつとあんな調子ですし」

「学校でも最近居眠り多いよね」

「・・・女ね」

「・・・はい？」

「女よ。アイツきつと放課後は彼女と遊びに行ってるんだわ」

「か、彼女！？でもだって、翔輝には譲葉とかエミーが・・・！」

「何でそうなるんですか？」

「何であたしまで入ってるのよ!？」

「とにかくそれはいいです。絶対に」

「分からないわよ？翔輝だって男なんだし・・・」

「ありえないです」

「・・・」

「・・・あ、ご、ごめんなさい・・・」

自分でも驚いてしまった、あんな声を出すなんて・・・。何故だろう・・・とは思わない。だって、その理由を知っているから。

とにかく翔輝さんが女性とお付き合いするなんて、少なくとも今の段階では、ありえない。それだけは自信を持って断言する事ができ

た。

「・・・譲葉、もしかして・・・」

「ふえ！？な、なんですか？」

ウルさんが心配そうに私の顔を覗き込んでくる。エミーさんも少し心配そうに私の様子を伺っている。

ま、マズイですね・・・。もしかして隠し事してるのばれましたかね？とにかく私は予想される質問に対する答えを10通りほど一瞬で考えて、万全の準備をする。

しばらくの沈黙をはさみ、やがてウルさんが一言。

「・・・妬いてる？」

その言葉に危うくずっこけてしまいそうになった。全身の力が一気に抜けてしまったので、もし椅子に座っていなかったら本当にずっこけていたかもしれせん。

「そんなんじゃないですよ。第一私が何を妬く必要があるんです？」

「や、だって譲葉翔輝のこと好きみたいだし。ねえ？」

ウルさんはに振り向きざまにエミーさんに問い掛けると、エミーさんもうんうん、といった風にコクンと頷いた。

「そんなワケ無いじゃないですか、いったいどこからそんな突拍子もない発想が出てくるんです？」

「全然自然でしょ。だってわざわざ一緒に帰ろうって誘ってたし、帰れないと分かったら拗ねたりしてたし」

「拗ねてません。誘うのは幼馴染としての礼儀です」

「・・・ホントに？」

「理由がない嘘はつかないようにしてるんです」

「照れ隠しって理由があるじゃん。よく凄く酷いこと言ってるけど、それも照れ隠しでしょ？」

「私に羞恥心はありませんから大丈夫です」

「・・・それはマズイって。羞恥心は持つときなさいよ」

「とにかく、私と翔輝さんは幼馴染です。それ以上でもそれ以下でもありません」

「分かったわよ。とにかくあたしはそろそろ帰るから。また明日学校でね」

「ええ、また明日」

「バイバイ！」

私とウルさんはエミーさんが森の木々たちに覆われて見えなくなるまで小屋の外で見送った後、エミーさんが食事を用意してくれたのでそれを頂いて宿題をパツパと終わらせてあっという間に就寝時間とはいっても時計はないので体内時計がそう告げてるだけなんですけど。いつも通りウルさんもミラさんと交代しています。

「ミラさん、今日も狩りですか？」

「今日は小屋の中でゆっくりするわ。食料結構溜まってるし。早く食べないと腐っちゃうしね」

「そうですか。いつも申し訳ありません、ミラさんは起きてるのにさっさと寝てしまつて・・・」

「そんなの気にしなくていいのよ、もともとヴァンパイアって言うのは人と関わりをあんまり持たない種族だし」

「それにしたつて・・・」

「気持ちがありがたく受け取っておくから。とにかく譲葉はもう寝なさい、明日も早いんだから」

「・・・はい、おやすみなさい」

「おやすみなさい」

罪悪感を感じながらも、ミラさんもそう言ってくださっているの
で謝罪だけして少し急いで倉庫に移動して寝袋に入る。隣では翔輝さ
んが寝袋に包まって規則正しく寝息を立てています。何気に寝癖い
いんですよね、翔輝さんて。

しばらく寝袋の中でじっとしていると睡魔が襲い掛かってきたので、
快く受け入れて差し上げました。私って優しい……。

「翌日」

学校中にベルが鳴り響くと共に学校が終了しました。日本の学校み
たいな「キーンコーンカーンコーン」じゃなくてちゃんとした教会
についているようなベルです。チャリティーベルみたいな。
少し前に同じような文章をみた気もしないでもないですが、多分あ
れです、デジャブです。どうも、譲葉です。

「……で？どうなんですか？」

と言うわけで場所は再び翔輝さんの机。翔輝さんはまた机に突っ伏
して寝ていたんですが、叩き起こしました

「……」

「安眠を妨害されたからって拗ねないでください」

「……帰れる。帰れるけどさ……」

ようやく開いた翔輝さんの口からはそんな呟きがため息に混じって
出てきた。そう言いながら翔輝さんが外を見たので、私も少し暗い

顔をしながらつられて外を見る。

えっと、とりあえず状況説明しましょうか。天気：大雨。以上。

「・・・傘持ってきてます？」

「それ以前に傘なんて持ってないだろ」

ウルさんの小屋には傘が置いていないので、私達は今日傘を持ってきていません。と言うかそもそもテレビがないので天気予報も見れませんし。新聞もさすがに来ませんしね。

「エミーは？」

「もう帰りました。今日は忙しいのか、物凄い勢いで帰っていきました」

「ウルは？」

「面白そうってエミーさんに着いて行きました」

「・・・つまり頼れる奴は誰もいないと」

「そうなります」

事実を突きつけると、翔輝さんはまた大きなため息を一つ。そんなため息つくと幸せが逃げてっちゃいますよ？と言おうとしたんですが、途中でやめました。だってその理屈でいくともう翔輝さんに幸せ残ってませんもん。

「・・・じゃあねえな。譲葉、5分この教室で待つてられるか？」

「はい？私は全然構いませんけど・・・？」

「そうか、じゃあちよつと待つててくれ。もしあれだったら校舎の入り口とこで待つててくれてもいいから」

「え、ちよつと、翔輝さん!？」

翔輝さんはそれだけ言うて教室を飛び出していってしまいました。

しかも鞆も何も置きっぱなし……。もしあれだったらって……。もしなんだっただらですか？全然分かりません……。

まあ5分で戻ると言っていたので、とりあえず入り口付近に待機してましよう。その方が帰ってくる時翔輝さんも楽ですし。

……。って、翔輝さんの荷物も私が移動させなきゃいけないんですね……。はあ……。

あ、さっきの『ため息すると幸せが逃げる』って奴。多分私にも幸せ残ってませんね……。

（10分後）

「……遅い」

翔輝さん5分で戻るとか言ってますでしたっけ？何で10分もかかっているんですか？

……。もしかして私騙されました？ひよっとして翔輝さんもう走って小屋に戻っちゃったんじゃないや……。

いや、翔輝さんがそんなことするわけ……。

……。でも翔輝さんは違うって言ってたけど、なんだか最近私のこと避けてるみたいだし……。

……。ホントに？本当に帰っちゃったんですか？

そもそも翔輝さん最近おかしいんです。最近ウルさんとかエミーさんにばかり構って私に素っ気無いですし……。

「……嫌われた……。んですかね……？」

『……凄く酷いこと言ってるし……』

ウルさんに言われた一言が脳裏に蘇る。そう、確かに翔輝さんにはかなりひどい事をたくさん言ってきた。

照れ隠し・・・なのかどうかは良く分かりませんが、とにかく色々言ってきたのは確かです。
・・・もし翔輝さんがそれを根に持っていたのなら？それが原因で嫌われた？

分からない。

久々に感じた。このもどかしさ。疑問があるのに、答えが出てこないこのもどかしさ。

昔からこれが嫌で、勉強を頑張った。そしたら分からない事が減って、嬉しくなつて、気付いたら全国トップという地位にいた。

そう、自分は全国トップ。なのに・・・どうして、答えが出ないんだろう？

「・・・どうして？」

口に出しても、答えは出ない。

私が悪いのだろうか？色々意地悪な事を言ったから、翔輝さんに嫌われたのだろうか？

それとも、何か他に理由があるのか？だとしたら何が悪かったのか？
どうして・・・こんなに胸が苦しいのか？どうして・・・こんなに切なくなるのか？

分からない。

分からない。

分からない・・・。

「・・・どうして？」

「な、何が？」

「え・・・？」

誰にも聞こえないような小さな呟きに、答えが返ってきたことに驚いて顔を上げる。そこにいたのは……。

「翔輝、さん……？」

「わ、悪い、待たせたな……」

そう、そこには雨でずぶ濡れになった翔輝さんが息絶え絶えに膝に手を付いてたっていた。足元には無数の泥が付いている。

「しよ、翔輝さん、どうして？」

「だから、何が？」

「な、何でそんなに濡れて……？」

「……何だ、雨の中全力疾走して、疲れない方法、あったのか？」

「……え？」

「んだよ、先に、言ってくれば、ここまで苦労しなかったのに……」

雨の中を全力疾走？何でそんな事を……？

そんな私の疑問はそっちのけで、翔輝さんは懸命に息を整えている。

「……ふう、少し落ち着いたな。さて、帰るか」

「……え？あ、はい……。……あ」

今、気付いた。翔輝さんの右手。そこにあったのは……傘。

「翔輝さん、それ……？」

「今買ってきたんだよ、コンビニで。近くにあると思ったんだけど意外に遠くてな。それでちょっと予想以上に時間喰っちゃまって……」

「

「今、買って・・・」

・・・何だ、そうだったんですか・・・。

単に、傘を買いに行つて、そしたら予想外にコンビニが遠くて、遅くなっただけなのに、私は勝手に勘違いして・・・。

「・・・ぷっ」

「ん？どした？」

「・・・あ、あははははっ！」

「・・・な、何だ？どうした？」

「・・・私つたら、バカみたいですね」

「そりゃあな」

「・・・そうですね」

今だけ、本当に今だけですけど、翔輝さんと同意見ですね。
でも、あっさり納得した私がそんなにおかしかったのか、翔輝さんは目を大きく見開いて私を見る。

「・・・なんですかそのいかにもありえないって感じの視線は？」

「・・・ありえない・・・」

「凶星ですか」

「熱でもあるのか？それともボケたか？老衰にはまだ早いんじゃないか？」

「どの口が言いますか、どの口が」

「この口」

「だからこそ問題なんですよ」

「んだとコノヤロー」

「野郎じゃないです」

「まあな」

そんな感じのやり取りをしつつ、私達は肩を並べて校舎を後にする。予想通りと言うか何と言うか、翔輝さんが鞆を持ってくれた。濡れないように傘の取っ手のフック状になっている部分に引っ掛けてるだけなんですけど、傘自体を翔輝さんが持っているんでこれは翔輝さんが持つてくれているって事でいいはずですね。

「翔輝さん、わざとやっています?」

「何が?」

「鞆が当たるんですけど」

「文句言うな、濡れるよりマシだろ?」

「え?あ・・・」

また今気付いた。翔輝さん、私のほうに傘漕い寄せてたんですね。

「翔輝さん、何やってるんですか?もっと翔輝さんのほうに寄せないと濡れますよ?」

「いいんだよ、俺もつビショビショだし」

「そう言う問題じゃないですって。大体なんで二つ買ってこなかったんですか?」

「金がなかった」

「・・・」

「・・・」

「・・・いいんですか?」

「傘?」

「はい・・・」

「気にすんな」

「・・・じゃあお言葉に甘えさせてもらいます。ありがとうございます。」

「ん」

やっぱり、翔輝さんは翔輝さんだと思う。だけど、やっぱり不安は拭いきれない。

本当に今までの事怒ってないのだろうか？幼馴染だから仕方なくやっているのだろうか？

本当に・・・嫌われていないのだろうか・・・？

「・・・翔輝さん」

「ん？」

「・・・最近私のこと避けてますか？」

「どうしたんだよ急に？昨日も」

「翔輝さん。真面目に、真剣に、本当のことを答えてください。私を避けていますか？」

「・・・んなことするワケ無いだろ？」

「じゃあ何で最近一緒に帰ってくれないんですか？何で素っ気無いんですか？」

「放課後に用事があったから。用事が何かは・・・言えないけど、とにかく本当にそれが理由だ。素っ気無いのは・・・多分ウルとかエミーとか仲間が増えてそいつらと行動する事増えたからな。それで俺がお前意外と話す事が多くなったから素っ気無くなった気がするんじゃないか？」

「・・・」

「・・・」

「・・・本当に？」

「本当だ」

「誓いますか？」

「何に？」

「私に」

「それでお前が信じられるならな」

「じゃあ言ってください。私のことをどう思っていますか？」

「お前は俺の幼馴染もとい家族兼仲間。要するに大切な人。これで満足か？」

「……分かりました、信じましょう」

翔輝さんは今、私に誓ってくれた。なら、私は翔輝さんを信じる。だから

「……ごめんなさい」

一瞬でも、翔輝さんのことを疑ってしまって……。

「……お前本当に大丈夫か？お前が俺に謝るとかありえないだろ。」

「……翔輝さんのバカ……」

どうしてこんなにホッとしているのか？ただ翔輝さんが私を避けていないと分かっただけなのに、どうしてこんなにホッとしているのか。

分からない。何も分からない。でも、学校で感じたあのもどかしさは、不思議と消えていた……。

第48話 どうして？（後書き）

ブログ作ってしまったので書くことが無くなってしまっていて困っている作者ですw

今後どうしよう・・・とか一日中考えてますw

第49話 翔輝 コン疑惑!?(前書き)

タイトルの には当てはまる言葉一つしかないじゃん、と思う方!
・・・その通りですw

第49話 翔輝 コン疑惑!?

皆さん前回に引き続きこんにちは、讓葉です。

現在は昼休み。いつものように私達4人（言わずもがな私、翔輝さん、ウルさん、エミーさん）はカフェテリア、いわゆる食堂のようなどころで食事を取っています。

しばらくの間私達は普通に談笑していたんですが、翔輝さんが飲み物を買ってくるといって席を立った隙をうかがって私は残った二人に計画のことを話しました。

その計画というのは、今まで「用事」だけで実際には何をしているのか分からなかったので、放課後翔輝さんのあとをつけてみる、というものです。

二人もその事は気になっていたのか、計画を説明するとあっさり首を縦に振ってくれた。

と言うわけで

「二人とも、頑張りましょうね」

「おー！」

「放課後が楽しみだわ」

ノリのいい友達を持って幸せですね、私って。

その後帰ってきた翔輝さんと一緒に談笑を続け、昼休みが終わって授業を受け、あっという間に放課後。

早速計画開始です。まずは私がいつも通り一緒に帰ろうと誘ってみる。

「翔輝さん、一緒に帰りませんか？」

「ん？いいぞ、帰るか」

・・・え？

「おい何やってんだ、早く帰ろっぜ？」

「・・・」

。どころやら今日は本当に帰れるらしいですね。早速作戦失敗です・・・

「ちょ、ちょっと待っててください。ウルさんたちも誘ってきますから」

「はいよ、じゃあ俺は先に校門行ってるから」

私は一旦翔輝さんと別れて二人にその事を話すと、「それじゃあ計画は明日に延長。とりあえず今日は一緒に帰ろう」という事になったので、その日は普通に町をブラブラした後一緒に小屋に帰りました。

↳翌日・放課後

「翔輝さん、帰りましょう」

そんなわけで次の日の放課後。私が再び翔輝さんを誘ってみると、

「あゝ・・・。悪い、今日は用事があるから無理」

ようやく期待していた返事が返ってきたことに私は心の中でガツポーズをする。しかし、表面上は物凄く残念そうな顔をして、

「そつですか・・・」

シユンとうなだれてみる。それを見て翔輝さんはバツの悪そうな顔をして、

「わ、悪かったって。こないだ一緒に帰ったからその分行かなきゃいけないんだよ。って言うか昨日一緒に帰っただろうが」

「それはそうですけど・・・」

「とにかく今日は本当に無理だから。また今度帰れるかどうか聞いてみるよ」

「はい・・・。それじゃ、私達は帰りますから」

「ああ、また後で」

と言うわけで翔輝さんのあとをつけると言う本来の目的が達成できそうです。

私はウルさんエミーさんに作戦の第一段階成功の知らせをし、翔輝さんが教室を出たところで作戦の第二段階開始です。・・・まあ要はあとをつけるだけなんですけどね。

翔輝さんが教室を出てしばらくしてから、教室のドアから顔だけ出して校門に繋がる廊下を見てみたんですが、何故かいません。一瞬で消えちゃいました。

「・・・あれ？どこ行ったんでしよう？」

「譲葉、後ろ後ろ」

「後ろ？」

私は今見ていた廊下の反対側に目をやる。すると、いました。一人だけ制服の目立っているあれは、間違いなく翔輝さんです。

「・・・何であっちに行くんでしょうか？」

「何で？」

「だって『用事』って言うくらいですからつきり学校外のことだ

「思ったので・・・」

「そっか、そういえばあつちは校門とは逆方向よね？」

「って事はやっぱりエミーが言ってたみたいに・・・」

「何です？」

「・・・女の子？」

「違います、絶対に」

「だから何でそう言い切れるの？」

「・・・女の勘です」

「信用できない」

「失礼ですね、私の勘はエスパーをも凌駕するほど・・・！」

「二人とも、騒ぐと翔輝に気付かれちゃうって！」

「・・・！す、すみません」

「まったく、これだから譲葉は・・・」

「基本的にはエミーさんのせいでしょう！？」

「だから譲葉黙っててばー！」

「・・・前途多難ですね・・・」

まあ奇跡的に翔輝さんに気付かれる事もなく、尾行を続けて数分。

私達は、と言うか少なくとも私は来た事がない校舎の端っこの方で翔輝さんは歩き続けた。

その途中でなんだか中学生くらいの子と遭遇したり小学生くらいの子と遭遇したり、なんだか時間と共に周りの生徒達が退化して行ってるんですけど・・・。

「翔輝の奴、幼稚部に用があるのかしら・・・？」

「幼稚部？そんなのあるんですか？」

「あれ、譲葉知らなかったっけ？この学校は幼稚部から大学まで全部同じ校舎で、なおかつエスカレーターだから特に勉強する必要もないのよ」

「・・・だから授業があんなに大雑把でレベル低いんですね・・・」

「？」

「って事は何？翔輝は今幼稚部に向かっているって事？」

「まあこのまま行ったら幼稚部の校舎につくけど」

「ま、まさか・・・」

「ウルさん、どうかしましたか？」

「・・・エミー言ったよね、翔輝の用事は女の子に会うことだって・・・」

「」

「言ったわね」

「って言うかありえませんがね」

「・・・って事はだよ？翔輝って・・・」

「・・・ロリコン？」

「」

「」

「」

「」

「・・・あの、ウルさん？」

「だって！女の子に会いに行く目的で幼稚部の校舎に来るなんてそ

れしか考えられないでしょ！？」

「ウルさん落ち着いてください」

「落ち着いてられないって！だって翔輝の周りにはこんなに可愛い

子がいっぱいいるのにこんなところに来るなんて！何かちびっ子達

に負けた気がして納得いかない！」

「」

「どういう理屈ですかそれ？」

「と言うかそれ以前に・・・」

「」

「それもありえませんが、翔輝さんは正常です」

「だってだって！分からないじゃん！わざわざこんなところに来る

なんて・・・！」

「だからありえませんが。翔輝さんは・・・」

「……？讓葉、どうしたの？」
「……」

「……大丈夫ですよ、これくらいなら言っても。」

「……翔輝さん、あつちの世界では学校の同級生とお付き合いましたから」

「……!？」

「まあこつちに来る数年前に別れましたけどね」

「は、初耳だよ……」

「当たり前じゃないですか、今初めて言ったんですから」

「どういうこと？だって翔輝の奴女の子恐怖症……」

「恐怖症なんて大層なものじゃありませんけど……。その事はまだそれなりに大丈夫だったんですよ。まあ学年上がることに少しずつ接し方が分からないといった感じになってきましたが」

「でも……」

「ほら、こんな事ばかりしていると翔輝さん見失っちゃいますよ？早く行きましょう？」

「あ、う、うん……」

「……二人とも、納得できないって顔に書いてありますけど、今はこれしか言えません。後は、翔輝さんが自分から言うまで待つてあげてください……」

さて、少し真剣モードに入ってしまったって暗くなってしまいましたね。気を取り直していきましょう。

しばらく翔輝さんをつけていると、エミーさんの読み通り幼稚部の教室の前に立って扉をノックしました。

数秒後、中からまだ若い女の人が出てきた。多分20代前半くらいでしょう。動物の一部が見当たらず、尚且つ耳が若干尖っている

るのでエルフでしょうか？

「あら翔輝君。ゴメンなさいね、毎日毎日お願いしちゃって・・・。
一応英雄さんなのに・・・。」

「んな事気にしなくていいんですよ。先生も無理しないほうがいい
つすよ？」

「ありがと、じゃあ今日も頼んでいいかしら？」

「ええ、ゆつくり休んでください」

「うん、じゃあまたいつもの時間までよろしくね？」

「はい」

そう言うとその女の人（翔輝さんの発言と言葉遣いからして先生らしい）は松葉杖を付いて教室を出て行った。

片方の足にはギブスが巻いてあって、人目見ただけでも骨折したと分かった。

「保健室まで送ってきましょうか？」

「それじゃ翔輝君がここにきてくれる意味がないじゃない」

「それもそうですね」

翔輝さんは苦笑してそう言った。・・・なんでしよう、すごく楽しそうに見えるんですけど・・・。

別に嫉妬とかそう言うわけじゃないんですよ？ただなんて言うか・・・ムカムカします。

「嫉妬じゃん」とかいった人。・・・明日目が覚めるとき髪の毛が残ってるといいですね

と、そうこうしている内に翔輝さんがやかましい教室の中に入ってしまった。しばらくの間をおいて、翔輝さんが大きく、しかしやる気の無い声で、

「クソガキ共、ちよつと黙れ〜！」

・・・子供の衛生教育上その発言はどうかと思いますが。って言うか完全にダメでしょう？

「何やってんのよ、アイツ・・・」

「ここの子から嫌われたりしてないのかな・・・？」

まあ十中八九相当嫌われてると思いますけどね・・・。

「あ、翔輝兄ちゃんだ！」

「兄ちゃんがまた来た！」

「翔輝兄ちゃん！遊んでよ〜！」

・・・え？あれ？

な、何かメチャメチャ好かれてませんか！？

「はいはい、遊んでやつからちよつと待て。えつと、まあいつもみたいに先生は赤ちゃんがいる上に足折つちまったから、動くのが大変だ。と言っわけで、俺がお前らの面倒しばらく見るから。面倒な事すんなよ？」

『はい！』

・・・何か普通に馴染んでるんですけど・・・。
振り向くと、後ろでウルさんとエミーさんも困惑の表情を浮かべている。

「よし、それじゃそれを肝に銘じて、適当に遊んでいーぞ〜」
『翔輝兄ちゃん！』

翔輝さんがそう発表すると、皆雪崩のような勢いで翔輝さんに突進していく。翔輝さんはそれを「やっぱりな・・・」とでも言いたげな顔をしてため息をつく。

「・・・これが翔輝さんの言ってた用事ですかね？」

「まあそうでしょ、ここにしばらくいるみたいだし・・・」

「ぼ、僕はちよつと違う事を想像してたけどなあ・・・」

「私だつてそうですけど、どう見てもこれが事実ですし・・・」

私達がそんなちよつとした会議(?)を開いていると、中の喧騒が一瞬だけ納まった。

「あ、悪いお前ら、ちよつと待つてな」

翔輝さんが生徒の皆にそう言ったからだ。何があつたのかと耳を澄ませてみると、

「おいお前ら。いつまでも隠れてねえで出て来い」

・・・なにやらとてもまずい事を言いましたが、多分教室の中の生徒の事ですよな?カーテンに包まって隠れているとか・・・。

「譲葉、ウル、エミーの三人。とつとと出て来いつて言つてんだ」

・・・ばれてました。はい、と言うわけで潔く翔輝さんの前に姿を現す。それに続いてウルさんとエミーさんもドアの陰から出てきた。

「やっぱりな・・・。お前ら、ちよつと俺あいつらと話があるからもうちよつと自分達で遊んでてくれな?」

『え〜!?!?何で〜!?!?』

「つべこべ言うな、すぐ戻ってくるから」
『・・・はい』

生徒たちは渋々と言った感じでそれぞれの遊びを始めた。それを確認した翔輝さんは教室の外に出て、私達に向き直る。

「つたく、何で付いて来るんだよ・・・」

「だ、だって翔輝さんが何してるか教えてくれないから」

「そうよ！大体なんてあんた教えてくれなかったの？別にこんな事教えてくれたっていいじゃないの」

「言ったらお前ら「ロリコン？」とか言ってからかうだろ」

「・・・」

「凶星な」

「と、とにかく。なんで気付いたんですか？」

「あんだけ騒がしくしてて気付かれてないつもりだったのか？」

「・・・」

やっぱりばれてたんですか・・・。

「・・・こないだ気まぐれで依頼室に言ったんだよ」

突然翔輝さんが語り始めた。ここに来ている理由でしょうか？

「そしたらいつもの先生にここの事言われてな。頼まれたから様子見にきたら予想以上に困ってたみたいでな。ほっとけなくて結局依頼受けちまってな。期間は最短で先生の骨折が直るまで、最長で先生が全快になるまで。今先生妊娠してるからな、全快って言ったなら結構長くなると思うけど」

「でもそんなの代理の先生に頼めないんですか？」

「その辺は何か良く分らんが、大人の事情でダメらしい」

「・・・どんな事情なのか微妙に気になりますね」

「でもさ、何で翔輝こんなに園児に気に入られてんのよ？あんな根っからのいじめっ子なのに」

「誰がいじめっ子だ。最初は当然怖がられたけどさ、何回か来る内に慣れてきたみたいで今では結構な人気者になってしまったというわけだ」

「まあ翔輝さん昔から面倒見はいいですからね」

「誰かさんのせいで鍛えられたからな」

「うう、封印していた過去が・・・」

「ゆ、譲葉、どうしたの？」

「昔はこいつ泣き虫で俺にベツタリだったからある意味鍛えられたんだよ」

「だ、誰がベツタリですか誰が!？」

「ああ、成程ね」「成程」

「二人で納得しないでください!」

と、とにかく。これでとりあえず謎(?)は解けましたね。

要するに、翔輝さんは依頼でここの手助けをしていたと。でも内容が内容だったので、私達にからかわれるとふんで黙っていたと。

かなり簡潔、と言うか大雑把なまとめになってしまいましたが、まあ間違っではないのでいいでしょう。

その後、結局私達三人は翔輝さんの手助けをして、全ての仕事を終えてから少し町をブラブラしてから小屋に帰りました。

はあ、子供の相手って疲れますね、もう二度とゴメンです・・・。

ふああ・・・。おやすみなさい・・・。

第49話 翔輝 コン疑惑!? (後書き)

昨日、24日(アメリカ基準)は、自分がこのサイトで小説を書くようになってちょうど1周年!皆様こんな小説を読んでくださって本当にありがとうございます!

これからも頑張りますので、よろしくお願いします!

第50話 イライラの原因(前書き)

50話です！そしてユニークアクセス100000人越えです！
読者の皆様本当にありがとうございます！これからも頑張りますの
でどうぞよろしく願います！

あ、更新が遅れたことの言い訳は後書きで・・・；

第50話 イライラの原因

・・・おはようございます。翔輝さんほどではありませんが朝に弱いのでちよつと機嫌が悪い譲葉です。

今日は、昨日の明日です。・・・ええ、間違つてはないですよね？もう少し詳しく説明すると、翔輝さんの依頼の手伝いをして散々な思いをして帰ってきた日の翌日です。

それにしても、やっぱり子供って恐ろしいですね。純粹なので何の遠慮もなく色々してくるんですよ。

はあ、本当に疲れました・・・。当の本人（私の横で爆睡中）は全然なんでもないつて感じてはしたけど。

つて言うか全然大丈夫なら私達を巻き込まないでくださいよ・・・。何かそんな事を考えていると余計に腹がたつてきます。と言うわけで、腹いせに翔輝さんを叩き起こしましょうかね。時間も・・・ちよつと寝坊してしまつたのでかなりギリギリですし。

「翔輝さん、起きてください。遅刻しますよ？」

「・・・」

「起きてください、この間居眠りのし過ぎで怒られたばかりなんですから、これで遅刻はまずいですよ？」

「・・・大丈夫だろ、あと5分くらい・・・」

「ダメです、私の計算だとあと2分以内に起きて支度しないと間に合いません」

「・・・じゃあ潔く遅刻する・・・」

「いい加減にしてください」

「っだ！」

私は翔輝さんの戯言を無視して寝袋の横を思いつきり引っ張ると、寝袋はまるで寝袋自信が寝返りをつつたかのように転がり、中に入

つっていた翔輝さんは顔面を倉庫の床に強打しました。

「何すんだ!？」

「あ、起きましたか。すごいですね、朝から完全覚醒してるじゃないですか」

「そりゃ誰だつていい感じにまどろんでる時に顔面強打したら完全覚醒するわ!」

「まあいいじゃないですか、遅刻するよりはマシじゃないですか」
「ふざけんなああああ!」

あゝ、ちよつと気分爽快です。

しかし時間が結構ギリギリなので朝の言いあらそ・・・会話は途中で強制終了して小屋の方に向かいます。

今週はウルさんが朝食当番なのですが、この時間じゃ朝食を食べる暇もないですね。

そんな事を考えながら小屋に入ると、ウルさんが冷蔵庫の前で固まっています。一瞬、その首筋に汗が流れたのを私は見逃しません。

「・・・ウル、飯は?」

「・・・え、えへへ・・・」

翔輝さんがそう聞くと、ウルさんは冷や汗を浮かべながら引きつった笑顔でこつちに笑いかける。・・・なるほど、食材がなかったと。

「昨日確認しなかったんですか?それも含めて朝食当番の仕事なんですからしっかりしてくださいよ?」

「うう・・・ごめんなさい」

「まあ幸い今日は朝食食べてる時間もなかったのである意味ちよつどいいですけど」

「はあ・・・」

「・・・まあそんなに気にすんな」
「・・・あ」

翔輝さんはそう言うと今にも泣きそうな顔をしているウルさんの頭を撫で始めた。

最初は何がなんだかと言う顔をしていたウルさんでしたが、次第に心底幸せそうな顔に変わってきました。

「・・・翔輝さん、ウルさん、急がないと遅刻ですよ？」

「あ、ゴメンね、今行くから」

「別に遅刻したっていいだろ・・・」

「ダメに決まってるでしょう？つべこべ言わないで急いでください」

「・・・了解」

・・・翔輝さんがウルさんを撫でているときにちよつと、こつ、何でしょう、説明しにくい気持ちになったのは秘密です。

と言うわけで朝食を抜いて登校です。学校に到着したのは、授業開始2分前。ギリギリセーフですね。

そしてお昼休み

「腹減った・・・」

「お弁当の事すっかり忘れてましたね・・・」

「うう・・・アイムハングリ・・・」

「何で英語？」

「・・・僕が覚えてる数少ない文章の一つだから」

・・・それ微妙に理由になっているような、なっていないような・・・。

それはともかく、この空腹をどうにかしないとです。この学校の学食は・・・まあぶつちやけ質は最悪です。

勿論私達の世界の高校の学食のレベルが高かったと言つのもありませんが、それを差し引いてもこの学校の学食は相当な事がない限り食べたくありません。

私達がこつちの世界の食べ物に慣れていないのであまりおいしく感じないのかもしれないんですけど、とりあえず進んでここの学食は食べないでしょう。

「・・・しょうがないか、コンビニ行つてなんか買ってくる」
「え、いいんですか？」

「・・・お前自分の分も買ってきてもらえる前提で話してるだろ？」
「だって翔輝さんですし」

「・・・何がいいんだ？」

「何でもいいです」

「僕も！」

「じゃああたしも」

「何で弁当持つてるお前まで？」

「別にいいでしょ、飲み物の一つや二つ。あたし紅茶。甘いのね」

「あ、僕ココア！」

「好き勝手注文しやがって・・・。譲葉は本当に何でもいいんだな？」

「ええ、お弁当と何か飲み物があれば」

「はいよ、じゃあちよつと行つてくるから」

「食べる時間も考えてちよつと急いでくださいね」

「御意」

短くそう答えると翔輝さんは小走りで教室を飛び出していった・・・
今になってやっぱりお茶にしておけばよかったかな、何て考えても無駄ですよ・・・。

「エミー、それちよつと食べさせて〜」

「ダメ」

「僕のが来たら分けてあげるから」

「ダメだって」

「・・・ケチ」

「ケチで悪かったわね」

そんなやり取りを傍らで見守る中、待つ事二十分。教室に息を切らした翔輝さんが入ってきた。若干荷物が多すぎる気もしますけど、気のせいでしょうか？

「た、ただいま・・・」

「翔輝！遅いよ！」

「わ、悪い・・・」

「どうしたんですか？何かありました？」

「ちょ、ちよつとな・・・」

「あ、夢幻君」

教室の入り口の方から声が聞こえたのでそつちを向くと、見慣れた女の子が立っていました。このクラスの委員長です。

「早いね。来る前に待ってて受け取ろうと思ったのに。仕事があったからちよつと遅れちゃったみたいだね」

「あ、悪い、俺が届けようと思ったのに」

「ううん、大丈夫。こっちこそゴメンね、疲れたでしょ？」

「ほんの少しな。ほれ、頼まれてたモン。これで全部だろ？」

そう言つて翔輝さんは手に持ったビニール袋をその子に渡す。渡された子は中身を確認し、それを終えると満面の笑みを浮かべてお礼を言つて教室を出て行った。

翔輝さんはそれを見送ると再び私達に向き直つて、もう片方の手に

持ったビニール袋をテーブルの上に置いた。

「ほれ、弁当と飲みモン」

「・・・翔輝さん、さっきの子は？」

「このクラスの委員長だろ。何だ、知らなかったのか？」

「いえ、そう言うわけじゃないんですけど、何か頼まれてたんですか？」

「ああ、委員会で使おうと思ってたものが予想以上に数が足りなくて急遽買出しに行く事になったらいいんだが人手が足りなくて仕方なく俺にお願いしたんだと」

「・・・要するに使いつ走り？」

「まあ。でも別にいいだろ、どうせコンビニの近くにある文房具屋にちよつと寄るだけだし」

「まあどうするかは翔輝さんの自由ですから構いませんけど・・・」

「だろ？さて、じゃあとつとと食べようぜ？」

『ゴォ・・・オン』

「・・・放課後に」

鉄拳制裁です。遅れてしまった事に対してもですけど、委員長さんと遊んでいたからです。

さて、そんなわけで空腹と戦う午後の授業を想定していたんですが、午後の授業は基本的に自習だそうなのでそこでお弁当を素早く完食し、難を逃れました。

そんな自習時間での事です。

「うづうづうう・・・」

・・・。

「うづうづうう……！」

……。

「にゃああああ、もう！」

……にゃあああああ？

「んだよ、うるせーな！寝られねえじゃねえか！」

「わかんないんだもん！全然！」

「って、お前自習時間にちゃんと勉強してんのか」

「当たり前でしょ？勉強しないのなんてあんたとウルくらいよ」

確かに翔輝さんとウルさん以外はちゃんと勉強してますね。こういうのを少しは日本の学校も見習って欲しいですね。

「はあ……。翔輝、教えて」

「何で俺が？譲葉に教えてもらえばいいだろ？あいつのほうが成績いいし賢いんだから」

「譲葉じゃレベル高すぎて聞くに聞けない。と言うかあたしなんか譲葉の勉強を邪魔しちゃう悪いって感じがする」

「それは何となく分かるが……」

「だから教えて。癪だけどあんたも結構頭いいんだから」

「じゃあねえな、どこ？」

「ここ」

「……ああ、ここは……」

……私ってそんなに色々聞き難いんですか？

そんな事気にしないで色々聞いてくれてもいいんですけどね。

と言つかむしろ聞いてください、なんか翔輝さんとエミーさんが一緒に何かやってるとイライラしますから。そんな自分でもどうしてか分からない気持ちになってさらにイライラが募ってしまった学校での一日も終わり、放課後。

「翔輝さん、今日もあるんですか？」

「ああ、だから悪いけど一緒に帰れない」

「分かりました、じゃあ私達は先に失礼しますね？」

「ああ、6時までには帰るから」

私はそこで踵を返した……んですが、ちょっと気になる事があったので立ち止まりました。

「……先生は？」

「先生？ああ、リーフ先生の事か？」

「幼稚部の先生です」

「リーフ先生がどうかしたか？」

「帰るんですか？」

「そうだな、職員室で仕事した後に戻ってるって言った。それが何だ？」

「……なんでもないです」

いやいや、何を言ってるんですか私。いくらあの先生が若くても一応先生ですから、そう言うのはないですって。

そもそも何を気にしてるんでしょう？別に翔輝さんが誰と何をしててもどうだっていいじゃないですか。

と言うわけでいつものようにウルさん・エミーさんと一緒に下校です。途中でエミーさんとも別れ、ウルさんと帰る途中での会話。

「そつえばさ、譲葉なんでそんな機嫌悪いの？」

「え？べ、別に機嫌悪くなんかありませんよ？」

「嘘だよ、さつきから短い返事しかしないし全然笑わないし」
「そ、そうでしたっけ？」

全然覚えてないです。と言うか私ちゃんとエミーさんにさよなら言いましたっけ？それすら覚えてないんですけど……。

「何かあったの？」

「いえ、何かつてわけでもないんですけど……今日見て分かったんですけど、翔輝さん女性の方以外と全然喋ってないなあ、つて」

「……ああ、言われてみればそうだね」

「まあ翔輝さんは女性に優しい、と言うか甘いので好感がもてる、と言うのは分かるんですけどね……」

「……ヤキモチ？」

「ち、ちがいますよ！断じて！」

「分かった分かった、そんな必死に否定しないでよ……」

や、ヤキモチ……？そ、そんなまさか……。あ、あはは……。それにしても、どうして今日はこんな何に對してもイライラしてしまうんでしょうか……。主に翔輝さん関係ですけど。

〜その夜〜

「それじゃミラさん、おやすみなさい」

「ええ、おやすみなさい。また明日の夜にね」

「はい」

ミラさんに挨拶して私は小屋を出て倉庫に入る。そこには相変わらず寝ている翔輝さんと私の寝袋があつて、音は翔輝さんの寝息以外

は完全な沈黙しかありません。
それがなんだか妙に恥ずかしく思えてきてしまって、私は無意識に寝袋を翔輝さんからできるだけ離れた場所に移動させ、それに潜り込んで眠るために目を瞑ります。
十分後……。

(……眠れない)

ダメだ、今日帰り道でウルさんに言われた言葉のせいで妙に翔輝さんを意識してしまって……。

……仕方ないですね。

私は寝袋を持って倉庫から出て、外に寝袋を敷いて中に潜り込みました。

さすがに今から小屋に入って翔輝さんと一緒に寝れないからここで寝かせてください、なんて言ったらミラさんにまでからかわれそうですし、だったら外で寝るしかないですよね？

そもそも寝袋って言うのは外でキャンプするときなどに使うものなので防寒機能もばっちり！のはずですし、大丈夫です。

と言うわけで、おやすみなさい……。

第50話 イライラの原因（後書き）

はい、と言うわけで更新が遅れた言い訳です。ブログのほうにも書いたんですが、ほとんどの人は読んでいらっしやらないと思うのでここにも書かせていただきます。

えっとですね、まずは50話目なので何か特別企画をやるうかと思っただんですが、結局いいのが思いつかずやっぱり普通の話にしよう、という結論に達するの一日使用

その後、50話目なのであんまりどうでもいい話は書きたくないと思っただけ色々試行錯誤していくうちに2日ほどが過ぎ、その間にユニークアクセス100000人突破

さらに学校もテストなどで忙しく小説に割く時間が少なくなっちゃったのも要因の一つです

極めつけは、この最新話を半分ほど書いた時にパソコンに異常発生インターネット強制終了による全データ消去・・・T-T

それが発生したのが午前2時を回ったのでその日は力尽き、次の日に全速力で書いて全速力で更新して、現在に至るといっわけです

まあ壮大にした割にはありがちな理由ですが、つまりはそう言う理由で更新が大幅に遅れてしまいました。本当に申し訳ありません・

さて、長くなっちゃったのでここで失礼します。

最後に、感謝を。この小説を読んでくださって本当にありがとうございます！ユニーク100000人、本当に嬉しく思います！この調子で頑張っていくので、これからもこの小説を読んでいただければとても光栄です！

第51話 アレは風邪をひかない(前書き)

申し訳ありません！

もうなんか恒例になってしまったこのセリフ！w

実はですね、ブログのほうでも言ったんですが、先日テニス部に入りまして、執筆の時間が大幅に減ってしまったという事情があります・・・

それにしただって一週間は 아닙니다よな・・・ごめんなさい

でももしかしたらシーズンが終わるまでこんなペースが続いてしま
うかもしれません、ホントにごめんなさい・・・

第51話 アレは風邪をひかない

「……皆さんおはようございます、いつものように寝起きで機嫌が悪い翔輝でございます。寝ぼけているので若干口調もおかしいです。さて、と言うわけで今日も行きたくない学校に行くために準備を始めましょう。と、俺が支度をしようと思つたと立ち上がると、

「……譲葉？」

譲葉がいない。どこ行つたんだあいつ、いつも先に起きた時は俺のことたたき起こすくせに、今日に限つて俺放置？

や、別に俺の安眠を妨害しないでくれるならそれはそれで一向に構わないんだけどさ、何か調子狂うと言つか何と言つか……。とりあえず倉庫を出て小屋へ……。と思つたら。

「……」

「……何やってんだこいつ」

譲葉発見。何故か外で寝ていた。その割には結構幸せそうな顔をしていて、若干顔が赤い……。ように見えなくもない。

「……まあ色々言いたい事はあるけど何よりも先に、何故こいつが外で寝ている？ホワイ？もつと発音よく言つとWhy? Why is she sleeping outside?」

おお、意外と覚えてる、何て心の中で自分に感心しながら譲葉に近づく。とりあえず起こさないと何がなんだか状況がさっぱり分からん。

「譲葉、起きろ」

「……やだよ、働きたくないよ」

「急に二トトになるな、とつとと起きる」

「・・・あゝ、やめてくださいお代官様」

「何を言ってるんだ何を」

「・・・寝ぼけているので分かりません」

「自分で寝ぼけてるとか言える時点で寝ぼけてないだろ。早く起きんと遅刻になるぞ?」

「・・・それはまずいですね」

譲葉はそう言つと寝袋からノソノソと這い出てきた。しかし、目はまだ虚ろなので、おそらくまだ完全には覚醒していないんだろう。

「・・・おふぁよつぐいいます」

「おふぁよつ?」

「・・・はい、おふぁよつです」

「・・・おふぁよつぐいいます」

「・・・はい、おふぁよつぐいいます」

「・・・うん」

「・・・おふぁよ」「いやもういいよそれ。エンドレスリピートじゃねえか」「うみゆ・・・」

寝袋から出たくせにさっきより寝ぼけてないかこいつ?寝袋の中にいた時の方がまだまともに喋ってたぞ?

「で、何でこんなところで寝てたんだ?」

「・・・」

「・・・あの、譲葉さん?聞いてます?」

「・・・え、私ですかあ?」

「あなた以外に誰がこの場にいらっしやるんでしょうか?」

「・・・きょうきさん」

「そんないかにも「おかしな人」みたいな名前ではございません。

翔輝です、翔輝」

「・・・ああ、そうでしたね」

「そうでしたよ。さて、そろそろ目が覚めましたかな？」

「・・・全然」

「ですよね」

何故こんな喋り方か？何かこの譲葉見るとなんとなく口調変えた
くなったから。理由は特になし。

しっかし全然起きない、と言うか活性化しないなこいつ・・・。
よし、プランBに変更。そもそもAなんてないけどな。

「譲葉、涎の跡ついてる」

「・・・はい」

「寝癖もすごいぞ」

「・・・それで・・・え」？

おお、さすがに少し反応あった。もう一步。

「服も肌蹴てる、おまけに下着見えてる」

「・・・!？」

そこまで言うと、さすがに完全覚醒したのか顔を真っ赤にして再び
寝袋の中に潜り込む。そして顔だけ出してこっちを物凄く恨めしそ
うに・・・ん？

ちよっと待て、何でこんなに俺睨まれてんだ？そもそも起きない譲
葉の自業自得なんじゃ・・・？

「・・・翔輝さん」

「うん？」

「ちよっとあっち向いててください」

「ん、はいよ」

とりあえず言われた通りに後ろを向く。後ろから衣擦れの音が聞こえたので、とりあえず制服の肌蹴を直しているのだろう。しばらくして……。

「……いいですよ」

「終わったか？」

「……終わりました」

そういわれたので振り向くと、そこにはまだ寝癖はあるものの、制服はピシッと着ていて涎の跡もない譲葉の姿があった。相変わらず目は俺を恨めしげに睨んでいるが……。

「つたく、相変わらず朝は苦手か？」

「翔輝さんほどじゃありません」

「それならさっきまでの体たらくはどう説明するんだ？」

「う……」

「朝ならお前との口論なんて楽勝だな」

「く、屈辱です……!」

「はいはい、屈辱でも何でもいいからとっとと準備しろ。遅刻してもいいのか？」

「え、もうそんな時間ですか!？」

「だから急いでんだろが。分かったらとっとと準備しやがれバカタレ」

「日本一頭のいい高校生に向かってバカタレとは翔輝さんも偉くなつたものですね」

「少なくとも今のお前よりは秀才だろ」

「……」

「つかお前顔赤いぞ?どうした?」

「ど、どうもしません!」

や、でもホントに顔赤いぞ?何となくフラフラしてるし……。なんだかちよつと心配だったので大丈夫か聞こうとしたその時。

「翔輝(譲葉)ご飯だよ……。って何で二人とも外にいるの?しかも寝袋まであるし」

小屋の中からエプロンをかけたウルがおたまを持って出てきた。今日の弁当に使ったのだろうか?

「あ、はい、今行きます……」

「うん。じゃあ翔輝は寝袋片付けといてね?」

「え、何で俺が?まあ別にいいけどさ……」

若干納得いかない感はあるけど、まあ別にそれほどの手間じゃないので一度反論しながらも引き受けた。

さて、そんなやり取りも程々にいざ学校。教室には相変わらずエミーがいて、入るなり「遅い!」と一喝された。

そんな俺達の騒ぎをよそに、譲葉はとっと自分の椅子に着席して鞆を机の傍らに置き、机にぐったりと突っ伏した。

「……あんだ譲葉になんかした?」

「何故そうなる?」

「譲葉今朝から変なんだ。なんか元気ないしフラフラしてるし」「ふん……。あたしちよつと様子見てくる」

エミーはそっぴい捨てて譲葉の元に駆け寄る。ウルもエミーに続いたので、俺もウルに続いた。

「讓葉、あんたホントに大丈夫？」

「だ、大丈夫ですよ。皆さん大袈裟ですよ、ちよつとフラフラしてたからつて。寝起きでちよつとフラフラしてるだけです」

「ホントに？それならいいんだけど・・・」

「別に具合が悪いとかじゃないですよ、単にまだ頭が覚醒しきつてないだけです。あと30分もすれば完全覚醒しますよ」

「だってさ。じゃあそろそろ授業始まつちゃうから自分達の席にいく？」

「う、うん・・・」

と言つわけで授業開始。と言いたいところだが、実際は讓葉の様子ばかり見てて授業なんか頭に入つてない。

なので讓葉の近況報告（？）。さつきから頭押さえたり机に突つ伏したり、かなり辛そうだ。完全に病気っぽい。

仕方ないな、助け舟助け舟と・・・。

「先生、ちよつと具合悪いんで保健室行っていいですか？」

「ん？ああ、別にいいわよ、行ってらっしゃい」

テキトーな先生でよかった。

「讓葉、一緒に頼む」

「・・・え？あ、はい、分かりました」

と言つわけで讓葉と共に保健室へ。

「翔輝さん、大丈夫ですか？」

「何言つてんだ、具合悪いなんて嘘に決まつてんだろ？」

「え？」

「つてか具合悪いのはお前だろ」

「・・・あはは、やっぱり、ばれてました？」

「授業中あんなにフラフラしてたら誰でも気付くって。ホントに大丈夫かお前？」

「正直ちよつと辛いです・・・。咳が出ないので風邪じゃなくて熱だと思っんですけど・・・。」

「まあどつちでもいいや、とりあえず具合悪いと。じゃあとりあえず保健室な」

「・・・ごめんなさい」

「つたく、遠慮しすぎだ。どうせ具合悪いとか言っただけを心配させたくないとかそういう理由だろ？」

「・・・何もかもお見通しって感じですね」

「伊達に昔から幼馴染やつてるわけじゃないからな。昔もほぼ全く同じケースがあつたし」

「そんなの、ありましたっけ？」

「あつたよ。学校行く時いつもは家に迎えに来るのにその日は来なかつたから様子見に行ったら滅茶苦茶寝ぼけてて、しばらく話したら目が覚めて、授業中にフラフラしてて様子がおかしかったから俺がしょうがないから「頭痛い」って言っただけでお前を保健室に連れてつた。覚えてないかい？」

「・・・なんだかぼんやりと覚えてます」

「昔から何にも変わらないな、お前は」

「失礼ですね、まったく・・・。」

「ただ今回は寝起き姿見られて恥ずかしがつてたよな？」

「当然です。それが何か？」

「だって前は全然そういう素振りは無かつたぞ？」

「そ、それはまだ子供だったからで・・・。」

「あん時つて俺ら中3だぞ？ たつた1年前だぞ？」

「・・・それじゃああの時はまだ翔輝さんを男の子として認識していなかつたという事で」

「つて事は何か？今は男として意識している？」

「『意識』じゃありません、『認識』です」

「どっちも同じなんじゃ・・・？で、大丈夫か？」

「あ、あんまり大丈夫じゃないです・・・」

「もう少し頑張れ、保健室すぐそこにあるから」

「は、はい・・・」

ゆっくり歩く譲葉を励ましつつ保健室へ入る。中には先生が待機していて、軽く診察してから譲葉をベッドに寝かせて後は任せると言ってくれたので俺はとりあえず教室へ帰る・・・と見せかけてサボる。

だってそうだろう？具合悪いはずの俺が帰ってきて付き添いのはずの譲葉が帰ってこなかったら不審に思うことだろう。それじゃあ我慢していた譲葉の苦勞が台無しになる。

・・・という建前のただのサボりだ。だってどうせ譲葉が帰らなかつたらおかしいと思うだろうしな。

ま、ホントの事はまた今度説明すりゃいいだろ。あの先生だから別にたいした罰は無いだろうし。

さて、いつも教室で済ませているはずの安眠を中庭の芝生で済ませて期分快適な俺視点からお送りする放課後です。

とりあえず教室に戻り、俺と譲葉の荷物を取る。事情を聞きに来たウルとエミーに軽く説明してから保健室へ。

「譲葉、大丈夫か？」

「あ、翔輝さん・・・。ウルさんとエミーさんも・・・」

「大丈夫？心配したよ、二人とも帰ってこないんだもん・・・」

「ご迷惑をおかけしま・・・え、二人とも？」

ウルの発言を聞いた譲葉は俺のことをジトーツとした目で俺を見る。俺はさり気なく視線を外してそれを回避した。

「それで譲葉、あんた大丈夫なの？」

「はい、教室にいたときよりは随分楽になりました。翔輝さん、どうもありがとうございます」

「気にすんな、つてかもし『ありがとうございます』なら次からこつなる前に言え」

「・・・はい」

「よろしい。帰れるか？」

「帰れない事は無いですけど、ちょっとあの小屋まで帰るのはきついですね・・・」

「じゃああたしん家泊まってく？」

「え、そんな悪いですよ！急ですし、風邪が移っちゃうかも・・・大丈夫大丈夫、あたしの親はそういうの大歓迎って人だし、あたしん家バカばかりだから」

「・・・バカは風邪をひかないってか？」

「・・・それ言ってて悲しくない？」

「やかましい！」

「自分から言ったくせに〜！」

「だからやかましい〜！」

なんかバカコンビが勝手にケンカ始めたんだけど・・・あ、先生に怒られた。

「とにかくさ、ホントに問題無いから来なよ」

「・・・じゃあお言葉に甘えて、お願いします」

「オッケー。それじゃあ帰りましょう？」

「ほい譲葉、お前の荷物」

「あ、すみません、ありがとうございます」

「じゃ、俺とウルはもう帰るから。また明日な」

「譲葉、お大事に〜！」

「はい、ありがとうございます。また明日」

と言うわけで珍しく譲葉抜きで歩く帰宅路。何となく新鮮な感じだ。まあだからと言って何かあるわけでもなく、その日は普通に過ごして普通に寝た。

（翌日）

「・・・お」

「あ、譲葉〜！」

「あ、翔輝さん、おはようございます。昨日はご迷惑をおかけしました」

「気にすんなって。で、体調は？」

「ええ、昨日より大分楽になりました。ありがとうございます」

「だから気にすんなって。で、エミーは？」

「あ・・・それが・・・」

「・・・もしや？」

「・・・」

「・・・え何、エミー風邪ひいたの？」

力なく頷く譲葉。

「・・・まあ、その、何だ？ご愁傷様です。」

第51話 アレは風邪をひかない(後書き)

↳ 譲葉・エミーの帰り道↳

「……」

「どうしたんですか？黙り込んで……」

「いや、大したことじゃないんだけどさ？」

「はい」

「誰一人として私がバカだって事否定しなかったな〜って思ってた」

「……」

「……」

「……」

「……」

以下略。

ドンマイ。

第52話 拍子抜け（前書き）

お待たせしました、約一週間ぶりの更新です；
こんなに間を空けたのに前回の続きみたいになってるんで、前回は
ザッと読み返したほうがいいかもしれません
それではどうぞ〜

第52話 拍子抜け

「げほっ、げほっ……！あゝもう最悪……」

初っ端から見苦しい姿……は晒してないし。じゃあ聞き苦しい声……は聞こえるワケ無いし。

ん……あ、読み苦しい文章をお送りしてしまい申し訳ありません、エミーです。「読み苦しい」なんて言葉があるかどうかは知らないけど、意味は何となく察してね。「見苦しい」「聞き苦しい」と同じ様な意味だから。

さて、言うまでも無く現在あたしは風邪をひいています。原因は讓葉。あ、別に讓葉を悪く言ってるわけじゃなくて、単に伝染元は讓葉、って意味で……とにかく讓葉を悪く言ってるわけじゃないから。

まあと言うわけで現在家で寝てるんですが、予想以上に暇で驚いた。あたしって基本的に風邪ひかないから、この「学校に行かなくていいんだ！ラッキー、とことん遊んでやるわ！」って言う気持ちと「だるくて何もする気にならない……」って言うのが入り混じった何とも言えないもどかしさ……。あゝイライラする！

な〜んてことをベッドでゴロゴロしている間ずっと考えていたので正直言っただけかなり機嫌が悪いです。皆さん、なるべく近づかないように気をつけてください、募ってるイライラ全部ぶつきますから。と、まあそんな感じにかなり八つ当たりモードに入っていると。

『ピンポーン』

「ん？お母さん帰ってきたのかな？」

言い忘れていましたが、私の両親は共働きなので基本的に家にはい

ません。いつも5時くらいまでには帰ってきてるけど、現在時刻は正午ちよつと過ぎ。あたしを心配して帰ってきてくれたのだろうか？

「は〜い、今出ます〜……。うゝ、クラクラする……」

ん〜、本格的にちよつとやばいかもね……。早いとお母さん入られて看病してもらおつと……。

……あれ？でもお母さんなら普通に入ってくるんじゃない？

何てことも考えたけど、それ以上に辛かったからとりあえずドアを開ける。するとそこには、

「お、何だ動けるのか？てつきり死体みたいになってると思ったんだが」

「……あれ、翔輝？」

何とそこには何故か翔輝が立っているではありませんか。……ん、なんか喋り方もおかしいわねあたし……。とまあそれは置いて……。

「何であんたがいるわけ？」

「いや、暇だったから様子見に」

「暇……って学校は？」

「それ聞く意味あるのか？」

「……」

こいつの事だからどうせサボりだろう。確かに聞く必要なかったわね。

「で、何しに来たの？」

「だから様子見に」

「それはもう聞いたわよ。様子見って何を？」

「ん〜、まあそれは何も考えてなかったんだけどな。って言うかぶつちやけ時間潰せるとこ探しに来ただけだし」

「・・・はあ、もう頭痛い・・・」

「当たり前だろ、病人なんだから」

病気のせいじゃないわよ、とでも言いたかったけどもうそれを言う気力も無かったのでとりあえず踵を返して自室に向かう。

「どこ行くんだ？」

「部屋・・・やっぱりまだ寝てるわ。時間潰すならここ使ってた方がいいから、ゆっくりしてって。ただしうるさくはしないでね・・・」

あたしはそれだけを簡潔に翔輝に告げ、玄関を去り自分の部屋のベッドにダイビング。ん〜、いつもは爽快なのに今日ばかりはやっぱりだるくてしょうがないわ・・・。

ベッドの上でゴロゴロしてる事約3分。部屋のドアがノックされた。

「うん〜・・・？」

「ん、起きてるのか？」

あたしが普段なら絶対に出さないような気の抜けた返事をする、ドアの向こう側から翔輝の声が聞こえた。

「何よ、あたし寝るって言ったでしょ・・・？」

「いや、キッチン使っていていいかなって思って」

「キッチン？・・・うん、好きにしていいいわよ〜」

「サンキュ。ゆっくり寝るよ？」

「うん〜・・・」

「またもや気の抜けた返事を返すと翔輝が遠ざかる気配がした。あたしはその後ちゃんとベッドにも振り込んで、しばらくすると心地よい眠気が……。」

「……うん……。」

額に心地よい冷たい物が当たるのを感じて、あたしは心地よい眠りの世界から呼び戻されました。

うつすらと目を開けてみる。ぼんやりとしていた視界がゆっくりと晴れていき、次第に目に映る人影の顔が鮮明に見えてくる。そこには……

「……翔輝」

「あ、悪い、起こしたか？」

まあわざわざ言う事もないと思うけど、そこには当然のように翔輝の姿が。

「……何してるの？」

「何してるように見える？」

そういわれたのであたしは目だけを動かして翔輝の周りに置いてあるものを見る。水の入った洗面器、耳に入れるタイプの体温計、風邪薬……。

「……看病してくれたの？」

「……ん、そこまで分かるなら大丈夫だな。食欲は？」

「すこしなら・・・」

「卵粥食えるか？」

「・・・うん。・・・あのさ、」

「じゃあ持つてくるから」

「・・・あ」

あたしが理由を聞こうとしたその瞬間、翔輝は椅子から立ち上がった部屋を出て行ってしまった。

急に訪れた静寂に、あたしはさらに混乱する。何で翔輝があたしの看病してるの？このおでこにある冷たいのは・・・？あ、普通のタオルだ。

で、何で？何で翔輝があたしの看病してるの？あれ、これ二回目よね？・・・で、何で翔輝が以下略。

何て感じに自問自答を繰り返す事約1分。小さなお茶碗とスプーンを持った翔輝が再び部屋に入ってきた。

「ほい。ここに置いとくから自分のペースで食べ」

「う、うん。あの・・・」

「ん？」

「何であんたがあたしの看病してるの？」

「や、普通に心配だったから」

「し、心配い！？あんたが、あたしのを！？」

「何だよ、悪いか？」

「気持ち悪い。なんか食欲なくなってきた。って言うかよく考えたらあなたの作った物なんか食べる気しない」

「やかましい、じゃあ食うな。で、気分は？」

「さつきよりは大分楽」

「そうか。他に何かして欲しい事あるか？」

「ううん、特に」

「分かった。なんかあったら呼べよ、リビングにいるから」

翔輝はそれだけ言ってまた部屋を出て行ってしまった。

「・・・どうしよう、あんな事言っちゃったけど正直かなりお腹空いてるし・・・。」

それに心配されたのだから少し嬉しかったし・・・。

「・・・いいや、食べちゃお。言い訳は後で考えるからいつか。」

と言うわけでご馳走さま。うん、意外とおいしかったわ。

翔輝のことだから胡椒なんか大量に入れてるのかなとか思ったけど、拍子抜けにも普通だった。

拍子抜けって言うのと期待してたみたいに聞こえちゃうけど、そういうわけじゃないからね？

でもまあと言う事は本気で心配してくれてるのかな？それは素直にありがたいかな？

それから数分してノックの音。音の主は言うまでも無く翔輝。

「何だ、結局食ったのか。俺の作ったものなんか食う気しないんじゃないかったのか？」

しまった、言い訳考えてない！ええと、ええと・・・！

「しょ、しょうがないでしょ！？お腹空いてたんだし・・・。」

「食欲なくなつたとか言つてなかったか？」

「き、気が変わったのよ！」

「気で腹って減るものか？」

「減るものなの！」

「ん、まあ食欲ある事はいいことだしな。お代わりいるか？」

もっと色々言われるかと思つたけど拍子抜けにもすぐに話題を変えてしまった。

今度のはホントに拍子抜けした。期待してたとかじゃなくて、予想外で。

「・・・ねえ、何で今日そんなに優しいわけ？」

「俺はいつだって優しいだろ？」

「本気で言ってる？」

「ご想像にお任せします」

「・・・で、何で？」

「いや、友達が大変な思いしてんなら助けるだろ、普通」

「・・・よくもまあそんな恥ずかしい事を堂々と言えるわね・・・」

「恥ずかしいのは分かっているけどさ、他に言い方も無いだろ？まあ天助なら絶対に看病なんかしなけどな」

「・・・テンスケって誰よ？」

「めんどくさいけど俺だってそれくらいはするさ。『女は大切にしろ』って叩き込まれたしな」

「誰に？」

「アホ親父」

「・・・あんた、仮にも自分の親に『アホ』って・・・」

「そのせいで昔からいいことないんだよ。全部あいつのせいだ」

その言葉でふと思い出した。

『・・・翔輝さん、あっちの世界では学校の同級生とお付き合いしてましたから』

ちよっと気になるし、聞いてみようかな。

「ねえ翔輝」

「ん？」

「あんた元の世界で誰かと付き合ってたんだって？」

そう聞いた瞬間、翔輝の雰囲気が変わった。なんていうか……さつきまで「ほわほわぁ」ってしてた空気が凍りついたみたいに……。

「……どこで聞いた？」

そういう翔輝の声は、今まで聞いた事がないくらいに冷たい響きがあった。

その段階で、あたしは聞いてはいけないことを聞いてしまったことに気付いたけど、もう後には引き返せない。

「ゆ、譲葉から」

「……あいつ、余計なこと言いやがって……」

翔輝はため息混じりにそう言うと、そのまま黙り込んでしまった。

長い沈黙は破られる事なく、時間だけが過ぎていく。

どれだけ時間が経つただろう？ 10秒？ 30秒？ 1分？ 5分？ 時間の感覚が麻痺するほどに長い沈黙。それに耐え切れず、あたしは硬く閉ざされていた唇を開いた。

「あ、あのさ……。もし話したくなかったらいいから。へ、変な事聞いてゴメンね」

「……本当だよ」

「……え？」

「本当だよ、昔な」

「そ、そうなんだ……」

「……」

「……」

「……」

「……話して……くれないの？」

「……悪い、まだ、な」

「翔輝……？」

「俺の中でもまだ整理できてないからさ。いつか、ちゃんと話すから」

「……うん」

正直に言えば、すごく気になる。いつものしょうもないやり取りなら構わず問い詰めていたと思う。

だけど、このことだけは、絶対に問い詰めてはいけない気がした。

翔輝が自分の口で、自分の意思で聞かせてくれるまで、このことに関わってはいけない。絶対に……。

「で、お代わりいるか？」

「……は？」

「いやだから、お代わり」

「……」

「……どうした？」

なんか……本日三度目の拍子抜け。

あんなだけ重たい雰囲気作つとして、その直後に出てきた言葉が「お代わりいるか？」って……。

雰囲気も何もあつたもんじゃないわね、ホントにもう……。

「……ううん、もういいわ。ありがとう」

「そうか？じゃあ残ったの俺もらうからな」

「うん。じゃああたしもう少し寝るから」

「そうか」

翔輝は部屋を出る前にもう一度タオルを冷たく濡らしてくれた。そ

れをした後で食器を片付け、小声で「お大事に〜」と囁いて部屋を出て行った。

あ、そういえばそろそろバレンタインよね。・・・バレンタインまでに良くなったらチョコでもあげようかな？・・・義理だけどね、義理。

第52話 拍子抜け（後書き）

（翌日）

「エミー！大丈夫？生きてた？」

「この通りすつかり元気よ」

「良くなってよかったですね」

「うん。あ、そうだ翔輝」

「ん？」

「そ、その・・・ありがとね」

「気にすんな、サボる理由も正当だったし」

「・・・いや、正当ではないと思う。っていつかそんな不純な動機であたしの看病してたわけ？」

「でもこのパターンで行くと、次に風邪をひくのは・・・」

譲葉のその言葉に、あたし、ウル、譲葉の三人は翔輝の方をじっと見る。数秒後

『ないない』

「おい」

最近若干シリアス気味な感じが続いてしまっているので、次回はとことんコメディにする予定です。

第53話 ハッピーバレンタインズデー (前書き)

当日に更新できなかつたあああああ〜!!!T—T

いや、もし楽しみにしてくださっていた方がいれば本当に申し訳ありません、実は当日は友達の家でお泊り会がありました；

まあなにはともあれ今回は少しはコメディ〜多目のつもりです

第53話 ハッピーバレンタインズデー

2月14日、月曜日。そう、月曜日。何故か、月曜日。

俺は覚えている。あっちのカレンダーで確認したときは、確かに2月14日は日曜日だったはずだ。

なのに、何故か月曜日。つまり、登校日。

この気持ちができるか？「その日は休みですよ〜」って言われていた日が急遽変更になって登校日になってしまった。これほどムカつく事はない。

と言っわけで、現在超不機嫌です。天助がいたら殴ってるな、問答無用で。

が、いくらそれがしたくても肝心の天助がないこの世界。イライラは募るばかり、最終的にはイライラは全てため息に変換されていた。

「翔輝さん、あんまり朝からため息ばかりつかないでください」

「どうしたの？元々ため息多いけど今日はいつもの3倍くらい多いよ？」

「いや、何で本来休日のはずの日に登校せにやなんのかと思ってな」

俺がそう言つと、譲葉は何故かガクツと体の力が抜けたみたいに頂垂れた。

「そ、そっちですか？」

「他に何がある？」

「いや、今日はバレンタインデーですし、『俺今日チョコもらえるのかな〜・・・？』みたいな意味のため息かと」

「お前は何年俺の幼馴染やってんだ？」

「？」

「バレンタインか休日かって聞かれれば、俺は迷わず休日を取るぞ？」

「・・・そういえばそういう人でしたね、翔輝さんは」

「ねえねえ、本来休日って？」

「あつちの世界ではバレンタインデーは日曜日だったはずなんだよ。それが何故かこっちの世界では月曜日だったからガツクシきたんだよ」

「そんな事覚えてるって事は、なんだかんだ言っつてやっぱり期待してたんじゃないですか？」

「んなわけあるか。単に天助が『バレンタインが日曜日と！？それじゃあ学校でチョコをもらえないじゃないか！』とか何とかやかましく言っつたのを思い出しただけだ」

「・・・そう言えば叫んでましたね、3月に」

「3月!？」

譲葉の言葉にウルは呆れたような感じで驚いていた。

そりゃそうだろう。「さて、バレンタインデーも終わったし、後は雛祭りがあつて、ホワイトデーがあつて・・・」って感じの雰囲気になりつつある3月にもう来年の2月のバレンタインデーの情報をチェックしているのは普通じゃない、少なくとも俺の知ってる限りでは特殊だ。

「でも本当に興味ないんですか？それに自分が好きな人がいるのか気になつたりしませんか？」

「しないし興味も無い。大体バレンタイン関係ってるく話が無いだろ」

「どういうことですか？」

「1929年には血のバレンタインで虐殺事件発生、『バレンタイン』って言葉が入ってる映画は基本的にホラーばかり」

「……た、確かに不吉な事、と言つかよろしくない事ばかりですけど、現実のバレンタインデーって言うのはロマンチックな日じゃないですか」

「んなもん恋人いる奴限定だろ。もしくは恋してる奴」
「……」

どうあっても俺を説得する事はかなわないと察したのか、今度は譲葉が大きいため息をつく。散々俺に言っというて自分でつくとはどういう見だ。

そんな会話も程々にしつつ、今日新たな血のバレンタインを作り出してやるうかなんて不吉な事を考えつつ学校へ。

授業中に夢の世界へ旅立ち、廊下にて足の鍛錬をしていると、あっという間に昼休み。

「翔輝、そういえばあんたチョコもらったの？」

「そもそももらえると思ってない」

「譲葉はくれないの？」

「いつもはもらってるけど今年は特に」

「つまり誰にももらってないと」

「まあ」

「……」

俺が普通に質問に答えると、エミーは何か考え込むように口元に手を持っていき俯く。

何をやっているのかとしばらく観察していると、肩がかすかに震えている事に気付いた。なるほど……。

「何笑ってんだバカタレ」

「……ぷっ！あはははは！」

「……アホらし」

俺は少し腹が立ったのでそう呟いて昼飯を食べ始める。

今日のメニューは学校の食堂で売っている小さなピザ。普通のピザの5分の1くらい大きさで、トマトソースの上に溶けたチーズがのっているだけのシンプルなものだ。

だが、正直言ってあまり食べたいものではない。いつだか言ったようにここの食堂の飯はお世辞にもうまいとは言えず、それはこれも例外ではない。

このピザ、前に一度だけ食べた事があるが、チーズが何か異物が入っているのではないかと思えるくらい異様に硬くて食べにくかった覚えがある。チーズと言うよりはシリコンをかじる感覚に近いと思う。

それを裏付ける証拠もある。実際に見たわけではないのだが、生徒の一人が実験で壁にこのピザを投げたところ、ピザとは思えない弾力で跳ね返ってきたそうだ。

それ以降このピザは「ゴムピザ」と呼ばれているらしく、この学校でも1、2を争うほどの不人気商品だそうだ。

そんなピザを食べているのも友達が譲葉が弁当を作っている最中に不注意で焦がしてしまい、しょうがなく学食になったのだが運悪く今日は業者の都合やら何とやらでこれしかなかったのだ。

何てことを思い出してまた少し不機嫌になっていくと、エミーが靴から何やら小さめの箱のようなものを取り出し、俺に渡した。その顔は若干赤く染まっている・・・ように見えなくもない。

「・・・しょ、しょうがないわね。はい、これ」

この大きさで、この時期にもらい、丁寧に包装されているプレゼント。

話の方向から考えてもそれはパツと見チョコだったのだが、あのエミーがチョコをくれるワケ無いと思った俺は、

「ビックリ箱か？」

「いらなの？」

「いや、くれるならもらうけどさ。これ何？」

「・・・今日渡すプレゼントなんてチョコ以外に何があるわけ？」

「まあそうだけど、お前がチョコくれるなんて信じられないんだよ。まだ熱あるんじゃないか？」

「し、失礼ね！言っとくけど、義理よ義理！ほら、熱があるとき看病してもらったし、そのお礼みたいなものよ、うん！」

最終的に何故か自分に説明（もとい言い訳）すると勝手に納得してしまったエミー。

「分かったからそんなに必死になるな。とにかくありがとな、後で食べるから」

「とか言って捨てたりしないでしょうね？」

「しねーよそんな事。ったく、少しは俺を信用しろよな・・・」

何となくエミーに信用されていない様な気がした俺はさらに不機嫌になっってしまった、軽く舌打ちをする。

ついでにエミーから顔を背けたので自然と視線は教室の別の場所に注がれ、たまたまウルと目が合う。

「あ、翔輝」

「ん？」

「はいこれ、チョコ」

「ん、サンキュ」

俺はエミーのときのように特に疑う事はせず、普通にエミーのそれよりも小さい箱を受け取る。

初めて他人と迎えるバレンタインに興奮していたらしく、手には大量のチョコレートが入っているの袋を持っていた。

「はい、エミーにも」

「あ、あたし？」

「うん、皆に配ってるから、エミーにも渡さない」と

「あ、ありがとう」

エミーの礼を聞くとウルは楽しそうに笑いながらチョコ配りを再開した。

俺は二人にももらった箱を潰れたりしないように鞆の普段使わない所にしまい、再びエミーに向き合う形でピザを口にする。

すると、ふとエミーがこっちをジトーツとした目で見ていることに気付いた。

「何だよ？」

「べつに？あたしのはあんなに警戒してたのにウルのは素直に受け取るんだなって」

「日頃の行いの差だろ」

「・・・そこは素直に認めるしかないわね。でもなんか納得できない」

「じゃあ日頃の行いを少しは改めろ」

「もう習慣だもん、今更直らないわよ」

「じゃあこうなっても我慢しろ」

「・・・翔輝さん」

俺達の話が一段落付いたと判断したのか、今まで沈黙を保っていた譲葉が不意に俺を呼んだ。

「ん？」

「その、今日も幼稚園の手伝いに？」

「そうだな、先生そろそろ子供生まれるらしいし忙しいから」

「そう・・・ですか」

「なんか用事でもあったのか？だったら今日はちょっと先生に言っ
て一緒に帰らせてもらおうか？」

「いえ、いいですよ。何時くらいまでいるんですか？」

「そうだな・・・多分5時半くらいにはなるかも」

「分かりました、じゃあ先に帰ってますね」

「悪いな」

「気にしないでください。じゃあ私はいつものように皆さんと一緒に
帰ってますから」

「ああ」

というわけで放課後、と言いかガキ共の面倒を見終わっていざ帰ろ
う廊下を走る。

途中先生に見つかり怒られたが、先生がいるときだけ歩いていない
ときはお構い無しに走る。

時間は午後6時半。譲葉に教えた時間より1時間も遅くなってしま
った。まあ別に何か約束をしているわけでもないし、いいか。

何て頭の中で呟きながら学校を飛び出して校門をくぐったその瞬間、

「あ・・・」

「・・・譲葉？」

校門の裏側に譲葉が立っていた。

2月とはいえまだ雪が降っているような寒い時期。譲葉は悴んだ手
をさすり合わせて寒さを紛らわせていた。

「ど、どうもです・・・」

「何やってんだお前、ウルとエミーは？」

「さ、先に帰ってもらったんです」

「そりやまたなんで？」

「・・・な、何となくですよ、何となく」

「何となくでこんな寒い中待ったりしないだろ」

「・・・」

俺が少し問い詰めると譲葉は辺りを見回し、誰もいない事を確認すると鞆の中から小さな、綺麗に包装された箱を取り出した。

「ば、バレンタインチョココレート、です。ど、どうぞ・・・」

「ああ、ありがと。・・・え、これだけのために今まで待ってたのか？」

譲葉はその問いに、首を縦に振って肯定の意思を示した。

「何で？」

「だ、だって今日はバレンタインですし・・・」

「まあ確かにそうだけども、去年は朝会うなり渡してくれただろ？何で今日に限ってこんな寒い中待ってわざわざ？」

「が、学校の方々に何か勘違いされると困るじゃないですか・・・」

「ま、まあそうだけども」

なんかいつもの譲葉と様子が違う。調子狂う・・・。

「な、なあ」

「え？」

「これって・・・義理、だよな？」

「・・・ええ、そうですね。何ですか、もしかして期待してました？」

「あ、いや、そういうわけじゃないんだけど・・・」

沈黙。・・・お、重い・・・！

「か、帰るか？」

「はい、帰りましょう」

と言っわけで帰宅。ここからは特別な事はないだろうと思っていた矢先、

「ああ、そうだ翔輝。これ、チョコレート」

「おお、サンキュ」

ミラも俺にチョコレートをくれた。まあ他の人のと違ってむき出しだったけど・・・。

まあでも普通に嬉しい。予想以上に皆からもらえたらやっぱなんだからで嬉しいんだな。

あっちにいたときはせいぜい譲葉と恭子にもらっただけだったから、新しい人たちからももらえてやっぱ嬉しいな。

・・・何だよ、嬉しくないとか言っつて結局もらえたらもらえただ嬉しいなんて、現金な人間だな、俺って。

第53話 ハッピーバレンタインズデー (後書き)

さて、と言うわけでそれぞれのチョコ報告
順番で紹介していくので、まずはエミー。

ん、特に何の変哲も無いチョコレートだな。まあ若干高そうな感じだけど。いくら位したんだろうな・・・？

味は・・・うん、下手なチョコとは比べ物にならないくらいおいしい。

エミーありがとな。

次、ウル。

・・・うん、これこそ何の変哲も無いチョコだな。いかにも1000円くらいで買えるようなチョコだ。まあ全員に配ってたしあんま高いものは変えないだろうし、もらえるだけありがたいか。

あ、ちなみにミラにもらったのも完全に同じだった。やっぱり二重人格だから考えることも同じなのかね？

味は勿論商品なので申し分ないが、エミーのに比べるとやっぱり若干劣る。

で、最後に譲葉にもらったのだな。

・・・何かすごい形だな、歪って言うかなんていうか・・・。
でもこんな歪って事は・・・手作り？

・・・何故だろう、気付いてはいけない事に気づいてしまった気がする。

と、とにかく食べてみないことには何ともいえないよな！頂きます！

結果はご想像にお任せします by 作者

とりあえず更新を最優先したので今回ちよつと短めです、ごめんなさい；
久々に完全コメディです。やっぱコメディは書いてて楽しいですね

第54話 第一回！ちよ〜つと早い肝試し？新春大ホラー大会 前編

起床。

「・・・」

外の様子を確認。

「・・・」

明るいけど、まだ若干暗いような気もするので8時前後と判断。

「・・・」

二度寝。

507

「翔輝さん、起きなさい！」

「うわああああ！？」

いい感じにまどろもつとした所に譲葉の怒鳴り声が響いた事により、俺の素晴らしい二度寝の機会は完全に消え去った。

と言うわけでどうも翔輝です。言うまでも無く機嫌が悪いです。

いやな？別に今日が学校のある日ならいいよ。平日ならな。それなら洪々でも「しょうがないか」って気になれるさ。

でもさ、今日は日曜日だぞ？英語で言うならSunday、フランス語で言うならDimancheだぞ？

そんな日のこんな朝早くに起こされたんじゃ文句の一つも言いたくなるわけで。

「何だよ！？せつかく人が休日をも有意義に二度寝で潰そうとしてるところをたたき起こしやがって！」

「何だよ、じゃありません！今日はエミーさんのお宅にお邪魔させていたたく事になってるじゃないですか！とつと起きて支度してください！」

「・・・そうだったけ？」

「そうです！」

「・・・はあ、分かったよ」

「分かれればいいんです。10時頃にお邪魔させていただく事になっているので、とつととしてくださいね？」

「・・・御意」

「・・・何かちよつと譲葉カリカリしてないか？まああいつも朝弱いから分からない事もないけどさ・・・。

とは言ったものの、朝の支度なんて30分もかからない。結局小屋を今出ても早すぎるけど、何かをするような時間もないというところもなく中途半端な時間が流れる。

さて、そんなどう形容していいか分からない時間を過ごした後には小屋から出た。

ちなみにウルは今日は別行動だ。ウルはああいう性格だから友達が多く、今日はその友達と朝早くから遊びに行ったらしい。

「つたく、なんであんな中途半端な時間に起こすんだよ・・・」

「だって暇だったんですもん」

「・・・は？」

「いや、だから私だけ中途半端な時間に起きるのは何か癪じゃないですか」

「・・・要するにお前が早く起きすぎて、嫌がらせて俺を起こしたと？」

「まあぶつちやければそうなります」

「……」

「……いや、まあそうだろうとは思ってたけどさ。

そんな会話を交わしてる間に、いつの間にかエミーの家の前。呼び鈴を鳴らすと数秒のタイムラグ後、エミーが俺達を出迎えてくれた。……笑顔で。

「あ、いらっしや〜い!」

「エミーさん、今日はお招きいただきありがとうございます」

「どういたしまして、さあ上がって上がって」

「……」

し、信用できね〜!

エミーが笑顔で俺を出迎える!? ありえない、絶対にありえないって!

な、何企んでんだ……? ……ん、まあ絶対によからぬことだろうけど……。

ん〜……いくら考えても分からない。何する気だこいつ?

「……エミー、お前絶対何か企んでるだろ?」

と言うわけで単刀直入に聞いてみた。単刀直入過ぎ? 知るか。

「翔輝さん、失礼ですよ!? せっかくエミーさんが呼んでくれたのに! ねえエミーさん!?!」

「ん? ああ、企んでるけど」

「……」

「……即答かよ」

「まあ隠しきれれると思ってなかったし、と言うかそもそも隠す気なかったし」

「・・・え、じゃあ何ですか、ホントに何か企んでるんですか？」
「うん」
「で、何する気だ？」
「うふふ、聞きたい？」
「・・・微妙に聞きたくない」
「そう？じゃあ教えてあげる」
「耳鼻科行け耳鼻科」
「今日はね・・・」

俺の言葉になんか目もくれず（耳もくれず）、エミーはさっき俺達を玄関で出迎えてくれた時よりさらに眩しい笑顔で俺達に向け、

「第一回！ちよ〜つと早い肝試し？新春大ホラー大会」

譲葉の表情が凍りつくのを、俺は見逃さなかった。

・・・要約すると、だ。

先日エミーがFunStation3（略称FS3）を買った際に一緒にソフトを二本購入した。

そのソフトと言うのが、何と見事に全部ホラーゲーム。

まず一つ目は「Bio Evil 5」と言う襲い掛かってくるゾンビを撃ち殺すゲーム。

二つ目は「壱」と言う、亡霊を特殊なカメラで除霊しながら進んで行くホラーゲームだと言う。

エミーは俺達を招き肝試しのようなことをするためにわざわざ「呪呪」とか言う超怖いホラー映画まで借りてきて、一緒にそれらを見たり遊んだりしようという魂胆らしい。

・・・全部聞いた事あるような話ばかりだが、気のせいだ、気のせい。

さて、というわけなのだが・・・当然問題が。勿論この方である。

「絶対に嫌です！」

・・・まあそうだよなあ・・・。

案の定と言っか何と言っか、エミーが話を終えたと単に譲葉は物凄い勢いで反論し始めた。

「何を言ってるんですかエミーさん！そんなバカバカしい！何が『ちよ〜つと早い肝試し？』ですか！？ちよ〜つとどころじゃありません、まだ極寒じゃないですか！そもそもこんなの肝試しって言いませんしね！第一ホラーなんて存在する意味が分かりません！人が恐怖するものを作って何が楽しいんです？人が普通恐怖するものを作って何が楽しいんです！？そういうバカな事を考える人がいるから日本は迷走を始めているんです！加えて・・・！」

・・・それから十数分、何故か俺まで一緒に譲葉の説教を延々聞かされた。最終的になんか全然関係ないことを言っていたような気がするのは俺だけじゃないはずだ。

「はあ、はあ・・・。わ、分かりましたか!？」

「わ、分かりました」

エミーはそんな譲葉の様子にビクビクしながら小さくそう答えた。

「分かったならいいんですよ、分かったなら」

「は、はい・・・」

「・・・終わったか？」

「はい！」

「よし、じゃあやるか」

「へ？」

「ホラーゲーム」

「・・・ごめんなさい翔輝さん、そういえば翔輝さんは日本語分からないのでしたっけ。申し訳ありません、私の配慮が足りませんでした。確か英語なら分かりましたよね？それでは・・・コホンッ。

Wha

「いやいや、そういうことじゃないから！」

このままだとまた譲葉の長ったらしい説教を今度は英語で聞かされそうだったので慌てて静止する。

「だから要するに、お前はやりたくないって事だろ？」

「・・・そうですね」

「じゃあお前はやらなくていいじゃん。俺は普通にそういうの楽しめるからこのままエミーと一緒にやるけど」

「なっ・・・!？」

「え、翔輝もホラー好きなの？」

「まあ普通に好きだな、あっちの世界では普通にやってたぞ」

「やった、じゃあやりましょう！譲葉はどうするっ？」

「へっ!？な、何がですか!？」

「いや、だってホラーゲームできないんじゃないかってもしかたないでしょ？ウルンとどこにでも行くの？」

「そ、それは・・・」

「まあでもどの道ここについても何もやる事ないしな」

「う、うっうっうっうっ・・・」

「・・・や、そんな恨めしそくに俺を見られても困るんだけど」

「ホントにどうするっ？」

「・・・いいですよ、やってやるっうじゃないですか」

「何を？」

「ホラーゲームですよ」

「……いや、無理しなくていいぞ？素直にウルんどこにでも行けば……」

「上等じゃないですかあ！ゾンビが何です？幽霊が何です！？そんなもの存在するワケ無いんですから全然平気ですよ！ええそうですとも！ドンと来い超常現象ですよ！」

「Don't come!？」

「英語じゃありません！」

「良く分かったな」

「ホントに言っただんですか!？」

「分かってなかったのか。前言撤回」

「うづうづう……！とにかく！私はやりますよ！さあ行きましよう！」

「譲葉、怖い……」

「私だって怖いですよ！ホラーと言っつのはそういうものでしょう!？」

や、ホラーじゃなくてお前が怖いんだって。お前がホラーなんだって。発狂してるようにしか見えないぞ？

「どうしたんですか二人とも！散々言っただいて怖気づいたんですか!？情けないですね、まったく！」

「……譲葉、ホントに無理しなくていいよ？」

「まだ仰いますか!？無理なんてしてません！勘違いしないでください……」

「その割には震えてるぞ？」

「武者震いです！」

「ゾンビとか幽霊と決闘にでも行くのかお前は」

「そうですとも！ゾンビだろうが幽霊だろうが全部虐殺すればいい

んですよ！」

・・・いや、どっちももう死んでるから。

「さあ行きますよ二人とも！」

「・・・御意」

譲葉はそう言うとズカズカとエミーの家の奥に入って行った。

もう止まらない、か。俺は観念して譲葉の後に続く。その時、ふと俺の服の裾が掴まれているを感じた。

振り向くと、エミーが今にも泣きそうな顔をして俺にしがみ付いていた。随分表情豊かだな、ついさっきまでは満面の笑みを浮かべてたぐせに。

・・・ま、気持ちはわからなくはないが・・・。

「しよ、翔輝い・・・譲葉が一番怖いよ・・・」

「・・・奇遇だな、俺もだ」

今日もし俺達が死んだら、絶対に死ぬほどびびった譲葉の首絞め攻撃による窒息死だろうな・・・。

ブログでも書いたとおり、補習校の卒業式で答辞を読む事になったのでそつちにしばらく力を入れたいと思います。詳しい事はブログに書いてあるので、お暇な時にどうぞお越しください

や、やっと更新できた・・・！

待ってくださっていた方々、本当に申し訳ありません！もう冗談抜きで宿題とか答辞とか答辞とか答辞とか忙しくて執筆する時間が無くて・・・。

今回久々の更新なので少し、若干長めです。もう少し発表事項があるんですが、それは後書きに回して、とにかく今は最新話をどうぞ！

「で、何やるんですか!？」

「・・・あの、譲葉さん、いや譲葉様？怒鳴らないでいただけるとわたくしとしては非常に助かるのですが・・・」

いつも強気なエミーが荒れている譲葉相手に物凄い低姿勢になっている。どっちも普段見ることができないので見ている分には心の底から面白い。

さて、前回からとてつもないほど長い時間が流れてしまったためにこれまでのあらすじを忘れてしまった人たちへ俺こと翔輝からの一行為あらすじ。

「死ぬほど怯えた譲葉に殺されそうな俺とエミー」
これで伝わるはず。もしこれでも分かんなかったら前回を見直すように。

と言うわけで、殺されない事を祈りながらテレビがあるリビングまで移動する。去年笑ってはいけないホニヤララを見たところだ。テレビには既にゲームが繋がれていて、周りにはソフトが散乱している。

それぞれのパッケージを手にとって見てみると、どれも元の世界で見たことがあるようなばかりだった。「Angel May Cry」とか。

その中に、例の二つを見つけた。「Bio Evil 5」と「壱だ。
パッケージもタイトルもあっちの世界のとはほぼ同じ。これ本当に知らないで作ってるのか？だったら普通にすごいぞ？

「譲葉、どっちやりたい？」

「どっちでもいいですよ！ドンと来い、超常現象!」

「それさつきも言った」

「要するにそういうことです！さあ、どっちやります！？」

「エミーは？」

「あたしは・・・どっちかって言うとバイオがいい」

「んじゃ決定。二人プレイ？」

「当然。あんたが女キャラね」

「何故？」

「主役はあたしに決まってるじゃない」

・・・男も女もどっちも主役だろ？

「・・・だとさ。と言うわけで譲葉、パス」

「はい？」

「だからパス。お前がやれ」

「・・・イジメです」

「何か言ったか？」

「いいえ、別に何も！別に翔輝さんがDSだとか超鬼畜だとかなんて全然言ってますんよ！」

思いつきり販してる部分を強調して言うてくる。まあ最初のも聞こえてたんだけどな。

まあイジメかと聞かれれば・・・イジメだな。日頃の恨み、ここで晴らさせてもらおう！見たいな？

と言うわけで、ゲームスタート。のために電源を入れる。ディスク読み込み、完了。

制作会社のロゴ、注意事項などが流れ、急にオープニングが始まる。

「ひっ！？」

「いや、早い早い」

オープニングでビビってたら切りがないぞ。先が思いやられる・・・。
そんな中、ようやく本当にゲームスタート。まずは基本的な操作の説明を受け、武器になる拳銃を拾った。

「ぶ、武器これだけなんですか!？」

「まあね、ゲーム始まったばかりだし」

「ふざけてるんですかこのゲーム!?!? ゾンビ相手にこんなしょぼい拳銃一丁で敵うわけ無いじゃないですか! もっと強い武器用意してくればいいじゃないですか、マシンガンとかショットガンとかグレネードランチャーとかロケットランチャーとか核搭載戦車とか!」
「最初からそれじゃゲームにならないだろうが」

「いいんですよゲームにならなくて! 要するに怖くなければいいんですから!」

・・・それだと最早ホラーゲームじゃなくなるんだが。分かってて言ってるのかこいつは?

「と、とにかく、こつという装備ですから仕方ありません。エミーさん、先行してください」

「・・・はい」

譲葉の異常なまでの怒りに臆したのか、エミーは素直に先行する。しばらくは狭い道をゾンビを倒しながら進み、やがて広い場所に出る。

そこでも同じようにエミーが先行し、譲葉がその少し後に続く。すると突然、

譲葉の画面の前に、さすが最新機器と言つべきグラフィックで、顔が血だらけのゾンビのアップが映し出された。

「くっ！ー！！」

（ダンッ、ダンッ、ダンッ・・・！）

「あ、ちよ、譲葉！？」

譲葉は声にもならない悲鳴を上げて、銃を乱射する。

目の前に出たゾンビを倒した後も乱射を続け、仕舞いにはエミーのキャラクターにまで弾丸を撃ち込み始めた。

ちなみに言っておくと、このゲームにはフレンドリファイアと言うものがある。味方に撃たれてもダメージを受けるといふ追加ルールだ。

そんなルールが存在する中、何発もの弾丸を打ち込まれたエミーのキャラクターの体力は瞬く間に減っていき、十秒足らずで0になった。

「譲葉、しつかりしてよ・・・」

「ただだだっで、ぞ、ゾンビが、が画面にバアッって・・・！！」

「上から降りてきたんだろっうな、ちよっどいい具合にエミーと譲葉の真ん中に。横に建物みたいなのあつたし」

「ううっ・・・ビックリしたよお、怖かつたよお・・・」

「はいはい、泣くな泣くな」

「だ、だっで・・・」

「・・・子供みたい」

「どっする？もっちやめるか？」

「・・・うん」

「じゃあもっ一つのほっやるか」

「なんでっ！？どうしてそうなるの！？ゲームをやめるって言っ選
択はないの！？」

「いや、俺がやりたいから」

「バカだ！翔ちゃんもバカだ！絶対！」

「バカじゃないっての。失礼なこと言うな」

「バカじゃなかったらドMだ！こんなゲームをやりたいなんて絶対にドMだ！」

「だから失礼な事言うなって言ってんだろっが！」

「うるさい！もう知らない！」

ガキのように拗ねてしまった。こうなるだろうとは思ってたけど。。
まあしょうがないか。さっきのは俺も普通にビビったし。
とりあえず譲葉の要望によりバイオはやめて「壱」をやる事になった。

プレイするのは俺、見るのはエミーと、怖いとか何とか言って結局
一緒になって見てる超怖がってる女子高生の姿がそこにはあった。
っって言っか譲葉だった。(西 維新風)

と言っわけでプレイ開始。

最近のバイオは基本的にドッキリ要素はないから特に警戒する必要
はなかったが、これは別だ。
隙あらば驚かそうとするから気を抜けない。あっちでも結構ビビっ
てたしな。

と、早速コントローラーが振動すると同時に視点が切り替わり、女
の子の霊が画面に移りこむ。

「うっ！？」

「あっ！？」

「きいあああああ！?!?!?!?!」

二人は少し体がビクツと反応し、そして残りの一人はまさに心の底からと言っていていいほど見事な悲鳴を上げた。

「「ビビリすぎ」」

「い、今子供が……!くくく、首が、きゅ、90度ひん曲がって……!」

「まあ霊だしありなんじゃねえの?」

「ででで、でもどうやって亡くなったらあんな事になるんですか!」

「知るか」

その後も小さなドッキリスポットが数個あったものの、讓葉の悲鳴以外にも特に問題もなく第一章が終了した。

そして第二章のオープニング、主人公が階段を降りていると、

「うわっ!?!」

「うにゃ!?!」

「いいいいいいあああああ!?!?!?!?!」

空中から長い髪をした女性が、頭を下にして一直線に地面に落ちていった。落ちる途中、一時的に時間が遅くなり、女性がはつきりとこつちを向いて微笑を浮かべているのがうかがえた。

これにビビらないというのは無理な話で、讓葉なんかこの世の終わりみたいな声を上げていた。

「び、ビビった」

「こ、これはしょうがないわね」

「怖いよお、嫌だよお、助けてよお……」

譲葉は刺激が強すぎたのか、目尻に涙を浮かべて今にも泣きそうな顔をして俺の腕に抱きついていて、って言うかももう既に半分以上は泣いてる。

「……もうやめとくか？」

「……そうね、ちょっと可哀想かも」

「二人とも……!」

「じゃあ「怨呪」見よつか」

「そうするか」

「死ねえええええ!!!!」

譲葉のここまで力の入った「死ね」は久々に聞いた。最後に聞いたのは何年前だろうか？

さて、そんなわけで未だに怒りのオーラを発している譲葉をなるべく無視し、映画を見始める。

随分と長い間ゲームをやっていたせいか、外もそれなりに暗くなっている。それに加えてカーテンは閉めてあり、電気も全て消した。十分過ぎるくらい条件は整っている。

そんな中鑑賞会スタート。

5分経過。

「うう……」

……。

10分経過。

「……うう……うう……」

.....。

30分経過。

「うづうづうづうづうづう.....」

.....。

1時間経過。

「ああダメ！バカ、バカバカ！それダメだって！分かるでしょ、あ、バカ！バカバカバカバカバカバカ！」

「黙って見れないのかお前はああああ！！！」

「うひいあああああ！？び、ビックリさせないでよ、もうっ！」

「やかましい！って言うか黙ってみる黙って！うるさいんだよ、さつきから！」

「だ、だって怖いんだもん！しょうがないでしょ！？」

「全然これっぽっちもしょうがなくないわ！」

「二人ともうるさい！」

「.....すんませ〜ん」「.....ごめんなさい」

アホな言い争いをしている俺と譲葉はエミーの一言で黙り込む。

1時間半経過。

「ダメだってそれ、そこに行くのは死亡フラグだって.....あ、

バカ、そういう時は一目散に逃げれば.....きゃあああああ！？」

「だあからうるさいっての！」

「.....あ、終わった.....？」

「結局最後までお前のせいで何言ってるのか全然聞こえなかったよ．．．」
「だ、だって怖かったんだもん．．．」
「まあ確かに怖かったけどさ、いくらなんでもビビりすぎじゃない？」
「．．．そんな事言ってエミーさんだってしっかりビビってたくせに」
「それを差し引いてもお前はビビりすぎだ」
「うう．．．」

さて、そういうわけで本日全てのメニューを終えた俺達はそのまま夕飯をご馳走になり、空が小さな光がポツポツと現れ始めた頃にエミーの家を後にした。

「まったく、口調が変わってたなら言うてくださいよ．．．」
「どうせ言っても無駄だろ？」
「．．．まあそうかもしれないけど、一応止める努力くらいはしてくださいよ．．．」
「無駄な努力はしませんよ」
「無駄な努力はしませんよ．．．」
「ドンマイ」
「会話になってませんよ？」
「ドンマイ」
「．．．」

そんな会話を交わしつつ、森の中へ。
街灯のある町の中と違い、森の中は自然の屋根があるので月明かりも届かず、辺りは真っ暗になっている。
さっきのあんなイベント（？）の後ではここに来るのは結構きつい。
だから譲葉にとっては、

「じじじ、怖いです・・・」

・・・まあそうなるわな。

今譲葉は俺の服の端を掴んでいる、どころか引つ掴んでいる。絶対これしわになってるな・・・。

「随分素直になつたな」

「はい？」

「エミーんちに着いたばかりの時は「こここ怖くなんかないですよ！」とか言つてなかったか？」

「しょ、しょうがないじゃないですか。あれだけ叫んでおいて怖くない、何て言つても信じられないだろっし」

「元々信じてねえよ」

「・・・」

返す言葉もないのか、譲葉はそのまま黙り込んでしまった。それでも服は離さないけど。

さらにしばらく歩いて、ようやく小屋に到着。ウルは既にミラと交代していて、狩りに行つてくると書置きが机の上に置いてあった。

特にやる事もない俺達は、そのまま寝ることになった。

そして、それから数時間が経つたかどうか、と言つ時間。

ようやく少しまどろんできたところ、肩が「トントント」叩かれた。

「・・・ん？」

「あ、あの、翔輝さん・・・」

「・・・何だよ、せつかく今寝そうになつてたのに・・・」

「いや、その、何と言いますか・・・」

「……？」

「……その、ですね、と、トイレに……」

「行ってらっさい〜」

「だ、だからあ……！その……」

「……なるほど、怖いからついて来いと」

「っっ！」

俺がそう聞くと、譲葉は布団に顔を埋めて悶絶する。

「ったく……。ほら、とっくと行くぞ」

「……は、はい」

……言い始めた本人が行く気なくてどうする？

そんなわけでトイレに同行する事になったのだが、今度はまた困った事に。

「み、耳は塞いでくださいね!？」

「はいはい」

「それと私が呼んだらちゃんと返事してくださいね!？」

「はいはい……。ってちょっと待て。それどうすればいいんだ？」

「耳を塞いで、尚且つ私の声には耳を傾けろってことです」

「無茶言っな」

しばらく続いた口論の結果トイレの扉を少し空けた状態で足を常に見えるように隙間から入れておくと言う妥協案を考え出して、何とか事なきを得た。

そして再び寝袋の中。

「……なんで一緒に寝袋に入ってるんだお前は」

「こ、細かい事は気にしないでください」

「全然細かい事じゃない」

「いいんですよ。ほた、早く寝ましょう、ね？」

・・・いや、だから寝れないから言ってるんだけど。

冷静に考えてみる、いくら俺でも同じ寝袋で女の子が寝てたら寝られるわけないだろうに。

しかし、そんな俺の心の叫びも空しく、讓葉は既に俺のすぐ横で寝息を立てていた。

結局、その日は眠れなかったとき。

さて、と言うわけで実に約2週間ぶりの更新となります。この2週間の間に色々と報告すべき出来事が起こりました。

まず、ついにPVアクセス数が100000人を突破いたしました！！！！

読者の皆様、本当にありがとうございます！これからも頑張りますので、未永くよろしく願います！

そしてさらに、ブログにも書きましたがお気に入り登録数が30件突破！これも本当に嬉しかったです！ありがとうございます！

さらにさらに、自分のことをお気に入りユーザー登録してください！
た方々が5人も！本当にありがとうございます！

というめでたい事があつた2週間、ろくにこのサイトにアクセスする暇もなく過ぎて行ってしまいました(; ; ;)

しかも、まだ答辞やらなにやらやる事は残っているのでまだ更新速度が上がるとは断言できません。本当に申し訳ありません・・・。

なるべく早く更新するようにはしますが、おそらく早くても1週間ほどはかかるかと思いますが、どうかご理解ください。

それでは、また次回お会いしましょう。

追記：一応R-15指定にしましたが、しばらくはそういう描写はない予定です。ただ、未来にはある予定なのでちよ〜つと前もって付けさせていただきました。

第56話 ホワイトデー？ 前編（前書き）

遅くなりました、ようやく更新です！

ブログすら更新できずに申し訳ありませんでした！

どうでもいい言い訳は後回しにして、とりあえず本編どうぞ！

P・S・もし「・・・え？今更？」って思う事があったら、作者が土下座して「ごめんなさい」を連呼している姿を想像してください。

第56話 ホワイトデー？ 前編

「ふあああ……」

翔輝です。眠いです。

とりあえず学校が終わりました。眠いです。

帰ろうと思います。眠いで

「しつこいですよ、翔輝さん」

「読心術？」

「どうせ翔輝さんのことだから『眠いです』とか何とか言ってたんでしょ？」

「驚異的洞察力だな」

「翔輝さんが読みやすいだけです」

「そうか？」

「そうです。って言うか帰りましょうよ」

「ん〜……や、俺疲れたからいいや」

「また言ってる……。そんなに疲れてるんですか？」

「まあ結構疲れてる。……俺寝るわ、先帰ってる」

「帰って寝なさい！」

……何か怒られたんでとりあえず帰ることに。

メンバーはいつも通り俺、譲葉、ウル、エミーの四人で帰路についた。

……あ、そういえば。

「なあ、お前らこの後なんか用事あるか？」

「え？」

「いや、だから予定。この後暇かって事」

「ああ、まあ暇といえば暇ね」

「僕も特にやらなきゃいけないことはなかったと思うけど」

「私もないです。どこか寄りたい所でもあるんですか？」

「ん、まあ寄りたい所って言うかお前らになんか渡さなきゃと思っ
てな」

「へ？何で？」

「いや、そろそろホワイトデーだし」

「・・・ああ、そういえばそうでしたね」

「忘れてたのか？」

「気にしてもいませんでした」

「ホワイトデー？」

「ホワイトデーって何？」

「ああ、こっちにはホワイトデーはないんですか。ホワイトデーって言うのはバレンタインデーにチョコレートもらった人にお返しをする私達のとその近辺の国にのみ存在する風習ですよ」

「あれ、ホワイトデーどこでもやってるんじゃないのか？」

「そうですね、そんな事も知らなかったんですか？ちなみに韓国なんかには毎月14日に何とかデーがあつて、例えば4月14日はブラックデー、その次の5月14日はイエローデーなんかがあります」

「・・・ちなみに何をするんだ？」

「ブラックデーはバレンタインデーにチョコレートをもらえなかった人や恋人ができなかった人が黒い服を着てチャジャンミョンという黒い色をしている韓国料理を食べて慰めあい、イエローデーはその日に恋人がいない人は黄色い服を着てカレーライスを食べないと生涯独身でいることになるかとされているので、基本的に結婚したい人はそれに従ってカレーを食べるようです」

「・・・何だかとっても憂鬱に慣れそうなとても素敵な祝日ばかり
ね」

「って言うかほとんど呪いじゃねえか、イエローデー」

「要するに色々食べられるって事？」

「・・・その解釈もどうなの？」

「って言うかそんな事は今はどうでも良くてだな」

「あ、そうだった。つまりホワイトデー、だっけ？だから翔輝が何か僕達にくれるって事？」

「まあ大雑把に言えばそういうこと」

「何でも？」

「チョコレートは2倍の値段までのものならよし」

「え、何よそれつまんない。フランス料理のフルコースでも奢らせようと思ったのに」

「そういう悪女がいるから2倍までって条件つけたんだよ」

「悪女って・・・失礼ねー！」

「待って、僕のチョコすっごい安いやつなんだけど・・・それでも2倍？」

「あ、・・・じゃあ4倍でいいよ。物によっては5倍もありかもな」

「やた」

「何よそれ、差別よ差別！」

「差別じゃなくて区別だ。この違いは重要だぞ？」

「どっちも同じでしょ!？」

「あ、あの、翔輝さん？」

「うん？」

「わ、私の場合はどうなるんでしょうか？」

「・・・そういうえばそうだった。譲葉は手作りチョコだったっけ。」

「・・・しまった、何も考えてなかった」

「あ、でも別に何か期待してたわけじゃないので無理にじゃないですよ？」

「いやそれはダメだろ。貰っというて何も返さないのは」

「そういうところは妙に律儀ですよね、翔輝さん」

「別に律儀なのは悪い事じゃないんだから『妙に』とか言うな」

「事実ですからね」

「あつそ。じゃああれだ、何でも良いよ」

「はい？」

「いや、だから何でも良いよ、俺の予算内なら」

「え、何それ！？じゃあ僕も何でもいいじゃん！」

「そうよ！あたしだって好きなものもらえる権利があるはずよ！？」

「だ、うるさいな・・・」

「うるさいじゃない！」

「あたし達も自由に色々選んでいいでしょ！？」

「分かった分かった、選んでいいからちよつと黙れ！」

俺が鬱陶しそうに言うと二人はピタリと静かになり、さっきの騒ぎが嘘のように静かになる。逆に天使のような笑顔を浮かべている。つたく、調子良いよなあ・・・。

「ただし予算内な、俺が無理って言うものは無理だかな」

「は、いい」

ハモンな。

「翔輝さん、ホントにいいですよ？何だか無理してるっぽいので」

「別に無理はしてねーよ、やかましいとは思ってるけど」

「そ、そうですか？」

「どうせそうなるだろうとも思ってたし」

「あ、あはは・・・」

俺の言葉に譲葉も苦笑している。それに気付いているのか気付いていないのか、二人はまだ気持ちの悪い笑みを浮かべている。

結局その日は俺が財布を忘れた事に気付き、二人（言わずもがなウルとエミー）に散々色々言われた拳句、三人の要望に答えた品をホ

ホワイトデーまでに用意すると言う条件で、その日はお開きになった。さて、と言うわけで三人の欲しいものリスト。

ウル 何かこっちの世界で美味いと評判らしいお菓子屋のクッキー、もしくはケーキ

エミー ちょっと高めの店で俺の奢りで食事

譲葉 俺のセンスで選んだアクセサリー

・・・何か下の二つホワイトデーとあんま関係なくね？や、俺が何でもいって言ったから別にいいんだけどさ。

「う・・・うん・・・？」

・・・多分夜。いえ、実際の時間は小屋の中なのでよく分かりませんが、いつもの目覚めより肌寒いという事は多分夜なのでしょう。と言うわけでこんばんは、譲葉です。

「・・・ふあああ・・・。・・・何でこんな中途半端な時間に・・・」

実際中途半端な時間なのかどうかは分かりませんが、少なくとももまともな時間じゃないでしょう。

この小屋時計が無いのが不便なんですよね・・・。

ドンッ！

「ひいつー!?!?」

ななな、何ですか今の音！？へ、変な音が……！

「しよ、翔輝さん、起き……！？」

今、気付きました。翔輝さん、いない……！？

「しよ、翔輝さん！？ど、どこにいるんですか！？」

辺りを見回しても小屋が暗いせいか、翔輝さんは見当たりません。

ドンツ！

「ひゃあ！？」

ま、また……！？

し、仕方ありません。翔輝さんがいないならミラさんに頼るしか……。

とにかくまずは小屋を出てから……。

「ミラ！お前今本気で殺す気だつたる！？昔みたいにちよつと手加減とかじゃなくて本気の本気で！」

……ふえ？

「当たり前よ。翔輝はそろそろ真剣に殺す気で行かないとこれ以上伸びないわ」

……え？え？

「だからって不意打ちでいきなり首元狙ってくることはないだろ！？」

「大丈夫よ、そろそろ翔輝なら避けられるかな〜って思ったから」
「それ半分くらい避けられないかもって思ってるだろ!？」

「ドンマイ」

「ふざけんなあああああ!」

「・・・え?え?え?」

「な、何ですか?ちょっと状況がいまいち読み込みないんですけど・・・」

とりあえず何だか覗いたらいけない雰囲気だったので扉をうつすらと開けて外の様子を覗いてみる。扉のすぐ外には翔輝さんが膝をついて木の方を見上げている。翔輝さんの視線をたどって木の方を見みると、ミラさんが直径十センチもない様な木の枝の上に立っている。あれも吸血鬼だからなせる業なんでしょうか?

「ホラ、次来なさいな」

「言われなくてもっ!」

翔輝さんは言い終わると同時に翔輝さんは能力を使ってミラさんが座る木の幹に突き刺さった状態の刀を出現させ足場として使い、瞬間にミラさんの立つ枝に到着、そのまま手に持った刀を振り下ろす。

ミラさんはそれをかわす事もせず、ただ薄い笑みを浮かべながら刀が振り下ろされるのを見守っている。

「・・・って翔輝さん!?ミラさん女性ですよ!?分かってますか!？」

「喰らえ!」

「喰らわな〜い」

刀が当たるか当たらないかの刹那、ミラさんは背中から地面に向かってフリーフォール・・・ってええええええ!??

・・・と思つたらミラさんは地面に当たる直前でフワツつと一時的に浮遊し、足を下にして音もなく着地した。あ、焦りました・・・。何て一息つく間も無く翔輝さんが木から飛び降りて、そのまままた刀を振り下ろす。

「喰らえつてのコノヤロツ！」

「だから私に当てるのは無理なんだって・・・。学習しなさいよ、翔輝」

ミラさんが呆れ返つた顔でそう呟くと、少しずつミラさんの体が黒く染まつていった。しかし翔輝さんはそうなる事が分かつていたのか、構わず刀を振り下ろす。

ほんの数秒前までミラさんだった黒い塊は刀に斬られる直前に地面に消え去り、翔輝さんが振るつた刀は空を斬つた。

翔輝さんは小さく舌打ちをすると一歩後ずさつて刀を構えなおしてあたりを警戒する。

「だから無理だつて言ってるじゃないの・・・」

どこからともなくその声が聞こえた瞬間、翔輝さんの背後に漆黒の柱が立ち、それは程なくして人の形を形成した。

「攻撃するのが無理な以上・・・攻撃をかわす事に専念しなさい！」

「・・・っ！」

完全に人の形になったミラさんの右手からさらに黒い塊が発生し、やがて翔輝さんのおなかの辺りにあてがわれた鎌のような形になった。

「この先、死にたくなければ・・・覚えてなさい！」

言い終えるや否や、ミラさんは完成した鎌を思いつきり引いた。それに連動して翔輝さんに触れている刃の部分も動き、直撃。そのまま翔輝さんの体は吹き飛び、背中を木の幹に強打した。

私は思わず息を飲んだ。翔輝さんの体に触れていた部分は間違いない刃の部分だった。それをあんな力一杯引かれたら、絶対に斬れている。さらにあんなに飛ばされて、背中を強打。かなりまずい気がする。

・・・と思いきや。

「いつてええええええ！」

翔輝さんは何事もなかったように起き上がった。・・・いえ、痛がつてはいるんですが、少なくともさっきの攻撃の激しさから連想されるようなリアクションではないです。

「動体視力と反射神経だけはいいのね、翔輝は」

「悪かったな」

「拗ねない拗ねない、褒めてるんだから」

「じゃあ『だけ』とか言うな」

「そんな事言ったかしら？」

「つたく、いちいちムカつく・・・」

「ふふっ・・・。じゃあ今日はこれでお仕舞い。お疲れ様」

「どうも。悪いな、毎晩付き合ってもらったして」

「別に？私も夜はやることなく暇だし、これくらいならおやすい御用よ」

「サンキュ、んじゃまた明日も頼んだぜ」

「ええ、おやすみ」

・・・こ、この二人、毎晩こんなことしてたんですか？あつ！

「ん、譲葉……。起きてたのかよ……」

呆然としてたせいで小屋に帰って来る翔輝さんに気付かず、そのままばったりと出くわしてしまう。

「しょ、翔輝さん、ごめんなさい、覗くつもりはなかったんですが……」

「嘘付け、この状況で覗く気がなかったわけあるか」

「う……」

返す言葉もありません……。

「そ、それより翔輝さん、大丈夫なんですか？」

「ん？ああ、さっきのか。平気だよ、喰らう前に鎌と腹の間に刀出したから」

「そ、そうなんですか？でも背中も……」

「大丈夫だつて。それより寝ようぜ、明日起きれないぞ？もしまだ質問があるならまた明日な」

「あ、そ、そうですね……。おやすみなさい、翔輝さん」

「ああ、おやすみ」

翔輝さんはその言葉を最後に寝袋の中に潜り込んでしまった。

私も少し遅れて布団に潜り込んだんですが、妙に目がさめて眠れませんでした……。

何故つて、気になることが多すぎるから。

知つての通り、翔輝さんは何をするのもめんどくさくて、自分が楽するためにしか努力しない人です。

そんな人がどうしてこんな夜中に、しかも秘密裏に特訓なんてして

るんでしょうか？そしてなにより……。

「……翔輝さん、まだ起きてます？」

「……ん」

起きてる。思い切って、聞いてみるしかない。

「明日が来る前に、寝る前に……一つだけ、聞いても構いませんか？」

「……何だ？」

「どうして、翔輝さん、ミラさんを攻撃できたんですか？」

そう、翔輝さんはたとえ冗談でも女性には攻撃できない。

相手はその女性であるミラさんでしかも得物は真剣。当たり様によつては相手に致命傷を負わせかねない危険性がある状況で、翔輝さんが本気でミラさんを攻撃するなんて……。

そう思うと、とてつもない不安に襲われた。

そんな事ありえない、私の知っている翔輝さんじゃない。何だか、怖くなってしまった。

翔輝さんが、いつの間にか私の知らない翔輝さんになってしまつていくんじゃないかって……。

「……バカヤロー」

「え……？」

「俺なんかミラに攻撃当てられるとでも思つてんのか？」

「……じゃ、じゃあ……」

「そもそも俺に女の攻撃できる度胸があると思つか？」

「……」

妙に長く感じられる沈黙が流れる。やがて、

「……ぶっ」

「……んだよ」

「自分で言いますか、そういうこと？」

「悪かったな、どうせ俺はヘタレですよ」

「いえ、それでいいんじゃないですか？いつも通りの翔輝さんですよ」

「……なんだそりゃ？」

「ぶっ、なんでもないです」

「……まあいいや、とにかくもう寝る」

「ええ、今度こそお休みなさい」

よかった、やっぱり翔輝さんは翔輝さんだった……。

第56話 ホワイトデー？ 前編（後書き）

というわけで今回ちょっと長めでした。ホワイトデーって、いつの話だよ！？って話ですよ、ごめんなさい。忙しくて当日更新できなかつたもので・・・；しかも前編って書いてあるし・・・。

一応設定上この話では3月10日辺りです。（ほぼ2週間前・・・；）

それにしても久々の戦闘です。感覚なくしてるなあ、書いたの何ヶ月ぶりだろ？；

とにかくまずは謝罪ですね、更新遅れて本当に申し訳ありませんでした。補習校の卒業式の答辞は無事終わりました。過去最高級の出来と先生のお墨付きだったので、俺の中ではとりあえず大成功です。しかし、その後風邪をひいたり成績が思うようにならなかつたりと予想以上に忙しい日々が続く、結局更新がこんなに遅れてしまいました、ごめんなさい。

アメリカは日本と違って卒業・進級が6月なので、日本は休みでもこっちは大絶賛学校登校日だったりするんですよ・・・。

まあ何はともあれ、成績も少し安定してきましたし、これからもう少しペースを上げられればなと思います。

それでは失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1919i/>

やる気0でリアリストな英雄達？

2010年10月8日16時12分発行